次田潤著

國文学史新講

明治書院發行

自序

從來公にせられた國文學史の組織は多種多樣でありますが、これを類別しますと、作者の傳記や作品の解說などを主とするものと、文藝思潮の發展を中心とするものと、文學の評論に重きを置くものと、此の三種になるやうであります。此の外になほ、國文學の本質若しくは國民獨得の文藝觀に基づいて、新しく體系を立てようとする學者がありますが、まだ纏まつた著述を見るまでに至つてゐません。記述の態度を異にする此等の國文學史には、それぞれ長所があるのは勿論でありますが、通史としては各の特長を折衷するのも一方法であらうと思ひます。

本書は國文學通史でありますから、新奇を求めず、專ら穩健を期したのでありまして、組織の如きは大體在來の書史的文學史の例に倣ひましたが、記述には其の他の樣式態度を參酌し、且つ內容の充實を圖つたのであります。試みに執筆

に當つて樹てました大體方針を箇條書にして見ますと、次の通りであります。

一　各時代竝に各種文學の間に輕重の差を置かず、なるべく平等に取扱ふ事。

一　國民の文學的生活の全局面を明かにする爲に、漢文學・國學・歌學・評論等の發達をも記述する事。

一　各種文學の本質を明かにし、又それぞれの文學と密接な關係を有する藝術の發生事情、竝に其の發達を略述する事。

一　文藝思潮の推移、各作家作品の相互の史的關係、竝に其の價値の闡明に努める事。

一　時代を代表する作家作品、及び從來の國文學史に閑却せられてゐる文藝に關しては、特に稍詳密に解說する事。

一　最近學者によつて究明せられた著しい事項、及び新たに發見せられた資料の紹介に努める事。

斯かる主義方針のもとに筆を執りましたけれども、豫期の如き結果を收め得な

かつた點が決して尠くありません。

國文學史は著者の獨創的な史的考察によつて、特色を發揮すべきは勿論でありますが、從來現れた諸研究の成果を集成して、記述の嚴正精確を期する事は、更に肝要であると思ひます。從つて本書には、自信のない未定見の發表は一切差控へましたが、權威ある學者の意見はなるべく廣く之を紹介し、且つ批判を試みました。尤も本書は多忙な教務の餘暇に成つたものでありますから、遺漏や失考が尠くなからうと思ひます。又近來國文學の研究は空前の盛況を呈して居りますから、今後本書の記載に修正を要するやうな新說や新資料が、續々現れるに相違ありません。此等に對しては、將來適當な方法によつて、增補訂正を施して行くつもりであります。

本書は曩に公にしました祝詞新講と共に、學習院に教鞭を執つてゐる間に成つたのでありまして、自分にとつては思出の多い記念の著述であります。此の間に帝室御物の祕本を拜觀する光榮を得たのを始として、宮內省圖書寮・高松宮

家御文庫・前田侯爵家尊經閣・三條西伯爵家文庫、其の他諸家の珍籍を拜見して多大の便益を得ました事は、此の上もない幸福であります。執筆中諸學者の著書や論文から多大の裨益を得た事は勿論でありますが、前には故福原前學習院長、後には荒木院長から屢激勵の言葉を頂き、前田侯爵家育德財團からは、貴重な尊經閣叢刊を寄贈せられ、又同學の先輩知友からは種々の援助を蒙りました。本書が拙劣ながらも完成を告げましたのは、此等の方々の庇護による所が多いのであります。茲に謹んで感謝の意を表します。

本書の題簽は入江皇太后宮大夫が特に揮毫して下さつたのであり、裝幀は荻生天泉畫伯を煩はしたのであります。共に拙著に一大光彩をお添へ下さつた事を深く感謝いたします。

昭和七年九月五日

著者

傳藤原隆能筆　源氏物語繪卷（柏木卷）尾州德川家藏

（二八七頁參照）

平治物語繪卷（信西卷）岩崎男爵藏　（四〇八頁參照）

御物 後鳥羽天皇宸翰御製色紙 （三七九頁參照）

國文學史新講目次

第三篇　平安時代後期

第四篇　鎌倉時代

圖版目次

卷頭圖版

挿入圖版

國文學史新講

次田潤著

序說

國文學史

國文學史は太古から現代に至る、國民の文學的生活の變遷發達の跡を研究するものであつて、日本文化史の一分科である。而して國文學史上には、國民思潮の流に棹さす歴代文學の史的發展の眞相を記述するは勿論、各種文學の推移の狀態、各作家竝に作品の相互の關係、及び作品の史的價値などを明かにし、なほ進んでは、國文學展開の理法を究明して、將來起るべき國民文學への指針となるべき知識をも、與へようとするのである。

國文學史の種類

國史に一般史卽ち通史と特別史とがあるやうに、國文學史にも此の二種類がある。卽ち太古から現代に至るまでの、國文學全體の史的發展の跡を記述するものは國文學通史であり、其の一部分に就いて、特に精細な考察を下すものは特別史である。特別史には種々のものがある。例へば一時代の國文

學の特質及び發達を記すものは、各時代國文學史（上代國文學史・平安時代國文學史・近世國文學史・明治文學史の如き）であり、各種の國文學中の一を取つて、其の發達を考察するものは、和歌史・俳諧史・小說史・淨瑠璃史などの如き種別史である。此の外作家を中心として記述するものは列傳體文學史であり、國文學の形態の展開を研究するものは國文學形態史であり、又國文學の思想の推移を記述するものは國文學思潮史である。而して此等の特別史の樣式は、之を通史にも應用することが出來るのであるから、通史の樣式にも種々のものがある。例へば國文學の種別によつて、各種の文學の展開を別々に記述するものがあり、又國文學の形態上の發展の方面から、國文學全體の史的發達の經過を記す事も出來るのである。併し普通に行はれて居るのは、國文學の思潮の推移を中軸として、各種の文學の展開を考察するものであつて、本書も亦その樣式によつて居るのである。以下其の研究方法の概要を述べよう。

國文學史の研究法

文學は作家の藝術的創造力の產物であると共に、時代の文化現象の一であり、更に大きく觀るならば、流動して止まざる國民の精神生活の一產物である。從つて國文學史の研究は、各時代に現れた個個の作家竝に作品に對して下した考察の結果を、國民の文學的思想の一體系のもとに、綜合し統一する事によつて完成するのである。換言すれば、一作品は其の作家の全作品中の一として考察し、一作家の文學は其の時代の文學的思潮の一產物として研究し、更に一時代の文學は、其の背後に流れて居る上古以來流動し來つた、國民思潮の中に置いて研究して行くのである。かくて國文學史の研究は、先づ作品に對する考察から始まるのである。

（一）作品に對する考察　これには外面的考察と內面的考察とがある。本文批判（Text-criticism）・本文の解釋・作品の解題・題號の由來・內容の組織・書物の體裁などの考察は、外面的考察であつて、これ等は內面的考察、卽ち文學的批判の準備事業であり、また補助的事業である。しかして外面的考察の中で、國文學史の研究上最も重要なのは本文批判である。我が國文學は極めて長い歷史を有するのであるが、近世に至つて印刷事業が始まるまでは、轉寫によつて傳へられたのであるから、其の間に多種多樣の異本を生じたのである。殊に時代の古い作品や、語物謠物の如く流動し易い性質を有する作品の中には、幾十種幾百種の異本を派生したものがある。又古い作品の中には、原本は旣に遠き昔に散逸し、現存するものは後世の僞作であつたり、又未完成の原作の續篇を、後人が書き續いだものがあり、又原作に部分的に補綴改删を加へたものなどがある。かくて多種多樣の異本を有する作品を、研究の對象とするに當つては、先づ異本の相違や移動の跡を系統的に考査すると共に、差違を生じた因緣を考究して之を原形に復するか、止むを得ざれば、原形に最も近いものを整定しなければならぬ。これを定本の整定といふ。本文批判と定本の整定とは、作品の語學的解釋と共に、國文學研究の根本的事業となるのである。

次に內面的考察は、作品に對して文學的批判を下すのであつて、是は作品の種類性質によつて、其の方法を異にするのは勿論であるが、一般には作品の素材・構想・表現等に亙つて、分析的と綜合的との兩批判を下すのである。而して其の批判の態度には、鑑賞的批判と知識的批判とがある。鑑賞的批

判は、自己の感受性により、又は鑑賞力に訴へて批判するのであるから、時に一時の感興に支配せられて、獨斷に陷ることがあり、或は他の批評家の評論が先入主となつて、公正を缺くことがある。主觀的な鑑賞的批判の此の缺陷を補ふものは、卽ち客觀的な知識的批判であつて、是は主として心理學・美學・文學論・修辭學などの知識を應用して、理知的に批判するいである。かくて鑑賞的批判と知識的批判とは並行して、始めて其の作品の眞價を定める事が出來るのであるが、文學史上の作品に對しては、なほ此の外に史的價値を評定する事を必要とするのである。作品に對する批判の標準は、個人によつて相違するやうに、時代によつても之を異にするものであるから、史的價値を判斷する場合には其の時代の標準によつて、——例へば平安時代の和歌に對しては、歌學歌論を參酌し、鎌倉室町時代の連歌に就いては、連歌式目を斟酌し、江戶時代の俳諧を批判するには、其の法式俳論などを參考に供して、——其の時代に於ける存在の意義、竝に他の作家作品に及ぼした影響などを檢討して、其の史的價値を明かにしなければならぬ。

(二)作　家

(二)作家に就いての考察　文學は作家の思想を表現したものであるから、作品を批判するには、先づ作家の個性を明かにする事が肝要である。作家の個性には、人間としての一般的個性の外に、創作的個性があるのであつて、此の二つは一致しない事が多いばかりでなく、時として相反する傾向を示す事がある。從つて作家の個性を考察するには先づ、其の生立・境遇・遺傳・學歷・性格・思想などを考察して、一般的個性を明かにすると共に、其の作品の上に現れた個人的特徴を分析的に硏究して、創作

的個性を究明しなければならぬ。元來作家と作品とは、有機的關係によつて結合せられて居るのであるから、作家の個性を明かにするには、創作過程の方面から個性の分業を考査する必要がある。卽ち一作家の一作品が、如何なる動機により、如何なる素材により、又如何なる構想によつて、創作せられたかを考察すると共に、其の作品の內容・表現・組織等の上に現れた獨創的な特質を、分析的に研究するのである。かくて一作品に現れた作家の個性が明瞭になつたならば、更に其の作家の手に成つた他の諸作と比較して、全作品の相互の關係を進化的に研究し、なほ進んで、時代を同じうし或は種類系統を同じうする、他の作家竝に作品との關係を研究して、其の作家の特性を一層明瞭にすると共に、史的價値を判定しなければならぬ。

(三)環境

(三)環境に對する考察　文學は既に述べたやうに、創作家の素質性格等によつて、特色を發揮するものであるけれども、又一方に於ては、作家の生活環境の影響を受けることが極めて多い。而して環境には自然的環境と時代的環境とがある。

自然的環境

自然的環境は、作家が生活する自然界、卽ち地勢・風土・動植物界などをいふのであつて、作家の自然觀は主としてこれに支配せられて居るのである。日本の地は固より自然界の美趣に富んで居るから、國民は特に自然美を讃美する性情を有するのであつて、自然と人生とは常に交錯して、文學の內容を構成して居るのである。而して文學者の自然觀は、其の地的環境の異なるに從つて、趣を異にするのは當然である。例へば、山紫水明の京都に生活した平安時代の人々が、優美な自然美を絕愛したのは偶然でないが、當時の作家は京洛幾里の天地に跼蹐してゐた

から、其の自然觀は極めて狹小であつた。然るに鎌倉時代になつて、宗教家が熱烈な信仰の爲に、深山幽谷を跋渉して地方の布教に努力し、又武士は戰鬪の爲に南船北馬して、各地の風景に接する機會が多かつたから、彼等の文學に表れた自然觀は忽ち擴大せられた。次いで室町時代から江戸時代にかけての文學は、主として都市の文藝となつたのであるけれども、なほ自然美に對する憧憬の念は衰へることなく、却つて自然觀照の進歩向上を來して、和歌俳諧の如きものに於ては、自然と人事の融合同化によつて、國文學獨特の特徴を發揮したのである。

時代的環境

次に時代的環境は、作家が生活する時代に於ける各種の社會現象、即ち政治・法律・經濟・學問・藝術・道德・宗教などから受ける影響をいふのであつて、作家の人生觀や藝術觀は主としてこれに支配せられて居るのである。かくて時代的環境は作家の個性に影響を與へ、引いては其の作品に時代的特色を發揮するのであるが、作家の中には屢時代の環境から超越して、獨自の境地に住む者があり、又世相に對して反抗的態度をとる者があり、又時として時代の魁となる天才が現れる事もあるのである。而して時代的環境に順應する作家の作品の多くは保守的であつて、或は現代謳歌主義となり、或は寫實主義となるのであるが、時代から超越しようとする作家の作品は、脫俗的高踏的となり、或は理想的空想的となり、又世相に不平を抱いて、之に反抗しようとする作家の創作は、或は諷刺文學となり、或は現代呪詛の文學となるのである。

時代思潮

時代的環境の影響は、主として外面的な世相の影響を指すのであるが、作家は又一方に於て、時代思潮殊に文學的思潮の中に生活するものであるから、時代の文學

的思潮と、作家並に作品との關係に就いての考察は、極めて肝要である。時代の文學的思潮は、例へば平安時代の文學は情趣尊重主義によつて支配せられ、鎌倉室町時代の文學は佛教思想によつて左右せられ、江戶時代の文學は儒教主義の色彩を帶びると共に、一方には階級意識から解放せられた、享樂的傾向が著しくなつたやうなものをいふのである。而して此等の思潮は、國民性に根ざす所の傳統的要素を基調として、文化の發達に伴なつて發展するのであるが、一方に於ては、外來の文化並に思想の影響を受けて、著しく變遷するものであるから、一時代の文學的思潮は、上古以來の流轉の跡を辿ると共に、內外に亙つて其の推移の眞相を究明しなければならぬ。

國文學史の編成

（四）國文學史の編成　作家・作品・環境の三者は不離の關係にあるものであるから、此等に對する考察は獨立的に行はれるべきものでなく、常に聯關して進んで行かねばならぬ。而して個々の作家並に作品を、時代を同じうし若くは種類系統を等しくする、他の文學者及び其の作品と比較して、其の史的關係を考察して、作者の傳統・作品の系統などを組織的に記述することは、文學史編成の準備的事業であつて、之を擴張して一時代の國民の文學的生活の考究に及ぼし、更に各時代の文學的生活を、國民の文學的思潮の一體系の下に綜合的統一的に記述するときには、玆に始めて一篇の國文學史が成立するのである。而して國文學通史の一般的樣式は、既に述べた通り、上古から現代に至るまでの國民思潮を中軸として、各時代に於ける各種の文學の展開を說明するのであるが、上下三千年の長きに亙る國文學史の全局面を見渡して、其の史的發展の跡を時代を追うて記述する事は、極めて困難である。從

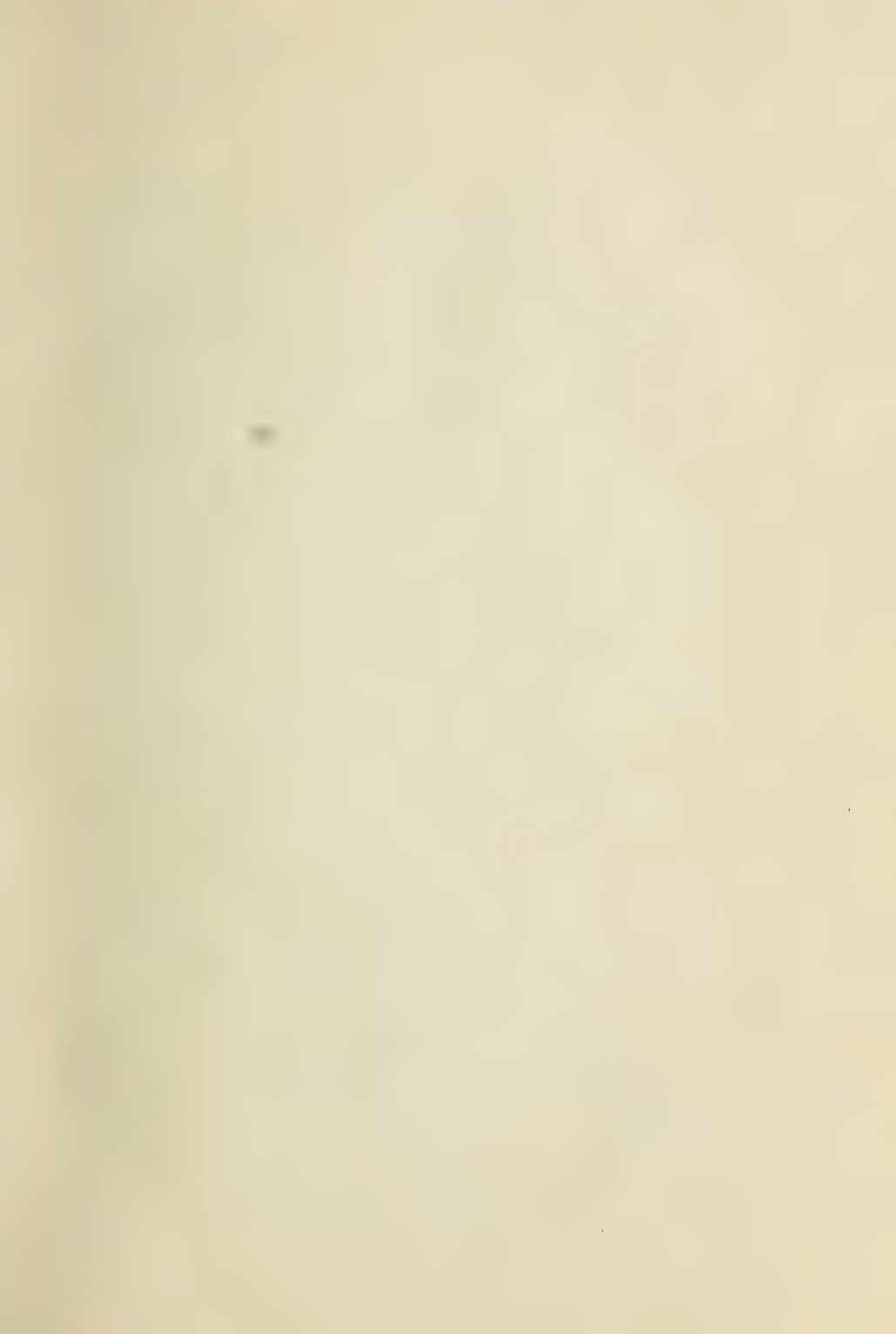
時代の區分

つて普通の國文學史には、縱には時代を幾つかに區分し、又横には各時代の文學を幾つかの種類に分類して、一時代づつの各種の文學の發達を述べて行くことになつて居る。然るに國民思潮は、永遠に流れて止まぬ水の流の如きものであるから、時代的區分を設けるに當つては、種々の困難を感ずるのである。從來最も廣く行はれて居るのは、國史の時代別に準じて、上古・中古・近古・近世・現代とするか、或は政治の中心地、即ち文學の地的環境の移動を追うて、大和時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代・江戸時代・東京時代とするのである。併し國民の文學的生活は、必ずしも政治上の變革や、地的背景の移動と共に變遷するものでないから、此等の時代的區分法は、國文學史上に於ては屢不都合を生ずるのである。そこで國民思潮の主流に棹さす階級的區分によつて、貴族文學時代・武士僧侶文學時代・平民文學時代・國民文學時代とし、又文學的思潮の起伏消長によつて、時代を分つことも出來るのであるが、何れにしても一長一短を免れない。

本書の編成方針

本書は國文學の通史であるから、時代の區分法は、從來最も廣く行はれて居る所に從つて、一般國史との對照の便を圖つたのである。併し平安時代や江戸時代の如きは前後三四百年に亙り、其の間の文學の發達變遷は極めて複雜であるから、更に之を前後の二期に分つことにした。而して各時代の國文學の發達を記述するに當つては、全文學の展開を時の推移を追うて述べることは、極めて困難であるばかりでなく、讀者の不便も少くないから、これも一般國文學史の様式に倣つて、和歌・俳諧・物語・隨筆・日記・淨瑠璃・脚本等の如き分類法によつて之を類別し、各種の文學の發達を別々に記述すること

にした。併し時代を分ち、作品を類別するときには、自ら時代思潮に對する觀念を稀薄にし、又各作家並に作品相互の史的關係を失ふ虞があるから、各時代の初に時代概觀の一章を設けて、其の時代に於ける社會狀態・時代思潮、及び文學の傾向などを概說することにした。

文學者の傳記、作品の解題などは、文學史の記述としては二次的のものであるから、一々詳述する必要はないのであるが、一時代を代表するやうな著名な作家作品に就いては、特に稍詳密に述べる事にした。次に作品の例を揭げる事は、必ずしも必要としないのであるが、作家作品の批評などは、實例によつて說明を一層正確にし、且つ讀者に深い印象を與へる事が出來るのは當然であるから、紙面の許す限り之を揭げた。尤も散文にあつては、讀者が容易に見る事の出來るものは多く之を省き、形の短い和歌俳句の如きは、なるべく多く示して置いた。なほ著名な文學の古寫本古版本、作者の筆蹟肖像の如きものは、なるべく多く揭げて參考に資したいのであるが、紙面を節約する爲に止むを得ず割愛したのが多いのである。

第一篇　大和時代

第一章　時代の概觀

時代の區分

大和時代は文化の中心たる帝都が、大和地方にあつた時代、卽ち國初から奈良時代の終までをいふ。此の時代は前後極めて長い年代に亙つて居るから、更に幾つかに區分する事が出來る。現存する最古の文獻が成つたのは、推古天皇の御代であるから、之を堺とする時には、それ以前を傳誦文學時代とし、それ以後を記載文學時代と稱する事が出來る。尤も此の二つの時代は、なほ相當長いのであるから、傳誦時代は、朝廷に始めて漢籍が傳來した應神天皇朝を堺として、原始文學時代(年數未詳)と記錄發達時代(凡そ三〇〇年)とに分ち、記載文學時代は、奈良奠都を堺として、近江飛鳥藤原時代(一一五年)と奈良時代(七五年)とに分つ事が出來る。併し傳誦時代の文學の發達は、極めて遲遲たるものであつて、其の發生時代を嚴格に定める事が困難であるばかりでなく、それが文字に寫されて固定したのは奈良時代であるから、時代を追うて記述するには種々の不便がある。從つて本書には、大和時代を一括して說く事にし、只時代の概觀を述べる時にのみ、二つの時代に區分する事にした。

一　傳誦文學時代

傳誦文學時代は、原始文學の時代から漢學の傳來を經て、佛教が渡來するまでをいふのであつて、國史上いはゆる氏族制度時代である。日本民族は太古の時代に、時を異にし、場所を異にして、集團的に此の國土に移住し、先住異民族を驅逐して、漸次繁榮したのである。先住民族は蝦夷・土蜘蛛の如き原始民族であつたから、文學を遺さなかつたのであるが、日本民族は文化民族であつたから、原始文學たる神話・傳說・歌謠などを語り傳へたのである。而して此等の傳誦文學を語り傳へた主なる民族は、出雲系民族と日向系民族（天孫民族）とであつて、共に大陸を原住地とし、言語風俗を同じうするものである。此の二つの民族は、夙に大陸の文化を傳へて最も優勢であつたが、後に日向系民族は國土の中央なる大和に移り、出雲系民族と融合して國家を建設し、遂に全民族を統一するに至つたのである。

日本民族

「朝日の直刺す國夕日の日照る國」は、瓊瓊杵尊が筑紫に天降つて、都とすべき處を求め得た時に、仰せられた語として傳へられて居るが、これ畢竟上代の我が民族が、住むに好ましい理想境を指したものであつて、大和を日高見の國と言つたのも同じ意味であらう。大和は四方に遠く山を繞らし、中央に廣漠たる沃野があつて、水は縱横に流れ、日の光は終日照り輝く處であるから、農業生活を營むのに適して居り、又光明を愛する民族性にも適して居る。かくて大和は、神武天皇が畝傍山の麓に都

大和國

を定め給うて以來、數十代の間帝都の地となり、上代文化の淵源地となつたのであつて、上代の國文學も亦、此の平野に於て發育を遂げたのである。

氏族制度

上代の社會組織は氏族制度である。氏族制度は祖先崇拜を根本として發達し、又維持せられたのである。祖先崇拜の對象となる神は、言ふまでもなく祖先神であるが、氏族が代々尊崇し來つた自然神も亦、崇拜者との關係が親密の度を加へると、屢其の氏族の祖先神となる事があり、又氏族と氏族とが結合し融合すると、もと一氏族が崇敬した神が、新たに共同の祖先神となるのである。更にこれを擴張して考へると、全民族の統一が成つた後に、皇室の御祖神がやがて全國民の大祖神と仰がれ、また國土の經營や國家の統一に功績のあつた氏族の祖神が、國民一般から崇拜せられるやうになつた由來も亦、自ら明瞭である。要するに祖神の崇敬によつて、小にしては氏族の鞏固なる團結が成り、大にしては皇祖天照大御神を尊崇する事によつて、皇室を大宗家と仰ぐ國民全體の神聖な結合が成つたのが、我が建國の體裁であつて、祭祀は直ちに政治である所以は玆にあるのである。かかる國體を有する我が上代に、政治・法律・道德などが、敬神思想を基礎として發達したのは當然であるが、なほ祭神の設備や幣物には、物質文明の最善を盡し、神前に奏する歌舞・音樂・祝詞には藝術の粹を集めたから、百般の文物も亦、祭祀を中心として發達したのである。

海外交通

國家統一以前に於て、出雲の民族が朝鮮と交通してゐた事は、『古事記』『日本書紀』などの神話によつて知られるのであるが、筑紫の民族が、朝鮮に設けられた漢人の植民地(樂浪帶方)と往來し、更に

遠く洛陽に赴いて、直接漢の文明を輸入した事は『漢書』『後漢書』『魏志』などの記載によつて明かである。神武天皇が筑紫から大和に遷り給うたのは、遠き太古のことであるが、其の後皇威は次第に國内に弘まるに從ひ、出雲も筑紫も朝廷の治下に歸し、西曆四世紀の頃には、既に國内の統一が成つたやうである。此の頃朝鮮半島には、北方に高句麗の建國があり、次いで其の南方に新羅・百濟が起つて、所謂三韓の時代となつたが、北方の國は絶えず南方の國を侵した爲に、任那は先づ救を朝廷に乞ひ、次いで百濟も亦援助を求めた。是に於て朝廷は軍を遣はして、新羅及び高句麗と戰はしめたのであつて、是より三韓との關係はいよいよ親密になり、百濟が始めて朝貢して以來、大陸の文物は頻りに我が國に傳來するやうになつた。三韓の文明が盛に傳來したのは、應神天皇から雄略天皇に至る間であるが、此の頃樂浪・帶方の秦漢人の遺民も亦、屢集團的に歸化して、彼の地の文化を盛に移植したのである。記紀に傳ふる所によれば、當時海外から傳來した文明は、漢學を始めとして、牧馬・造酒・土木・造船・鍛冶・養蠶・織縫・醫術等であつて、是より我が國の文明は、年を逐うて著しく發達したのである。

漢學佛教の傳來

大陸から傳來した文明の中で、國民の精神生活に著しい影響を與へたのは、漢學と佛教である。應神天皇の御代に、百濟から渡來した阿直岐と王仁を師として、皇子菟道稚郎子が漢學を修められたのは、我が國に於ける漢學の始といはれて居り、又王仁が『論語』と『千字文』とを獻上したのは、公に漢籍が傳はつた最初とせられて居る。其の後王仁の子孫は、歸化人阿知使主（あちのおみ）の子孫と共に、文筆を以

傳誦時代の國文學

つて朝廷に仕へ、外交の文書や朝廷の記錄出納の事に當つたのであるが、此の外にも多くの學者が渡來して、漢學は益盛に行はれるやうになつた。かくて漢學が普及するにつれて、儒教は我が國民道德の上に、著しい感化を及ぼしたのである。儒教は元來宗教的色彩の稀薄な道德教であつて、其の說く所の仁義忠孝は、よく我が國風と一致するものであつたから、容易に普及したのであるが、欽明天皇の御代に傳來した佛教は、我が固有の宗教思想と相容れざるものであつたので、忽ち國論が沸騰した。併し佛教も亦時を經るに從つて漸く理解せられ、殊に聖德太子が神儒佛三教の調和を圖られて以來は、非常な勢を以つて弘通するに至つた。聖德太子は儒佛を究められた後、日本固有の精神を根柢として、巧みに二教の長所を取り入れられたのであつて、大化改新の基礎は實に太子によつて築かれたのである。併し此の事は更に次の時代の初に述べる積りである。

以上述べたやうに、大陸との交通は太古から行はれ、時代を下るに從つて益盛になり、且つ其の傳來文化も漸く多方面に亙つたのであるが、其の國民に及ぼした影響は、未だ主として物質方面であつた。漢學の如きは傳來の後相當に長い歲月を經たけれども、未だ單に文字の學問に過ぎなかつたのであつて、儒教思想の影響は、國文學に現れるまでには至らなかつた。朝廷に於ては、歸化人若くは其の子孫をして文筆に當らしめ、又諸國には國史（史官）を置かれたけれども、彼等の記す所は、主として政治上の記錄であつて、未だ漢字を自由に使用して、國文を寫す程度には達してゐない。從つて推古朝以前の國文學は、口々に傳誦せられたのであつて、傳誦文學の特徵として聲調を重んじ、散文

もなほ韻文の要素を多分に含んで居るのである。かくて口傳へに傳承せられた上古の文學的遺物にして、後世文書に記載せられて固定したものは、神話及び傳說と、それに伴なふ古歌謠であつて、此の外には朝廷の祭祀に用ゐられた、宗教文學ともいふべき祝詞がある。神話と傳說は上古の敍事文學であり、歌謠は抒情文學であり、祝詞は敍事的抒情文學であつて、此の三者は後の國文學の母胎となつたのである。而して此等の文學の特徵として注意すべき事は、何れも神若くは超人間的な英雄を對象とする文學である事、上代國民の共通の思想感情を表現したものである事、傳誦文學である爲に、極めて流動し易いものである事などである。

二　記載文學時代

遣隋使及び遣唐使

記載文學時代は推古朝以後、奈良朝の終に至るまでの二百年間である。此の時代は我が國民が、海外文明の燦然たる光彩に眩惑すると共に、國民の自覺が漸く興隆した時である。而して當時大陸の文明の輸入に最も力を盡したのは、遣隋使及び遣唐使の一行であつて、其の端緒を開いたのは聖德太子である。聖德太子は推古天皇の十五年（隋の煬帝の太業三年）に、始めて小野妹子を隋に遣はされ、次いで十六年及び二十二年にも遣隋使の派遣があつたが、二十六年には隋が滅んで唐の代となつた。其の後十三年を經て、舒明天皇の二年（唐の太宗の貞觀四年）に、犬上御田鍬等を唐に派遣したのは、卽ち遣唐使の最初であつて、爾來奈良朝の終までに、唐に使を發遣する事が前後十四回に及んだ。當時の遣隋使及び遣唐使には、

留學生と唐の文化の傳來

毎回多數の學問僧留學生を從はしめて、彼の地の文物制度を學ばしめられたのであつて、是より我が國の政治・宗教・學問・藝術等は急激に發達し、國民生活の面目は全く一新するに至つた。

推古天皇の十六年に小野妹子を再び隋に遣はす時、八人の留學生を從はしめたのは、留學生派遣の最初であつて、其の中には大化改新に與つた高向玄理・新漢人旻、及び歸朝の後に中大兄皇子竝に中臣鎌足の漢學の師となつた南淵請安などがあつた。其の後學問僧留學生の派遣せられることは益多くなり、奈良時代には遣唐使一行の總人員は五百名乃至六百名に達した。留學生の在留期は概ね長く、十年二十年を普通とし、長きは三十年にも及んだのであるが、而も其の歸朝に際しては、大陸の典籍を携へ歸るは勿論、屢かの國の學者高僧を伴なひ歸つたのであるから、外來文明は年と共に益盛に輸入せられ、天平時代に至つて最盛期に達したのである。今遣唐使の一行が齎した海外文物の、最も著しい一例を擧げて見よう。入唐大使多治比廣成の一行が、天平六年に歸朝の途に上つた時は、海上で風浪の難に遭ひ、大使の率ゐる四船の中一艘は崑崙に漂著し、一艘は難破したのであるが、廣成の乘つてゐた第一船には、留學生の吉備眞備・僧玄昉・大和長岡等が便乘してゐた。眞備は十七年間留學して、各種の學問の蘊奧を究めた上に、『唐禮』一百三十卷、『太衍暦』一卷、『太衍暦立成』十二卷以下、樂書・樂器等を携へて歸つた。又玄昉は經論五千餘卷と諸佛を擁して歸り、大和長岡は唐の法律を研究した人で、歸朝の後には眞備と共に律令の改定に與つて功績があつた。更に第二船には、唐人袁晋卿・唐僧道璿・婆羅門僧正菩提・林邑僧佛哲・波斯人李密翳等が便乘してゐた。袁晋卿は我が大學の音博士

となつた學者であり、道璿は華嚴の章疏を傳へた名僧であり、菩提以下の三人は我が國に始めて渡來した、印度の高僧若くは學者である。卽ち菩提は華嚴に精通し、我が大佛造立竝に其の開眼供養の導師となつた人であり、佛哲は林邑の八樂を傳へた大樂師であるが、此の二人はなほ悉曇學をも傳へて、我が音韻學の發達に大なる貢獻があつた。而して李密醫の事は明瞭でないが、其の名から推して、醫學に通じた人であらうと言はれて居る。右は最も著しい一例を擧げたのであるが、前後十數回派遣せられた遣唐使の一行が、大陸各地の文化を傳へた盛況は推して知るべきである。

唐の文物制度の摸倣によつて成つた政治上の大改革は、孝德天皇朝の大化改新である。此の新政によつて、從來弊害の多かつた氏族制度は崩壞して、中央集權制の世となり、皇室の尊嚴は益加はると共に、人才登用の途が開かれた爲に、國民の自覺も漸く起つて、皇室竝に國家に對する國民的思想が盛に振興するやうになつた。大化改新以後の五六十年間（近江飛鳥藤原時代）は、所謂律令制定時代であるが、文武天皇の御代に至つて、遂に大寶律令の撰定があつた。此の律令には我が國情に鑑みて、諸官省の上に神祇官を置いた外は、殆ど唐制を其の儘採用したのであるが、是より先既に大化の頃以來、都制を始め宮殿寺院の建築などには、悉く唐風の摸倣が行はれてゐた。大化改新の時に營まれた難波豐埼宮は、唐の都制を摸した最初の帝都であるが、其の後近江大津宮・飛鳥淨御原宮・藤原宮を經て、漸次規模が雄大となり、遂に平城京に至つて最も大規模に營まれた。元明天皇以後は卽ち奈良朝であつて、其の七代七十五年間は、帝都を中心に東洋各地の文化が盛に傳來して、咲く花の匂ふが如

き天平の盛時を見るに至つたのである。

平城京は唐の長安を其の儘に模範として營まれたものである。當時長安は支那の佛教の中心地であつて、西域・印度から傳來した佛教文化は、都市の一大美觀となつた時であるから、これを模範とした我が平城京が、佛教藝術の府となつたのは當然である。卽ち東西の郊外には、莊嚴なる堂塔が高さを競うて立ち並び、其の殿前には異國趣味の豐かな舞樂が奏せられ、堂內には燦爛と輝く佛像・壁畫・佛具があつて、佛前では一日に數百千の僧尼の得度式が行はれた。殊に日本佛法の總本山ともいふべき東大寺に於ては、八宗を始めとして、東洋各國の學問藝術の硏究が行はれ、其の戒壇では、聖武上皇を始め、光明太后・孝謙天皇が、一時に戒を受け給ひ、至尊の御身にしてなほ三寶の奴とまで仰せられるほどの有樣を見た。更に當時の宗制を見るに、各國に國分寺竝に國分尼寺を造らしめ、これを總括する爲には、帝都に總國分寺としての東大寺と、總國分尼寺としての法華寺を建立せしめられ、斯くして全國民をして、均しく佛果を得しめようとせられたのである。かくて佛教は全く國家的の宗教となつたのであるから、上古以來の祭政一致の國風は當時一變して、政教一途の新政を見るに至つたのである。

推古朝以後佛教は年々興隆し、天平期に至つて頂上を極めたのであるが、其の興隆は國民の內心からの、强烈なる宗教的欲求からここに至つたのでなく、官府の權威若くは爲政者の誘導によつて到達したのであるから、一般の信仰は極めて外面的であつた。卽ち堂塔の建立も、經文の書寫讀誦も、樣

唐招提寺講堂

此の講堂はもと平城宮の朝集殿であつたのを、本寺草創の際に勅旨によつて、賜はつたのであると傳へられて居る。移建に當つて佛堂に適するやうに、多少改造せられたであらうと思はれ、又其の後建治・延寶・明治の三回に修理を施した時にも、部分的に改廢したであらうから、現在のものは原形の儘でない事は勿論である。併し外觀の如きは、概ね原形を保存してゐるであらうから、是によつて和銅當時の宮殿建築の樣式を想像する事が出來るのである。

樣な法會も、主として聖壽の安泰や國家安穩の爲に行はれたのであつて、其の信仰が飽くまで現世の利福を祈願するものであつた事は、彌勒・釋迦・觀音・藥師の諸佛が、盛に造られた一事を見ても明瞭である。從つて當時の佛教の盛大は實に空前絶後の

ことではあつたけれども、國民の内部生活に影響する所は極めて少かつたのであつて、民間の宗教は依然として神ながらの道であつた事は、『萬葉集』を見ても明白である。

佛教が時代を下るに從つて隆盛を極めた事は、右に述べた通りであるが、一方漢文學を見ると、これは傳來の歷史も古く、漢籍の如きは夙に傳寫によつて廣く流布してゐたから、それが國民思想に及ぼした影響は、佛教の比ではなかつた。大化改新以前に於ける貴族子弟の教育は、學者の個人教授によつて行はれたのであるが、大化改新の後大學寮の設置があり、次いで教育機關として京師に大學、諸國に國學を設け、明經・紀傳・明法・算數の四道を授け、其の業を卒へた者を試驗して官吏に任用する制を立てて以來、漢學は忽ち興隆した。尤も律令制定時代には、特に明法道を重んじたのであるが、天智天皇の御代以來は詩文の大家が續出し、又天武天皇の頃からは紀傳道を重んじて、修史の計畫を立てさせられたから、詩文竝に經史の學も亦漸く勃興するやうになつた。かくて奈良朝になると、從來の紀傳道の中から文章道を獨立させ、文章博士を置いて紀傳道を掌らしめられたから、詩文學は大いに起つた。漢學が興隆するにつれて、儒教が我が國民思想に、多大の感化を及ぼした事は言ふまでもないが、一方には五行讖諱説の如きも漸く重んじられた事は、大化から天應に至るまでの年號十七回の中、大化・大寶など二三を除く外は、悉く祥瑞に基づいてゐるのを見ても明瞭である。支那の神仙思想は、『懷風藻』の詩や、『萬葉集』の和歌にも見えて居るのであつて、仙境に憧憬れ、不老長生を願ふ思想が漸く著しくなつたのであるが、殊に說話文學には多大の影響を及ぼして、在來の神話傳說と

は色調を異にした、多くの神仙說話を生ずるに至つた。老莊の超俗隱逸の思想は、儒教を尊んだ當時の學風とは、相容れざるものであつたけれども、奈良朝には一部の民心を動かしたやうである。なほ六朝文學の無常厭世の思想は、時代を下るにつれて、漸く文學者の間に浸潤したのであつて、萬葉末期の歌人には、一種の哀調を帶びた傾向が著しく見えるのである。かくて奈良朝になると、漢文學は國民思想に種々の感化を與へたのであつて、やがて起るべき平安時代の文學的思想の基調は、略ぼ此の時代に成つたのである。

近江飛鳥藤原朝の文學

最後に記載文學時代に於ける國文學の發達の概況を略述して置く。推古朝以後海外との交通が彌盛になるにつれて、國民の自覺も亦漸く勃興し、國文學は從來の渾沌たる民族的文學から離脫して、種種の部門に分れて別々の發達を遂げるやうになつた。殊に近江飛鳥藤原時代には、支那文學を摸倣して漢詩漢文を盛に作るやうになつたが、當時和歌は內容が著しく進步し、形式も整頓して著しく發達し、個人的特色を有する歌人が次々に現れた。殊に藤原朝の典型的歌人といはれる柿本人麻呂が、傳統的な敬神思想と國家的觀念を强調したのは、當時の國民思想を代表した觀がある。支那の史學に刺戟せられて國史を編纂する事は、既に推古天皇の朝に起つたのであるが、壬申の亂後は特に國史編述の必要を感じ、天武天皇以後歷代に亙つて、修史の事業が繼續せられ、奈良朝の初に至つて『古事記』『日本書紀』の完成を見るに至つた。要するに推古朝から藤原朝に至る百十餘年間は、國家の發展に伴なつて、國民的自覺が盛に起つた時代であるから、此の間の國文學には、皇室竝に國家に對する國民

的思想感情が强調せられたのである。此の傾向を承けて、更に個人的に自覺して、個性を表現するやうになつたのは奈良朝である。推古朝から藤原朝に至る間は、また文章史上の黎明期として注意すべき時代である。現存する最古の文獻は、聖德太子の憲法十七條・佛典の註疏・外交文書・金石文などであるが、此等の中には純粹の漢文の外に、漢字を借りて國語を混へ記した折衷體がある。此の折衷體は、其の後漢字の音訓を借りて、國語を自由に表記するやうになつて、茲に始めて純粹の國文を寫し得るやうになつたのであつて、『古事記』や『萬葉集』の如き記載法が發達したのは、即ち飛鳥藤原朝の頃である。

奈良朝の文學

奈良朝は奈良奠都と外來文化の傳來とから大なる刺戟を受けて、學問文藝が彌向上發達して、上代文學史上の黃金時代となつた。其の初期には天武天皇の修史の御遺志を承けて、國史地誌などの編纂が次々に行はれたのであるが、一方には我が國の文學を支那文學と、對等の位置に置かうとする努力が續けられた。萬葉歌人の山部赤人・山上憶良・大伴旅人・高橋蟲麻呂等は其の先鋒であつて、其の作歌は題材内容表現などが著しく展開すると共に、各自己の特色を發揮して居る。其の後歌人には大伴家持・湯原王・大伴坂上郎女等があつて、個性はいよいよ鮮明になると共に、漢文學の感化を受けて、形式内容ともに優美纖細になつた。かくて和歌は奈良朝の末期に近づくに從つて、素朴純眞な上代文學の特質を失つて、貴族的文學となり、茲に都鄙の文學の間に著しい懸隔を生じ、又目で味ふ文學と耳に訴へる文學とは分離して、別々の途を辿るやうになつた。

『萬葉集』は奈良朝の文學を代表するものであるが、之に次いで貴重なのは宣命である。宣命は祝詞の系統を引いて發生した天皇の勅命を宣る文章である。其の文體は祝詞よりも遙かに散文的であり、內容は事柄に應じて變化して居る。宣命は奈良朝の末期に近づくに從つて、儒佛の思想を多分に取入れ、文體も漢文を引用し、用語も外來語を多く用ひるやうになつたのであつて、後の和漢混淆文の魁となつて居る。奈良朝にはまた漢詩漢文が盛に行はれた。當時宮廷に於ては、四時の公宴に群臣を召して詩を上らしめられ、又貴族の間にも讌集賦詩の風が流行した。かくて詩文の大家は續々輩出し、又詩の撰集や家集も編まれたのであるが、現存するものは『懷風藻』一卷だけである。漢文は『古事記』の序、『懷風藻』の序竝に詩家傳、『常陸風土記』『萬葉集』の歌序などに其の面目を傳へて居る。奈良朝にはなほ說話文學がある。其の一は神仙說話であつて、『萬葉集』『懷風藻』『風土記』其の他に散見し、他の一は佛敎說話であつて、『日本靈異記』に收錄せられて居る。而して此等の說話文學は平安時代の物語の源流となつたのである。

第二章　神話及び傳說

一　神話傳說の集成

國文學史上最古の文學は、『古事記』『日本書紀』『風土記』等に記載せられて居る神話・傳說、及びそ

れに附隨する歌謠である。上古の歌謠は次の章に於て述べるとして、先づ神話傳說と、それを收錄した『古事記』以下の古典に就いて考察することにする。

神話

原始時代の民族は驚異的の感情を起すすべての現象の起因を、超自然的存在（神・精靈など）に歸すると共に、すべての事象を自己と同樣に、生命竝に靈魂を有する如く考へたのである。この思考作用を神話學者は、神話的想像又は神話的思考法と言つて居る。神話は原始時代の民族が共通の神話的想像によつて、自然や人事の諸現象を說明した一種の物語である。卽ち神話は、理智の掣肘を受けない原始民族の想像の產物であるけれども、自然と人生に對する說明を試みたものであつて、其の解釋の基準となつたものは、當時に於ける信仰・習慣・產業・社會組織などの如き、一切の精神生活竝に物質生活の實相であつて、其の物語は彼等にとつては架空的なものでなく、現實のものであると信じられてゐたのである。從つて神話は、宗教や科學や藝術などが未だ分化せずして、混沌たる狀態にあつた太古に於ける文化的產物であつて、吾々は之を硏究する事によつて、我が國民文化の遠き源を知り得るのである。

傳說

神話に次いで發生する民族的な物語は傳說である。これは歷史的に著しい文化現象を、後から回顧する心情から生れるのであつて、神話時代から歷史時代に移り行く中間に發生する、想像的理想的の物語である。傳說は神話に較べると、超自然的分子の少いものであり、又一般に時と處の束縛を受け易いものであるが、特に神話的特質を多く含んで居るものを神話的傳說といひ、歷史的事件又は歷史

的に可能なる事柄に關するものを歴史的傳說といふ。傳說の中には理想的英雄を主人公とする物語が多いのであつて、之を特に英雄傳說といふ事がある。神話的傳說は神話に接觸し、歴史的傳說は歴史若くは歴史物語に接觸するのであるが、其の接觸點に於ては二者が混淆してゐて、明確な境界線を引き難いのである。

說話

神話や傳說の中には、諸所に遊離的に介在する說話がある。說話は神話の性質を失つた短い話であつて、如何なる神又は英雄にも結び付き、又如何なる事象にも容易に結び付けられるものである。說話の中には、人間と動物との交渉に關する物語が多いのであるが、其の他動物だけの說話があり、又大樹・靈泉・靈劍などに關するものなどがあつて、其の種類は極めて多い。說話の多くは、地名・俚諺・慣習・禁制(タブー)などの起りを說明する爲に、神話傳說の中に挿入せられて居るのであるが、中には氏族の出自や、家職の由來などを說明して居るものがある。なほ說話の中には、屢外來のものであらうと思はれるのがある。神話及び傳說は民族の所產であつて、廣く民族の間に語り傳へられたのであるが、說話は主として一部の民衆の間に傳承せられたものであり、今日もなほ地方の民間に、口碑として保存せられて居るものが無數にある。かくて說話は、神話傳說の如き體系を具へるに至らずして、個々に傳承せられたものであり、其の內容形態ともに、概して低級なものであるから、文學としての價値は二次的である。

神話傳說の統一

我が民族の神話傳說及び說話は、『古事記』『日本書紀』などに記されて、後世に傳へられたのである

が、これは初から今見るやうな、組織的な物語として現れたのではない。最初は皇室を始め諸の氏族の間に、それぞれ祖先から語り傳へられた個々のものがあつて、しかも其の傳承は上代に於ては、社會的地位を確證する神聖な物語として、最も嚴正に語り傳へられたのである。然るに朝廷の威德が漸く廣く民族の上に及び、やがて全民族が皇室を中心として、統一せられるやうになると、從來個々に語り傳へられた諸の氏族の傳承も亦、皇室の傳承を根幹として結集せられて、遂に一體系を具へた國民的傳承（記紀に記されて居る神話傳說の原形）の成立を見るに至つたのである。併し統一せられた國民的傳承と雖も、なほ部分的には種々の異說があつたのであつて、此が文字に記されて固定する時に、一說として取られたものもあるが、（日本書紀一書曰の如き）捨てられて永久に湮滅したものも尠くなからうと思はれる。要するに我が民族の神話傳說が一體系を具へたのは、全民族の統一が成つた後である。而して之を資料として國史を編纂するまでには、更に長い年月を經たであらうと思はれる。

國史編纂以前に於ける神話傳說の傳誦は、漢字が傳來した後も、なほ相當長く續いたであらうと思はれるが、此の間に皇室を始め、一部の上流階級の間には、漢字を用ひて記錄を作ることが行はれたに相違ない。併し漢字を自由に使用して國事を記すことは、日本人にとつては容易な業でなかつたから、初は專ら歸化人の氏族が、これに從事したのである。例へば應神天皇の御代に歸化したと傳へられる阿知使主、及び其の子都加使主の子孫は、東の文部を率ゐ、又王仁の子孫は西の文部を率ゐて、朝廷の記錄に從事したのであるが、其の他にも秦漢人や韓人の歸化した者の後裔にして、文筆に從事

古事記以前の修史事業

したものの多かつた事は、『日本書紀』『古語拾遺』『新撰姓氏錄』などによつて知られる。而して此等の歸化氏族が記したものは、主として政務上の記錄文書であつたと思はれるが、又家々の私記も記されたであらう。かくて此等の記錄文書にして、幸に後世に遺存したものは、口傳へに傳承せられた神話傳說と共に、後の國史編纂の資料となつたのは勿論である。

『日本書紀』の仁德天皇四十一年の條に、「春三月、遣紀角宿禰於百濟、始分國郡疆場、具錄鄕土所出。」とあるのは、朝廷で記錄を作製せしめられた最古の所見である。此の記事によれば、これより先に國內の記錄を作る事が既に行はれてゐたであらうと想像せられる。次いで履仲天皇紀の四年八月の條には、「始之於諸國置國史、記言事達四方志。」とあるから、當時は既に諸國に史官を置かれたのである。

かくて朝廷に於ては、仁德天皇の頃から、政治上の記錄を作る事が行はれたのであるが、當時記錄に從事したものは、なほ主として歸化氏族であつたであらう。日本人の手に成つたと思はれる最古の文獻にして現存するものは、推古天皇朝に成つたものであつて、此の御代には始めて國史の編纂が行はれたのである。卽ち推古天皇紀二十八年の條に、「是歲皇太子島大臣共議之、錄天皇記及國記、臣連伴造國造百八十部、幷公民等本記。」とあるのは、國史編纂の初見である。此の記事によれば、當時の國史は聖德太子が、蘇我馬子と共に議つて編修せられたのであつて、體裁は支那の史書に倣つた紀傳體であつたやうである。併し此の國史は、其の後皇極天皇の四年六月に、蘇我蝦夷等が誅せられる時、其の家と共に烏有に歸したのであるが、「國記」だけは船史惠尺が火中から救ひ出して、中大兄皇子に獻

天武天皇の修史事業

じたことが書紀に見えて居る。尤も「國記」に就いては、其の後に何等の記事も見えてゐないのであるが、若し後に遺存したとすれば、其の後の修史事業の重要な資料となつたであらう。世に聖德太子と馬子の共編に係かる國史と稱する『先代舊事本紀』十卷（略稱「舊事紀」）が現存して居るけれども、これは平安時代の初頃に、記紀其の他の古文獻を抄錄して成つた僞書であることは、既に江戸時代の學者が考證した通りである。

推古天皇の御代に始めて國史の編纂が行はれて後六十二年を經て、天武天皇の十年三月には、川島皇子・忍壁皇子・廣瀨王・竹田王・桑田王・三野王以下諸臣に詔があつて、帝紀及び上古の諸事を記さしめ、中臣連大島・平群臣子首をして、筆錄せしめられたことが書紀に見えて居る。帝紀は皇室の御系譜竝に御傳記であり、上古の諸事は神話傳說の類を指したのであらう。又『古事記』の序文によれば、天武天皇が當時諸家に傳はつてゐた帝紀及び本辭に、誤や僞が多かつたのを憂ひ給うて、經國の大本とすべき正しい帝紀及び舊辭を撰錄して後世に傳へようとして、先づ舍人の稗田阿禮に命じて、帝皇の日繼及び先代の舊辭を誦み習はしめられたのであるが、崩御によつて中絕したといふ。（帝皇日繼は帝紀と同じであり、本辭舊辭は上古諸事と同じであらう。）是より先、蘇我氏討伐の事を謀り給うた天智天皇は、律令を定め制度を改め、又學問を獎勵せられて、御製の詩文もあつたやうであるが、文書の類は悉く壬申の兵燹に罹つて灰燼となつてしまつた。壬申の大亂は皇室の不詳事であり、且つ近江朝廷に代つて天下を知ろし召した天武天皇の御政治は、改新に對する反動とも見るべきものであつたので、當時の國民精神には、多少の動搖があつ

たもののやうに思はれる。從つて天武天皇が特に修史事業を盛に起されたのも、一には蘇我氏滅亡の時、燒失した國史を再興せられる爲、一には當時區々に傳承せられてゐた、諸の氏族の歷史を統一して、國民精神の歸趨を明示しようとせられたものと想像せられる。さて天武天皇は、右に述べたやうに、二様の修史事業を起されたのであるが、崩御によつて何れも完成せずして中止せられた。併し天皇の御遺志は、其の後歷朝に亙つて繼承せられたのであつて、稗田阿禮に誦み習はしめられた舊辭を本として、撰錄せしめられたのは、元明天皇の御代に成つた『古事記』であり、天武天皇の十年三月に起された修史の業は、『古事記』の成つた年から更に七年を經て、元正天皇の養老四年に、『日本書紀』(三十卷系圖一卷)となつて完成を告げたのである。

二　古事記

成立の由來

『古事記』の成立の由來は、撰者の太安萬侶が卷頭に掲げた序文(實は上表文である)に明記せられて居る。卽ち元明天皇が、天武天皇の修史の御遺志を紹がせられて、先紀(帝紀と同じ)や舊辭の誤謬を正す爲に、和銅四年九月十八日に太安萬侶に詔を下して、稗田阿禮が誦み習つた勅語の舊辭を撰錄せしめられたものであつて、完成して獻つたのは、翌年卽ち和銅五年正月二十八日である。此の文面によれば、勅語の舊辭だけを資料としたやうに見えるけれども、帝紀も亦資料となつたであらうと思はれる。帝紀は主として皇室の御系譜、及び皇位繼承の次第などを記したもので、一の成書であつたらしいのであつて、『古

事記』に記載せられて居る天皇の登極、崩御の寶算、山陵の所在、后妃皇子の事などは、之を資料として記したのであらう。次に舊辭は、皇室を始め諸の氏族が傳承した神話傳説であつて、これも天武天皇の御代には、既に文書として存在したやうである。要するに『古事記』の成立に關係のあつたのは、天武天皇と稗田阿禮及び太安萬侶であつて、編述の根本資料となつたものは、帝紀と舊辭である。而して天武天皇は、當時區々に傳承せられてゐた諸傳説を取捨し修正を加へ、且つ統一を與へられたのであるが、『古事記』の序文中に安萬侶が、「謹みて詔旨に隨ひ、子細に採り摭ひぬ。」と言つて居るのを見ると、天武天皇の御代には、未だ一體系を具へた古史傳説の成書はなかつたのである。次に稗田阿禮に就いては、序文中に「時に（天武天皇の御代）舍人有り、姓は稗田、名は阿禮、年は是二十八。人と爲り聰明にして、目に度れば口に誦み、耳に拂るれば心に勒す。即ち阿禮に勅語して、帝皇の日繼及び先代の舊辭を誦み習はしめたまひぬ。」とある。此の文意は、天皇から授けられた古傳説を、忠實に諳誦したものとも解せられるが、寧ろ難解な古記錄の訓方を、天皇から授けられた通りに、誦み習つたものと解するのが妥當である。岡田正之博士の説によれば、誦習の語は『史記』の儒林傳に見えて居るのであつて、諳誦の意ではなく、誦讀習熟の義である。而して安萬侶は、先にも述べたやうに、天武天皇が新しく整理せられた帝紀及び舊辭を更に取捨して、『古事記』を編纂したのであるが、其の記述の方法は、序に述べて居る所によれば、阿禮が誦み習つた古訓を其の儘に採用し、且つ文字使用法の如きも、古記錄の面目を出來る限り保存するやうに努めたのである。（當時阿禮が生存してゐたとすれば六

十有餘の年齡であるが、其の存否に就いては明瞭を缺いて居る。)さて安萬侶は壬申の亂に功勞のあつた多朝臣品治の子で、靈龜二年に氏の長者となり、養老七年に民部卿從四位下で歿した人である。安萬侶が當時一流の文章家であつたことは、其の筆になつた『古事記』の序文を見ても明かであるが、なほ『古事記』撰進の後に、書紀の編纂者の一人に加へられた事に徵しても明白である。なほ『古事記』の題號は、上古の諸事を記す意であつて、恐らく安萬侶が命名したのであらう。

古事記の組織

『古事記』は三卷から成つて居る。上卷は天地開闢の神話に始まつて、日子穗穗手見命の神裔の物語に終り、中卷は神武天皇の御東征に始まつて、應神天皇の御代の物語に終り、下卷は仁德天皇から推古天皇に至るまでの事を述べて居る。卽ち大體に於て、上卷は神話であつて、其の間に神話的傳說が織り交ぜてあり、中卷下卷は主として歷史傳說であつて、下卷は其の終に近づくに從つて、漸く歷史的記述に入つて居るのである。更に神話及び傳說の組織を見るに、先づ神話は大體、天孫系神話・出雲系神話及び筑紫系神話の三大神話群が、此の順序によつて記述せられて居るのであるから、上卷は三部に分たれるのである。

古事記の神話

第一部の天孫系神話は、高天原を背景とする自然神話及び人文神話であつて、先づ天地の創造の神話に始まり、伊邪那岐・伊邪那美二神の國生み・神生みの如き、創造生成の神話を物語つた後、伊邪那美命が火神を產んで神崩り給うたのを轉機として、黃泉國の神話に移り、上代人の生死觀及び觸穢と潔齋に關する觀念の投影と見るべき人文神話を語つた後に、再び轉じて光明界に出で、自然神と人格神とを兼ねた天照大御神と須佐之男命を主神とする、個々の人文神話を物語り、

最後に須佐之男命の追放を黠出して、出雲系神話への橋掛として居る。第二部の出雲系神話は、前後に分つて見ることが出來る。前半は出雲を舞臺とする英雄神話であつて、先づ須佐之男命の八岐大蛇退治に序幕を開き、須賀宮に於ける神婚說話を語り、轉じて大國主命の求婚說話を本系として、稻羽の素兎・手間の赤猪・氷目矢(ひめや)・蛇の室屋などの遊離說話を語つた後に、大國主命の國土經營の傳說を物語つて、後半部の前提として居る。後半部は天孫系對出雲系の民族的交涉を主題とする人文神話であつて、先づ高天原に於ける國土平定の御議に始まり、天若日子等の反逆の物語を經て、出雲系諸神の歸順の顚末を物語り、天孫が筑紫に天降り給うた事を語つて、筑紫系神話に接續して居る。而して第三部の筑紫系神話は、天孫瓊瓊杵命の道案內をした猿田彥神の說話に始まり、木花開耶姬と磐長姬の物語、火遠理命と火照命の海幸山幸、及び海神宮行の物語を經て、鵜葺草葺不合命の生誕の事を物語つて、神代の終を告げて居る。而して此等の物語は、もと個々の民間說話であつたのを、天孫及び其の御子に結合してゐるのであるが、殊に說話に著しく異彩があり、また筑紫南部を占有してゐた、吾田(あた)や隼人族と天孫系民族との關係を說明してゐるのは注意すべき事である。以上說明した三部の神話には、それぞれの特徵がある。其の著しい黠を擧げるならば、天孫系神話には皇祖神を中心とする民族統一の精神が强調せられて居ると共に、政治的宗敎的思想が濃厚に現れて居り、出雲系神話には農耕漁獵等に關する民族生活の反映があり、又大陸との關係を暗示する說話に富んでゐる。而して筑紫系神話は、最も異彩に富んでゐるのであるが、殊に海洋に關する美しい說話が多く、また呪詛・禁制の如

き原始信仰に關する土俗の反映が目立つのである。

以上述べたのは上卷の神話の組織と其の特徴であるが、更に中卷以下の傳說を見るに、神武天皇以後は歷史時代として取扱はれて居るのであるから、記述の態度は著しく異なつて居る。而して中卷下卷の傳說は、これを通覽して亦三部に區分する事が出來る。第一部は建國創業の傳說であつて、神武天皇から開化天皇に至るまでの物語である。尤も綏靖天皇以降八代の御代には、傳說が缺けて居る。第二部は國家統一の傳說であつて、崇神・垂仁兩朝の御治世に關する物語に始まつて、景行天皇朝の日本武尊の西征東伐を經て、仲哀天皇の熊襲親征に至るまでである。而して第三部は主として海外交通の傳說であつて、神功皇后の新羅親征から、應神・仁德兩朝の三韓との交通の物語を經て、雄略天皇前後に至る外來文化渡來に關する物語である。而して雄略天皇以後は、漸く歷史時代に移る黎明期であるから、姑く之を傳說から除外するのが當然であらうと思ふ。神武天皇以後の傳說は、大體に於て歷史傳說であるが、中に幾多の說話が挿入せられて居る。歷史傳說は傳說本來の性質上から、主要なる人格を中心として個々の傳說若しくは說話が結集せられるのであつて、神武天皇・日本武尊・神功皇后・仁德天皇・雄略天皇等の傳說は、殊に其の傾向が著しいのである。『古事記』三卷の組織は大體以上述べた通りである。

古事記の傳說

古事記の文學的價値

『古事記』の文學としての價値は、(一)個々の神話傳說を巧みに連鎖して、一體系を有する敍事文學を作り上げた點と、(二)それ等の神話傳說が內容にふさはしい、素朴にして而も高雅な辭句文章によ

つて、表現せられてゐる點とに存するのである。更に委しく言へば、『古事記』の素朴となつた個々の神話傳說は、上代民族の藝術的遺品ではあるけれども、其の原形はもとより極めて素朴單純であるから、直ちに文學とは言ひ難いのである。然し『古事記』は此等を結集して、國土の生成・國家の建設・民族の統一の如き民族發展の大事件が、神祇や英雄などの理想的大人格の活動によつて達成せられた經路を、極めて組織的に物語り、而も之を統一するに當つて、國家統一の民族的精神と、卓絕せる國體觀念を以て終始一貫して居る所に、敍事文學としての價値があるのである。次に文章に就いて言へば、安萬侶は其の序文の中に述べて居るやうに、(一)古語古意の保存に細心の注意を拂つたのであつて、(二)漢字の音訓を併せ用ひ、(三)意義を適確に表し難い場合には註を加へ、而も(四)用字はなるべく古記錄の儘を用ひたのである。即ち『古事記』の記述法は、國文を主とし、漢文の構造を併用した、一種の折衷體であつて、記錄と共に發達した上古の記載法は、『古事記』に至つて其の頂點に達したのである。かくて安萬侶の用意周到なる記載法によつて、從來傳誦の間に洗煉せられた神話傳說の表現形式は、大體に於てこれを『古事記』に寫すことが出來たのである。即ち同じ辭句を丁寧に反復して、一切の省略法を用ひず、又概念的抽象的な語句によらずして、常に具象的な表現法を用ひて居る爲に、事柄に適當した莊嚴雄大な感が起ると共に、素朴單純な上代人の生活が、行文の間に躍動するのである。『古事記』の文章は一見古拙單調なやうであるが、事柄が莊嚴であり、滑稽であり、優美であり、悲壯であるに從つて、或は簡勁に、或は流麗に、それぞれに應ずる變化の妙があり、又技巧としては巧妙な譬喩・雄大な

形容・素朴な誇張などを用ひて感興を豐かにし、且つ印象を鮮明にしてゐるのであつて、傳誦文學としての體裁は遺憾なく備はつて居る。『古事記』の中で内容文章ともに特に勝れて居るのは、黄泉國・天岩戸・八岐大蛇退治・因幡の素兎・海幸山幸・海神國・沙本毘賣命・日本武尊・秋山之下氷壯夫春山之霞壯夫などの傳説であらう。

『古事記』の古寫本中で最古の完本は、名古屋市の眞福寺寶生院（俗稱大須觀音）に傳來して、今は國寶となつて居る眞福寺本である。

古寫本

古事記（眞福寺本）

此の寫本は應安四五年の頃僧賢瑜が筆寫したものであるが、其の奥書によれば、文永三年に大中臣定世が書寫したものの轉寫本であるから、今を去ること六百六十年前の古寫本の面目を保存するものである。圖版は近年古典保存會からコロタイプ版として刊行されたものに據つたのである。

故於レ是速須佐之男命言、然者請二天照大御神一將レ罷、乃參二上天一時、山川悉動國土皆震。爾天照大御神聞驚而、詔下我那勢命之上來由者、必不三善心一。欲レ奪二我國一耳上、卽解二御髮一、纒二御美豆羅一而、乃於二左右御美豆羅一亦於二御鬘一、亦於二左右御手一、各纒二持八尺勾璁之五百津之美須麻流之珠一而、（自美至流四字以音下效此）曾毘良邇者、負二千入之靫一、（訓入云能理下效此自曾至邇以音）比良邇者、附二五百入之靫一、亦臂取二佩伊都（此二字以音）之竹鞆一而、弓腹振立而、堅庭者於二向股一蹈那豆美、（三字以音）如二沫雪一蹶散而、伊都（二字以音）之男建（訓建云多祁夫）蹈建而待問、何故上來。

右譯文

故是に速須佐之男命の言したまはく、「然らば天照大御神に請して罷りなむ」とまをしたまひて、乃ち天に參上ります時に、山川悉に動み國土皆震りき。爾に天照大御神聞き驚かして、「我が那勢命の上り來ます由は、必ず善しき心ならじ。我が國を奪はむと欲ほすにこそ」と詔りたまひて、卽ち御髮を解き、御美豆羅に纒かして、左右の御美豆羅にも御鬘にも、左右の御手にも、各八尺の勾璁の五百津の美須麻流の珠を纒き持たして、曾毘良には千入の靫を負ひ、〔比良邇者〕五百入の靫を附け、亦臂には伊都の竹鞆を取り佩ばして、弓腹振り立てて、堅庭は向股に蹈み那豆美、沫雪如す蹶ゑ散かして、伊都の男建び蹈み建びて待ち問ひたまはく、「何故も上り來ませる」ととひたまひき。

（古事記　上卷）

三　日本書紀

『日本書紀』はもと『日本紀』と稱へたのであるが、平安時代の初期の頃から『日本書紀』と呼ぶ慣習を生じた。此の書は『續日本紀』の元正天皇養老四年五月辛酉の條に、「先レ是一品舍人親王、奉レ勅

修二日本紀一、至レ是功成、奏二上紀三十卷系圖一卷一」とあるのによつて、舍人親王の撰進である事は明かであるが系圖一卷は散逸して現存しない。舍人親王は天武天皇の第三皇子である。而して『弘仁私記』の序に「夫日本書紀者、一品舍人親王、從四位下勳五等太朝臣安麻呂等、奉レ勅所レ撰也。」とあるのに據れば、舍人親王の督勵のもとに、太安萬侶を始め多數の學者が集つて編纂したのである。是より先、持統天皇紀五年八月の條には、大三輪氏以下の十八氏に詔して、其の家の纂記を獻らしめられた事が見えて居り、次いで元明天皇の御代には、『古事記』の撰進の翌年、即ち和銅六年に、諸國に風土記を撰上すべき詔を下されたばかりでなく、更に和銅七年には、紀朝臣清人と三宅臣藤麻呂とに、國史を撰修すべき詔があつた事が『續日本紀』に見えて居る。右の纂記の如きは、『日本書紀』の編纂の資料を蒐集する目的で獻らしめられたであらうと思はれ、和銅七年の國史撰修の詔は、『日本書紀』編纂事業の準備か、又は其の一部であつたであらうと想像せられる。

編纂法

『日本書紀』は其の題號を見ても明かであるやうに、對外的の國史として編纂せしめられたのであるから、其の編纂方法は自ら『古事記』と大いに異なつて居る。當時は『史記』『漢書』の如き支那の史書も廣く讀まれ、從つて支那に於て發達した歷史編纂法に精通した學者も多かつたのであつて、『日本書紀』の編纂には、必ず其の知識が應用せられたであらう。即ち編纂者の人數を多くし、史料も『古事紀』の撰修に用ひたもの以外に、家々の系圖や纂記や氏文の類を始め、『百濟記』『百濟新撰』『百濟本記』高麗沙門道顯の『日本世紀』（此等の書名は書紀に明記せられて居る）の如き三韓の史籍までも參考に供して、大規模の國

史を作らうとしたのである。かくの如き用意のもとに成つた『日本書紀』は、種々の點に於て『古事記』と異なつて居る。卽ち『古事記』は、神話傳說に統一を與へて、一の古史傳說を作り上げた所に、其の特色があるのであるが、『日本書紀』は、先づ神代卷に於ては本系とすべき一說を取り、異說はこれを「一書曰」として別に揭げ、神武天皇以後に於ては、各方面から集めた材料を綜合して、史實の豐富を期したのであつて、すべての點に於て、國史としての體裁を備へることに努めて居る。從つて天武天皇の修史事業は、『日本書紀』に至つて始めて完成したのであつて、『古事記』は其の準備事業の一であつたのである。

『日本書紀』の組織竝に內容は、三十卷の中初の二卷を神代史とし、第三卷神武天皇から、最終の持統天皇卷に至るまでは、多少の例外を別として、大體に於て御一代を一卷とする方針を立てて居る。卽ち書紀は各時代を公平に取扱つて、歷史としての體裁を整へる事に留意して居るのであつて、『古事記』が上卷を神代とし、中卷下卷は傳說のある御代の記述にのみ詳細であつて、之を缺く御代には、只皇室の系譜を記すに止めて居るのに比べて大いに趣を異にして居る。更に記述の態度に就いていへば、神代に於ては神話を神話として記すといふよりも、それに反映して居る歷史的意義を要約して本文に揭げ、多くの異說は之を統一する事なしに、「一書曰」として列記し、叉屢それに歷史的解釋を試みて居る。叉神武天皇以後の卷に於ては、傳說をも歷史として取扱ふ傾向が一層著しくなつて居り、殊に歷史時代に近づくに從つて、對外關係の史實や、外來文化の傳來發達等に關する記事が精細を極

めて居る。要するに書紀は、すべての點に於て歴史的であつて、『古事記』が傳說的であり文學的であるのと大に異なつて居る。從つて書紀は文學的價値に於ては、『古事記』より遙かに劣るのである。

書紀の文章

更に文章の上から見ると、書紀の文章は大體に於て純粹の漢文に近い。かかる文體が採用されたのは、對外的關係にもよるであらうが、一面には資料の關係によるのである。卽ち書紀は既に述べた通り、內外の史料を廣く蒐集して編纂したのであつて、その中には『古事記』のやうな文章で書かれた古記錄もあつたであらうが、多くは漢文で記されたものであつて、此等の內外の資料を採用するときには、原文の面目をなるべく保存するのが、支那の歴史編纂法であつたのである。かくて漢文を採用し、支那の歴史編纂法に據つた爲に、時として故意に文飾を施したり、或は支那の史籍詩文の故事成句を借りたりしたのであつて、それが爲に古傳說の面目は大に失はれ、時に事實を枉げた場合もあるのである。從來國學者が書紀を漢意に偏してゐるの故を以て排斥し、大いに『古事記』を尊重したのはこれが爲である。併し書紀は右に述べたやうな編纂法によつて、精細に記述せられたのであるから、歴史としては却つて多くの價値を有つて居るのである。なほ書紀は漢文で記してあるけれども、編纂者は諸所に古語の訓註を挿んで、古語の保存に留意して居るのであるから、大體訓讀させる積りであつたのであらう。平安時代に訓讀した事は、古寫本古鈔本の訓や、日本紀講筵の私記などによつて明かである。

古寫本

圖版に示した岩崎家藏本（推古天皇紀・皇極天皇紀の二卷）は、もと一條家文庫の藏本であつて、乎古止點の古訓を施した

鈔本中の最古のものである。本文の書寫は、黑板博士の說によれば、宇多天皇から醍醐天皇の御治世の間に成つたもので

廿一年冬十一月作掖上池畝傍池和珥池
又自難波至京置大道十二月庚午朔皇
太子遊行於片罡時飢者臥道垂仍問姓名
而不言皇太子視之与飲食即脫衣裳覆
飢者而言安臥也則歌之曰斯那提流箇
多烏箇夜摩爾伊比尓惠弖許夜勢屢
諸能多比等阿波礼於夜那斯尓那礼奈
理雞迷夜佐須陁氣能枳弥波夜那祇伊
比尓恵弖許夜勢留諸能多比等阿波礼辛未

日本書紀（岩崎男爵家藏本）

あるといふ。而して訓點は前後三回に加へられたのであつて、本文の右に記してあるものの中で最も古いのは、一條天皇の御代前後の訓點であらうといはれて居る。圖版に揭げたのは推古天皇紀二十一年の條であつて、「しなてる片岡山に」の歌謠がある。

四　風土記と氏文

風土記の成立

『古事記』『日本書紀』以外に、上古の地誌と民間說話を收めたものに風土記があり、又一家の所傳を窺ふべきものに氏文がある。先づ風土記に就いて述べよう。諸國の地誌を作らしめられた最古の記事は、履仲天皇紀四年秋八月の條にある「始之於諸國置國史、記言事達四方志。」である。此の文中の「史」は書人の義であつて、記錄に從事する者であり、「言事」は古傳承の意、又「四方志」は地方誌の意である。併し此の時代に果して、後の風土記の如きものが作られたか否かは疑問である。現存する風土記の成立に直接に關係のあるのは、『續日本紀』和銅六年五月甲子の條にある次の詔である。

畿內七道諸國、郡鄉名著好字、其郡內所生、銀銅彩色草木禽獸魚蟲等物、具錄色目、及土地沃堉山川原野名號所由、又古老相傳舊聞異事、載于史籍言上。

和銅六年は『古事記』撰進の翌年であり、『日本書紀』撰上より七年前である。從つて右の詔が下つたのも、畢竟當時勃興した國史編纂の機運に促されたものであつて、諸國の國司は此の命を奉じて、それぞれ其の國の風土記を奉つた筈である。併し其の後二百年程經て、醍醐天皇の朝には、既に朝廷に於ては風土記の大部分を失つたらしく、延長三年十二月十四日の太政官符に、

五畿內七道諸國司應早速勘進風土記事

右如聞諸國可有風土記文。今被左大臣宣偁、宜仰國宰令勘進之。若無國底探求部內尋問古老早速言上者、諸國承知、依宣行之、不得延廻、符到奉行。　（類聚符宣抄第六）

と見えて居る。（左大臣は藤原忠平である。なほ此の太政官符は『朝野群載』にも載せてあるが、それ

現存する古風土記

逸文風土記

には國学が國宰となつて居り、又國底が底本となつて居る。）此の官符によつて、當時諸國の國司は更に其の國に遺存する風土記を整理して獻つたであらうと思はれるが、現存するものは、僅かに出雲・常陸・播磨・肥前・豐後の五箇國だけである。其の中で完本が傳はつて居るのは『出雲風土記』だけであつて、其の他は一部分を缺いて居る。かくて上代の撰進に係る風土記にして、後世に傳はつたものは極めて少いのであるが、鎌倉時代まではなほ多くが遺存したらしく、卜部懷賢の『釋日本紀』や僧仙覺の『萬葉集註釋』（一名仙覺萬葉集抄）などに、諸國の風土記の斷片を引用して居る。此等の古書に散見する風土記の逸文を採輯したものには、今井似閑の『萬葉緯』、吉田令世の『風土記抄』、伴信友の『古風土記逸文』、狩谷棭齋の『諸國採輯風土記』等があるが、更に之を大成したのは、栗田寛博士の『古風土記逸文』（二卷）であつて、其の考證註釋の書には、同博士の『古風土記逸文考證』（八卷）がある。『古風土記逸文』に採收せられた國は、前記の五箇國以外の三十六箇國に及んで居る。さて以上擧げた五箇國の風土記と、各國風土記逸文以外に、なほ『日本總國風土記』があるが、是は遙か後世に成つた僞書である。後世作られた風土記に對して、和銅竝に延長の勅によつて獻つたものを、特に古風土記と稱して居る。

現存する五つの古風土記の中で、『出雲風土記』は其の奧書に「天平五年二月卅日勘造」とあるから、和銅六年から二十年後に成つた事が明かであるが、其の他には奧書がないから、撰進の年代を知る事が出來ない。併し『出雲風土記』に、「右件鄕字者、依靈龜元年式改里爲鄕。」とあつて、常陸及び播磨の兩風土記には「里」を用ひて居るから、此の二書は靈龜元年以前、卽ち和銅年間に成つたものであ

り、肥前及び豊後の風土記には「郷」の字を用ひて居るから、それ以後に成つたもので、一般には延長以前の撰進に係るものであらうと言はれて居る。

讃容郡　所以云讃者大神妹妋二柱各競占国之時妹玉
津日女命捕臥生鹿割其腹而種稲其血仍一夜之間生
苗即令取殖尓大神勅云汝妹者五月夜殖哉即去他處
号五月夜郡神名賛用都比賣命今有讃容町田也即
鹿放山号鹿庭山山四面有十二谷皆有生鐵也難波豊前
於朝庭始進也見顕人別部犬其孫等奉發之初

播磨風土記
（三條西伯爵家藏本）

古寫本

播磨と常陸の兩風土記は右に述べた通り、和銅年度の舊本と認むべきものであるが、『播磨風土記』は古くから僅かに逸文が傳はつてゐて、全體を見る事が出來なかつた。其の全文が始めて世に紹介せられたのは、寛政八年に正二位柳原紀光卿が、某家の寫本を筆寫して以來のことである。然るに其の後、紀光卿が寫した原本の所藏者が不明となつてゐたのであるが、弘化の頃谷森種松が三條西家に在ることを知り、懇請して寫して以來、始めて原本の所在も亦世に知られるやうになつたのである。圖版に掲げたのは卽ち伯爵三條西家所藏本であつて、古典保存會複製本に據つたのである。

一 風土記は國々の地誌及び地方の說話を記した鄕土誌である。其の地誌的記事は、上代に於ける地方の生活狀態や、文化の程度などを硏究する者にとつて、貴重な資料となるのであるが、文學として見るべきものは說話である。風土記の說話は、記紀の如き官撰の國史に見る事の出來ない、民間の古傳承であつて、記紀の神話傳說と比較する時特に興味がある。今一例として『播磨風土記』神前郡堲岡里の一條を抄出して見よう。

所三以號二堲岡一者、昔大汝命、與二小比古尼命一相爭云、擔二堲荷一而遠行、與二不レ下レ屎而遠行一、此二事何能爲乎。大汝命曰、我不レ下レ屎欲レ行。小比古尼命曰、我持二堲荷一欲レ行。如是相爭而行之。逕二數日一大汝命云、我不レ能二忍行一。卽坐而下レ屎之。爾時小比古尼命咲曰、然苦。亦擲二其堲於此岡一、故號二堲岡一。又下レ屎之時、小竹彈二上其屎一汚二於衣一、故號二波自賀村一。其堲與レ屎成レ石于レ今不レ亡。一家云、品太天皇巡行之時、造二宮於此岡一勅云、此土爲レ堲耳、故曰二堲岡一。

風土記の說話の多くは右の例のやうに、地名起原の說明に附會せられて居るのであつて、其の主人公は主として記紀の神話傳說中の著しい神、若しくは英雄となつて居る。卽ち『出雲風土記』には主として素盞嗚尊や大國主命に關する說話を收め、『播磨風土記』には出雲系の神々や、天日槍に結び付けた說話もあるが、殊に多いのは景行天皇・仲哀天皇・神功皇后・應神天皇などの、當國御巡幸に關する說話である。而して常陸・肥前・豐後の各國風土記には、景行天皇と日本武尊を中心とする說話が多いのである。風土記にはまた、記紀に見えてゐない神に關する傳說や、民間の信仰風俗などを反映する、種

種の興味ある說話がある。二三の例を擧げれば、『出雲風土記』に於ける八束水臣津野命の國引傳說の如き、『常陸風土記』にある立速日男命一名速經和氣命の祟に關する說話の如き、『常陸風土記』及び『播磨風土記』にある巨人說話の如き、『常陸風土記』にある新嘗や燿歌に關する說話の如きである。

文體

風土記は各郡からの報告を、國司の廳で取纏めたのであつて、國廳に於てはそれに文飾を加へ、又文體を統一する爲に、書き改めもしたであらうと思はれる。併し風土記は各國に於て、別々に編纂したものであるから、文體は國々によつて異なつて居る。概して漢文で書いてあるが、中には漢字の音訓を借りて、國語を寫す方法を混へ用ひたものもある。純粹の漢文を用ひ、而も六朝駢儷の文を學んで、美辭麗句を連ねて最も文采のあるのは『常陸風土記』であり、國文脈を最も多分に含んで居るのは『出雲風土記』である。

氏文

氏文は家々の祖先以來の來歷と系譜とを記した記錄であつて、持統天皇紀五年の條に見える「纂記」の類である。「纂記」が國史の資料とする爲に奉らしめられたと同じく、氏文も亦同一の目的で、上進せしめられたのであらうと思はれるが、其の多くは散逸して、今は只一つ『高橋氏文』の殘簡が遺つて居るばかりである。『高橋氏文』は『本朝月令』『政事要略』『年中行事祕抄』等に引用せられて傳はつて居るのであつて、其の研究には伴信友の『高橋氏文考證』がある。

高橋氏文

『高橋氏文』は延曆年間に、高橋・安曇兩氏の間に、神事の御饌を供進する行立の先後に就いて爭が起

つたとき、各から上進した氏文の一である。而して今日傳はつて居る殘簡は、遠祖磐鹿六獦命が景行天皇の東國御巡幸に供奉して、上總國安房の浮島の宮に於て、魚貝を獲つて御饌を調進して以來、代代膳臣として神事に奉仕し、桓武天皇の延暦十九年に至るまで、三十九代六百六十九年間、其の家職を繼いで來た事を述べたものであつて、卷末には六獦命が年七十二で薨じたとき、景行天皇から賜はつた宣命と、延暦十一年三月の太政官符「定高橋安曇二氏供奉神事御膳行立先後事」とを添へて居る。磐鹿六獦命が御饌に奉仕した時の事は精細に記されて居るから、是より先家の記錄があつて、それに基づいて記したものであらうと思はれる。なほ卷尾に添へた太政官符の中には、安曇氏から奉つた氏記には、僞辭を追加した痕が明白である事、及び二氏の氏記と『日本紀』とを對校した結果、高橋氏のはよく『日本紀』に合致する事などが記してあるから、當時兩氏には古い氏記が傳はつてゐた事が明かである。かくて現存する『高橋氏文』は、一度上進した氏文の副本であつて、更に後日の覺書の爲に、官符をも添へたものであらうと言はれて居る。

『高橋氏文』の文體は、漢文脈の中に國文を混へたもので、國文は助詞を細書してある。即ち『古事記』の文と宣命書とを折衷したやうなものである。斷簡ではあるが、內容に古傳として見るべきものがあり、文章は古雅であつて、上代の散文の重要なるものである。

『高橋氏文』は風土記と同樣に、從來餘り研究されて居ない。其の考證註釋の書には、江戶時代の有名な考證學者、伴信友が著した『高橋氏文考註』があるだけである。今は『伴信友全集』第三に收められて居る。

第三章　上古の歌謠と萬葉集

一　記紀の歌謠

上古の歌謠

これまでに述べた記紀及び風土記などには、それぞれ神話傳說に附隨する、多くの歌謠が採錄せられて居る。此等の古歌謠は、國民文學發生期の抒情詩であつて、國文學溯源硏究上極めて貴重なものである。上古の說話や傳說の多くが失はれたのと同じやうに、當時の歌謠も亦記載以前に散逸したものが無數にあるのである。而して幸にして文書に記されて、後世に傳へられた上なものは、『古事記』の百十餘首、『日本書紀』の百三十餘首であるが、記紀の間に同一の歌若しくは類似のものの重出が凡そ五十首あるから、之を除けば二百首許りになる。なほ記紀以外の古典では、『萬葉集』に上古の歌謠と見るべきものが八十餘首、風土記に二十餘首あつて、其の他の古文獻にもなほ多少散見するのであつて、此等を合計するときには、上古の歌謠の總數は約三百首となるのである。

記紀の歌謠

記紀の歌謠は神話や傳說に附隨し、或は其の一部として語り傳へられたのであるから、作者は神若しくは超人間的な人格となつて居る。從つて記錄の發達した時代の歌謠は別として、それ以前のものは、所傳の通りの時代に、所傳の儘の作者によつて、詠まれたものと見ることの出來ないことは勿論である。もと同一の歌であらうと思はれるものが、物によつて語句を異にして居り、又同じ歌謠が異

なれる傳說や、異なれる作者に假託せられて傳はつたものが少くない。卽ち上古の歌謠は、其の形態も固定して居らず、其の作者も一定してゐないのであつて、極めて流動的であつたのである。更にこれを發生の動機の方面から觀るときには、未だ個人的作品はないのであつて、二人の間の唱和や、集團的生活に於ける共同の感情を表現したものが、大部分を占めて居ることは、歌の內容を見て明白である。從つて上古の歌謠の眞の作者は、民衆であると見るべきであつて、其の發生竝に發達の過程は、後世の民謠と相似て居るのである。

歌謠の曲節

上古の歌謠は、音樂舞踊と離るべからざる關係があつたのであつて、多くは實際に諷誦せられたのである。實地に謠つたものである證としては、歌詞の中に囃詞のある事、詞書に謠つた事が明記せられて居る事、『古事記』に志良宜歌・讀歌・擧歌・片下・志都歌の如き、曲節に關する名目が記載せられて居る事、などを擧げ得るのであるが、殊に『琴歌譜』後に云ふに、記紀其の他の古歌謠の歌曲が、記載せられて居るのを見て明瞭である。而して實地に謠はれた歌の中には、歌舞として演ずる時、演舞者によつて謠はれたらしく思はれる長篇の敍事詩もある。『古事記』に神語と稱へて居る、八千矛神と沼河比賣命及び須勢理毘賣命との唱和の如きは其の一例である。上古の歌謠は、記紀の如き古典に記載せられる以前に、長い間口傳へに傳誦せられたのであるから、其の時代の好尙に應ずるやうに、漸次改作せられたであらうと思はれる。殊に形態に於て著しく整齊せられたであらう。

歌謠の發達

原始的な歌謠は、伊邪那岐・伊邪那美二神が唱和した「あなにやし、えをとこを」「あなにやし、え

をとめを」の如き單純な詠歎から發足したであらうと思はれる。此の詠歎の稍長くなつたのは、天岩戶の前で八百萬の神が合唱した「あはれ、あなおもしろ、あなたのし、あなさやけ、おけ」古語拾遺や、神武天皇が八十梟帥を擊ち滅し給うた時、皇神が合唱した「今はよ、今はよ、ああしやを、今だにも我子よ、今だにも我子よ」日本書紀の如きものである。かくて二人の唱和や、衆團の合唱に用ひられた簡單な詠歎は、漸次發達して抒情の歌となり、更に敍事詩の性質を帶びた歌謠にまで進展したのであるが、未だ客觀的に事象を歌ふまでには至らなかつた。而して原始的な歌謠の一句の音數は、右に擧げた歌によつても知れるやうに、三音・四音・五音・六音・七音などであつて、未だ一定してゐなかつたのであるが、歌謠が發達するに從つて、五音・七音が最も優勢となつた。更に句法の發達を見ると、初めは長短樣々の句が雜然と用ひられたのであるが、後には五音・七音の二句が單位となり、之を幾つか重ねて、種々の歌體を發達させたのである。五七の二句一聯が單位となるやうになつたのは、我が國語の音節の關係に因るのは勿論であつて、此の短長二句を反覆する時は、自ら呼吸と一致して、美しい聲調を得るのであるが、一方には支那の五言七言の句法からも、影響を受けたであらうと思はれる。而して五音句は稍輕く、七音句は重く感じられる道理であるから、勢ひ七音句を以て歌ひ切る事になつて、茲に五七調が一般の格調となつて行つたのである。

次に短長の二句を單位として、種々の歌體が成立した狀態を考へて見ると、先づ二句一聯に更に七音の一句を添加したものは、五七七の片歌であるが、(例一)これは實例に就いて見ても明かである如

く、元來一首として完結した意味を表し難いものであるから、自然唱和に用ひられたのである。（例二）次に二句一聯を二つ重ねたものは、五七五七の四句歌となるのであるが、（例三）同じ四句歌の中にも、片歌に一句を添へたやうな形式のものもある。（『古今集』の眞名の序にいふ混本歌は四句歌を指したものかと思はれるが、一說には六句歌であると言ひ、又旋頭歌の一名であるとも言はれて居る。）次に片歌を二つ重ねて一首としたものは、五七七五七七の六句歌、即ち旋頭歌であり、（例四）二句一聯を二つ重ねて、更に一句を添加したものは、五七五七七の短歌である。（例五）而して二句一聯を三つ以上重ねたものは長歌であつて、其の古いものは偶數句であるが、後には最後に七音の一句を添加して、感情を强調する奇數句を生じた。上代の歌謠に見る長歌は、七句以上五十句までの長短樣々な形が行はれたのであるが、其の構造は片歌と短歌、若しくは短歌と片歌の結合から成るものがあり、（例六）又一篇の中に段落があつて、二三節から成るものなどがある。（例七）なほ末節が短歌形式であるのが數首あるのは、後に長歌に反歌を添へるやうになつた根源である。（例八）かくて上古の歌謠の中には、後に發達すべき詩歌の各種の形態の起原を見出すのであるが、就中最も多數を占めて居るのは、短歌と長歌であつて、其の他は比較的に少數である。

上古の歌謠は、上代民族の生活內容の直接なる表現であるから、其の內容の種類は、多方面にわたつて居るのであるが、歌數に於て最も多數を占めて居るのは、（一）戀愛の歌、（二）戰鬪の歌、（三）酒宴の歌の三種である。（一）男女相思の情は上下貴賤を通ずる人類自然の感情であるから、種々の境遇

にあつて、種々の感情を歌つて居る。ただし其の歌ふ所が單純率直であつて、男子は女子を得た愉悦を敍べ、女子は男子の武勇や容姿を賞めたのが多いのであつて、感情が率直であり、表現が素朴であるのは、現實生活にのみ陶醉した、上代人の作としては已むを得ないことである。(二)上代の民族は異民族の討伐と國家統一の爲に、常に武器を手にして戰場に立たなければならなかつた。從つて戰場に於て士氣を鼓舞する軍歌を歌ひ、戰ひ終つて勝利を悦び、敵の敗亡を嘲笑する歌を合唱したのである。(三)而して酒宴は種々の場合に行はれた。祭祀の庭や、新築を祝ふ宴席や、情人を待つ女の家などに於ては、夜の更け行くのも忘れて、酒を酌み交はし歌を高らかに合唱したのである。右に擧げた三種の外に、なほ旅で詠んだ國思（くにしぬび）の歌があり、狩獵の情景を歌つたものがあり、貴人の死を哀悼した歌があり、又世事を諷した謠物や、童謠の如きものもある。

修辭

最後に修辭を見ると、單純ながらも內容的修辭としては、誇張や擬人や樣々の譬喩を用ひ、形式的修辭としては、反覆・對句・枕詞・序詞などを用ひて居る。譬喩の材料は山野に自生する草木や農作物などを用ひることが多く、そこに農業や狩獵によつて生活した、上代人の生活狀態を窺ふことが出來る。上古の歌謠の修辭に於て特に發達を遂げたのは、形式上の修辭である。卽ち反覆には同音同語又は同句を繰り返したものがあつて、これによつて聲調の美が備はり、又感情を强調することが出來る。(例四・五・六)對句も亦主要な修飾であつて、一句對二句對の如き簡單なものから、十句に至る長對句があり、其の配列にも種々のものがあつて、連對や三並對などが用ひられて居る。(例九)又枕詞は形式上には

聲調を助け、內容上には連想を增すのであつて、音數は三音のものから四音五音のものまで用ひられて居る。枕詞は時代を下るに從つて、既成のものを襲用する傾向を生じたが、序詞は多くは各自の獨創に成るものであつて、二句のものから十數句に亙るものまで用ひられて居る。擬人・譬喩・枕詞・序詞などには、既に自然と人生とを對比するものが多いのであつて、やがて發達すべき國文學の特質をここに見出すのである。要するに、上代の歌謠は未だ率直であつて、單純な詠歎を表出する程度のものが大部分を占めて居るのであるが、歌の形式や修飾には、後に發達すべき歌謠のすべての要素を含んで居る。而して感情を直接に表現した歌には力が充ちてゐて、後の和歌に見ることの出來ない特徵がある。

(一) 愛しけやし　我家の方よ　雲ゐ立ち來も

(二) あめつつ　千鳥ましとと　など黥ける利目
孃子に　直に逢はむと　わが黥ける利目

(三) 淺小竹原　腰なづむ　空は行かず　足よ行くな

(四) 須須許理が　釀みし御酒に　我醉ひにけり　ことなぐし　ゑぐしに　我醉ひにけり

(五) 八雲立つ　出雲八重垣　妻籠みに　八重垣作る　その八重垣を

(六) 八田の　一本菅は　子持たず　立ちか荒れなむ　あたら菅原　言をこそ　菅原と言はめ
あたら淸し女

(七)宇陀の　高城に　鴫罠張る　我が待つや　鴫は障らず　いすくはし　くぢら障る　舊妻か　肴乞はさば　立柧棱の　實の無けくを　扱きしひゑね　後妻が　肴乞はさば　いちさか木　實の多けくを　扱きだひゑね　えゝしやこしや　あゝしやこしや

(八)忍坂の　大室屋に　人多に　來入り居り　人多に　入り居りとも　みつ〳〵し　久米の子が　頭椎い　石椎い持ち　撃ちてし止まむ　みつ〳〵し　久米の子等が　頭椎い　石椎い持ち　今撃たば良らし

(九)纏向の　日代の宮は　朝日の　日照る宮　夕日の　日陰る宮　竹の根の　根だる宮　木の根の　根延ふ宮　八百土よし　い築きの宮　眞木拆く　檜の御門　新嘗屋に　生ひ立てる　百足る　槻が枝は　秀つ枝は　天を蔽へり　中つ枝は　東を蔽へり　下枝は　鄙を蔽へり　秀つ枝の　枝の末葉は　中つ枝に　落ち觸らばへ　中つ枝の　枝の末葉は　下つ枝に　落ち觸らばへ　下枝の　枝の末葉は　あり衣の　三重の子が　捧がせる　瑞玉盃に　浮きし脂　落ちなづさひ　水こをろ　こをろに　是しも　あやに畏し　高光る　日の御子　ことの　語り言も　此をば

【註】右に掲げた最後の歌の對句に就いて簡單に説明して置く。「朝日の、日照る宮」と「夕日の、日陰る宮」とは二句對であり、それに續く「竹の根の云々」の四句と「八百土よし云々」の四句とは、亦各二句對となつて居るのであつて、此の三つの二句對は所謂六句連對となつて居る。次に「秀つ枝は、天を蔽へり」以下は、二句づつ三つ並んで三並對となつて居り、それを承けた「秀つ枝の」以下の八句は四句づつの對句であつて、所謂四句長對となつて居るのである。對句の名稱は學者によつて異なるのであるが、今は小國重年の『長歌詞の珠衣』に據つたのである。

二　萬葉集

上古の歌謠を眺めた後で『萬葉集』に接すると、恰も原生林を出て、秋草の咲き亂れてゐる野邊を行くやうな感じがする。上古の歌謠は内容が單純素朴であり、表現が率直であつて、未だ洗煉せられた文學の域に達してゐないのであるが、『萬葉集』を繙くと、題材・思想・格調・修辭等いづれの點から見ても、上代の抒情詩として極點に達した觀がある。上古の民族的な抒情文學は、萬葉時代に至つて始めて個人的の作品となつたのであつて、國民の文學的自覺をここに見るのである。

名義

『萬葉集』はもとから字音によつて「マンエフシウ」と呼んだのである。「萬葉」の名義に就いては、鎌倉時代の萬葉學者僧仙覺は、萬づの言の葉の義と見て居り、賀茂眞淵も亦これに從つて居るのであるが、「葉」を言葉の意味に解釋するのは穩當でない。僧契沖の『萬葉代匠記』に、「萬葉」を萬世の義として、萬世に傳ふべき集の意としたのは、鹿持雅澄も此の説に從つて居る。「葉」を中葉・後葉などの場合と同義に見たのであつて、「萬葉」なる語は既に支那の『文選』などにも用例があるのであるから、此の説は妥當である。併し近來岡田正之博士は、詩を集めて詩林といひ、歌を編んで歌林と名づけるやうに、「萬葉」を以て多くの歌に譬へたので、歌林の萬葉を集めた意味による命名であらうと言はれたのは、傾聽すべき説である。岡田博士著『近江奈良朝の漢文學』

卷數と歌數

『萬葉集』所收の歌は、作者又は時代の明記せられてゐるものに就いて言へば、仁德天皇の御代か

ら、淳仁天皇の天平寶字三年に至るまでの、前後四百五十年にわたつて居るのであつて、卷數は二十卷である。併し作者や年代の知られてゐない作歌の中には、天平寶字三年以後のものがあるかも知れず、又卷數も最初は二十卷以上であつたかも知れない。何となれば卷十七以下の四卷は、大伴家持の歌日記ともいふべき卷であるが、彼は天平寶字三年以後に、なほ二十七年間生存してゐたのであるから、其の晩年の歌を收めた數卷があつたのが、後に湮滅したかも知れないのである。さて『萬葉集』の歌數は傳本によつて相違し、又類歌や或本歌などの計算法の如何によつて異なるのであるが、契沖の『萬葉代匠記』には、長歌二百六十六首、短歌四千百八十六首、旋頭歌六十三首、合計四千五百十五首として居り、鹿持雅澄の『萬葉集古義』には、長歌二百六十二首、短歌四千百七十三首、旋頭歌六十一首、合計四千四百九十六首として居る。『國歌大觀』の歌數は四五一六首となつて居る。上古の歌謠の長歌は五十句を超えるものはないのであるが、萬葉のは長篇のが多く、其の最大なるものは百四十九句に及んで居る。而して長歌は後世衰へて、『古今集』には僅かに五首を見るばかりであり、其の後の歌集には見る事も稀になつたのであるから、此の集に二百六十餘首を收めて居るのは、長歌だけから見ても、一大歌集と言ふべきである。なほ短歌の四千百餘首といふのは、後の私撰集には其の例があるが、勅撰集の最大なるものに比べると、略ば倍數に當つて居り、又旋頭歌に至つては後世殆ど衰亡し、且つ見るべきものがないのであるから、『萬葉集』は量に於ても質に於ても、國文學史上最も重要なる歌集と言ひ得るのである。

斯かる一大歌集が成立した由來を考へて見るに、記紀の如き國史の編纂が、支那の歴史に刺戟せられて起つたのと同じく、支那に於ける詩文集の影響を蒙つてゐる事は勿論である。『萬葉集』の成立以前天平勝寶三年には、既に日本人の詩を集めた『懷風藻』が編まれて居るのであるが、それ以前に個人の詩集があつた事は、本篇第五章に述べるつもりである。而して歌集は、此等の詩集に先だつて現れたのであつて、『萬葉集』の註記に見えてゐるものは、『古歌集』『柿本朝臣人麻呂歌集』『類聚歌林』『笠金村歌集』『高橋連蟲麻呂之歌集』『田邊福麻呂歌集』の六種であるが、此等は孰れも散逸して後世に傳はらなかつた。『笠金村歌集』以下の三集は、それぞれ其の歌人の家集であらうと思はれるが、『古歌集』以下の三集は後人が編んだ撰集である。卽ち『古歌集』は逸名の古歌を輯めたものであり、次の『柿本朝臣人麻呂歌集』は人麻呂の自撰ではなく、後人が撰んだ集であつて、中には人麻呂の作でないものも混じて居るのである。又『類聚歌林』は山上憶良が、古今の和歌を類別的に集めたものであつて、萬葉に引いて居る形式から見ると、歌傳をも註した用意周到な集であつたやうである。『柿本朝臣人麻呂歌集』の歌も分類せられてゐたやうであるが、殊に『類聚歌林』の類別・配列・註記などは、『萬葉集』の編成に多大の影響を與へたやうに思はれる。要するに『萬葉集』の中には、前記の如き既存の諸歌集から、古人の作を選出した卷もあり、又當時著名な歌人であつた大伴旅人・山上憶良・大伴家持などを始め、其の周圍の人々の歌を集めた卷があり、又此等の人々が採輯した作をも加へて、二十卷としたのである。而して其の一部分は、誰かが整理を加へたのであるが、中には未だ整頓せられてゐない卷も

ある。

部類

『萬葉集』の部類は後の勅撰集や家集などと大いに趣を異にして居る。萬葉の分類法は後に述べるやうに、卷によつて方針を異にして居るのであるが、全體を通じて根本的の部類となつて居るのは、雜歌・相聞・挽歌である。雜歌は後世の勅撰集のと異なつて、其の範圍が遙かに廣いのであつて、四季の風物を詠じたもの、行幸遊宴狩獵などの作、新京舊都に對する感情を敍べた歌などがあるが、殊に旅にあつて詠んだ作歌が最も重きをなして居る。次に相聞及び挽歌の名義は、共に其の出典を支那の典籍に求め得るのである。卽ち相聞は相互に感情を以聞する義であつて、男女の間の贈答、卽ち戀歌が大部分を占めて居るのは當然であるが、其の外になほ、親子兄弟朋友などの間の贈答歌も多いのである。又挽歌は柩を挽く時の歌の義であつて、哀悼歌を指すのであるが、其の範圍は稍廣いのであつて、臨終の作や、後人の追憶の歌などを含んで居る。以上述べた雜歌・相聞・挽歌は三大部門であるが、此の外になほ譬喩歌・問答歌などの部を設けた卷がある。譬喩歌は感情を直接に表現せずして、他の事物に譬へて敍べた作をいふのであつて、相聞の一部と見る事が出來る。又問答歌は文字が示す通り、問と答から成つて居る作歌を指したのである。

各卷の組織

更に各卷の組織を見ると、集中で最も完備した體裁を備へ、且つ精撰歌のみを集めたのは卷一と卷二である。卽ち卷一は全部雜歌であり、卷二は相聞・挽歌の二部に分たれて居るのであるから、之を通じて見る時には、雜歌・相聞・挽歌の三部門に分類せられたものと見做すことが出來る。而して各部

門の歌は更に年代順に配列せられて居る。かくて卷一と卷二とは、類別的に編まれた代表的な卷と言ひ得るのであるが、これと相似た方式で編まれて居るのは、卷三・卷四・卷六・卷七・卷九の五卷である。此の中で卷六は雜歌のみの集であるが、歌は年代順に配列してあり、卷九は雜歌・相聞・挽歌の三部に分つて、既存の古歌集から取つた歌を多く收めて居る。次に卷三は雜歌・譬喩歌・挽歌の三部に分れ、各部門の歌はそれぞれ年代順に配列せられて居り、又卷四は全部相聞であつて、これも年代順に配列せられて居るのであるから、此の二つの卷は通じて四部門に分たれて居るのである。次に卷七は卷三と同じやうに分類せられて居るが、彼と異なる所は、時代の不明な作歌を集めて居る事と、雜歌と譬喩歌とを更に細分して居る事である。詠天・詠月・寄衣・寄玉の如く細分して居る。雜歌・相聞・譬喩歌・挽歌の外に、更に問答の部を設けて五部に分類したのは卷十三であつて、此の卷には稍古い時代の作者未詳の歌を集めて居る。以上擧げた七つの卷と異なつた部類法によつて編纂せられて居るのは、卷八・卷十と卷十一・卷十二の四卷である。卽ち卷八と卷十は、先づ春夏秋冬の四季に大別し、更にそれぞれ雜歌と相聞に分つて都合八部とし、其の各部の作歌は略ぼ年代順になつて居る。次に卷十一は卷頭に「古今相聞往來歌類之上」と題し、卷十二には「古今相聞往來歌類之下」と題してあつて、其の各は更に正述心緒歌相聞に當る。寄物陳思譬喩歌の一種旋頭歌・問答歌・羇旅發思・悲別歌の如き部類に細別されて居る。

以上述べた諸卷と全く異なつて、單獨の卷として異彩を放つて居るのは、卷五・卷十四及び卷十五である。卷五は卷頭に雜歌と標記してあるが、實は相聞・挽歌をも含んで居る。此の卷は大伴旅人を

中心とする、太宰府關係の人々の作を集めたものであつて、もと旅人が其の周圍の人々との贈答歌を集めたものに、憶良の作品を加へて成つた卷であらうと言はれて居る。次に卷十四は東歌(あづまうた)と題してあつて、其の前半には國名の明かな作を收め、後半には國名未詳の歌を掲げて居るのであるが、前半は雜歌・相聞・譬喩歌の三部に分ち、後半は雜歌・相聞・防人歌(さきもりのうた)・譬喩歌・挽歌の五部に分つて居る。所謂東歌の中には、東國地方の民謠も多いのであるが、大和の人が東國を旅行した時に、其の國振りの歌として詠んだのも混つて居るのである。次に卷十五は雜歌と相聞の二部から成つて居るけれども、部門を設けてゐない。而して其の前半には、新羅に遣はされた使節等の旅次の歌を收め、後半には、中臣朝臣宅守(やかもり)と狹野茅上娘子(さぬのちがみのをとめ)との相聞の歌を收めて居る。又卷十六は「有二由緣一并雜歌」と標記してあつて、由緣のある歌卽ち說話を伴なふ作と、雜歌とから成つて居る。前者の中には櫻兒・蘰兒・竹取の翁などの如き說話を漢文で記してあつて、後の『伊勢物語』や『大和物語』の先驅をなして居る。又後者は滑稽な歌と民間の俚謠とを集めて居るのであるが、滑稽的な作の大部分は、物の名を詠み込んだものであつて、後の物名の歌の魁となつて居る。最後に卷十七以下の四卷は、既に述べたやうに、大伴家持の歌日記とも見るべき集であつて、家持自身の作を中心として、大伴家の人々や其の他の歌人との贈答歌を時代順に記し、なほ家持が採輯した古歌や、當時の防人の歌などを記したのであつて、恐らく家持が手記した卷々であらうと言はれて居る。

編者

『萬葉集』の編者に就いては從來種々の說があつた。『榮華物語』の月宴の卷には、橘諸兄（天平寶字元年薨五十六）

が勅命によつて撰んだものであるとして居るが、藤原清輔の『袋草子』には、大伴家持の私撰とし、藤原定家も同様に見て居り、其の後の學者も之に從ふ者が多いのである。右の二說の外に、僧仙覺は諸兄・家持兩人の撰と見る說を唱へ、契沖も此の說を主張して詳しく考證し、且つ私撰であると言つて居る。其の他一時に一人が撰したものでなく、數人の手で編まれたとする說があり、又一部分を勅撰と見る說などもある。要するに此の集は、右に述べたやうに雜然たる卷々の集合體であるから、一時に一人の手に成つたものでない事は明白である。而して家持の如きは最後の集成者であらうと思はれるのであるが、彼以前既に何人かが集めた卷もあるであらうし、又家持の手を離れて後も、なほ他の人によつて多少の補修が試みられたやうである。從つて萬葉全部が、現在見るやうな形に纏められた年代を、精確に決定する事は極めて困難である。

『萬葉集』の用字法は時代により、又作者によつて異なつて居るのであるから、之を簡單に說明する事は困難であるが、大體から見て二樣の別がある。其の一は主として一字一音式の假名、卽ち萬葉假名で書いたものであり、他の一は漢字の音訓を借る外に、字音字義に係らず機智によつて、樣々な表記法を用ひて居るのである。かくて萬葉の表記法は、記紀・祝詞・宣命などと比較するときは、漢字の材料も豐富であり、用字法も極めて複雜になつて居るのである。今は時代の區別を立てずに、一般の用字法を音によるものと、字訓によるものとに大別して、各種の用法を擧げて見よう。

甲、字音によるもの

一、漢語佛語　（例）力士　雙六　藐姑射　餓鬼　布施　檀越　五位
二、借音　（例）阿米都智　和多都美　毛美知婆　南（助詞）　賀藍（同上）　安吉（秋）

乙、字訓によるもの

一、正訓　（例）籠　山道　闇夜　釣爲海人　間無數鳴
二、借訓　（例）手次（襷）　蟻（有）　庭（助詞）　名鴈（無かり）　小竹櫃（偲びつ）
三、義訓　（例）暖　丸雪　西渡　未通女　五十戸　十五日　求食
四、戲訓　（例）左右手　三五月　折木四（雁）　三伏一向夜（月夜）　山上復有山（出）
馬聲蜂音石花蜘蟵荒鹿（悒憎くもあるか）

古寫本

『萬葉集』の古寫本の中で、平安時代の筆寫本は、今日までに五種發見せられて居る。桂本・藍紙本・元暦校本・金澤本及び天治本である。此の外に鎌倉時代の寫本に神田本・西本願寺本等があるが、今は平安時代の寫本だけに就いて、簡單に解説して置く。桂本は平安中期に筆寫した巻四の殘巻である。前田利家の夫人松子の舊藏であつたが、後に利家の子利常が八條宮（後に桂宮といふ）に獻上したのであつて、今は御物となつて居る。草白紫藍黄茶薄茶等の色に染めた織色紙に、金銀泥で花鳥草木の模様を描いた美しい料紙に、優麗な筆で書いたものであつて、萬葉古寫本中最も美しいものである。筆者に就いては、貫之説や源順説などもあるが、確證のない限り未詳とすべきである。（巻頭圖版參照）藍紙本は平安末期の寫本で、巻九の大部分と、巻十八の殘簡、其の他斷片が現存してゐる。藍紙本と稱するのは、銀砂子を散らした薄藍色の漉紙を用ひたからであつて、筆者は從來藤原公任と言はれたが、近來田中親美氏は藤原伊房の筆であらうと言はれた。其の雄勁な書風は萬葉の歌風に最もふさはしい感がある。もと會津の松平家の所藏であつたが、今は原富太郎氏の藏本とな

つて居る。（圖版參照）元曆校本も亦平安末期に書かれたもので、筆者は數人である。二十帖現存してゐて、其の中六帖は有栖川宮家（現在の高松宮家）の御藏本であり、十四帖は古河男爵家の所藏である。紫と藍の飛雲形模様を漉き込んだ鳥子紙の兩面に書いてある。金澤本は卷二と卷四の零本であつて、これも平安末期の寫本である。美しい模様を押した唐紙に、能筆を以て寫したもので、筆者未詳であるが、田中親美氏の説では、藤原定信であらうといふ。此の本は前田利常が手に入れたものであるが、明治四十三年、明治天皇が前田侯爵邸に行幸遊ばされた時獻上したので、今は帝室御物となつて居る。天治本は卷十三の完本で、天治元年六月書寫の奥書がある。用紙は仙花紙であるが、筆は中々の能書であつて、藤原基俊の筆であらうかと言はれて居る。京都福井貞一氏の藏本である。

藍紙本萬葉集

歌體の發達
旋頭歌

萬葉時代の歌體は、短歌・長歌・旋頭歌の三種類である。旋頭歌は記紀の歌謠時代に發生した歌體で

あつて、藤原朝の頃に頂上を極め、奈良朝になつて衰へたのである。而して集中に僅かに六十二首を存するに過ぎないのは、當時既に此の歌體が、衰亡すべき運命を持つてゐたことを示して居るのである。旋頭歌はもと片歌の問答から發生した歌體であるから、萬葉時代の作も多くは問答形式の名殘を留めて、一首が二段から成つて居るのである。尤も萬葉時代は、實地に謠つた時代から讀んで味ふ時代に推移したのであつて、旋頭歌も亦其の間に變遷してゐるのである。卽ち古くは問答的性質を帶びてゐたのが、一人で謠ふ自問自答の歌となり、更に目に訴へる歌になつて問答形式は失はれ、殆ど短歌と擇ぶ所のないものとなつたのである。例へば

水門（みなと）の葦の末葉（うらは）を誰か手折りし吾が背子が振る手を見むと我ぞ手折りし（卷七）

君が爲手力（たぢから）つかれ織りたる衣（きぬ）を春さらば如何なる色に摺りてばよけむ（卷七）

春日なる三笠の山に月も出でぬかも佐紀（さき）山に咲ける櫻の花の見ゆべく（卷十）

の如きは、自ら問ひ自ら答へたものであるが、

の如きは、極めて短歌に近づいて居る。旋頭歌はもと單純な感情を民謠風に表出する時、最も興味があるのであつて、自己の感情を自由に表現しようとする場合には、到底短歌に及ばないのである。從つて旋頭歌は、問答形式が崩れて短歌に接近した時、既に衰亡に向つて一歩を進めたのであつて、奈良朝初期には短歌に壓倒せられて彌振はなくなり、僅かに遊戲的に試みられるに過ぎなくなつた。

長歌

次に萬葉の長歌は記紀の歌謠のそれに比して、形式内容ともに著しく發達し、藤原朝から奈良朝の

初頃に頂上に達したのである。今は主として形態の發達に就いて述べよう。藤原朝以前の長歌の一句の音數は、なほ三音・四音・六音・八音の如き不定形が可なり多く用ひられたが、藤原朝以後には五七の二句を單位として、之を反覆するやうになつた。而して近江朝までは一首の句數が偶數から成るものが相當に行はれてゐたが、藤原朝以後は最後に五七七を置いて、一首を奇數句とするのが普通となつた。（長篇にあつては上古の歌謠に見るやうに、一首を二三節に切つて各節の末尾を五七七とするものがある。）かくて萬葉の長歌は五七の連續から成つて、聲調が極めて單調になつたのであるが、之に變化を與へる爲には、序詞・枕詞・對句の如き修辭に意を用ひ、また素材を多くして、內容の豐富を圖つたのである。人麻呂・赤人・憶良・蟲麻呂等の長歌が特に傑出して居るのは、これが爲であつて、奈良朝後期の家持等の作が平凡單調に陷つたのは、形式內容共に既に行詰つて、徒らに過去を踏襲した爲である。

萬葉の長歌の形式で特に注意すべきは反歌を添へた事である。反歌發生の起原は、記紀の歌謠に於て、末尾の句を反覆するもののある事、及び一首の末節が短歌から成つて居るもののある事、などに求められるのであるが、反歌といふ名稱が、もと支那の詩賦の反辭から來たものであるとすれば、詩賦の形式の影響も亦否み難いのである。而して長歌に反歌を添へる目的は、長歌に歌つた感情を更に短詩形に纏めて、感情を統括するためであるが、時には長歌に歌ひ殘した感情を、之によつて補つたものもある。反歌の數は古くは一首であつたが、藤原朝の人麻呂以後は、二首以上五六首を添へる事

も行はれ、時としては各が後の連作のやうに、或る意味によつて連鎖せられて居るのもある。

短歌も亦時代と共に變遷し發達して居る。概括的にいへば、時代の古いものは、一句が五音七音以外の端數から成るものがあるが、大體に於て五七五七七の形に整定されたのである。尤も結句を八音句として感情を强調する事は、時代を通じて行はれて居る。(例一・二) 次に句法を見ると、初句から四句までを一氣に歌つて來て、結句に力を籠めて、感情若くは氣分に統一を與へたものが極めて多い。(例一・二)更に句切のあるものを見ると、三句切は未だ少數であつて、二句切・四句切が多く (例二・三・四) 又一首に二箇所の切目を設けて、感情の表現を幾つかに分けて居るのも少くない。(例五) 其の他語又は音を反復したり、枕詞・序詞を用ひたりして、聲調の美を增して居るのであるが、修辭に就いては今は省略して置く。要するに萬葉の短歌も亦、單純素朴な上古の歌謠に比して、著しい發達を遂げたのであるが、殊に感情の流に適應する格調の變化は多種多樣であつて、短詩形としてのあらゆる形式美は、殆ど遺憾のない域に到達したと言ひ得るのである。

(一) 葦邊行く鴨のはがひに霜降りて寒きゆふべは大和し思ほゆ。(卷一)
(二) 秋田苅る假廬(かりほ)も未だこぼたねば雁が音寒し。霜も置きぬがに。(卷八)
(三) あなし河川浪立ちぬ。卷目(まきむく)のゆつきが嶽に雲る立つらし。(卷七)
(四) 水底の玉さへ淸く見ゆべくも照る月夜(つくよ)かも。夜の更け行けば。(卷七)
(五) 三輪山をしかも隱すか。雲だにも情(こころ)あらなむ。隱さふべしや。(卷一)

三　萬葉時代の歌人

『萬葉集』は前後極めて長い年代の作歌を收め、作者は上下貴賤男女を問はず、あらゆる階級を網羅し、其の地域は帝都を中心に殆ど全國（北海道及び出羽但馬伯耆美作隱岐の五箇國を除く）に及んで居り、且つ其の二十卷は既に述べたやうに、雜然たる集合體である。從つて萬葉の歌風の變遷發達を說く事は極めて困難である。今は個人的作歌の現れた時代以後を萬葉時代と見て、便宜上之を四期に區分して、各時代の歌風を概說した後、其の時代の代表歌人の歌風を考察する事にする。

時代の區分

『萬葉集』所收の歌で時代の最も古いのは、仁德天皇の皇后磐姬命の御歌であつて、最も新しいのは淳仁天皇の天平寶字三年正月一日に、大伴家持が詠んだ作歌である。併し凡そ推古朝までは、傳はつてゐる歌數も少く、且つ此の間の歌は、記紀の歌謠と性質を同じうするものであつて、作者の如きも所傳のままに信じ難いものが多いのである。今此等を除いて見ると、歌數も多く、歌風にも萬葉時代の特徵が漸く認められるのは、舒明天皇以後の百三十年間である。而して此の間は更に以下述べるやうに、四期に分つて見る事が出來る。第一期は最も長いのであつて、舒明天皇から天武天皇に至る凡そ六十年間であり、第二期は持統文武兩帝の御代、即ち藤原朝であり、第三期は奈良奠都から、聖武天皇の天平年間の初頃までであり、第四期はそれ以後淳仁天皇朝までである。而して第二期以下の一期の年數は、それぞれ二十年乃至二十五年である。

第一期

第一期は上古の歌謠を承けて、主として素朴な抒情歌が歌はれた時代であつて、未だ實際に口誦せられた痕跡のあるものが多い。此の時代の和歌は、胸中の抑へ難い感情を率直に表現したものが多いのであつて、戀愛の歌が主位を占めて居るのであるが、上古のそれに比して、著しく優美になつて居る。戀愛の作に次いで注意せられるのは、挽歌と自然に對する感情を敍べた歌である。挽歌には、天智天皇の崩御を悼み奉つた倭姫皇后や婦人（姓氏未詳）並に額田王の長歌の如き、綿々として盡きざる悲痛の情を敍べた佳作がある。自然の風物に對する觀方や感情などにも、亦非常な進歩が見える。舒明天皇が、香具山から大和の國原を望んで詠み給うた「倭には群山あれど」の長歌を、應神天皇が近江へ行幸の途上、葛野を望んで歌はせられた、「千葉の葛野を見れば百千足る家庭も見ゆ國の秀も見ゆ」と比較したならば、自然觀照に於ても、表現に於ても、著しく詩的になつて來た事を知るであらう。

わたつ海の豐旗雲に入日さし今夜の月夜あきらけくこそ（巻一）　作者未詳

川のへの五百箇磐群に草むさず常にもがもな常處女にて（巻一）　吹黄刀自

これ等は到底上古の歌に見られない藝術的價値の高い作品である。第一期は民衆的な感情を表現した歌謠から、個人的詩歌を發生した時代であるが、近江朝には既に個性の明かな歌人を輩出するに至つた。近江朝の歌人として最も傑出してゐたのは額田王であるが、天智天武兩帝もすぐれた御製を遺されて居り、倭姫皇后もすぐれた歌人である。今第一期の代表的歌人として、額田王の事を略述して置かう。

額田王

額田王は鏡王の女で、初め大海人皇子(天武天皇)の寵愛を受けて十市皇女を生み、後に天智天皇の寵を蒙つたのであるが、天皇の崩御の後には、再び天武天皇に侍したのである。額田王が兩帝の寵遇を受けた事は、集中の御製や女王の御歌にも見えて居るのであつて、かの壬申の亂の原因の一は、女王に對する愛の問題に胚胎して居ると言はれて居る。額田王の長歌には、春秋の優劣を判つた作や、近江國に下る時の歌の如き、勝れた作品があるが、今は著名な短歌を二首掲げて置く。

熟田津(にきたづ)に船乘りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな(卷一)

君待つと吾が戀ひ居れば我が宿の簾(すだれ)うごかし秋の風吹く(卷四)

要するに第一期は、素朴な純情を歌つた時代であつて、傳はつてゐるのは主として抒情歌である。當時の和歌には題材・修辭・思想などの上に、既に漢文學の影響を認め得るのであるが、未だ佛教の感化は見當らない。

第二期

第二期の藤原朝になると、專門の歌人が現れると共に、文字の使用法が著しく發達して、讀んで味ふ歌が、實際に謠はれる歌から全く分離して、急激な發達を遂げた。此の時代には取材の範圍が著しく擴大せられ、思想も複雜になり、表現も自由になり、技巧は殆ど頂點に近い程度にまで發達し、なほ作者の個性も明白に認められるやうになつた。而して此の時代を代表する歌人は柿本人麻呂であつて、之に次いで注意すべきは、高市黑人(たけちのくろひと)と長意吉麻呂(ながのおきまろ)である。

柿本人麻呂

柿本人麻呂は藤原朝の代表的歌人であるばかりでなく、萬葉歌人中の第一人者であり、更に國文學

史上に於ける、最も偉大な文學者の一人である。其の傳記資料としては、萬葉所收の彼の作歌、及び其の題詞があるのみであつて、世に傳ふる事績には、後人の想像說が多く混つて居る。人麻呂の生地に就いては、石見近江などの說もあるが、恐らく大和の人であらう。持統文武二朝に仕へ、官位は低かつたが、歌人としては重んぜられたやうであつて、屢行幸啓に供奉して歌を詠んで居る。其の作歌には吉野紀伊近江讃岐などで詠んだものがあるが、遠く筑紫に遣はされた事もあり、晩年には石見國の地方官吏となつて赴任し、其の地で歿した。歿年は詳かでないが、和銅二三年頃と見るのが穩當なやうである。集中に人麻呂の作歌として收められて居るものには、題詞に「柿本人麻呂作歌」と明記されてゐるものの外に、「柿本朝臣人麻呂之歌集出」と註したもの、及び「或云人麻呂作」とあるものがある。此の三樣に記載せられた作歌の中で、彼の作として最も確實なのは最初のものである。人麻呂の作には雜歌・相聞・挽歌の三種があり、歌體には短歌・長歌・旋頭歌の何れもあつて、其の數は比較的多く傳はつて居る。

人麻呂は宮廷歌人であつたから、其の傑作は皇室に關する題材を歌つたものに多い。持統天皇が吉野離宮に行幸せられた時に供奉して詠んだ作、高市皇子の城上（きのへ）の殯宮の時の歌、近江の荒都を過ぎて詠んだ作などは、何れも代表的作品である。此等は長歌であるが、殊に高市皇子の殯宮の時の作の如きは、百四十九句から成る堂々たる雄篇であつて、集中の最大長篇である。人麻呂は宮廷に關する作には、祝詞に倣つて皇室の尊崇や神祇の崇敬の如き、國民的感情を歌つたのであるが、相聞歌には、

石見國から妻に別れて上京する時の長歌二首を始め、幾多の勝れた短歌を詠んで居り、又挽歌には、妻の死を哀悼した長歌二首の如く、切々人の肺腑を刺す悲痛の情緒を歌ひ、なほ他人の死に對しても同情の涙を濺いで居る。かくて人麻呂は抒情歌に於て、特に勝れた詩才を揮つたのであるが、又敍景にも長じてゐた。彼が敍景に長じてゐた事は、抒情歌の作中に、情景を兼ねたものの多いのを見ても明瞭であるが、敍景歌として勝れた作は、覊旅の中に多く見えて居る。(主として短歌)尤も彼の敍景歌は主觀的傾向が著しいのであつて、純敍景歌といふべきものは稀である。

人麻呂は短歌旋頭歌にも非凡の才を持つてゐたけれども、特に長歌の完成者として最も重きをなすのである。彼の長歌の構想並に格調は、內容に應じて異なるのは言ふまでもない事であるが、初めは過去の追憶を悠揚たる調子で歌ひ、次いで主題に入ると、格調も自ら內容に適應した聲調に轉ずるのであるが、最後に感情が高潮に達したとき、激越な格調又は警拔な句法で歌ひ終るのを得意とした。かくて彼の長歌は整然とした構想と、莊重流麗な格調とによつて、一氣に詠み出されて居るのであつて、如何なる長篇と雖も聊かの弛みもなく、終始緊張した感情が流れて居る。長歌に於ける此の特長は、また大體に於て短歌にも見受けるのであつて、初めはゆるやかな調子で歌ひ起し、結句に近づくに從つて、感情が一點に集注せられて行くのが多い。尤も短歌の表現は、長歌に比して遙かに自由であつて、心境の異なるにつれて、或は雄渾に、或は沈靜に、或は幽寂に、それぞれの氣分に應ずる格調を帶びて居る。

人麻呂は技巧を重んじた歌人であつて、其の洗煉せられた各種の修辭は、他の歌人の到底追從し難いものがある。萬葉の修辭の主要なものは、上古の歌謠に於けると同じく、枕詞・序詞・對句・繰返などの如き形式的技巧であつて、擬人・譬喩などは、寧ろ第二次的のものであるが、此等を最も巧妙に用ひたのは人麻呂である。人麻呂の長歌には、特に枕詞を多く用ひたものと、主として對句を用ひたものとあるが、前者に於ては平均六七句に枕詞一つの割合になつて居る。萬葉の對句の種類は、大體に上古の歌謠の範圍を出てゐないのであるが、人麻呂に至つて用法は著しく進步して、二句對を始めとして、二句對を二つ以上連ねた連對や、四句以上に亙る長句を對した長對句などを用ひて、均整の美を添へ、且つ聲調を流麗にして居る。語句若くは音を繰返す事も、上古の歌謠の重要な技巧であつたが、人麻呂は巧みに之を利用して、一首に韻律の美を添へて居る。例へば、

小竹の葉はみ山もさやにさやげども吾は妹思ふ別れ來ぬれば（卷二）
淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしぬにいにしへ思ほゆ（卷三）

の如きである。初の一首は、S音の反復によつて聲調を美しくして居るばかりでなく、竹の葉ずれの音を格調の上に響かせて居り、後の一首には、同じ母音を連續させて、詠歎にふさはしい韻律を與へて居る。要するに人麻呂の作歌は、題材の範圍も廣く、何れの歌體にも長じ、又敍景抒情を兼ね、特に抒情歌に於て勝れて居た。而して其の歌風の特長としては、態度の眞率、表現の自由、格調の麗朗の三點を擧げる事が出來る。左に彼の歌風を見るべき數首を掲げて置く。

過二近江荒都一時柿本朝臣人麻呂作歌

玉襷　畝火の山の　橿原の　日知りの御世ゆ　生れましし　神のことごと　樛の木の　いやつぎつぎに　天の下・知ろしめししを　そらにみつ　大和を置きて　青丹よし　奈良山を越え　いかさまに　思ほしめせか　天離る　鄙にはあれど　石走る　近江の國の　さざなみの　大津の宮に　天の下　知ろしめしけむ　天皇の神のみことの　大宮は　ここと聞けども　大殿は　ここと云へども　春草の　茂く生ひたる　霞立つ　春日の霧れる　百磯城の　大宮處　見れば悲しも

反　歌

さざなみの滋賀の大わだ淀むとも昔の人にまたも逢はめやも（卷一）

○

ひむがしの野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月傾きぬ（卷一）

玉藻苅る敏馬を過ぎて夏草の野島の埼に舟近づきぬ（卷三）

淡路の野島の埼の濱風に妹が結びし紐吹きかへす（卷三）

夏野行く牡鹿の角の束の間も妹が心を忘れて思へや（卷四）

高市黒人

人麻呂と同じ時代の歌人に高市黒人がある。卷一の「高市古人感二傷近江舊堵一作歌（或書云高市連黒人）」といふ題詞の短歌二首を、黒人の作とする時には、集中に十八首の作を數へる事が出來る。何れも短歌であつて、人麻呂と同じく持統天皇の駕に陪して、吉野宮や參河國で詠んだ作があり、又近江の舊都を訪

れて、懷古の情を歌つて居るが、此の外になほ覊旅八首がある。純情を率直に歌つた人であつて、特に旅情を歌つたものに見るべき作が多い。

いづくにか船泊てすらむ安禮の埼漕ぎ廻み行きし棚無小舟（卷一）

旅にして物戀しきに山下のあけのそほ船沖に漕ぐ見ゆ（卷三）

磯の埼漕ぎ廻み行けば近江の海八十のみなとに鶴さはに鳴く（卷三）

人麻呂と時代を同じうした長意吉麻呂も亦注意すべき歌人である。其の作歌は黑人と同じく悉く短歌であつて、集中に十三首見えて居る。大寶二年に持統天皇が參河國に行幸せられた時、

引馬野ににほふ榛原入りみだり衣にほはせ旅のしるしに（卷一）

と詠み、又難波宮に於ける應詔の作に、

大宮のうちまで聞ゆ網引すと網子ととのふる海人の呼聲（卷三）

と歌つたのを見て、彼の歌風を察する事が出來る。意吉麻呂の作歌で特色のあるのは、卷十六に載せられてゐる八首である。此等は何れも種々の物名を詠み入れた滑稽な作であつて、平安時代の物名の歌の先驅である事は既に述べた通りである。例へば酒宴の夜が更けた頃狐の聲が聞えたので、人々が席上の雜器狐の聲河橋などを入れて、一首の歌を作れと言つた時、求めに應じて詠んだ歌は、

銚子に湯沸かせ子ども櫟津の檜橋より來む狐に浴むさむ

といふのである。其の他次の如き作がある。

長意吉麻呂

詠ニ荷葉ニ歌

蓮葉は斯くこそあるもの意吉麻呂が家なるものは芋の葉にあらし

詠ニ酢醬蒜鯛水葱ニ歌

醬酢に蒜搗き合てて鯛願ふ吾にな見せそ水葱の羹

詠ニ白鷺啄レ木飛ニ歌

池神の力士舞かも白鷺の桙啄ひ持ちて飛びわたるらむ

此等は文學としての價値は乏しいのであるが、詠みにくい題材を巧みに取扱つた點に、作者の機智が見えるのである。而して當時既にかかる種類の作歌が行はれたのは、時代の文學生活の一面を語るものであつて、和歌史上注意すべき事である。

第三期

第三期は奈良朝の前半期であつて、山部赤人・大伴旅人・山上憶良・高橋蟲麻呂等は其の代表的歌人である。幾多の傑出した歌人が肩を竝べて現れ、それぞれ得意の題材を捉へて、個性の極めて鮮明な作を詠み、素材・思想・表現・格調等が著しく進展したのは、此の時代の注意すべき現象である。

山部赤人

山部赤人の傳は歴史に見えず、また集中の題詞にも、其の閲歴を知るべき材料は極めて乏しいのである。思ふに人麻呂と同じく大和の人で、宮廷に出仕したのであるが、地位は高くなかつたやうである。巻六に載せられた諸作によれば、神龜から天平の初にかけて、聖武天皇に供奉して吉野紀伊難波などに旅行して居る。集中に載つて居る作歌は、長歌十三首、短歌三十六首であつて、人麻呂に比し

て歌數は遙かに少い。其の長歌は規模が小さく、概ね平明單純であつて、伎倆は人麻呂に遠く及ばない。赤人は特に敍景に長じてゐたのであつて、舊都や離宮で詠んだ歌などを見ても、人麻呂のやうな熱情のこもつた作はない。試みに赤人が飛鳥の舊都に遊んで詠んだ次の長歌を、人麻呂が近江の荒都に立つて詠んだ長歌（七三頁參照）と比較したならば、此の二人の特色は直ちに觀取されるであらう。

登神岳山部宿禰赤人作歌

三諸の　神名備山に　五百枝さし　繁に生ひたる　樛の木の　いやつぎつぎに　玉葛　絶ゆる事なく　在りつつも　やまず通はむ　明日香の　舊き都は　山高み　河とほじろし　春の日は　山し見が欲し　秋の夜は　河し清けし　朝雲に　鶴は亂れ　夕霧に　蝦はさわぐ　見るごとに　哭のみし泣かゆ　いにしへ思へば（三巻）（反歌を省く）

赤人は敬虔な態度で自然を眺めた自然詩人であつて、印象の鮮明な繪畫的な作に於てすぐれて居る。長歌よりも寧ろ短歌に於て獨特の天分を持つてゐた人である。

田兒の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ富士の高嶺に雪は降りける（巻三）
若の浦に潮滿ち來れば潟を無み葦邊をさして鶴鳴きわたる（巻六）
み吉野の象山の間の木末にはここだもさわぐ鳥の聲かも（同）
ぬばたまの夜の深けぬれば久木生ふる清き河原に千鳥しば鳴く（同）
ますらをは御獵に立たし處女等は赤裳裾引く清き濱邊を（同）

春の野に菫摘みにと來し吾ぞ野をなつかしみ一夜寢にける（卷八）

右の中初めの四首は長歌の反歌である。

赤人と對峙して第三期の歌壇に於ける一異彩であつたのは山上憶良である。憶良の經歷は『萬葉集』卷五及び『續日本紀』によつて察することが出來る。彼は大寶元年四十二歳の時、遣唐少錄となつて唐に渡り、慶雲元年に歸朝した。靈龜二年には伯耆守に任ぜられ、更に晚年には筑前守となつて任地に下り、其の後京に歸つて、天平五年に七十四歳で歿した。（年齢に就いては異說がある。）其の作歌は卷五を主として、卷一・三・六・八等に散見して居るが、何れも晚年の作である。憶良は人麻呂・赤人等と全く趣を異にして、主として社會や人生に關する題材を歌つたのであつて、自然美を歌はず、また戀愛歌は一首も傳はつてゐない。其の作歌を見ると、漢文學の素養があつて、儒教や佛教の思想の影響を受けて居るのであるが、根柢には日本固有の思想が橫たはつてゐたのであつて、家庭生活を樂しみ、子に對する愛情を歌つて居り、又老莊思想にかぶれた人々を戒めて居る。かくて憶良は、主として現實生活を歌つた人生派の詩人であつたと言ひ得るのであるが、更に其の歌風を見ると、種々の點に於て特色を發揮して居る。是より先長歌は、人麻呂によつて大體完成せられたのであつて、爾來動もすれば單調平板に流れる傾向があつたが、憶良は一首を二段若くは三段に切つて、各段の終を五七七として變化を圖つたのである。憶良は又素材用語の方面では、努めて具象的な名詞を連ね、修辭の方面に於ては、形式的な技巧を退けて、極めて緊張した格調によつて、事象を眼前に彷彿せしめようとしたのである。

憶良の歌には、かくの如く種々の特色があるのであるが、其の缺點としては、道徳的觀念に傾いて理智的となり、感情が稀薄になつた事を擧げなければならぬ。憶良の代表作歌としては「令レ反二惑情一歌」「貧窮問答歌」「戀二男子名古日一歌」等を擧ぐべきであるが、何れも長篇であるから、今は小長歌と短歌とを掲げて置く。

思二子等一歌

瓜食めば　子ども思ほゆ　栗食めば　ましてしぬばゆ　いづくより　來りしものぞ　眼交に　もとな懸りて　安寢しなさぬ

反　歌

しろがねも金も玉も何せむにまされる寶子にしかめやも（卷五）

罷レ宴歌

憶良らは今はまからむ子泣くらむその彼の母も吾を待つらむぞ（卷三）

沈レ痾之時歌

をのこやも空しかるべき萬代に語りつぐべき名は立てずして（卷六）

高橋蟲麻呂

赤人・憶良と共に第三期の一流の歌人中に數へられるのは、敍事歌人の高橋蟲麻呂である。其の傳は詳かでないが、集中の作歌によつて、地方官となつて常陸に赴任したことが察せられる。彼の作歌として明記せられて居るのは、天平四年に藤原宇合卿が西海道の節度使に遣はされる時に詠んだ長歌一

首だけであるが、此の外に「高橋連蟲麻呂歌集中出」と記されたものが二十三首ある。彼は主として長歌を詠み、殊に多くの傳說歌を詠んだのである。傳說を歌つた作品で名高いのは、勝鹿の眞間の手兒奈の歌、葦屋の菟原處女の墓の歌、上總の末の珠名娘子の歌、水江浦島子の歌などであるが、此の外に赤人の富士山の歌の次に載つてゐる「詠二不盡山一歌」も、註記によれば彼の作歌であつて、傑作の一に數ふべきものである。此等の作は概ね長篇であつて、構想が自然であり、詞藻が豐麗であつて、他の歌人の追隨し難い特長がある。蟲麻呂は敍事に長じたばかりでなく、抒情にも秀でたのであつて、傳說歌にも自己の感情を織り交せて居る。

見二河内大橋獨去娘子一歌

級照る　片足羽河の　さ丹塗の　大橋の上ゆ　くれなゐの　赤裳裾引き　山藍用ち　摺れる衣著て　ただ獨り　い渡らす子は　若草の　夫かあるらむ　橿の實の　獨りか寢らむ　問はまくの　欲しき我妹が　家の知らなく

反　歌

大橋のつめに家あらばうら悲しく獨り行く子に宿かさましを（卷九）

此の作は傳說歌ではないけれども、敍事歌人としての特徵は十分に認められる。

次は大伴旅人である。旅人の傳記資料は『續日本紀』中に散見して居る。大伴氏は天忍日命の裔で、代々武官として朝廷に仕へた名族である。旅人は養老二年五十四歲で中納言に任ぜられ、其の後太宰

帥となつて任地に下り、天平二年に大納言に任ぜられて歸京し、其の翌年に六十七歳で世を去つた。筑紫に居る頃憶良は部下に屬してゐたが、互に風流の友として親しく交つたのであつて、憶良の作が後世に傳はつたのも、其の關係からであらうと思はれる。旅人は憶良と同じく漢文學に通じ、支那思想の影響を受けたのであるが、性格に於ては大いに異なつてゐた。卽ち其の作歌には、性格竝に境遇の反映と、老莊思想の感化とが見えるのであつて、何處となく飄逸な所があり、また享樂的傾向がある。讃酒歌十三首はかうした彼の性格竝に思想の一面を示して居る。併し旅人は元來情熱の人であつて、別離友愛慕鄕等の感情を歌つたものや、筑紫で病歿した妻を悼んだ作などには、其の性情が現れて居る。後世に傳はつた旅人の歌は、筑紫に下つてから以後のものであつて、何れも短歌である。(尤も卷三には壯年の頃の長歌が一首載つて居る。)彼の作歌として最も勝れて居るのは讃酒歌であるが、異彩を放つて居るのは、松浦河の仙女との贈答(神仙思想の影響を受けて創造した一種の歌物語)である。左に掲げるのは亡妻を追憶した作である。

吾妹子が見し鞆の浦の天木香樹(むろのき)は常世(とこよ)にあれど見し人ぞなき（卷三）

妹と來し敏馬(みぬめ)の埼を還るさに獨りして見れば淚ぐましも（同）

人も無きむなしき家は草枕旅にまさりて苦しかりけり（同）

吾妹子が植ゑし梅の樹見る每にこころ咽(む)せつつ涕し流る（同）

平明で切情が溢れて居るのが旅人の特色である。

第四期

、第四期は天平の盛時から、萬葉時代の終までであつて、此の頃旋頭歌は殆ど廢れ、長歌はなほ行はれたけれども、徒らに過去を摸倣して類型的となり、專ら短歌が盛につくられたのである。第三期の頃、儒教佛教などの影響は既に著しかつたのであるが、第四期になると、漢詩文の影響は、思想は固より題材表現格調等に亙つて廣く及び、又一方に於ては、歌が貴族社交の具に供せられる傾向を生じた。かくて當時の歌風は素朴純眞な萬葉の本質から遠ざかると共に、知識的に詠まれるやうになり、やがて來るべき古今集時代の歌風に、一歩近づいたのである。第四期の歌人は極めて多數に上るのであるが、著しい歌人は大伴家持を筆頭に、湯原王・市原王・田邊福麻呂・中臣宅守・狹野茅上娘子・大伴坂上郎女・大伴坂上大孃・大伴田村大孃、其の他家持と贈答した幾多の女性がある。而して代表的歌人は家持である。

大伴家持

大伴家持（延曆四年歿六十八）は旅人の子である。天平十年に内舍人に任ぜられ、天平十八年には越中守に任ぜられて、五年間其の地に住み、天平勝寶三年に少納言となつて歸京した。其の後天平寶字二年に因幡守に轉じ、姻戚の惠美押勝が誅せられた時には、薩摩守に左遷せられたが、光仁天皇御即位の後は累進して寶龜十一年に參議となり、左右大辨を經て從三位を授けられ、延曆元年には氷上川繼の反に坐して、一時官位を除かれたが、間もなく本官に復し、延曆四年に歿する時には、中納言兼春宮大夫であつた。以上は家持の略歷であるが、其の作歌の傳はつて居るのは、少壯の時から天平寶字三年正月因幡守の時（四十二歲）に至る二十餘年間であつて、短歌三百三十餘首長歌四十六首旋頭歌一首である。家持

の歌風は境遇や性格の變化するにつれて、幾度か變遷して居るのであるが、大體から見て青春時代・越中守時代・在京時代の三期に分つ事が出來る。青春時代の歌は主として純情を歌つた相聞歌であり、越中守時代のは題材が著しく廣くなつて、自己の生活を始めとして、越中の風物を詠じて居る。次いで在京時代のものになると、靜寂な境地を拓き內面的に深みを加へて、著しく進步した跡を見るのである。家持の歌風を概括して言へば、長歌は人麻呂・憶良の風を摸倣して却つて平板になり、格調も概ね散文的であつて、見るべき作が乏しいのであるが、短歌に於ては敍景抒情共に勝れた作が多いのである。家持の歌には動もすれば技巧の末に走り、又觀念的な作を詠む弊があるのであつて、此等は『古今集』の歌風に至る過渡期の傾向と見る事が出來る。

大伴家持

うち霧らし雪は降りつつしかすがに吾家（わぎへ）の苑にうぐひす鳴くも（卷八）

夏山の木末（こぬれ）の繁（しじ）にほととぎす鳴き響（とよ）むなる聲の遙けさ（同）

藤波の影なす湖（うみ）の底淸みしづく石をも珠とぞ吾が見る（卷十九）

春の苑紅にほふ桃の花下照る道に出で立つをとめ（同）

春の野に霞たなびきうらがなしこの夕影に鶯鳴くも（同）

我が宿のいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも（同）

大伴坂上郎女

第三期から第四期にかけての女流歌人中で最も傑出したのは、旅人の妹大伴坂上郎女である。初め穗積皇子の寵を受けたが、薨去の後は藤原不比等の子麻呂に嫁し、其の歿後には更に大伴宿奈麻呂（すくなまろ）の

妻となつて、坂上大嬢・田村大嬢等を生んだ。坂上大嬢は家持の妻となつた人である。天平の初めに旅人に從つて太宰府に下つた事があるが、天平勝寶二年の歌以後のものは傳はつてゐないから、其の後間もなく世を去つたのであらう。坂上郎女は額田王と併せて、萬葉時代の女流歌人を代表する人である。大伴家の人である爲に、作歌は幸に多く傳はつたのであつて、長歌六首短歌七十二首旋頭歌一首ある。婦人の身で長歌を作つた例は、額田王・石上乙麻呂の妻など二三人あるに過ぎないのであるが、坂上郎女は六首を遺して居り、而も尼の理願の死去を悼んだ歌や、相聞の怨恨歌の如き、稍長篇を詠んで居る。長歌にも戀愛に關するものが多いが、短歌は大部分が抒情歌であつて、戀愛の外に子に對する愛や別離の情などを歌つて居る。

　久方の天の露霜置きにけり家なる人も待ち戀ひぬらむ（卷四）

　玉主に珠は授けてかつがつも枕と吾はいざ二人寢む（同）

此等は子に對する切情を歌つた例であるが、自然の風物を詠じた作も、

　ぬばたまの夜霧の立ちておほほしく照れる月夜の見れば悲しさ（卷六）

　山の端のささらえ壯子天の原門渡る光見らくしよしも（同）

の如く主觀を詠んだものが多い。

其の他の歌人

家持と坂上郎女は第四期を代表する男女の歌人であるが、此の外に家持と略ぼ同時代の勝れた男子の歌人に、湯原王と田邊福麻呂がある。湯原王の作には抒情歌もあるが、特に靜寂な境地を詠まれた

ものに勝れた作が多いのであつて、其の歌風には家持と相似た所がある。現存する歌はすべて短歌である。田邊福麻呂の作歌には、其の名の記されたものと、「田邊福麻呂之歌集中出」と註せられたものとがある。特に敍景歌に長じてゐたのであつて、歌集中の長歌には、「悲ニ寧樂故鄕一作歌」「讃ニ久邇新京一歌」「難波宮作歌」「過ニ敏馬浦一時作歌」の如き、すぐれた作がある。最後に女流歌人には、坂上郎女に次ぐべき人に、情熱的な戀愛歌を多く遺した笠女郎と、狹野茅上娘子がある。何れも短歌のみを詠んで居る。笠女郎のは、家持との贈答歌のみが二十九首傳はつて居り、茅上娘子のは、中臣宅守との贈答歌であつて、卷十五に宅守の作と併せて六十三首載つて居る。宅守の作も勝れて居るが、寧ろ茅上娘子の方に見るべきものが多い。

歌經標式

『萬葉集』の最後の歌が作られた天平寶字三年以後の奈良朝後期の和歌は、殆ど傳へられてゐない。但し光仁天皇の御代に、既に『歌經標式』の如き歌學書が現れたのは注意すべき事である。『歌經標式』(一卷)は其の序文に「寶龜三年五月七日濱成謹上」とあるから、此の年に藤原濱成が撰述したものである事は明かである。一名を『濱成式』と呼ばれ、後世『喜撰式』『孫姬式』と併せて和歌三式といひ、又これに『石見女式』を加へて和歌四式とも云はれて居る。何れも支那の文學論に倣つて、歌體歌病の事などを論じた簡單な歌學書である。『歌經標式』に二種の流布本と、佐々木信綱博士が發見せられた異本とがある。流布本には脫漏が多く、又『喜撰式』や『孫姬式』の一部の混入などがあつて、原本の儘で

ない事は明白であるから、從來假託の書であると言はれたのである。然し異本には誤脱が少く、且つ平安時代末期の歌學書の、『袖中抄』や『奥儀抄』などに引かれてゐるものと一致する所が多いから、原本の面目を最もよく保存するものと言はれて居る。さて此の書は歌學書の濫觴であつて、歌學史上貴重な研究資料であるが、其の中に引例として掲げられた歌にも、注意すべきものがある。所收の和歌の歌體には長歌・旋頭歌もあるが、主として短歌であつて、何れも一字一音式の萬葉假名で記してある。歌數は二十八首（外に二三句だけ引いたのが數首ある。）であつて、此等の中には『萬集集』中にあるものもあり、又其の他の歌も必ずしも勝れた作ではないが、歌風に於て和歌史の研究資料となるものが尠くない。左に三首を抄出して置く。

あかときと鳥も鳴くなり寺々の鐘も響きぬ明け出でぬ此の夜（殖栗豐島詠レ夜歌）

潮滿てば入りぬる磯の草ならし見る日すくなく戀ふる夜多み（顯燒王戀歌）

鼠の家米舂き振ひ木を切りて引き燧りいだす四つといふかそれ（藤原濱成）

最後の一首は謎の歌である。

四　奈良朝の歌謠

『萬葉集』の歌は大部分が目で見て味ふべきものとなつてゐるが、中には詞書や註によつて、諷唱した歌である事の明かなものがあり、又形式格調内容などから見て、口吟せられたであらうと想像せら

れるものもある。奈良時代に佛會に用ひる爲の歌謠が存した事は、元興寺綱封倉の牙笏に記した短歌などによつて知る事が出來るが、殊に纒まつて傳へられたのは、佛足石の歌二十一首である。これは奈良の藥師寺の境內に現存する、佛足石歌碑に刻まれてゐる金石文であつて、一字一音式の萬葉假字で記されてゐるが、其の中の二首は判讀し難いものになつて居る。佛足石とは、釋尊が天竺の阿育精舍の巖上に印した足跡であると傳ふるものの傳寫であつて、歌は其の後方に立てられた別の石に刻んである。其の歌は何れも五七五七七七となつてゐて、短歌を實地に歌ふために、最終の句形を繰返す形式に成つて居る。光明皇后の御歌であるとも云ひ、又佛足石落慶の時に集まつた者の作であるとも言はれて居るが、要するに作者は詳かでない。併し歌は天平時代のものである事は確かである。歌ふ所は主として佛足石の敬仰讚歎であるが、四首には呵嘖生死を詠んでゐる。內容は單純な佛教思想を歌つたものであるが、聲調は流麗である。今其の中の四首を揭げる。

御足跡つくる石の響は天に至り地さへゆすれ父母が爲に諸人の爲に

よき人の正目に見けむ足跡すらを我はえ見ずて石に彫りつく玉に彫りつく

この足跡を廻りまつれば足跡主の玉のよそほひ思ほゆるかも見る如もあるか

雷の光の如きこれの身は死のおほ君常にたぐへりおづべからずや

佛足石歌體は實地に諷唱した歌謠の一體であつて、文獻に遺存する最古の例としては、『古事記』の清寧天皇の條の

大君の王の柴垣やふじまりしまり廻ほし截れむ柴垣やけむ柴垣

を擧げ得るのであるが、『萬葉集』にも

彌彦の神の麓に今日らもか鹿の伏すらむ皮服著て角附きながら（越中國歌、卷十六）

の如き例がある。此の外『萬葉集』の卷五に載つて居る「筑前國司守山上憶良、敬和下爲二熊凝一述二其志一歌上六首竝序」天平三年の作 の反歌五首の中四首には、

常知らぬ道の長手をくれぐれと如何にか行かむ糧米は無しに　一云、乾飯は無しに

の如く、梭異の形式で更に別の一句を附記して居るが、之を本歌の第六句として續けて見ると、やはり佛足石歌體となるのである。若しこれを佛足石歌體と見做す事が出來るならば、更に次の如き和歌も、同樣に取扱つて差支ないのである。

栲領巾の白濱浪の寄りも肯へず荒ぶる妹に戀ひつつぞ居る　一云、戀ふる頃かも（卷十一）

平敷の埼漕ぎ廻ほり終日に見とも飽くべき浦にあらなくに　一云、君が問はすも（卷十八）

併し此等に就いてはなほ疑問があるのであつて、直ちに佛足石歌體と斷言する事は出來ない。

琴歌

上古の謠物で、奈良朝前後から平安時代初期にかけて行はれたものに、琴歌がある。琴歌といふのは、圓融天皇の天元四年書寫の、近衞公爵家所藏の『琴歌譜』一卷に收められてゐる、二十一首を指すのであつて、最近發見せられたものである。此の譜本は其の奥書によれば、大歌所の大歌師多安樹の家に傳はつたものの轉寫本であつて、六絃の和琴に合せて謠つた、古歌謠の譜と歌とを記したもので

ある。從つて其の歌は、書寫の時代よりも遙かに古い時代のものであつて、二十一首の中の五首は、記紀の歌謠と殆ど同じものであり、其の他の三首は、神樂歌や『古今集』などに見えてゐるものと略ぼ同一の歌であり、又其の他の十三首は、從來の文獻に見當らない古歌謠である。此の書に記された曲

琴歌譜
近衛公爵家藏
（古典保存會複製本による）

名に、茲都歌・茲良宜歌・宇吉歌などとあるのは、『古事記』の中の曲目と同一であり、酒坐歌とあるのは、『古事記』の酒樂歌に當り、高橋扶理・天人扶理・繼根扶理などとあるのは、『古事記』の夷振・宮人振などの類に相當するものである。即ち此等の歌曲は、上古から行はれたものであつて、時代の好尚に應ずるやうに、多少の修正は施されたにしても、大體に於て古歌謠の面目を保ちつつ、平安時代の初期の頃まで、琴歌として用ひられたことを示して居る。歌は曲名の下に萬葉假名で記し、別に譜中に

も同じ歌詞が記してあるが、實際に謠ふ時には、多少歌詞を變へたらしく、二者の間に語句の異なる所がある。要するに琴歌は、奈良朝頃の歌謠を見るべき資料となるばかりでなく、溯つては記紀の歌謠の謠方をも察する事の出來る貴重な資料である。

第四章　祝詞と宣命

一　祝　　詞

祝詞は原始宗教に用ひられた單純な祈禱呪禁の詞に源を發して、祭祀の發達するにつれて漸次成長して、遂に一種の宗教文學として成立するに至つたのである。上代人は言語に神祕的な靈が宿つてゐると考へてゐた。この信仰を言靈信仰と呼ぶ。卽ちめでたい詞を唱へれば、其の詞の言靈の作用によつて、幸福を得る事が出來、反對に凶言を發てば、己の忌み嫌ふ者に、凶事を招く事が出來ると信じたのである。而して不吉な詞を發つことは、自他共に之を忌み、漫りに口にしないのが人情であるから、其の詞は自ら祕密に用ひられ、從つて民衆の力によつて、發達するやうな事もないのであるが、めでたい詞は自他共に之を聞くことを喜び、且つ公然と用ひられるものであるから、これは民衆の力によつて漸次發達して、遂に上代文學の一としての祝詞の如きものを見るに至つたのである。祝詞はもと集團的に營まれた祭祀の詞であつたのであるが、文書に記されて後世に傳へられたのは、朝廷の

祭儀が完備した時代になつて發達した、國家的の祭祀に用ひられたものである。祝詞と性質を同じうするものに壽詞がある。これも言靈信仰に基づいて、御代の長久を祝賀する詞であつて、文章も祝詞に近いものであるから、廣義の祝詞の一として取扱ふことが出來る。

壽詞

起原と變遷

記紀の天岩戸の神話に、天兒屋命が太詔戸言を奏上した事が見え、又『古事記』の大國主命の段に、櫛八玉神が火鑽の詞を申した事が見えてゐるから、神前に祝詞を奏する事は、祭祀の儀式と共に、上古に其の源を發してゐるのである。天岩戸の前で奏した祝詞は傳はつてゐないけれども、書紀の一書に、此の時の祝詞を「廣厚稱辭祈啓矣」と記し、又天照大御神が之を聞こしめして、「未ㇾ有㆓若ㇾ此言之麗美㆒者也」と仰せられたと傳へて居るから、上古の祝詞が善言美辭を盡して、神の心を悅ばしめるものであつた事を知るのである。又櫛八玉神が唱へた火鑽の詞は、『古事記』に載つて居るが、其の文によれば、上古の祝詞はまた幣帛や神饌を奉るに當つて、これを讃美するのが慣例であつたと思はれる。壽詞も亦古くから用ひられ、善言吉詞を盡して祝賀の意を述べるものであつたことは、顯宗天皇紀にある室壽の詞を見ても知られるのである。祝詞・壽詞が上古から存在してゐた事と、其の特質の一斑とは、此等によつて略ぼ窺ひ得るのであるが、上古のは其の時限りのものであつて、未だ定型がなく、又傳誦せられて行く間に散逸した爲に、殆ど後世に傳はらなかつたのである。古代の祝詞・壽詞にして現存するものは、醍醐天皇の延長五年に撰定した、『延喜式』(五十卷)の第八卷(此の卷を祝詞式と呼んで居る。)に收錄せられた二十七篇(此の中の一篇「東文忌寸部獻㆓橫刀㆒時呪西文部准㆑之」は漢文の呪文であつて、祝

詞ではない。)と、平安時代の末期に藤原頼長が手記した『台記』の「別記」に採錄せられた、「中臣壽詞」一篇とである。尤も祝詞式所收の祝詞は、當時行はれた諸祭の全部を網羅したのではない。之を『延喜式』の四時祭に擧げてある諸祭と對照して見ると、重要な祭祀の祝詞で洩れて居るのがある。思ふに祝詞式に收錄せられたものは、大體に於て古くから用ひ來つた諸篇を揭げ、且つ『延喜式』撰定以前に近く制定せられた重要な祝詞を載せたのである。なほ『延喜式』第八卷の首に「凡四時諸祭不レ云二祝詞一者、神部皆依二常例一宣レ之。其臨時祭祝詞、所司隨レ事脩撰、前レ祭、進レ官經二處分一然後行レ之。」とあるのに據れば、祝詞式に祝詞を揭げてゐない諸祭のは、常例によつて奏したのであり、臨時祭のは、其の都度神祇官人をして、起草せしめたのである。

現存する祝詞及び壽詞が成立した年代は詳かでないけれども、其の古いものは國家的祭祀が發達した頃、間もなく出來たものの面目を保存して居り、大部分は奈良朝以前の制作であらうと思はれる。併し現存する祝詞が文書に記されて固定したのは、平安時代の初期であるから、それまでの長い年月の間に、幾度か改修せられたであらうと思はれる。現存する祝詞の制作された時代を推考することは、嘗て江戸時代の學者によつて試みられたのである。六人部是香は、「大祓」「大殿祭」「御門祭」の三篇を最古のものと見做して、神武天皇の御代に成つたといひ、(「大祓詞天津菅麻」參看)賀茂眞淵は、「出雲國造神賀詞」は舒明天皇朝に、「大祓」は天智天武兩朝の頃に、「遷二却祟神一」「大殿祭」は持統文武兩朝の頃に、「祈年祭」「廣瀨大忌祭」「龍田風神祭」の如きは、奈良朝に於てそれぞれ制作せられたので

あらうと言つて居る。併し此等は臆測に過ぎないのであつて、學問上の根據も薄弱である。寧ろ本居宣長の說に從つて、比較的古い祝詞は大寶令の頃に作られ、中には稍古く天智天武の御代に作られたのもあるであらうと見るのが穩當である。思ふに、『延喜式』の祝詞の中には極めて古いのもあるが、又平安時代になつてから、制作されたものもあるのであつて、其の古いものに就いては、祭祀の沿革、神社の起原、文體用語の特色等によつて、略ぼ其の時代を推定するに止まるのである。而して最も古色を帶びて居るのは、「大祓」「出雲國造神賀詞」「中臣壽詞」「大殿祭」「御門祭」「祈年祭」「月次祭」等の諸篇であり、比較的新しいのは、「春日祭」「平野祭」及び伊勢神宮の諸祭に用ひる諸篇である。

作者

祝詞の作者は元より明かでないけれども、朝廷の祭祀に奉仕することを家職とする、中臣齋部の二氏は職掌上から考へて、祝詞の制作に最も深い關係があつたであらうと思はれる。而して此の二氏と祝詞奏上の關係に就いては、『延喜式』第八卷の首に、「凡祭祀祝詞者、御殿御門等祭、齋部氏祝詞、以外諸祭、中臣氏祝詞。」と規定せられ、又齋部廣成が撰進した『古語拾遺』に、「大殿祭」と「御門祭」の二篇は、齋部氏所屬の祝詞として居るのである。此等によれば、「大殿祭」と「御門祭」の二篇は齋部氏に屬し、其の他のものは中臣氏所屬のものであつたのである。尤も其の他と云つても、「出雲國造神賀詞」や「東西文部獻横刀時呪」の如きは、それぞれ其の所屬が明白であるから例外である。

宣命形式と奏上形式

現存する祝詞は、これを文章の形式の上から見ると、文末が「諸聞食止宣」で終つて居るものと、「稱辭竟奉久登白」で終つて居るものとがある。即ち一は祭祀の庭に集へる人々に對して宣布するもので

あり、他の一は神祇に直接奏上するものである。而してこれを中臣齋部二氏の所屬のものに就いて言へば、奏上する形式のものには、中臣氏所屬のものと齋部氏所屬のものとあるが、宣讀する形式のものは、主として中臣氏に屬するものである。中臣齋部二氏の掌る祝詞に、かくの如き形式上の差別があるのは、二氏の職掌の相違に基づくのである。卽ち中臣氏は政治上の要職にあつて、祭祀には百官若くは神職を召集して、詔命を奉じて祝詞を宣り聞かせる事を掌つたから、其の祝詞は自ら宣命に近い形式となつたのであるが、齋部氏は上古に於ては、中臣氏と相並んで祭政に奉仕したのであるけれども、後には中臣氏に壓倒せられて政治上の地位を失ひ、專ら祭祀にのみ仕へるやうになつたから、其の所屬の祝詞は自ら神に奏上するものに限られ、其の數も大いに減じたのであらうと思はれる。

祝詞の內容は、祭祀の精神の異なるにつれて相違するのは當然であるが、現存するものは國家的祭祀に用ひられたものであるから、一般に皇室の長久、國家國民の繁榮を祈願する旨を述べる事が主となつて居る。更に主要な祝詞に就いて言へば、「祈年祭」のは穀物の種子を蒔く時、又「月次祭」のは其の成育期に當つて豐穰を祈り、併せて皇室の安穩と國家の隆昌を祈るのであり、「廣瀨大忌祭」と「龍田風神祭」のは、風水の災害を蒙る事なく、五穀が無事に豐熟することを願ふのであり、又「大嘗祭(おほにへ)」のは天つ神が寄さし給うた新穀を、長御食(ながみけ)の遠御食(とほみけ)として聞こしめすに當つて、御代の長久を祈請するのである。此等は農業國としての重要な祭祀に奏上する祝詞であつて、其の數も比較的に多いのである。何れの祝詞にも、玉體の平安長久を祈り、宮殿の安泰を祈らぬはないが、特にそれを主として祈

る祝詞には、「大殿祭」「御門祭」「鎭火祭」「鎭御魂齋戸祭」「遷却祟神」「道饗祭」の諸篇がある。以上擧げたのは祝詞の中で、最も主要なものであるが、其の外になほ御代の長久を壽ぐものに「中臣壽詞」と「出雲國造神賀詞」があり、外戚の祖神を祭つて、御代の繁榮を祈願するものに、「春日祭」「平

延喜式祝詞篇（九條公爵家藏）

九條公爵家所藏の延喜式祝詞篇は、平安時代末期に近い頃の筆寫であつて、現存する最古の寫本である。右の圖版は官幣大社稻荷神社刊行の複製本に據つた。

野祭」などの祝詞があり、百官を始め國民が過ち犯した過去の罪や穢を祓ひ清めるものに、「大祓」の詞があり、又遣外使節の安全を祈るものに「遣二唐使一時奉幣」がある。

祝詞の組織に、古いものと新しいものとの間に差異があるが、其の古いものに就いて見ると、大體二部から成つて居る。卽ち第一部には祭祀の本緣、若くは祭神に關する神話傳說などを物語り、第二部には神德を讃美し、幣帛を稱へ盡して、祈願の旨を述べるのである。かくて此の二部から成る祝詞は、古い型を保存するものであるが、新しいものは第一部を缺き、其の代りに祈禱の詞が特に長大となつて居る。芳賀博士の說によれば、延喜式祝詞は其の主要なる歷史傳說の敍述を除去せられたものであつて、「鎭火祭」の中に伊邪那美命が火を產み給うたことが見え、「大殿祭」に鏡璽を皇孫に授け給ふ事があり、「遷二却祟神一」の祝詞の中に建甕槌命の武勇を敍べ、「出雲國造壽詞」の中に大國主命の國讓の事が見えて居るのは、上代の祝詞壽詞に於て、更に詳細に述べられたものが、纔に其の名殘を留めて居るのであると云はれて居る。（國文學史概論參照）思ふに神話的敍事によつては、參集せる人々の心を遠く神代の昔に誘導して、時間的に遠大にして莊嚴の感を起さしめる効果があり、祈禱的敍述に於て、幣帛の品々を列擧し、神々の名を列ね、參集せる人々を擧げる事によつては、聞く者の心に空間的に雄大森嚴な感を起させるのであつて、祝詞の莊重美は其の構想の上にも存するのである。

祝詞は言靈信仰に基づいて發生したものであるから、上代人がこれに文學的技巧の最善を傾けたのは當然である。然るに元來祝詞に述べるべき内容は、略ぼ一定して居るのであるから、技巧は自ら形

式方面に注がれたのである。先づ表現の特色に就いていへば、つとめて抽象的・概念的な語句を連ねて、漠然とした廣大な感を起させることに力を注ぎ、又語を重ね句を疊んで、冗漫の中に自ら悠揚たる風格を備へ、鄭重な感を與へようとして居る。從つて修辭に於ても、譬喩や誇張の如きものを用ひることは少く、寧ろ韻律の快美聲調の莊重を期することに力を注いでゐるのであつて、列擧法・反覆法・對句法の如き形式的修辭を多く用ひて居る。かくて祝詞は或一篇だけを取り出して見ると、思想が雄大であり、形式が莊嚴であり、聲調が快美であるが、各篇を通覽する時には、內容・組織・表現・修辭等が一定の型にはまつて居て、變化に乏しく、單調を感ずる。これが『古事記』や『萬葉集』などに較べて、文學的價値に於て劣る所以である。併し祝詞は上代國民の宗教感情を敍べた敍事的抒情文學であつて、後世に比較すべきもののない特殊の文學として、其の價値は永久に變らぬものである。

祈年祭の一節

辭別、伊勢爾坐天照大御神能大前爾白久、皇神能見霽志坐四方國者、天能壁立極、國能退立限、青雲能靄極、白雲能墜坐向伏限、青海原者棹柁不干、舟艫能至留極、大海原爾舟滿都都氣氐、自陸往道者荷緒縛堅氐、磐根木根履佐久彌氐、馬爪至留限、長道無間久立都都氣氐、狹國者廣久、峻國者平久、遠國者八十綱打挂氐引寄如事、皇大御神能寄奉波、荷前者皇大御神能大前爾、如横山打積置氐、殘乎波平聞看。又皇御孫命御世乎、手長御世登、堅磐爾常磐爾齋比奉、茂御世爾幸閇奉故、皇吾睦神漏伎神漏彌命登、宇事物頸根衝拔氐、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎、稱辭竟奉登久宣。

右直譯文

辭別きて、伊勢に坐す天照大御神の大前に白さく、皇神の見霽かし坐す四方の國は、天の壁立つ極み、國の退立つ限り、青雲の靄く極み、白雲の墜坐向伏す限り、青海原は棹柁干さず、舟の艫の至り留まる極み、大海原に舟滿ちつづけて、陸より往く道は荷の緒縛ひ堅めて、磐根木根履み佐久彌て、馬の爪の至り留まる限り、長道間無く立ちつづけて、狹き國は廣く、峻しき國は平らけく、遠き國は八十綱打挂けて引き寄する事の如く、皇大御神の寄さし奉らば、荷前は皇大御神の大前に、横山の如く打積み置きて、殘をば平らけく聞こし看さむ。又皇御孫命の御世を手長の御世と、堅磐に常磐に齋ひ奉り、茂し御世に幸はへ奉るが故に、皇吾が睦神漏伎神漏彌命と、宇事物頸根衝き拔きて、皇御孫命の宇豆の幣帛を、稱辭竟へ奉らくと宣る。

二　宣　命

奈良朝の散文を代表するものは宣命である。天皇の詔命を臣下に宣り聞かせる詞であるから、宣命といふのであつて、同じく天皇の勅を漢文で記したものは、詔勅といつて區別するのである。玆に宣命と稱するのは、『續日本紀』に收められた六十二篇を指すのである。『續日本紀』は、文武天皇から桓武天皇の延暦十年に至るまでの事を記した、漢文の國史であるが、編纂者は詔勅は屢原文を摘書したのに拘らず、宣命は殆ど原文の儘を採錄したのである。而して宣命は文武天皇朝以前にもあつたのであるが、『古事記』にはこれを載せず、又『日本書紀』には漢文に書き改めてゐるのである。また『續日

本紀』に次ぐ『日本後紀』以下の國史にも、宣命を收錄してゐるのであるが、それ等は次第に漢文脈を加へ、後には全く漢文の詔勅となつてしまつたのであるから、國文學史上に宣命といふのは『續日本紀』のもののみを指す事になつて居る。

續紀の宣命

『續日本紀』所收の六十二篇の宣命は、文武天皇の元年八月庚辰の卽位の宣命に始まり、桓武天皇朝の延曆八年九月戊午の詔に終つて居る。而して此の間で宣命の數の多いのは、聖武天皇朝から光仁天皇朝に至るまでである。當時は國事が多端であつたから、勅を下される機會が多かつたのである。宣命は主として、卽位・立皇后・立皇太子・改元・讓位・大官任命の如き場合に下されるのであるが、大佛の建造や、橘奈良麿・惠美押勝・和氣王・粟田道麿等の陰謀反逆の如き、不祥事に當つて下された例も少くない。宣命の主體は固より天皇であるけれども、中には太上天皇・皇太后・皇后の大命を宣るのがある。又宣命を受ける客體となるものは、群臣又は國民であるけれども、時としては一個人に賜はつたり、神佛に宣らしめられたのもある。

起草者

宣命の起草者は明瞭でないけれども、中務省の內記は其の職掌から考へて、起草の任に當つたであらうと思はれる。而して之を朗讀する者は宣命大夫(宣命使ともいふ。)であつて、其の朗讀には宣命譜があつて、一定の曲節を附けて音吐朗々と讀み上げたのである。次に宣命の書き方は、祝詞と同じやうに漢字の音訓を借りて書下しに記し、用言の語尾や助詞などは、一字一音式の假字で形を小さく記して居る。是を宣命書といふ。宣命書は、漢字の音訓を借りて國文を書き表す方法としては、最も

宣命書

進歩したものであつて、『古事記』の表記法に較べて、更に一段と進歩して居るのである。

形式

宣命は皇室または國家の重大な事件に當つて、遍く群臣萬民に聖旨を宣り聞かせる詞であるから、其の特色としては謹嚴莊重なる文辭と、それにふさはしい聲調とを必要とする。從つて文章は祝詞に似た組織・表現・修辭を用ひて居る。即ち祝詞に神話的敍述を冒頭に置くやうに、宣命にも建國創業の昔を回顧して、筆を起すものが多い。又祝詞に列擧・繰返・對句の如き形式的技巧を用ひるのと同じやうに、宣命にも此等の修辭を頻繁に用ひて、莊重な韻律を傳へる事に努めて居る。なほ宣命に「現つ御神と大八島國知ろしめす、天皇が大命らまと詔り給ふ大命を、集侍はれる皇子等王臣百官人等、天下の公民、諸聞こし食さへと詔る。」の如き冒頭を以て始め、段落毎に「諸聞こし食さへと詔る」を繰返してあるのも、祝詞と同じ形式をとつたのである。宣命の文辭は、かくの如く祝詞に似て居るのであるが、其の異なる所は、對句を用ひる事が減じて、概して著しく散文的になつたことである。即ち國文は宣命を待つて始めて散文の發達に向つたのである。宣命の文體が散文的になつたと共に、其の内容は事柄に應じて變化するから、祝詞がとかく千篇一律であるのと異なつて、稍變化に富んで居る。瑞祥に基づく改元や、大佛の鑄造の如き、新時代に起つた新しい出來事に就いて下された宣命には、外來思想の影響が著しく見え、文章も漢語佛語を多く混へて居る。

内容

宣命に現れた思想の中で最も注意を引くのは、君臣の情義である。天皇は至尊の位にありながら、却つて皇族を始め群臣百寮の輔佐の功によつて、始めて天下の政を平安無事に行ひ得る旨を仰せられ

てゐる。又天皇は御自らの喜びは、直ちにこれを國民に分ち給ふのであつて、即位改元などの場合には、必ず功臣に恩賞があり、且つ大赦の恩命を下し給ふ例となつてゐる。而して天皇が國民を治め給ふ御心は「此の食國天の下を撫で賜ひ慈み賜ふ事は、辭立つにあらず、人の祖のおのが弱兒を養ひ治す事の如く、治め賜ひ慈み賜ひ來る業となも、神ながら念ほしめす。」(第三詔)の如き詞によつて窺はれるやうに、全く慈父の愛子に對する情を以て臨ませられるのである。何れの宣命にも常に親王諸王百官を對象としてゐると共に、天下の公民を擧げ來つて、天下庶民の末をも慈み給ふ主上の慈愛は、常に「惠み賜ひ撫で賜ふ」といふ語によつて現されて居る。「治む」は君臣の義を示し、「慈み」「撫づ」は父子の情を示すものである。又屢國民を諭し給うた詞に「明き淸き直き心」がある。これは儒教の忠孝信義の如き道德の綱要を、一語に盡したものであつて、國民道德の大本を示し給うたものと思はれるのである。

外來思想

宣命にはかくの如き日本固有の美しい精神があつて、其の特色をなして居るが、他の一面には、時勢に伴なふ當然の結果として、多くの外來思想が取入れられて居る。其の最も著しいものは崇佛思想であり、之に次ぐのは儒教竝に道教の思想である。聖武天皇は殊に佛法を信じ給うて、國法と佛法の對立によつて、國家の安泰を圖らうとせられたから、此の頃からの宣命には、或は「盧舍那如來・觀世音菩薩・護法・梵王・帝釋四大天王の不可思議威神」の力を尊重し、或は最勝王經の講讀や、吉祥天の修法を行はしめられ、或は法師を崇むべきことなどを諭されてゐるのであつて、佛教の尊崇は多くの宣

命に强調されてゐる。天平二十一年に、陸奥の小田郡から大佛の塗料の黃金を産したので、改元して天平感寶とし給うたのは、支那の慣習に倣つたものであつて、以後引續いて慶瑞祥に基づく改元が行はれたのは、道教思想の影響である。其の他禮樂の重んずべきを說き、孝子・順孫・義夫・節婦の美德を稱揚するなど、儒教思想の影響を受けてゐることも著しいのであつて、祝詞と比較して思想の變遷の甚しい事に驚くのである。

最後に文章に就いて一言する。宣命は祝詞よりも遙かに實用的なものであつて、政治の要道を示したり、國法の重んずべき旨を諭したり、國民道德を說いたりする事が多いのであるから、懇切明瞭であると共に、義理の疏通を主としなければならない。從つて其の文章は、形式を重んずる祝詞と異なつて、著しく自由であり、且つ韻文の要素を減じて、著しく散文的になつて居る。例へば用語を見ても、博士・力田・禮樂の如き漢語や、袈裟・如來・舍利・佛の如き佛語を取り入れ、或は「人天の勝樂を受けて」といひ、「其れ仁孝は百行の基なり」といふやうに、漢文其の儘の語句を引用してゐる。かくて宣命の文體は、和漢混淆文の源泉となつて居るのであつて、後の散文の發達に大なる關係を有つて居るのである。

文武天皇御卽位の宣命

現御神止大八嶋國所知、天皇大命良麻止詔大命乎、集侍皇子等王臣百官人等、天下公民諸聞食止詔。高天原爾事始而、遠天皇祖御世御世中今至麻弖爾、天皇御子之阿禮坐牟彌繼繼爾、大八嶋國將知次止、天都神乃御子

隨母、天坐神之依之奉之隨(聞看來)、此天津日嗣高御座之業止、現御神止大八嶋國所知、倭根子天皇命授賜比負賜布、貴支高支廣支厚支大命乎、受賜利恐坐弖、此乃食國天下乎、調賜比平賜比、天下乃公民乎惠賜比、撫賜牟止奈母、隨神所思行佐久止詔天皇大命乎、諸聞食止詔。是以百官人等、四方食國乎治奉止任賜幣留、國國宰等爾至麻弖爾、天皇朝庭敷賜行賜幣留、國法乎、過犯事無久、明支淨支直支誠之心以而、御稱稱而緩怠事無久、務結而仕奉止詔大命乎、諸聞食止詔。故如此之狀乎聞食悟而、款將仕奉人者、其仕奉禮良牟狀隨、品品讃賜、上賜、治將賜物會止詔天皇大命乎、諸聞食止詔。

右譯文

現つ御神と大八嶋國知ろしめす、天皇が大命らまと詔りたまふ大命を、集侍はれる皇子等王たち臣たち百官の人等、天の下の公民、諸聞こし食さへと詔る。高天原に事始めて、遠天皇祖の御世、中今に至るまでに、天皇が御子のあれ坐さむ彌繼ぎ繼ぎに、大八嶋國知らさむ次でと、天つ神の御子ながらも、天に坐す神の依さし奉りし隨に、聞こし看し來る、此の天津日嗣高御座の業と、現つ御神と大八嶋國知ろしめす、倭根子天皇命の授け賜ひ、負せ賜ふ貴き高き廣き厚き大命を、受け賜はり恐み坐して、此の食國天の下を調へ賜ひ、平らげ賜ひ、天の下の公民を惠び賜ひ、撫で賜はむとなも、神ながら思ほしめさくと詔りたまふ天皇が大命を、諸聞こし食さへと詔る。是を以て百官の人等、四方の食國を治め奉れと任け賜へる、國々の宰等に至るまでに、天皇が朝庭の敷き賜ひ行ひ賜へる國の法を、過ち犯す事無く、明き淨き直き誠の心を以ちて、いやすすみすすみて緩み怠る事無く、務め結りて仕へ奉れと詔りたまふ大命を、諸聞こし食さへと詔る。故如此の狀を聞こし食し悟りて、款しく仕へ奉らむ人は、其の仕へ奉れらむ狀の隨に、品品讃め賜

ひ、上げ賜ひ、治め賜はむ物ぞと、詔りたまふ天皇が大命を、諸聞こし食さへと詔る。

第五章　漢文學と佛教說話

一　漢文學

大化改新以前の漢文學

漢字が始めて朝廷に傳來したのは、應神天皇の御代であるが、我が國民の手に成つた漢文で現存するものは、推古朝の金石文と、聖德太子の憲法十七條、及び佛典の註疏などを以て最古とするのである。（此の御代に天皇記國記等の國史の撰修があつたが、後に燒失した事は既に述べた通りである。）蓋し當時は佛教興隆の影響を受けて、漢學も亦益盛に行はれるやうになつたのであるが、殊に直接支那と交通を開き、留學生學問僧を派遣せられるやうになつたのは、漢學の興隆に多大の刺戟を與へたであらう。下つて孝德天皇の朝に大化改新が行はれ、式部省の下に大學寮を置き、博士をして教授の任に當らしめられて以來、京師に大學があり、諸國に國學があつて、經史詩文の講習はいよいよ盛に行はれるやうになつた。

近江朝の漢文學

大化改新の直後は律令の制定に忙しく、未だ詩文の學は振はなかつたのであるが、天智天皇の御代に至つて始めて盛に起つた。天智天皇が未だ皇子で在らせられた頃、藤原鎌足と共に經學の大家南淵請安（推古天皇の十六年に遣隋使小野妹子に從つて留學した學者）を師として、漢學を修め給うたこ

奈良朝の漢文學

とは有名な話であるが、御子の大友皇子(弘文天皇)は、我が國最初の詩人として名高く、川島皇子も亦詩文に長じて居られた。又天皇の御弟天武天皇が、川島皇子等に詔して國史撰定に當らしめられたことは、既に述べた所であるが、天武天皇の諸皇子の中には、詩文に長じ給うた大津皇子・舍人親王・忍壁親王等があつて、皇室の漢文學は極めて隆盛であつたのである。大友皇子の御子葛野王は經史詩文に長ぜられてゐたが、其の御孫は奈良朝に文名の高かつた淡海三船である。又鎌足の子不比等は漢學に通じ、忍壁親王と共に律令の撰定に當つたが、其の子武智麻呂(南家)・房前(北家)・麻呂(京家)・宇合(式家)等も亦、それぞれ詞藻に秀でてゐたのである。而して北家は代々攝關大臣家として繁榮し、南家式家は永く大學頭文章博士の名門として知られ、漢文學の發達に多大の貢獻をしたのである。かくて漢詩漢文は史學と共に近江朝に於て、先づ百花繚亂の盛況を呈したのであつて、其の隆盛に就いては、『懷風藻』の序文に、「旋招二文學之士一、時開二置醴之遊一、當二此之際一、宸翰垂レ文、賢臣獻レ頌、雕章麗筆非二唯百篇一。」と記し、また紀淑望の『古今集』後序に「自三大津皇子之初作二詩賦一、詞人才子慕レ風繼レ塵、移二彼漢家之字一、化二我日域之俗一、云々」と述べて居る。併し當時の詩文が壬申の亂に悉く湮滅して、後世に傳はらなかつたのは誠に惜しい事である。

其の後奈良朝になつて、聖武天皇の御代には大學の學生四百人を定員とし、五經・三史・明法・算術・音韻・籀篆等六道を授けたのであるが、(三好清行の封事に據る)殊に當時新たに文章博士を置いて文章生を養成し、又梅花宴・上巳・七夕の宴などを催して、群臣に詩賦を上らしめられたのは、當時の詩文の隆盛を語る

ものである。當時詩賦が盛に行はれた事は、神龜三年九月に祥瑞があつて、朝野の道俗に詩を作らしめられた時、詩を上つた者が百十二人に及んだといふ一事を以つて推す事が出來る。（續日本紀參照）聖武天皇の御代には、長屋王が新羅の使節を迎へて宴を張り、互に詩を賦した事があるが、淳仁天皇の御代にも、三韓の使節を迎へて盛に詩を詠じたのであつて、貴族の讌集賦詩の風尙は此の頃から盛に起つたものと思はれる。壬申の大亂以後奈良朝に至るまでの詩にして、幸に散逸を免れたものは、下に述べる『懷風藻』を始めとして、少數ではあるが、『萬葉集』の歌序や、『經國集』（平安朝時代の天長四年に成る。）や『釋日本紀』などに散見して居る。岡田正之博士著『近江奈良朝の漢文學』によれば、右に擧げた諸書に見えて居る近江奈良朝の詩人は、總數七十五人であつて、現存する詩の總數は百四十篇である。而して此の中二十四人は『萬葉集』中に其の歌が見えてゐて、詩と歌とを兼ねた人々であるから、當時詩文が和歌の發達に及ぼした影響は尠くないであらうと思はれる。奈良朝の頃には六朝の四六騈儷體を摸倣して、對偶麗句を連ねた漢文も亦盛に行はれたのであるが、其の多くは湮滅して今は僅かに『古事記』の序文、『懷風藻』の序文竝に詩家傳、『常陸風土記』の文章、『萬葉集』の中の和歌の歌序（特に卷五と卷十七以下の四卷に多い）などに、其の面目を傳へるのみである。

奈良朝の詩集には家集と撰集とがあつた。『萬葉集』以前に、既に家集や總集の如きものがあつた事は、既に述べた通りであるが、詩人の間にも此等に傚つて、早くから一家の集を編むことが行はれたやうである。其の最古のものは藤原宇合の集であつて、『尊卑分脈』（洞院公定の撰）の宇合傳の中に、「有レ集二

巻」とあるのが是である。（近江奈良朝の漢文學二四三頁參照）次いで石上乙麻呂は、土佐國に配流の身となつてゐた頃の詩を收めて、『銜悲藻』二巻を作つた事が、『懐風藻』の石上乙麻呂傳に見えて居る。併し惜しいことに此等は共に散逸して後世に傳はらなかつた。かくて奈良朝の詩集にして現存するものは只『懐風藻』一巻があるだけである。

『懐風藻』の撰者は詳かでない。江戸時代の儒者の林春齋（羅山の子）は『本朝一人一首』に、淡海三船の撰であるとして居るが、其の據る所を明示してゐない。平出鏗二郎氏は『鏗痴集』の中に、春齋の説を排けて、集の末尾にある亡名氏の歎老一首の作者こそ撰者であると言ひ、又此の頃武田祐吉氏は其の著『上代國文學史』に、其の亡名氏は當時の有名な漢學者の葛井廣成であらうと説かれたが、何れも根據が薄弱である。此の集の撰定の動機題號の由來及び成立年代は、巻頭に記された序文に「余撰二此文一意者、爲レ將レ不レ忘二先哲遺風一、故以二懐風一名レ之云爾。于レ時天平勝寶三年、歳在二辛卯一冬十一月也。」とあるので明かである。天平勝寶三年は『萬葉集』中の最も年代の新しい歌が詠まれた、天平寶字三年より八年前に相當する。『懐風藻』は大友皇子（弘文天皇）を始め、作者六十四人の詩百二十篇を收めたもので、時代は前後百年許りに亙つて居るが、近江朝の詩は大友皇子の御作二篇があるだけで、其の他は飛鳥淨御原宮時代以降七十餘年の詩である。詩は作者別に掲げ、作者は年代順に序列してあつて、作者の一部分には漢文の小傳が添へてある。作者は文武・弘文・孝謙の三帝、川島・大津の二皇子以下諸王諸臣僧侶等であつて、未だ女流詩人の名はなく、又庶民の作も見當らない。即ち當時の詩文は

貴族の專有であつたのである。

集中の詩風は六朝の古詩を摸倣したもので、未だ唐詩の影響は見當らない。岡田博士は當代の詩風の特徴として、(一)五言の詩の多きこと、(二)八句の詩の多きこと、(三)對句から成れること、(四)平仄の諧はざること、(五)慣用の押韻あることの五項を擧げて、六朝の詩風を承けた事と、詩學の未だ幼稚であつた事に注意して居られる。近江奈良朝の漢文學參照 更に詩の題材を見ると、侍宴從駕の作が最も多く、全數の約四分の一を占め、讌集遊覽の詩がそれに次いで多い。宴席の詩の中には、上巳・曲水・七夕・釋奠などのが多く、遊覽の作の中には、山齋や臨池の詠が多いのであつて、此等は當時の詩賦が、主として貴族交遊の具に供せられた事を示すものである。而して侍宴應詔の詩には、論語の「知者樂レ水、仁者樂レ山」の故事によつて帝德を頌し奉つたものが多く、吉野離宮に陪從して詠じた作には、仁山智水の外に、姑射・桃源・蓬瀛の如き故事によつて、吉野を仙境に擬して居るのが多いのは、いづれも支那思想の摸倣である。其の他遊宴や述懷の詩に、塵俗を遁れて山水を樂しみ、罇前に陶醉して憂を忘れる事を詠じ、又仙人を懷ひ、竹林の七賢を慕ふやうな作も少くないのであつて、老莊の神仙思想や虛無淡恬の思想を摸倣して居るのも、注意すべき事である。次に敍景詩を見ると、其の素材は略ぼ一定してゐて、天象では月星雲などを詠じ、植物では竹梅松柳菊槿を、動物では鶯雁猿鹿蝶蟬などを詠んで居り、また景物の配合も支那の詩賦の約束に從つて、梅花に嬌鶯を、階前に桃花を、塘上に柳條を、巖上に孤松を詠じて居る。かくの如く當時の詩は六朝詩賦を摸倣して、而も上古の邦人の作とし

ては、極めて勝れた伎倆を示して居るのである。集中の優秀な詩人は、大友皇子・大津皇子・藤原不比等・藤原宇合・石上乙麻呂等である。集中に洩れた淡海三船・石上宅嗣等も亦、奈良朝有數の詩人であるが、此等の作品は平安時代初期の『經國集』に見えて居る。

五言侍レ宴一絶　　大友皇子

皇明光二日月一　帝德載二天地一　三才竝泰昌　萬國表二臣義一

五言臨レ終一絶　　大津皇子

金烏臨二西舍一　鼓聲催二短命一　泉路無二賓主一　此夕離レ家向

五言侍レ宴一首　　山前王

至德洽二乾坤一　淸化朗二嘉辰一　四海既無爲　九域正淸淳　元首壽二千歲一　股肱頌二三春一　優優沐レ恩者
誰不レ仰二芳塵一

五言遊二吉野山一　　丹墀眞人廣成

山水隨レ臨賞　巖谿逐レ望新　朝看度レ峰翼　夕翫躍レ潭鱗　放曠多二幽趣一　超然少二俗塵一　栖二心佳野域一
尋問二美稻津一　（以上懷風藻）

上宮聖德法王帝說

奈良朝の漢文を見るべき典籍には、『上宮聖德法王帝說』や『唐大和上東征傳』などがある。『上宮聖德法王帝說』（一卷）は、聖德太子の御一代の傳記である。太子の御傳記には、其の薨後間もなく書かれたと言はれる『上宮記』があつたのであるが、今は『釋日本紀』に引用せられた逸文を存するばかりである

から、此の書は現存する最古の太子傳である。撰者は詳かでないが、書中に法隆寺の佛像や繡帳の銘文を引用して居る事、及び後世に傳はつた諸本が、何れも法隆寺の傳本から出て居ることなどに據つて、法隆寺の僧侶の手に成つたものであらうと言はれて居る。文章は素朴な漢文であり、書中には推古朝の遺文・和歌・古傳などがあるのであつて、文學史上の貴重な一資料である。京都の知恩院に藏せられて居る古寫本(國寶)は、平安時代中期の筆寫であつて、先年古典保存會から複製本が刊行せられた。

唐大和上東征傳

次に『唐大和上東征傳』(一卷)は、鑑眞の出家の初から修學時代・教化時代を經て、入唐僧榮叡・普照等の懇請を容れて、萬難を凌いで渡來し、佛教界の爲に多大の功を遺して、七十六歲で示寂するまでの事蹟を詳述した一代記である。卷頭に「眞人元開撰」とあるのによれば、有名な漢學者淡海三船(法號元開)が撰述したのである。成立年代は卷末の記載によれば、光仁天皇の寶龜十年二月八日である。此の書は佛教史や海外交通史の研究資料であるは勿論、文章もすぐれて居り、なほ卷末には撰者以下、唐僧思託・石上宅嗣・藤原刷雄・唐使高鶴林等の詩七首、及び詩序を載せて居るのであつて、日本漢文學史上に於ても貴重な資料である。現存する古寫本には、京都東寺觀智院所藏本がある。院政時代の寫本であつて、是も最近古典保存會で複製せられた。

二　佛教說話

日本靈異記

奈良朝は佛教が極めて盛に行はれた時であるから、當時既に民間に佛教の教訓を說く爲の說話が發

生した。當時の佛教關係の說話を集めたものには『日本靈異記』三卷がある。正しくは『日本國現報善惡靈異記』といふ。撰者は藥師寺の僧景戒であつて、嵯峨天皇の弘仁年間に撰錄したものである。近頃板橋倫行氏は本文を考證して、弘仁十三年までに業を了へたものである事を發表せられた。（「國語と國文學」昭和五年二月號）所收の說話の時代は、雄略天皇朝から弘仁年間に及んで居るのであるが、其の大部分は奈良朝のものであり、又地域は畿内地方を主として、東國中國四國に及んで居る。各卷に序文があるが、上卷の序に、因果の理を示して善道を修せしめるために、支那の『冥報記』や『般若驗記』に倣つて、我が國の奇事を集めた事を述べ、なほ其の文末に「祈覽二奇記一者却レ邪入レ正、諸惡莫レ作、諸善奉行。」と記して居るのを見て、撰述の由來は明瞭である。採錄した說話の數は百十二話であつて、長短樣々である。小子部栖輕が雷を捕へた話や、狐を妻にして子をまうけた話のやうな、奇事異聞もあるが、大部分は高僧の奇譚や、觀音・藥師・法華經などに關する靈驗譚、若しくは恐ろしい地獄の話などであつて、因果應報の理を說く事を主眼として居る。而して話の末尾には「經云、欲レ知二過去因一、見二其現在果一、欲レ知二未來報一、見二其現在業一者、其斯謂之矣。」と言ひ、或は「因果之理是不レ信哉」と記して、必ず教訓の一言を添へて居るのは、後の『今昔物語集』以下の教訓的佛教說話集の濫觴として注意すべきことである。此等の佛教說話は、奈良朝頃の社會生活殊に宗教生活を窺ふべき好資料であるが、なほ國文學史上に於ては、當時の伽藍緣起と共に、我が文學に新しい要素を加へた點に於て重要なものである。

「日本靈異記」の刊本には延寶版があるが誤脫が極めて多い。狩谷望之（棭齋）の「校本日本靈異記」三卷は、高野山金剛三昧院藏本三卷（建保二年の寫本）と、尾張國大須眞福寺本（中下二卷）の摸本とに據つて校訂したもので、「群書類從」に收められ、又近頃「日本古典全集」に望之の「日本靈異記攷證」三卷と共に收められて廣く世に行はれて居る。「日本靈異記」の古寫本で現存するものは甚だ少い。望之が校定に用ひた眞福寺本は、現存して國寶に指定せられて居るが、高野本の所在は不明であつて、其の轉寫本が上賀茂神社の三手文庫其の他に藏せられて居る。此の外此等と同じく鎌倉時代の書寫に係る古寫本が、前田侯爵家に藏せられて居る。（圖版參照）此の書は下卷のみの殘缺本であるが、もと仁和寺心蓮院の藏本で、卷末に「嘉禎二年丙申三月三日書寫畢　右筆禪惠」とある。原作の面目を保存する點があるばかりでなく、後人が加へた訓釋があり、又流布本に無い逸文を含み、誤脫を正し得るものが多いのであつて、靈異記の研究上貴重な新資料である。

前田侯爵家本日本靈異記

（尊經閣叢刊より）

『日本靈異記』の文章は漢文體であつて、中に俚謠九首を傳へて居る。左に揭げる一節の中にも一首を含んで居る。

狐爲レ妻令レ生レ子緣第二

昔欽明天皇（是磯城島金刺宮食レ國天皇天國押開廣庭命也）御世、三野國大野郡人、應レ爲レ妻覓ニ好孃一、乘レ路而行時、曠野中遇ニ於姝女一。其女媚レ牡馴睇之。牡睇レ之言、何行稚孃之。答言、將レ覓ニ能緣一而行女也。牡心語言、成レ妻耶。女答言聽。即將ニ於家一交通相住、比頃懷任生ニ一男子一。時其家犬十二月十五日生レ子。彼犬之子每向ニ家室一而、期尅睚眥嘷吠。家室脅惶告ニ家長一言、此犬打殺。雖レ然患告而猶不殺。於ニ二月三月之頃一、年米舂時、其家室於ニ稻舂女等一、將レ宛ニ間食一、入ニ於碓屋一。即彼犬子將レ咋ニ家室一、而追レ犬即驚誄、恐成ニ野干一登ニ籬上一而居。家長見言、汝與レ我之中子相生、故吾不レ忘レ汝、每來相寐。故隨ニ夫語一而來寐、故名爲ニ岐都禰一也。時彼妻著ニ紅染裳一（今之桃花裳也）而窕裳襴引逝也。夫視ニ去容一戀歌曰、古非皮未奈（コヒハミナ）、和我尸爾於知奴（ワガヘニオチヌ）、多万可妓留（タマカギル）、皮呂可爾美緣弖（ハロカニミエテ）、伊彌師古由惠邇也（イニシコユヱニ）。故其令ニ相生一子、名號ニ岐都禰一、亦其子姓負ニ狐直一也。其人强力多有走疾如ニ鳥飛一矣。三野國狐直等根本是也。（上卷第二話）

第二篇　平安時代前期

第一章　時代の概觀

時代の區分　平安時代は桓武天皇の御代（天應元年御即位。延暦十三年平安奠都。）以後、源頼朝が鎌倉に幕府を開くまでの、前後凡そ四百年間であつて、一に中古時代といはれて居る。平安時代の國文學は、弘仁期を中心とする詩文隆盛期に始まり、延喜天暦時代の和歌勃興期を經て、一條天皇から後三條天皇に至る間の、物語及び日記文學の全盛期となり、最後の院政時代には、物語日記が衰退したのに反して、和歌は新舊二派が對立して、極めて活氣を呈したのである。從つて平安時代は左の四期に區分する事が出來る。

第一期　詩文隆盛期（朝權盛行期）自桓武天皇至宇多天皇

第二期　和歌興隆期（藤原氏擡頭期）自醍醐天皇至花山天皇

第三期　物語全盛期（藤原氏極盛期）自一條天皇至後三條天皇

第四期　和歌革新期（院政時代）自白河天皇至安德天皇

而して此の間の文學は、殆ど貴族の專有であつたから、其の盛衰は貴族を代表する藤原氏と運命を共にしたのである。即ち御堂關白道長の時代（自一條天皇至後一條天皇）は平安文學の全盛期であつて、其の前後は上昇

下降の途上にあつたのである。從つて本書に於ては、右に掲げた四期の二期を併せた二百年間を一期として、前期後期に區分する事にした。卽ち前期は平安文學が漸次發達向上した時代であり、後期は全盛期から凋落の途を辿つた時代である。以下平安時代前期の概觀を述べよう。

平安京

桓武天皇は奈良の都の積弊を一掃し、人心を新たにする爲に、和氣清麻呂等の奏請を容れて、延曆十三年に今の京都に遷都遊ばされた。當時これを平安京と言つた。平安京は三面に翠巒を繞らし、東に鴨川が流れ、西に桂川の清流があり、南方は遠く平野が開けて巨椋池に臨み、所謂山河襟帶自然に城をなすものであつて、天子南面の相に適つた所である。しかのみならず東山三十六峰を始めとして、北方には比叡愛宕の雙峰が對峙し、遠近に眺められる山の姿には優婉の趣があり、殊に幹の色の美しい赤松の間に、花紅葉を織りまぜる春秋の美景は繪よりも美しく、且つ此の地特有の霞と霧は、朝に夕に異なつた色調を呈するのであつて、四季折々の變化の妙に富む事は、他の地に求め難い特色である。桓武天皇が特に此の地に遷都せられた理由としては、要害の地である事、交通の便利である事などを擧げ得るのであるが、山河の景色の美しい事も、重要な理由であつたと思はれる。宮城の工事は、遷都の後延曆二十四年に、造宮職が廢せられるまで繼續せられたのであつて、其の規模の雄大結構の壯麗であつた事は、今更說明するまでもない。平安京の都制は、大體に於て平城京の舊制を踏襲して、更に擴大せられたのであつて、宮殿城門諸官署條坊などの名稱には、和樣のものもあつたが、大部分は唐の例に倣つたのである。

外來文化の影響

桓武天皇から仁明天皇に至る五代七十餘年間は、奈良朝に引續いて遣唐使の派遣があり、又渤海との交通も頻繁に行はれて、海外の文明が盛に傳來した時代であつて、平安時代特有の貴族的文化の基礎は、此の間に築かれた。遣唐使の派遣は桓武天皇の延曆二十三年と、仁明天皇の承和五年の二回に過ぎなかつたが、多數の留學生學問僧を伴はしめられた事は、前代と同じであつて、唐の文化は盛に攝取せられた。當時遣唐使に從はしめられた人々の中には、學者高僧の外に、醫師陰陽師樂師畫師などがあつたのであつて、彼等が學んだ文明は多方面に亙つたのである。試みに著しい例を擧げて見れば、最澄・圓仁等は天台を學び、空海・圓行等は密教を傳へ、且つ歸朝の折には經論章疏等數百部を將來し、又佛像佛具を携へ歸つた。又橘逸勢は長安の學者を歷訪して深く學術を究め、菅原梶成は醫術を學んで、歸朝の後は鍼博士となり、春苑玉成は陰陽道を究め、歸國の後之を陰陽寮の諸生に傳へた。其の他樂師畫工等が唐代の藝術を傳へた事は言ふまでもない。平安時代初期に於ける大陸文明の輸入の狀況は右の如くであつたから、當時の

官幣大社平安神宮
（平安京の大極殿を摸す）

制度學問宗教文藝を始め衣食住が、悉く唐風の摸倣であつた事も亦怪しむに足らぬ事である。然るに仁明天皇の頃から、唐には內亂が續き、國內の統一は破れ、さしもに盛であつた文化も著しく衰退したので、遂に宇多天皇の御代に至つて、菅原道眞の奏言に基づいて、遣唐使を廢する事になつた。次いで唐は醍醐天皇の御代に滅び、屢朝貢した渤海も亦間もなく滅亡したので、大陸との公の交通は玆に全く絕えてしまつた。是より先、爲政者竝に學者名僧等の間には、既に外來文化心醉の餘弊を覺り、民心を一新して固有文化を建設しようとしたのであるが、海外との交通が絕えて後は、一般貴族社會にも漸く自覺が起り、是より平安時代特有の新日本文化が、年を逐うて發達するに至つたのである。

新佛教の興隆

平安時代の文化は漢學と佛教を根柢として發達したのである。漢學に就いては後に述べるとして、先づ佛教に就いて略述しよう。奈良朝に於ける文化の發達は、佛教が中心であつた事は、既に述べた通りであるが、其の末期に於ては、僧侶の中に朝廷の信任を恃んで政治に參與する者があつて、天下を騷がしたのである。玄昉・道鏡の如きは其の著しい例である。平安時代の佛教も亦、宮廷を背景として繁榮したのであるけれども、桓武天皇以來歷代の天皇は、前代に於ける僧侶の腐敗に鑑みて、政治に容喙する事を禁じ、只僧位僧官を授けてこれを優遇すると共に、一方に於ては高僧を勵まして佛教界の革新の爲に努力せしめられたのである。而して平安時代の佛教は、其の劈頭に現れた最澄（傳教大師）と空海（弘法大師）が、新たに支那から傳へた天台と眞言によつて代表せられる。南都に榮えた舊佛教は、外來の儘であつて、其の隆盛は形式的外面的であつたが、天台眞言の二宗は神道と融合して日

本的新佛教となり、又儒教陰陽道と提挈して、上下一般の信仰を受けたのである。かくて當代の佛教は民心にも深く浸潤したのであるが、殊に人生の無常迅速を歎ずる悲觀思想や、現世の不幸を宿世に歸する宿命因果說の如きは、文學者の人生觀に著しく深みを加へたのである。併し平安時代前期に於ける一般の信仰はなほ皮相的であつて、未だ深刻なる厭世出離の觀念を抱く者もなく、又未來の法悅を欣求する者もなかつた。從つて佛教界に於ても、高僧智識は別として、其の末流に屬する者は、俗世の風潮に押流されて、ひたすら現世利益を說き、甚しきは權門に阿附して、名利の爲に奔走する者が尠くなかつた。天台眞言二宗は元來經典の研究によつて、深遠なる佛理を探究する事を本義とするものであるが、自家の弘通繁榮を圖る爲には、衆俗の要求に應ずる必要があつたのであつて、時代を降るにつれて、專ら祈禱咒法の如き教相の一面を重んずるやうになり、名僧智識も主として息災延命二世安樂の咒驗によつて、其の名を知られるやうになつた。かくて前期の末になると、說教供養は社交の儀式となり、祈禱修法は專ら醫療の代理をつとめ、堂塔の建立や寺領の寄進は虛榮の爲に流行し、佛畫寫經なども美的玩弄物と殆ど擇ぶ所がなくなつた。此の傾向は後期に入つていよいよ甚しくなつたのである。

佛教と共に貴族社會の思想竝に生活に、最も大なる影響を與へたのは漢學である。桓武天皇は平安奠都の後、文教に御心を注がせられて、先づ大學の學生の定員を增加し、勸學田を增置し、又盛に人才を登用せられたのであるが、殊に其の御子の平城嵯峨淳和三帝は詩文を奬勵し給ひ、且つ文藻に天

來の叡才を揮はせられたから、漢學は忽ち興隆して、弘仁時代の詩文隆盛期を見るに至つた。當時は大學の外に、名門が其の子弟を教育する機關として、競うて私學を創設した。和氣氏の弘文院、橘氏の學館院、王氏の淳和院、在原氏の奬學院、藤原氏の勸學院などは其の主なるものであるが、中にも勸學院は、藤原氏が隆盛に赴くにつれて最も盛大となり、「勸學院の雀よく蒙求を囀る」とさへ言はれた。かくて列聖の學事御奬勵は、私學の興隆と相俟つて、盛に人材を輩出し、漢學は前後に比類のない盛況を呈した。當時の漢學の隆盛は、『弘仁格式』『貞觀格式』『延喜格式』を始めとして、『新撰姓氏錄』、『令義解』『祕府略』の如き實務に關する浩瀚な書物が次々に撰定せられ、また政務に必要な國史が歷朝に亙つて撰上せられた事を見ても、大體を想像する事が出來るが、當時の漢學を代表するものは寧ろ詩文である。此の頃特に詩文を重んじた事は、嵯峨淳和兩帝の御代に、『凌雲集』『文華秀麗集』『經國集』の如き勅撰集が撰せられ、詩客文人の家集や、詩文評論の書などが相踵いで現れた事を見ても明かである。

弘仁前後の貴族の生活

平安時代初期に於ける漢學は、右の如く隆昌であつたから、當時制度や公事を始めとして、貴族の日常生活に至るまで、悉く唐風を模範としたのは當然のことである。『日本紀略』の弘仁四年九月十四日の條に、「宴皇太弟(淳和天皇)於清涼殿。具物用漢法」と見え、又同書弘仁九年三月二十三日の條には、「詔曰云々。其朝會之禮、及常所服者、又卑逢貴而跪等、不論男女、改依唐法。」と見えて居り、なほ『續日本後紀』の仁明天皇の承和九年の條下には、「九年有詔書、天下儀式男女衣服、皆依唐法、五

位已上位記、改從漢樣。」とある。此等によつて何事も唐樣を摸倣した世相の一般を推して知ること
が出來るのであるが、更に『日本後紀』を繙いて當時の行幸肆宴の有樣を見ると、畿内各地の野に遊獵

神泉苑

せられた事や、神泉苑其の他の離宮に於て、群臣を集めて宴遊せられた事が、一年に數回見えて居る。遊獵は前代以來宮廷貴紳の間に流行した鷹狩であつて、當時これを野行幸といつた。肆宴の多くは花の宴・曲水宴・七夕宴・重陽宴などであつて、樂を奏し、詩を賦し、騎射を觀、魚を釣り、終つて群臣に酒祿を賜ふのが恒例であつて、遊獵と共に支那の王侯貴族の風俗に傚つて行はれたものである。

山紫水明の平安京は周圍至る所に好風景がある。從つて朝廷に於ては天皇の出遊に供へる爲に諸所に離宮を營み、又皇族以下貴族もこれに傚つて、近郊の勝地に山莊を構へる事が流行した。御苑で最も名高いのは、周文王の靈囿に擬して造らしめられたと稱せられる神泉苑であつて、桓武天皇以後歴代の行幸は年々數回に及んで居る。これに次いで名高かつたのは嵯峨帝の南池院・嵯峨山院、淳和帝の雲林院などである。

貴族が好風景の地を求めて別業を營む事は、奈良朝以來の流行であるが、平安奠都の後は益盛に行はれた。其の著名なものを擧げれば、源融（嵯峨天皇の皇子）は嵯峨に棲霞觀を造り、また六條河原に河原院を營んで豪奢を極め、皇女有智子内親王も嵯峨に山莊を設けて、文人を集めて詩賦を唱和せしめられた。其の他藤原繼繩の葛野別業及び交野山莊、藤原冬嗣の深草の閑院、淸原夏野の雙岡山莊、賀陽豐年の宇治別業、良峰安世の花山莊などは、何れも林泉の美を蒐めたもので、四時に交友を集めて詩を唱和し管絃を奏して、時の移るのを知らなかつたのである。かくて四時の出遊が盛に流行すると共に、唐風の遊戲卽ち雙六・圍碁・騎射・打毬などが流行し、特に婦女の間には鬪草・鞦韆などが行はれた。鬪草は百花の美を競ふ優美な遊であつて（一七二頁參照）鞦韆と共にもと支那の婦人の遊戲である。當時淑女が鞦韆に乘つて嬉戲した有樣は、『經國集』所載の嵯峨天皇御製の句に

長繩高懸二芳枝一　窈窕翩翩仙客姿　玉手爭來互相推　纖腰結束如二鳥飛一

とあるのを見て知る事が出來る。

藤原氏の擡頭

桓武天皇から仁明天皇に至るまでの間は、大體に於て支那文明を摸倣した時代であるが、之を基礎として平安時代獨得の文化が發達したのは、延喜天曆の治世から關白道長の時代に至るまでの間である。而して文德淸和兩帝の頃から、宇多天皇の朝に至るまで凡そ五十年間は、其の過渡期である。文德天皇の御生母は冬嗣の女順子であつて、冬嗣の子良房は其の女を納れて女御とし、自らは人臣にして始めて太政大臣に任ぜられ、次いで良房の女の生み奉つた淸和天皇が卽位せられた時には、更に外

祖父として攝政となつた。是より藤原氏は代々攝政關白となり、頻りに他氏を排斥して、一門の權勢を張つたのであるが、藤原氏と其の盛衰を共にした貴族的文化も、亦此の頃から漸く黃金時代に入つたのである。

延喜天曆前後の貴族

當時は天下泰平であつて、政務は自ら閑散であり、且つ貴族は財力と權勢とを掌握して、生活に餘裕があつたから、平安京裏の風俗は益華美に流れ、宮廷の公事節會を始め、上流社會の日常生活は、擧げて悉く藝術化するに至つた。詩文が衰へて和歌和文が勃興したのも此の頃であり、建築造園服裝等が唐風の摸倣から脫して、日本風の優美典雅なものになつたのも、此の時代からである。卽ち貴族の邸宅は寢殿造となり、林泉前栽の風致は建築と巧みに調和して、四季の眺に風情を添へ、男女の服裝は優美絢爛を極め、室內の裝飾調度乘物も、亦それに應じて華美になつたのであるが、更に日常生活は花晨月夕の宴に、夜を徹して詩歌を詠じ、管絃を弄び、又感情の動くにまかせて自由な戀愛に陶醉したのである。かくて朝廷は男女の歡樂場となり、大宮人は情趣本位の節會供養、さては遊宴の外に爲す事もなかつたから、儀式典禮は年々に增加し、政治の實績の擧らなかつた事は、延喜の頃の三善淸行、天曆年中の菅原文時等が上つた意見封事を見て、一般を想像する事が出來る。

貴族社會の反面

延喜天曆以後に於ける平安京裏の世相は、右の如く華やかであつたが、飜つて上流生活の裏面を見ると、彼等は現世悅樂の生活を營む爲には、自己の地位の向上を熱望し、一家一門の榮達を希ふ欲求に驅られて、ひたすら政權の掌握に苦心慘澹し、其の當然の歸趨として、他氏排斥の見苦しい暗鬪を

繰返し、さては同族相爭ふ醜態を演じたのである。然のみならず、權門勢家は競うて其の女を宮中に納れ、其の織手に縋つて外戚の威を振ひ、自家の榮譽を得ようとしたから、後宮に於ては皇后中宮の軋轢を生じ、家庭にあつては嫡室側妻の反目があつて、嫉妬猜疑讒誣は公然行はれるやうになつた。かくて表面極めて華やかであつた宮廷貴紳の生活も、其の裏面には常に黯澹たる雲がたなびいて居たのである。

平安前期の國文學

平安時代前期の世相は大體述べ終つたから、最後に此の時代の國文學發達の概要を記して置く。平安時代前期の二百年間は既に述べたやうに、弘仁前後の漢詩漢文の全盛期と、延喜天暦頃の和歌の隆盛期とに分たれる。弘仁期に於て貴族は專ら漢文學を修め、詩賦に全力を擧げたのであるから、當時の文學は詩の勅撰集によつて代表せられるのである。弘仁期の詩人は專ら唐代詩賦の風を摸倣してゐたのであるが、時代を經るに從つて、漸く平安貴族特有の優美纖細な感情を發揮して、日本的詩文を作るやうになつた。

和歌の發達

其の後貞觀元慶の頃には詩文は漸く衰へ、和歌和文が之に代つて擡頭したのであつて、此の頃の漢學者には詩文と和歌を兼ねる者が多かつた。此の過渡期に於て、和歌は漢文學の思想を取入れ、又其の技巧の影響を受けて、著しい發達を遂げたのであつて、從來の素朴純眞な感情を表現した和歌は、情趣本位の思想感情を、洗煉せられた形式格調で歌ふやうになつた。假名字體が發達し和文が勃興したのも此の頃からであつて、後世のやうな優麗な文體は未だ見ることが出來なかつたけれども、和歌の詞書などに用ひられて、やがて興隆すべき物語文の素地を養つてゐたのである。

和歌は貞觀の頃、在原業平小野小町の如き勝れた歌人が輩出して以來、漢詩と對峙して行はれ、仁和寛平以來、內裏を始め貴族の間に、歌合を行ふ事が流行した。是より和歌は益興隆し、すぐれた歌人が續々現れたのであるが、延喜五年には、弘仁期の詩の勅撰集に倣つて、始めて『古今和歌集』が撰ばれた。延喜に次ぐ天暦の頃は、漢文學が再び復興した時であつて、詩文の大家が輩出したが、和歌和文は更に著しい發展を遂げたのである。卽ち和歌は『古今集』に次いで『後撰和歌集』が撰ばれ、歌合も亦益盛に行はれたのであるが、殊に注意すべきは物語が著しい發展を遂げた事である。

物語の發達は、假名文の發達に俟つ所が多いことは言ふまでもない。貞觀元慶の頃には、假名文が發達して、和歌を中心興味とする短篇物語集ともいふべき『伊勢物語』が現れたのであるが、天暦の頃には其の系統を引いて種々の說話を集めた『大和物語』が作られた。『伊勢物語』と『大和物語』は共に所謂歌物語であつて、『萬葉集』卷十六の傳說歌から系統を引いて居るのであるが、これとは別に、上代の神婚說話の系統を引き、支那の神仙思想の影響を受けて、日本支那印度の說話から取材した『竹取物語』の如き傳奇的物語が現れた。『竹取物語』は『古今集』以前に作られたのであるが、圓融花山兩帝の御代になると、『竹取物語』の系統を引きながら更に寫實的傾向を帶びた、稍長篇の『宇津保物語』や『落窪物語』などが創作せられた。當時作られた物語は、此の外になほ多數あつたのであるが、散逸して後世に傳はらなかつたのであつて、次の時代になつて、『源氏物語』の如き大作が現れたのも當然の事である。平安時代に廣義の物語と考へられたものに、和文の日記がある。これは主として女子の

手に成つたのであるが、其の魁となつたのは、延長の頃紀貫之が女性の作に假託して書いた『土佐日記』である。これは歌物語の傾向を帶びた紀行であるが、これに次いで圓融天皇の頃に、藤原道綱の母が書いた『蜻蛉日記』は、自己の感情生活を記したものであつて、後期になつて次々に現れる女流日記の先驅となつて居る。要するに平安時代前期の國文學は、和歌を中心として發展したのであつて、物語も日記も和歌の趣味を基調としてゐないものはないのである。而して前期の後半に於ては、和歌中心の歌物語と、說話から發達した傳奇的物語とが合流して、短篇の物語から長篇の物語に向つて進展したのである。

第二章　前期の漢文學

一　弘仁期の漢文學

唐代文學の影響

平安時代初期の弘仁天長の頃は、漢文學の隆盛期であつて、江戸時代の儒學隆盛期と對峙して、我が文學史上の異觀である。而して平安初期の漢文學は、直接唐の文學の刺戟を受けて興隆したのである。是より先奈良朝は、支那の盛唐時代に相當し、玄宗の開元・天寶の頃は、唐代三百年中でも最も詩文の盛な時代であつて、李白・杜甫の如き詩聖を始めとして、王昌齡・高適・李嶠等の大家が一時に輩出した。次いで中唐の末になつて、代宗の太曆頃は奈良朝の末葉稱德天皇の御代に當るのであるが、其

の頃の詩文は盛唐期には及ばないけれども、なほ五言詩に巧妙な韓翃・錢起・盧綸・司空曙等の所謂太曆の十才子があり、續いて憲宗の元和、穆宗の長慶頃は、卽ち我が弘仁時代に當り、白居易・韓愈の全盛時代である。當時白樂天が小野篁と詩によつて相識り、遭逢を切望したと傳へられてゐる一事によつても、彼我の詩文界に密接な交渉のあつた事を察する事が出來る。

平安時代初期に、我が國の文人が愛誦した支那の詩文集は、枚擧に遑のない程であるが、其の著しいものを擧げれば、

文選　遊仙窟　蒙求　彫玉集　文館詞林　河嶽英靈集　王勃集　王維集　李嶠百詠

溫庭筠集　李白集　杜工部集　高適集　白氏長慶集（白氏文集）　元氏長慶集　李長吉集

文心彫龍　劉希夷集　王昌齡集

此等の中『文選』以下の四部は、既に奈良朝の頃傳はつたのであるが、其の他は此の頃前後して將來されたのである。就中當代の詩人が寶典として最も尊重したのは『文選』と『白氏文集』とである。『文選』（六十卷）は、周秦以來梁に至る詩文を類聚したもので、我が國に於ては支那の科擧の制に倣つて、之を登用試驗に課した爲に、特に廣く讀まれたのである。弘仁中藤原常嗣・同諸成は大學にあつて之を諳誦し、藤原衞と共に學中の三傑と稱せられたといふ。『白氏文集』（七十卷）は白樂天の詩文集であつて、其の流麗な作風が、特に平安人士の趣味に投合する所があつた爲に、盛にもてはやされたのである。『文德實錄』（仁壽元年九月の條）によれば、藤原岳守が承和五年大宰小貳であつた時、唐船の貨物を檢校して

元稹・白居易の二集を得て獻上したので、天皇は從五位上を授けられた。元稹の集は『元氏長慶集』であり、白居易の集は卽ち『白氏文集』である。『文選』や『白氏文集』に次いで『遊仙窟』（唐の張文成の作）も、其の優艶な文辭が一般に喜ばれたのであり、其の他の詩書が當時の詩文に多大の影響を與へた事は勿論である。

平安時代初期の我が詩文界が、唐代文藝の大なる感化を受けた事は右の如くであるが、當時上には天資詩文に長ぜられた平城嵯峨淳和三帝があつて、四時の行幸遊宴に群臣を召して詩賦を唱和せしめられ、下も自ら其の風に化せられて、詞藻に專念する者が多く、遂に詩賦は明經紀傳を壓して、獨り其の盛觀を擅にするに至つたのである。此の時奈良朝の『懷風藻』の後を續いで、詩の勅撰集が次々に撰ばれたのは當然である。

凌雲新集

詩の勅撰集で最初に現れたのは、嵯峨天皇の弘仁五六年の頃に成つた『凌雲新集』一卷である。一に『凌雲集』といふ。卷頭に揭げた小野岑守の序に據れば、嵯峨天皇の勅を奉じて、岑守が菅原清公・勇山文繼と再三討議し、なほ當時の大家賀陽（かや）豐年の閲を經て成つたもので、桓武天皇の延曆元年から弘仁五年に至るまでの作者二十三人、作詩九十首を撰んだのである。（現存の集には二十四人九十一首ある。）詩は太上天皇（平城天皇）今上天皇（嵯峨天皇）皇太弟（淳和天皇）の御製令製を初に置き、藤原冬嗣以下無位の巨勢志貴人に至るまでを位階順に配列してある。詩の最も多いのは嵯峨天皇の二十二首で、次は賀陽豐年・小野岑守の各十三首、皇太弟の五首、菅原清公の四首（これで全卷の半ば以上となる）であつて、其の他の諸家のは僅かに一二首づつである。而

平城帝
太上天皇　御製二首
詠桃花一首
春花百種何為艶灼々桃花最可憐氣則巖邊
懸割冠味惟甘矣可求仙一香同發薰朝吹千
笑共開映暮煙願以成蹊枝葉下終天長樹玉
階邊
賦櫻花
昔在幽巖下光華照四方忽逢攀折客含笑宜
三陽送氣時多少衆陽後短長如何此一物擅
美九春場

凌　雲　集　(九條公爵家舊藏)

して撰者の一人である文繼の作は一首も見えてゐない。

『凌雲集』が成つてから數年を經て、弘仁八九年の頃に撰ばれたのは『文華秀麗集』(三卷)である。序文によれば、藤原冬嗣が嵯峨天皇の勅を承けて、仲雄王・菅原清公・勇山文繼・滋野貞主・桑原腹赤等とともに撰んだもので、『凌雲集』に漏れた作品を採る方針の下に、作者二十六人(外に嵯峨淳和兩帝がある)作詩百四十八首(現存百四十三首)を收めて居る。詩の最も多いのはやはり嵯峨天皇の三十四首であつて、中に姬大伴氏の作一篇が異彩を放つて居る。閨秀詩家で文獻に見えたのは、此の大伴氏の女を以て嚆矢とする。此の撰集は遊覽・宴集・餞別・贈答・詠史・述懷・艷情・樂府・梵門・哀傷・雜詠に類別し、作者の名は野岑守・勇文繼・滋貞主のやうに支那風に記してある。かくて此の集

は種々の點に新例を開いて居る。

『文華秀麗集』が成つて後十餘年を經て、更に『經國集』が撰ばれた。題號は魏の文帝の「文章者經國之大業、不朽之盛事」の語から取つたのである。滋野貞主の序文によれば、良岑安世が淳和天皇の勅を奉じて、滋野貞主・南淵弘貞・菅原淸公・安野文繼・安部吉人等と共に撰んだものであつて、收むる所は慶雲四年以後天長四年までの作者、百七十八人の賦十七首、詩九百十七首、序五十一首、對策三十八首で、之を二十卷に編成したものである。かくて此の集は前二集に比して、遙かに大部のものであつたが、後世約三分の二以上散逸して、今は一・十・十一・十三・十四・二十の六卷を存するのみである。序文の終に、天長四年五月十四日の日附があるから、集の成立年月は略ぼ想像せられる。此の集は凌雲・文華秀麗兩集と略ぼ同じ時代を中心とし、更に前後に延長して、古くは奈良朝の高野天皇（孝謙天皇重祚稱德天皇）の御製以下藤原宇合・石上宅嗣・淡海三船等の詩を採錄し、近くは天長年中の作まで收めて居る。作品は『文華秀麗集』に倣つて類別し、又作者名も漢風に記して居るのであるが、序や對策の如き文章をも收めたのは、此の集の特色である。嵯峨天皇の御製は此の集に於ても最も多く載せて居る。なほ空海の作詩は此の集に始めて見えて居る。女流の作詩は既に『文華秀麗集』に載つてゐるが、此の時代には嵯峨天皇の皇女有智子内親王や、惟氏（林鵞峰は其の著『本朝一人一首』に、嵯峨帝の宮女かと言つて居る。）の如きすぐれた閨秀作家があつて、光彩を添へて居るのは、やがて起るべき女流文學の先驅である。

經國集

弘仁期の詩風

以上述べた三集は僅々十數年の間に成つたものであつて、現れる毎に量に於ても質に於ても、著しい進境を示して居るのは、當時の漢文學の隆盛を語るものである。而して此等の勅撰集の詩風を見ると、奈良朝に專ら行はれた五言詩は衰へて七言詩が之に代り、殊に四句の七絶が最も多數を占め、又長篇の七言古詩が盛に詠じられたのであつて、種々の點に於て、奈良朝に比して著しい進歩を示して居る。而して詩形に於て七言が盛になり、表現に於て一般に技巧に長じ、且つ流麗な詩風が喜ばれ、又內容に於ては情趣を重んじ、纏綿たる情緒を詠じたものが多くなつたのは、何れも唐詩の感化を受けたのであつて、やがて起るべき和歌和文の發達に多大の影響を與へたのである。

詩餘

弘仁時代の詩文の盛況は、右に述べた勅撰集によつても明瞭であるが、なほ當時既に詩餘の如きものが行はれたのは注意すべき事である。詩餘は詩の餘流の義であつて、一に塡詞（圖式の通りに字を塡めて作る故の名である。）といひ、又單に詞とも呼ばれて居る。漢魏の古樂府が衰亡した後、唐代に至つて專ら絶句を歌つた事から始まつたのである。即ち絶句を管絃に和して歌ふ時に、一句の中の一字を取去つて、歌曲に變化を與へたものであつて、詞に一定の譜があり、字に定數があり、韻に定聲があるのであるから、日本人にとつては決して作り易いものではない。盛唐の詩人が李白、清平調・憶秦娥・菩薩蠻などを作つたのが其の濫觴であると傳へて居るが、（文體明辨所載）これは後人の附會說であつて、寧ろ中唐の張志和が作つた漁歌子や、劉禹錫の瀟湘神の如きものが、詞體の上から見ても權輿とすべきである。（鹽谷博士著支那文學槪論講話に據る。）さて詩餘は中唐に起り、晩唐から五代にかけて流行し、宋に至つて全盛を極めたのであるが、我が國に

は弘仁時代に、早くも嵯峨天皇が之を作り給うたのである。（田能村竹田が其の塡詞圖譜に、『本朝文粹』第一に載つてゐる中書王兼明親王の憶龜山を以て、我が國の詩餘の嚆矢としたのは失考である。）即ち『經國集』卷十四にある漁歌子五首の御製がそれであつて、之に和し奉つた有智子内親王、及び滋野貞主の作も倂せて載せてある。左に其の一首づつを掲げて見よう。

漁歌（五首の中）　太上天皇

江水渡頭柳亂ㇾ絲　漁翁上ㇾ船煙景遲　乘二春興一　無二厭時一　求ㇾ魚不ㇾ得帶二風吹一

奉ㇾ和二漁歌一（二首の中）　公主

春水洋洋滄浪淸　漁翁從ㇾ此獨濯ㇾ纓　何鄕里　何姓名　潭裏閑歌送二太平一

同（五首の中）　滋野貞主

漁夫本自愛二春灣一　鬢髮皎然骨性閑　水澤畔　蘆葉間　挐音遠去入ㇾ江還

右の御製は、先に述べた張志和の漁歌子（五句二十七字四韻）の詞式によつて、作り給うたものであつて、吾々はこれによつて、帝の博識と天來の詩才とを伺ひ奉ると共に、當時唐の文學が極めて迅速に我が詩界に影響した事を、推して知る事が出來るのである。

二　弘仁時代の詩人

弘仁前後の詩文全盛期には上に文藝の才藻に富ませられた三帝があり、下には詩人文豪が朝野に滿

小野岑守

ちてゐた。今其の中の著しい人々に就いて略述しようと思ふ。勅撰集の撰者の中で文名の最も高かつたのは、小野岑守・菅原清公・滋野貞主の三人である。小野岑守（天長七年歿五十三）は推古帝の御代に、始めて遣隋使となつた妹子の玄孫である。妹子は孝昭天皇の御子天押帶彦命の裔であつて、近江國滋賀郡の小野に棲んだので、小野を氏としたのであると云ふ。岑守は『凌雲集』以下三集の撰者であり、又良岑安世等と共に『內裏式』を撰定した學者であつて、晩年には從四位上に進み、勘解由長官兼刑部卿に任ぜられた。詩で名高い篁は岑守の子である。

菅原清公

次に菅原清公（承和九年歿七十三）は遠江介古人の子で、年少の頃略ぼ經史に通じ、文章生に補せられ、又秀才に擧げられ、次いで延暦二十三年には遣唐使判官として唐に遣はされた。歸朝の後大學助に任ぜられ、文章博士となり、晩年には從三位に敍せられ、屢侍讀を拜命した。凌雲・文華秀麗二集の撰者に擧げられたことは、既に述べた通りである。是善は其の子であり、道眞は其の孫である。

滋野貞主

次に滋野貞主（仁壽二年歿六十八）は大同の初文章生の課試に及第し、圖書頭・東宮學士などに任ぜられ、後に參議を經て宮內卿となり、相模守を兼ねた。文華秀麗・經國二集の撰に當つた外に、天長八年には勅を奉じて、諸學者と共に古今の文書を類聚して『祕府略』一千卷を編纂した。此の書は空前の大著であつて、當時の漢學の隆盛を語る一大記念物であるが、後世散逸して今は殘闕二卷を存して居る。

嵯峨天皇

右に擧げた三人は學者にして詩文に長じた人々であるが、當時の代表的詩人は他にある。先づ雲上には嵯峨天皇と皇女有智子內親王を擧げるべきであるが、臣下には僧空海と小野篁が最も傑出して居

る。嵯峨天皇は列聖中古今稀なる叡才を抱かせられ、『凌雲集』以下の勅撰集に載せ奉つた御製は、最多數の九十六首に達して居る。御製集があつたかも知れないが、後世傳はつてゐない。勅撰集を始めて起されたのは、六朝に於ける例に倣ひ給うたものかと思はれるが、天資好文の帝であるから、必ずしもさうと斷定する事は出來ない。天皇はまた書にも秀でさせられたのであつて、空海橘逸勢と共に三筆と稱せられた。左に『凌雲集』中の聖作一首を掲げて置く。

春日遊獵日暮宿二江頭亭子一

三春出獵重城外　四望江山勢轉雄　逐レ兎馬蹄承二落日一　追レ禽鷹翮拂二輕風一　征船暮入連レ天水
明月孤懸欲レ曉空　不レ學夏王荒二此事一　爲レ思三周卜遇二非熊一

有智子内親王

弘仁時代に閨秀詩人が現れたことは既に述べたのであるが、中にも「本朝女中無雙之秀才」（本朝一人一首）と言はれたのは有智子内親王（承和十四年薨四十一）である。經史にも通じて居られたが、殊に詩に於ては一流の詩人に伍して遜色がなかつた。弘仁十四年の春、嵯峨天皇が賀茂齋院の花の宴に行幸せられ、文人をして春日山莊の詩を賦せしめ給うた時、皇女は韻を探つて塘・光・行・蒼を得、左の一首を作られた。

寂寂幽莊水樹裏　仙輿一降一池塘　棲レ林孤鳥識二春澤一　隱レ澗寒花見二日光一　泉聲近報初雷響
山色高晴暮雨行　從レ此更知恩顧渥　生涯何以答二穹蒼一

天皇はこれを歎賞せられて、三品の位を授けられた。時に皇女は御歳僅かに十七歳であつた。（續日本後紀承和十四年の條）左に掲げる一首は、『經國集』所載のものである。

空海筆蹟風信狀（敎王護國寺藏）

奉レ和二巫山高一

巫山高且峻　瞻望幾岧岧　積翠臨二蒼海一　飛泉落二紫霄一　陰雲朝晻曖　宿雨夕飄颻　別有二曉猿叫一　寒聲古木條

此の最後の二句は、江村北海が『日本詩史』に、初唐の遺響があると評した佳句である。

嵯峨天皇に劣らぬ詩人は、佛教界の偉人弘法大師空海（承和二年寂六十二）である。空海は本姓佐伯氏で、讃岐の多度津の人である。幼少の頃から學問を好み、十八歳の時大學に學び、後佛典を修め、二十歳で剃髪した。三十一歳の時傳教大師最澄（弘仁十三年寂五十六）と共に入唐して三年間佛教を研究し、傍詩文と書法を學び、歸朝の後眞言宗の弘通に全力を注いだのである。空海は唐に在る頃、其の國の文士と詩文を唱和して歎稱せられたのであつて、詩文に關する著述と詩文集とが傳はつて居る。『三教指歸』（三卷）は儒佛老三教を論じたもので、二十四歳の時の著述であるが、其の論旨と縱横の才筆には、既に後年の學識文才が十分に示されて居る。詩文を集めた『性靈集』（十卷）

は、正しくは『遍照發揮性靈集』と云ひ、高弟なる高雄の眞濟が編んだものである。此の外に空海の名高い著書に『文鏡祕府論』がある。詩文の法格作法を論じたもので、六朝及び唐に行はれた詩文の論を參酌してあつて、六卷より成つてゐる。此の書は現存する東洋の修辭學の最古のものであつて、當時我が詩文學の上に貢獻する所が多かつたばかりでなく、後の歌學にも多大の感化を及ぼしたのである。なほ『文筆眼心抄』はこれを要約したもので、弘仁十一年に成つたのである。空海の詩ですぐれて居るのは、寧ろ長篇にあるのであるが、今は世によく知られて居る七言絶句二首を擧げて置く。

後夜聞二佛法僧鳥一

閑林獨坐草堂曉　三寶之聲聞二一聲一　一鳥有レ聲人有レ心　聲心雲水倶了了

在レ唐觀ニ昶（テフハフ）法和尚小山一

看レ竹看レ花本國春　人聲鳥哢漢家新　見二君庭際小山色一　還識君情不レ染レ塵

小野篁

空海より少し後れて現れた小野篁（仁壽二年歿五十一）は、岑守の子であつて、空海と並び稱せられた詩人である。篁は年少の頃弓馬を事とし、文事を顧みなかつたが、嵯峨帝が嘗てこれを歎じ給うて、「岑守の子にしてなほ一介の弓馬の士となるか。」と仰せられたので、大いに慚ぢ、これより學問を勵んだと傳へられて居る。二十一歳の時文章生に補せられて以來累進し、淳和天皇の天長十年には淸原夏野等と共に『令義解』を撰定した。次いで仁明天皇の承和三年に、遣唐副使に任ぜられて出發したが、風浪の難に遭つて果さず、更に承和五年に再び發向する時、大使藤原常嗣の專橫を憤り、病と稱して赴かなか

つた。しかも「西道謠」を作つてこれを誹謗した爲に、嵯峨上皇の逆鱗に觸れて、隠岐に配流せられた。其の途上で作つた「謫行吟」七十韻は當時推賞せられたものであるが、今は傳はつてゐない。百人一首によつて人口に膾炙してゐる「わたの原八十島かけて」の一首は流謫の折の作である。篁は其の後數年にして召し還され、本位に復せしめられたのであるが、是は上皇が彼の詩才を惜しみ給うた爲であると言はれて居る。其の後參議となり、左大辨に任ぜられ、位は從三位にまで昇つた。以上述べた略歴によつても察せられるやうに、篁は不羈狷介の性であつて、人と相容れざる所があつたが、一面に又父母に至孝であつた事が傳はつて居る。文學の才に於ては當時群を抜いてゐたので、種々の逸事が傳はつて居る。篁の集には『野相公集』五卷（本朝書籍目錄所見）があつたが、今は傳はつてゐない。其の詩文は『經國集』『扶桑集』『本朝文粹』『和漢朗詠集』等に散見し、和歌は『古今集』『新古今集』其の他の勅撰集に見えて居る。『和漢朗詠集』所收の

紫塵嫩蕨人拳レ手　碧玉寒蘆錐脫レ囊

は、嵯峨上皇の大井川行幸に陪從した時に、勅によつて奉つた詩であるが、其の後傳はつた『白氏文集』の「蕨嫩人拳レ手、蘆寒錐脫レ囊」と暗合し、しかも白樂天の上にあるべき作と賞せられたと傳へられて居る。左に『經國集』中の一首を掲げて置く。

奉レ試賦ニ得隴頭秋月明一首

反覆單于性　邊城未レ解レ兵　戍夫朝蓐食　戎馬曉寒鳴　帶レ水城門冷　添レ風角韻清　隴頭一孤月

萬物影云生　色滿都護道　光流飲飛螢　邊機候二侵寇一　應レ驚此夜明

篁は又書家であつて草隷を得意とし、王義之・王獻之の風があつたと云ふ。有名な道風は弟葛絃の子である。

三　貞觀元慶期の詩文

貞觀元慶期の詩文

弘仁天長に次ぐ貞觀・元慶の頃は、漢文學が稍衰へて、和歌和文が之に代つて漸く起り始めた過渡期である。此の頃現れた詩文の大家に、大江音人・菅原是善・島田忠臣・橘廣相・都良香等であつて、稍後れて寬平の頃には、藤原佐世・菅原道眞・紀長谷雄・三善淸行等が輩出した。此等の詩人の中で詩文の集が傳はつて居るのは、島田忠臣の『田氏家集』、都良香の『都氏文集』、及び菅原道眞の『菅家文草』があるだけである。大江菅原の二氏は菅江二家と稱せられて、代々詩文を以て世に知られた。殊に大江音人（元慶元年歿六十七）は江相公と稱せられて名高い詩人であつたが、其の詩集は傳はつてゐない。而して此の時代を代表する詩の大家は、都良香と菅原道眞である。

都良香

都良香（元慶三年歿三十六）は桑原氏であつたのを改めて都氏と稱した。貞繼の子で、伯父は文章博士腹赤である。良香は父及び伯父の學問を承け、詩文の名聲が一時に轟いたが、年四十六（三代實錄に據る）で歿した。「氣霽風梳二新柳髮一、氷消波洗二舊苔鬚一。」及び「三千世界眼界盡、十二因緣心裏空。」は、共に『和漢朗詠集』に收められて人口に膾炙して居るが、其の次句は共に鬼神が繼いだといふ傳說が傳はつてゐるのは、文名の高かつた證據である。良香は詩の大家

であつたが、殊に文章に長じてゐた。詩は『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』『扶桑集』などに散見するのみであるが、文集には『都氏文集』がある。もと六卷あつたのであるが、散逸して今は卷三・四・五の三卷を存するだけである。

菅原道眞（延喜三年歿五十九）は清公の孫、是善の子で、三代相嗣いで經史並に詩文に長じて文名が高かつた。道眞は幼少の頃から學才があり、又詩の天才であつて、十一歳の時月夜觀梅の詩「月輝如二晴雪一、梅花似二照星一、可レ憐金鏡轉、庭上玉房馨。」を作つて、其の師島田忠臣をして感歎せしめた。三十三歳の時文章博士となつて以來、一世に喧傳せられ、殊に宇多天皇の寵遇を蒙つて重く任用せられ、醍醐天皇の御世に右大臣となつたが、周圍の嫉視を受け、遂に左大臣藤原時平等の讒奏によつて太宰權帥に貶され、晩年は憂悶の日を送り筑紫で歿した。かくて其の晩年の不遇に對する同情は、學德文藻に對する敬仰の念と相俟つて、後世文學の神と仰がれたのである。著述には『類聚國史』の如き大部のものがあるが、詩文集には『菅家文草』十二卷及び『菅家後草』一卷がある。後草は左遷の前後の作詩を集めたものであつて、悲痛の情切々人の肺腑を刺すものが多い。道眞は白樂天に私淑し、又温庭筠の詩を愛誦したのであつて、其の詩は概ね平明で、技巧を弄ぶことなく、至情が流露して居る。道眞は又和歌にも長じてゐた。左に道眞の名高い詩を掲げよう。

九日侍レ宴同賦二菊散一叢金一應制

不三是秋江練二白沙一　黄金化出菊叢花　微臣把得籠中滿　豈若一經遺在レ家

離レ家三四月　落涙百千行　萬事皆如レ夢　時時仰ニ彼蒼一

自詠

不レ出レ門

一從ニ謫落在ニ柴荊一　萬死兢兢跼蹐情　都府樓纔看ニ瓦色一　觀音寺只聽ニ鐘聲一　中懷好逐ニ孤雲一去

外物相逢滿月迎　此地雖レ身無ニ撿繫一　何爲寸歩出レ門行

國史の撰修

平安時代初期の詩文隆盛期には紀傳道も盛であつて、國史の撰修が次々に行はれ、又『史記』や『日本紀』の講筵が屢開かれた。今延暦から延喜に至るまでに成つた史書の、著しいものを纏めて記して置く。先づ官撰の國史には、『日本書紀』の後を記述した『續日本紀』四十卷が延暦十六年に成つた。文武天皇から桓武天皇の延暦十年に至る、九代九十五年の間の事を記した漢文の國史で、前後數回に亙つて編修せられ、幾度か改修補正を經て成つたもので、編輯に與つた人も多數に上つて居る。『續日本紀』に續いて撰進せられたのは、桓武天皇の延暦十一年から淳和天皇の天長十年に至るまで、四代四十二年間の事を記載した『日本後紀』四十卷、（現存するものは卷五以下の十卷）（承和七年成）仁明天皇御一代の事を記した『續日本後紀』二十卷、（貞觀十一年撰）文德天皇御一代の事を書いた『文德實錄』十卷、（元慶三年成）及び清和天皇から光孝天皇に至る、三代三十年間の記事を収めた『三代實錄』五十卷、（延喜元年撰上）である。これ等によつて、文武天皇から光孝天皇に至るまでの、漢文の國史が完備したの

であつて、之に『日本書紀』を加へて世に六國史と稱して居る。

平安時代の初期に書かれた上古史には、齋部廣成の『古語拾遺』一卷がある。本書は廣成が、中臣氏の壓迫の下に衰へた自家の非運を慷慨して撰上したもので、齋部家の古傳を記した一種の上告書である。記紀に記載せられてゐない古傳承を見る事が出來るのであつて、上古史並に神道の研究資料に富んで居る。此の外延喜二十三年に、朝廷の命によつて大神宮の神官が、御鎭座の由來並に年中の諸儀などを記した『皇大神宮儀式帳』一卷、『止由氣宮儀式帳』一卷があり、また熱田神宮の別當尾張連の記した『尾張國熱田大神宮緣起』一卷がある。最後のは貞觀十六年に、別當尾張連清稻が記したものを、寬平二年に尾張守藤原朝臣村椙が補修したのである。寬平頃に成つた浩瀚な國史は菅原道眞が撰上した『類聚國史』である。宇多天皇の勅によつて、六國史中の記事を類聚したもので、もと二百卷と目錄二卷・帝王系圖三卷とあつたのであるが、今は殘闕六十一卷を存するのみである。

四　天曆時代の詩文

平安時代初期の漢文學隆盛期に就いては、以上述べた通りであるが、其の後國文學が勃興するにつれて、漸く衰運に向つた。併し天曆の頃には、村上天皇がみづから詩文に長じ給ひ、屢好文の士を召して詩賦を唱和せしめられ、又天曆三年には內裏詩合を行はしめられて、盛に詩文を奬勵せられたから、漢文學は再び興隆するに至つた。當時漢學は殆ど菅江二家に歸して固定し、詩文は益日本化し、

且つ徒らに美辭麗句を鬪はす風潮を生じたから、其の隆盛は到底弘仁時代には及ばなかつた。當時詩文の大家には、大江氏に朝綱・維時があり、菅原氏に文時があつて對峙してゐたが、此の外に文名の高かつたのは、橘直幹（なほもと）・源英明・源順及び兼明親王等である。

大江朝綱

大江朝綱（天德元年歿七十二）は音人の孫で、玉淵の子である。官位は參議正四位下に昇り、祖父の音人を江相公といふのに對して、後江相公と呼ばれた。博學で詩文に秀で、嘗て村上天皇の勅を奉じて、『新國史』四十卷（光孝天皇の仁和から醍醐天皇の延喜に至る間の國史）を編修したが、今は殘闕を存するのみである。朝綱の詩文集に『後江相公集』二卷があつたが、これも後世散逸した。『和漢朗詠集』所載の

前途程遠　馳㆓思於雁山暮雲㆒　後會期遙　霑㆓纓於鴻臚之曉淚㆒

は、渤海の使節の歸鄕を送つた詩序中の秀句であつて、使節をして三歎せしめたので世に知られて居る。なほ秀逸一首を擧げて置く。

王昭君

翠黛紅顏錦繡粧　泣尋㆓沙塞㆒出㆓家鄕㆒　邊風吹斷秋心緒　隴水流添夜淚行　胡角一聲霜後夢
漢宮萬里月前腸　昭君若贈㆓黃金賂㆒　定是終身奉㆓帝王㆒

大江維時

大江維時（應和三年歿七十六）も亦音人の孫で、千古の子であるから、朝綱の從兄弟である。文章博士となり、大學頭・東宮學士を兼ね、天德年中には參議に任ぜられ、更に中納言となつたので、世に江納言と云つた。經史に通じたが、殊に文章に巧みであり、又天德三年の詩合には召されて判者となつた。近代詩

人の作を撰した『日觀集』二十卷は散逸して傳はらなかつたが、古今の詩句を類別的に撰んだ『千載佳句』一卷は現存して居る。維時は文章家であつて、詩は寧ろ得意でなかつた。

菅原文時（天元四年歿八十四）は道眞の孫で、大學頭高視の子である。高視の弟淳茂は文時の叔父であつて、詞藻に秀でてゐたが、文時は更に長じてゐた。文章博士となり、晩年に從三位に敍せられたので、菅三品と呼ばれた。詩文に於ては朝綱と共に雙絶と稱せられたので、此の二人を對比した逸話が多く傳はつて居る。嘗て村上天皇が兩人を召して、『白氏文集』中第一の詩を選ばしめられた時、共に期せずして「送蕭學士遊黔南詩」を奏上したので、帝は大いに歎稱せられたと言はれて居る。又皇孫源保光の邸に文人が相會して、「名花在閑軒」の題で詩を賦した時、文時は詩中に「此花非是人間種。再養平臺一片霞。」といふ句を詠じたが、朝綱の詩中にも「此花非是人間種。瓊樹枝頭第二花。」の句があつた。此の上句は一字の相違もなく暗合し、下句は共に梁園の故事によつたものであつたので、一座の人々に驚歎されたが、朝綱は後に人に語つて「後世必ず余と文時とは菅江の一雙と稱せられるであらう。」と言つたといふ事である。『和漢朗詠集』の春の部に載つてゐる花光水上浮序の二首は、名高い秀句であるが、これは第三篇の『和漢朗詠集』（二六五頁）の條に引くつもりであるから、左に文時の作中で、最も人口に膾炙する詩一首を擧げて置く。

山中有仙室

丹竈道成仙室靜　山中景色月花低　石牀留洞嵐空拂　玉案拋林鳥獨啼　桃李不言春幾暮

煙霞無レ跡昔誰棲　王喬一去雲長斷　早晩笙聲歸二故溪一

橘在列

橘直幹

菅江二家に次いで文人を出したのは橘氏であつて、延喜の頃には在列があり、天暦頃には直幹があつて、共に名聲が高かつた。在列（歿年未詳）は大和守祕樹の第三子で、詩文に長じてゐたが、後に佛門に入つて尊敬と稱した。其の教を受けた源順が編んだ『尊敬集』は今傳はつてゐない。次に直幹（歿年未詳）は長門守長盛の子で、橘公統に學び、文章博士となり、冷泉天皇の侍讀となつた。集に『橘直幹集』一卷があつたが後世散逸した。

箪瓢屢空　草滋二顏淵之巷一　藜藿深鎖　雨濕二原憲之樞一

は天徳の初めに奉つた「請レ兼二任民部大輔一狀」の中の句であつて、村上天皇の歎賞を蒙つたので世に知られて居る。

兼明親王

當時皇族の中で最も文藝に長じて居られたのは、醍醐天皇の皇子兼明親王（永延元年薨七十四）である。中務卿であつたので世に前中書王といつた。（前中書王は、村上天皇の皇子の具平親王を、後中書王といふのに對してである。）左大臣に任ぜられたが、後に中務卿に左遷せられたのは、藤原兼通が權勢を恣にして、從兄賴忠を左大臣にする爲であつた。當時兼通の專横に對する悲憤のあまり作り給うた、菟裘賦は世に喧傳せられて居る。『和漢朗詠集』中の

扶桑豈無レ影乎　浮雲掩而忽昏　叢蘭豈不レ芳乎　秋風吹而先敗

は賦中の名句である。親王は博學多才で、詩文に秀で、又書に於ては道風と並び稱せられた。親王は

源英明

時に詩餘も試みられたのであつて、『本朝文粹』卷一に憶龜山二首を收錄して居る。宇多天皇の皇孫で齊世親王の御子の源英明（天慶三年薨）も亦漢學に長じ、文學の才があつた。其の母は道眞の女であるから、文時の從兄弟である。詩文と和歌を兼ねた人で、從四位に敍せられ、藏人頭兼左近衞中將であつた。家集に『源氏小草』五卷があつたが、今傳はつてゐない。源順も當時の詩人であるが、寧ろ歌人として名を知られた人であるから、次の章に述べる事にする。以上擧げた天暦前後に於ける詩人文章家の作は、『扶桑集』『本朝麗藻』『本朝文粹』『朝野群載』『和漢朗詠集』などに多く載つて居る。

第三章　和歌の興隆

一　古今集以前

弘仁期の和歌

桓武天皇から仁明天皇まで五代七十餘年間は、漢詩漢文の隆盛期であつて、宮廷や貴紳の遊宴に於ては、專ら詩賦を唱和した時代であつて、和歌を詠む事は極めて稀であつた。此の時代に和歌は主として民間に行はれてゐたと思はれるのであつて、偶すぐれた作は人々の記憶に殘つて『古今集』『後撰集』などに、讀人知らずの歌として載せられて居る。尤も當時宮廷を始め貴族の間に、全く和歌を詠む場合がなかつたのではない。何となれば『日本後紀』『類聚國史』『日本紀略』などには、遊獵肆宴などで詠まれた桓武・平城・嵯峨三帝の御製を始め、皇族重臣などの作歌が散見して居り、また『古今集』

『後撰集』などにも、當時の歌人の作歌が所々に載つて居る。卽ち『古今集』には、嵯峨天皇の皇子で臣籍に列せられた東三條左大臣源常（ときは）（齊衡元年薨四十三）や、藤原關雄（仁壽三年歿四十九）や、小野篁等の作歌が載つて居り、また『後撰集』には嵯峨天皇の皇后（橘嘉智子）や、桓武天皇の皇子の高津内親王・紀内親王などの御歌や、藤原冬嗣の作歌などが散見して居る。併し弘仁時代は和歌衰頽時代であつて、萬葉時代末期を承けて、旋頭歌は全く廢れ、長歌も殆ど見るべきものがなく、只萬葉の遺風を傳へた短歌のみが行はれたのである。

讀人不知の歌

さて弘仁前後の和歌を代表するものは、『古今集』中の讀人不知の歌、及び卷二十に載つてゐる大歌所御歌・神遊歌・東歌であるが、『後撰集』の讀人不知の歌の中にも、此の時代の作と見做されるものが少くない。此等の讀人不知の歌の中には、わざと作者の名を記さなかつたのもあるであらうが、多くは題も作者名も未詳の古歌である。それ等を見ると、格調用語內容などに於て、萬葉時代の遺風を存するものが極めて多い。卽ち格調について言へば、殆ど句切のないもの（例一）二句切のもの（例二・三）四句切のもの（例四・五）二句目と四句目とに切目のあるもの（例六）などが多いのであつて、此等は何れも萬葉風の名殘である。例へば

（一）みづぐきの岡のやかたに妹とあれと寢ての朝けの霜のふりはも　（大歌所御歌）

（二）山吹はあやなな咲きそ。花見むと植ゑけむ君がこよひ來なくに

（三）いとはやも鳴きぬる雁か。白露の色どる木々ももみぢあへなくに

（四）秋が花散るらむ小野の露霜にぬれてを行かむ。さ夜はふくとも

（五）近江より朝立ちくればうねの野に鶴ぞ鳴くなる。あけぬこの夜は

（六）月夜には來ぬ人待たる。かき曇り雨もふらなむ。わびつつも寢む　（大歌所御歌）

此等は用語は固より、內容も概ね素朴であり、單純であつて、寧ろ萬葉風に近いものである。併し『古今集』中の讀人不知の歌風には優美纎細な所があり、又觀念的に詠む傾向があつて、明かに萬葉から古今に移る過渡期にある事を示して居るものが少くない。左に擧げる例の如きはそれである。

春日野の飛火の野守出でて見よいま幾日ありて若菜つみてむ

待てといふに散らでしとまる物ならば何を櫻に思ひまさまし

春雨のふるは涙かさくら花散るを惜しまぬ人しなければ

わがせこが衣のすそを吹き返しうらめづらしき秋のはつ風

春霞かすみていにし雁がねは今ぞ鳴くなる秋霧のうへに

『古今集』撰定の頃は、『萬葉集』に關する知識が不十分であつて、撰者は萬葉に入らぬ歌を採ることを標榜しながら、之を取入れて居る。明かに『萬葉集』中の歌であるものは、

さ夜中と夜はふけぬらし雁がねの聞ゆる空に月わたる見ゆ　（古今秋上　萬葉九）

つき草に衣は摺らむ朝露にぬれての後はうつろひぬとも　（古今秋上　萬葉七）

以下合計十二首許りある。

長歌の衰頽

弘仁期の和歌に就いて注意すべき事は、長歌が殆ど衰頽した事である。『萬葉集』中の長歌は、末期に於て五七調から七五調に移る傾向を生じ、形式内容ともに平板單調に流れたのであつて、長歌衰亡の徴は、既に家持などの作歌に明瞭に現れてゐたのである。平安時代初期の長歌としては、『續日本後紀』の嘉祥二年三月に、仁明天皇の四十の寶算を祝賀する爲に、興福寺の僧侶が奉つたものがある。これを見ると、格調はなほ五七の古調であるが、意味の上から見れば、七五調になつてゐるのであり、且つ内容形式共に散文的になつてゐる。其の後に作られた長歌が益單調になり、文學的價値の乏しいものとなつた事は、『古今集』に載せてゐる讀人不知の一首、及び古今集時代の長歌四首を見て明かである。平安時代の長歌には、殆ど反歌を添へない事になつてゐるが、これも長歌が衰へて短歌が獨立して榮えた時代の、一面を反映するものと言へるであらう。かくの如く長歌が衰へた原因は種々あるであらうが、元來長歌は形式は堂々としてゐても、詠まれる内容は單純であるから、傑出した歌人でない限り自然單調になるのである。而して格調に於て五七調から七五調になつたのは、長歌の形態を破滅に導く重大な原因となつたのであるが、更に内容に於て内省的觀念的に詠む傾向を生じ、技巧に於ても譬喩緣語掛詞のやうな、内容を助けるものが多く用ひられたのは、何れも長歌の衰退を招く原因となつたのである。其の他宴席の唱和や、題詠などが盛に行はれた結果として、長歌よりも短歌の方が、遙かに即興的に單純な感情を表出するのに適切であつた事も、主なる原因であらう。

貞觀元慶期の和歌

弘仁前後に於ける和歌は以上述べた通りであるが、次いで貞觀元慶の頃になると、宮中や貴紳の宴

に、詩賦と共に和歌を唱和するやうになり、當時の詩人には、和歌を兼ねる者が多くなつたのであるが、一方には專ら歌人として名を知られた人が續々現れた。次いで仁和寛平の頃になると、內裏や皇后宮で屢歌合が行はれ、又歌人をして和歌を奉らしめられるやうになつたから、歌人は益多くなり、遂に和歌は全く漢詩を壓倒して行はれ、やがて詩の勅撰集に代つて、勅撰和歌集が撰ばれる時代となつたのである。今貞觀から寛平に至るまでの、四代四十年間の歌壇に就いて述べよう。

六歌仙

此の時代には漢文學は主として菅江二家に歸し、詩文は著しく和臭を帶び、且つ作風が漸く固定して生氣を失つたので、人心は自ら詩文を去つて和歌に赴いたのである。當時詩人若しくは漢學者にして、和歌に長じた人も多かつたのであるが、中にも名高いのは六歌仙である。六歌仙は『古今集』の序に、「近き世に其の名聞えたる人は」として列擧せられた、僧正遍昭・在原業平・文屋康秀・喜撰法師・小野小町・大伴黑主の六人である。此の中で傳記の明かなのは、遍昭と業平であつて、其の他の歌人は歿年も詳かでない。又黑主・康秀の作は極めて少く、しかも其の作歌は概ね文學的價値の低いものであり、喜撰の如きは、只「わが庵は都のたつみ」の一首を傳へてゐるばかりである。從つて現存する歌から見れば、六歌仙の中で眞に勝れた歌人は、業平・小町・遍昭の三人であつて、他は論ずるに足らない。

在原業平

在原業平は當時一流の歌人であつて、平安時代の和歌の先達である。業平は平城天皇の皇子阿保(あぼ)親王の第五子であるが、在原の姓を賜はつて臣籍に列せられた。藏人・右馬頭を經て、元慶元年に右近衞權中將となり、從四位上に敍せられ、同年藏人頭に任せられて、元慶四年に五十六で歿した。世に在

五中將、又は在中將と呼んだ。中納言在原行平は其の兄であつて、すぐれた歌人であつた。業平は多感多情の人であつた上に、其の身は生涯不遇であつたから、悶々の情を和歌に洩らしたのである。從つて其の歌は殆ど抒情であつて、率直に感情を敍べ、措辭の末を顧みなかつた。『古今集』の序中に、「其の心あまりて言葉足らず、しぼめる花の色なくてにほひ殘れるが如し。」と評したのは、情緒は豐富であるが、表現に不十分な所があるから、動もすれば率直に聞える。併しなほ何處となく餘情があるといふのであつて、極めて適評である。左に『古今集』の中からすぐれた歌を擧げて見よう。

世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし

寢ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして

つひに行く道とはかねて聞きしかど昨日けふとは思はざりしを

飽かなくにまだきも月の隱るるか山の端にげて入れずもあらなむ

忘れては夢かとぞ思ふおもひきや雪ふみ分けて君を見むとは

此の中で最後の二首は、業平と姻戚關係にある惟喬親王に對して詠んだ作歌であると傳へられて居るものである。惟喬親王は文德天皇の第一皇子でありながら、藤原良房の權勢が盛であつた爲に、其の女の腹に生まれ給うた第二皇子惟仁親王に超えられて、帝位に卽く望を失ひ、若くして佛門に入つた人であつて、業平とは境遇が相似てゐたので、特に親交があつたのである。業平の和歌を集めた『業

平集』一卷が、『三十六人集』及び『群書類從』に收められて居るが、これは後の人が『古今集』を始め、世世の勅撰集から抄錄したもので、中には他人の作歌を混入してゐる事は、既に契沖が『河社』に論じて居る通りである。なほ業平と『伊勢物語』との關係に就いては、更に後に述べるつもりである。

業平と好一對の歌人は小野小町である。出羽の郡司の女であるといひ、また篁の孫、即ち良眞の女であるとも傳へられて居るが詳かでない。小町の生涯は、業平と同じやうに、甚しく傳說化せられて居るのであつて、事實と認むべきものは殆ど無いやうである。小町の歌風には、業平に似て情熱があるが、異なる所は稍技巧的であつて、語句も洗煉せられて居り、殊に女性らしい弱々しさがある。『古今集』の序に小町を評して、「小野小町はあはれなるやうにて强からず。いはばよき女の、惱めるところあるに似たり。」と言つたのは、彼の歌風が一體に婉柔纖弱であるのを指したのである。傳はつて居る作歌の殆どすべてが戀愛の作であつて、はかない夢を多く歌つて居る。

思ひつつぬればや人の見えつらむ夢と知りせば覺めざらましを　（古今）
うたた寢に戀しき人を見てしより夢てふものは賴みそめてき　（同）
色見えでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける　（同）
夢ならばまた見るよひもありなましなになかなかの現なりけむ　（續古今）

此等によつて小町の歌風を窺ふ事が出來るが、なほ次に技巧の纖細な作を揭げて置く。

花の色はうつりにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに　（古今）

みるめなきわが身を浦と知らねばやかれなであまの足たゆく來る　（古今）

小町にも『小町集』といふのがあつて、『三十六人集』に收められ、又『群書類從』にも收錄せられて居るが、是も後人が輯めたもので、他人の作が雜つて居る。小町の歌として最も信ずべきは、勅撰集中のものであらう。

僧正遍照

僧正遍照（寛平二年寂七十五）は俗名を良峰宗貞といひ、漢文學で名を知られた良峰安世（桓武天皇の皇子）の子である。仁明天皇の寵遇を受けて、從五位藏人頭左近衞少將にまで昇つたが、嘉祥三年に天皇の崩御に遭ひ、年三十五で出家した。後に山科の花山に元慶寺を創建し、其の座主となつたので、世に花山僧正と云つた。其の歌は業平と正反對で、洒落な風があつて輕妙である。一體に卽興の作が多く、巧みに擬人法を用ひ、奇警な著想を詠んでゐる。古今の序に「歌のさまは得たれどもまこと少し。譬へば繪にかける女を見て、いたづらに心を動かすが如し。」とあるのは、彼の特徵を巧みに評した言である。卽ち表言は巧みであるが眞實味（リアリティ）が乏しく、從つて其の歌風には、畫中の美人に對して感動するやうに、一種の浪曼的な傾向があると言ふのである。

山風に櫻ふきまき亂れなむ花のまぎれに君とまるべく　（古今）

よそに見て歸らむ人に藤の花はひまつはれよ枝は折るとも　（同）

蓮葉のにごりにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく　（同）

此等は卽興的の作であつて、所謂まこと少き作であるが、次の如きはすぐれて居る。

皆人は花のころもになりぬなり苔のたもとよ乾きだにせよ　（古今）

折りつればたぶさにけがる立てながら三世の佛に花たてまつる　（後撰）

遍昭にも『遍昭集』があつて、『三十六人集』や『群書類從』に收められて居るが、これも後人の手に成つたもので、他人の歌や讀人不知の作などの混入がある。

六歌仙の時代から延喜の初頃にかけての名ある歌人に、源融・在原棟梁(むねはり)・在原滋春・藤原敏行・菅原道眞・大江千里等がある。源融（寛平七年歿七十四）は六條河原に河原院を營み、鹽竈の景色を摸寫して風流を盡したので、河原左大臣と呼ばれた。在原棟梁（昌泰元年歿）と滋春（歿年未詳）は業平の子である。藤原敏行（延喜七年一說昌泰四年歿）は空海と共に書道の名手といはれた人で、家集には『敏行朝臣集』一卷がある。此等の人々の中で、初めの四人の作歌で後世傳はつたのは極めて少數であるが、道眞と千里のは稍多く傳はり、且つ注意すべき歌集がある。

菅原道眞の作歌は、世々の勅撰集に三十五首取られ、又『大鏡』に八首載つて居る。道眞は固より詩人であるから、和歌は詩に及ばないけれども、平明で端的に感情を表出して居る。道眞の撰といはれるものに、『新撰萬葉集』一名『菅家萬葉集』がある。（群書類從所收）二卷より成り、卷每に序がある。上卷の序の終には「于時寛平五載秋九月廿五日。偷盡前世之美而、解後世之頤云爾。」と記し、下卷の末尾には「歲次延喜十三年八月廿一日謹進」とある。此等によれば、上卷は道眞が撰したものかも知れないが、（一說に道眞の父是善の撰かと言ふ。）下卷は道眞歿後に成立したものである。兩卷とも『萬葉集』の體

裁に倣つて、和歌を萬葉假名で書き、一首毎に同じ意味を詠じた七言絶句を竝べ記して居る。試みに上卷の卷頭の一例を示せば、

水之(みつの)上丹(おもに)文織紊(あやおりみだる)春之雨(はるさめ)哉(や)山之(やまの)綠緒(みどりを)那倍(なべ)手(て)染濫(そむらむ)

春來天氣有二何力一　細雨濛濛水面縠　忽望遲遲暖日中　山河物色染二深綠一

所載の歌の中には、道眞の作歌かと思はれるものもあるが、「寛平御時后宮歌合」の作が多く取つてあり、又「是貞親王家歌合」「朱雀院女郎花」などの歌や、『古今集』其の他の歌集中の歌などがある。詩は主として道眞の作であるやうであるが、下卷の詩は韻も蹈まず、平仄も合つてゐないので疑問とされて居る。本居宣長の『玉勝間』にも、下卷の詩は到底道眞の作とは思はれないと言つて居る。かくて此の集はたとへ最初道眞が撰んだものであるとしても、下卷の如きは明かに後の人の手に成つたのであつて、今後の研究に俟つ所が多い。なほ此の集は文學的作品としての價値は別として、和歌と漢詩とを竝べてゐる點に、時代の好尙が窺はれるのであつて、次に述べる千里の『句題和歌』と共に注意すべき集である。

大江千里

大江千里（歿年未詳）は漢學の大家音人の子で、詩文と和歌を兼ねた人であつて、其の作歌を見るべきものに『句題和歌』（群書類從所收）一卷がある。是は寛平六年に宇多天皇の勅を奉じて、詩句を題にして詠んだもので、序に「今臣纔捜二古句一構二成新詞一、別亦加二自詠十首一、惣百二十首」とあるが、現存の本には重複や追加があつて、百二十五首を收めて居る。其の句は主として『白氏文集』の中から採つて居る。左に二三

の例を擧げよう。

月照二平砂一夏夜霜

月影になべてまさごの照りぬれば夏の夜ふかき霜かとぞ見る

秋來只識二此身哀一

おほかたの秋くるからに我が身こそ悲しき物と思ひしみぬれ

不レ明不レ暗朧朧月

照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜ぞめでたかりける

詩文の句を題にして詠ずる事は、是より後にも屢行はれた。延喜の頃或る年の三月三日に、紀師近の家で行つた曲水宴に、貫之を始め『古今集』の撰者、其の他の人々八人が、「花浮二春水一」「燈懸二水際明一」「月入二花灘一暗」の三題に就いて、各一首づつを詠んだ『三月三日紀師近曲水宴和歌』一卷（群書類從所收）の如きも、句題和歌の一種であつて、千里も其の席に加はつて居る。

藤原輔相

右に擧げた人々の外に、延喜以前の歌人で諧謔の歌を詠んで異彩を放つたのは、藤原輔相（すけみ）（歿年未詳）である。輔相は冬嗣の孫、越前權守弘經の六男であつたので、號を藤六といつた。宮内省圖書寮所藏本の『藤六集』（一名輔相集）一卷には三十九首の作歌を收め、また『拾遺和歌集』の物名の部には三十七首を載せて居る。（此の中には家集にあるのもあるが、大部分は家集以外のものである。）此の外に輔相の作として傳へて居るもの、または家集によつて彼の作とすべきものを擧げれば、『古今集』（雜下）『枕草子』『袋草子』『宇治拾遺物語』『新拾遺和歌集』

戀部などに、各一首づつ見えて居る。『古今集』のは「雁のくるみねの朝霧はれずのみ思ひつきせぬ世の中のうさ」であつて、題不知讀人不知となつて居るが、家集にはくるみ（胡桃）を詠んだ歌として收められて居る。又『枕草子』のは、「村上の御時雪のいと高う降りたりけるを」の段にある「わたつみのおきにこがるる物見ればあまの釣してかへるなりけり」であつて、これも家集には「蛙のおきにいでて」と題して載せてある。輔相の歌はすべて物名を詠み込んだものであるが、殊に動植物名や地名を詠み入れたのが多い。

わぎもこが身をなげしより猿澤の池のつつみやきみは戀しき（裏燒）　家集・拾遺集

あづまにて養はれたる人の子はしただみてこそ物はいひけれ（小蠃）　家集（拾遺集、讀人不知）

昔より阿彌陀佛のちかひにて煮ゆるものをばすくふとぞ知る　宇治拾遺物語

此等によつて彼の歌風を知る事が出來よう。要するに輔相は機智奇才に富み、專ら滑稽な歌を詠んだ人であつて、後の狂歌の源を作つたのである。

二　古今集時代

延喜以前に於ける和歌は、既に述べたやうに、貞觀元慶の頃から漸く盛になつたのであるが、殊に寛平の頃に內裏歌合や后宮歌合などが屢行はれ、又朝廷に於ては四時に歌人を召して、和歌を奉らしめられたから、和歌は忽ち隆盛に赴いた。（下の歌合の條參照）次いで延喜の御代には、醍醐天皇は御父宇多上皇と

共に和歌を好ませられて、屢歌人を召して歌合を催されたのであつて、此の御代に弘仁時代の詩の勅撰集に倣つて、和歌の勅撰集を撰ばしめられたのは偶然でない。即ち延喜の初め、醍醐天皇は勅撰和歌集の計畫を立てさせられて、(當時天皇は未だ御年二十歳前後であるから、實際は宇多上皇の思召に基づくのであらうと思はれる。)先づ當時の著名な歌人の紀友則・紀貫之・凡河内躬恒・壬生忠岑の四人に詔して、各其の家集と、『萬葉集』に入つてゐない古歌を撰上せしめられた。初めには『續萬葉集』と名づけたのであるが、重ねて勅があつて、奉つた歌を部類して二十卷とし、『古今和歌集』と名づけたのである。(以上古今集眞名序による。)奏覽の年月に就いては明記されてゐないので、從來種々の説があるのであるが、一般には序文に延喜五年四月十八日とあるのを以つて、奏覽の日と定めて居る。

組織

流布本の『古今集』には、卷頭に紀貫之の假名の序があり、卷尾には紀淑望の手に成つたと言はれる眞名の序がある。併し嘉祿本・元永本(此等の古寫本に就いては下に述べる)の如きは眞名の序を闕いて居る。此の和漢兩樣の序の關係に就いては、一般には、初め貫之が假名の序を書き、後に淑望がそれを漢文に譯したのであると見られて居る。次に部類は春・夏・秋・冬・賀・離別・羇旅・物名・戀・哀傷・雜歌・雜體・大歌所御歌として居る。これは『萬葉集』及び弘仁時代の詩の勅撰集の部立に倣つて、更に改良を加へたのであつて、これより以後長く和歌撰集の模範となつた。雜體の部には、長歌・旋頭歌・誹諧歌を收めてゐるのであるが、長歌は僅かに五首、旋頭歌も四首あるばかりであるから、『古今集』は殆ど短歌の集である。なほ大歌所御歌は、宮廷の舞樂に用ひられた謠物であつて、神樂・催馬樂・風俗歌などと同じ性質の歌で、形は

やはり短歌である。『萬葉集』の詞書はすべて漢文を以つて記されてゐるが、『古今集』のは悉く和文で記し、而も歌との聯絡には特に注意を拂つて居る。

『古今集』の歌數は傳本によつて出入があるが、大體に於て千百餘首である。假名の序に「萬葉集に入らぬ古き歌、みづからのをも奉らしめ給ひてなむ。」とあるが、實際には萬葉の歌その儘のもの、または一部分相違した類歌が、十數首入つて居るのは、撰者の疎漏である。集中に採られた歌數の最も多いのとの明かな歌が數首あるのは、撰進の後に追加されたのであらう。又延喜五年以後に作られたこは、撰者自らの作であつて、たとへ高位高官の人の歌であつても、すぐれてゐないものは採らなかつたと共に、賤民の作をも憚る所なく取入れて居る。これは撰者が確固たる抱負と自信とを抱いて、事に當つた事を示すものである。而して所收の和歌に、時代並に歌風の上から見て、明かに新舊の二種に分つ事が出來る。其の一は讀人不知や六歌仙の作歌によつて代表せられる古い歌であり、他の一は撰者等によつて代表せられる當代の歌である。讀人不知や六歌仙の時代の歌風に就いては、既に述べた通りであるから、以下主として撰者の時代の歌風に就いて考察する事にする。

古今集時代の歌風

撰者によつて代表せられる古今集時代の歌風を、萬葉時代と比較して見ると、種々の點に於て驚くほどの相違を見出すのである。先づ歌體に就いて言へば、萬葉の異彩であつた長歌は全く衰頽して、僅かに殘骸を止めて居るに過ぎず、旋頭歌も其の形は崩れて、殆ど文學的價値のないものとなつたのであつて、古今時代は殆ど短歌のみが行はれたのである。短歌の格調を見ると、萬葉時代に多かつた

二句切・四句切・無切は大いに減じて、三句切が多くなり、從つて萬葉特有の雄勁莊重な五七調は、流麗な七五調に移つたのであつて、助詞・助動詞の巧妙な使用によつて、聲調は益なだらかになつた。聲調の美しくなだらかな事は、『古今集』の著しい特長である。次に修辭を見ると、萬葉歌人が頻繁に用ひた枕詞・序詞・繰返などの如きものは大いに減じて、掛詞や緣語を用ひて內容を豐富にし、又譬喩・擬人・警句・對照・漸層の如き修辭を巧妙に使つて、技巧の妙を極めて居る。更に表現に於ては、萬葉歌人が純眞な感情を自然に率直に表出したのに對して、古今時代の歌人は、感情を反省し、或は過去の經驗を想起して、之を推量又は疑問の形で發表して居る。從つて古今の歌風は、萬葉の直覺的客觀的であつたのに對して、主觀的であり理智的であり又觀念的である。古今の理智的な表現は流麗な格調と相俟つて、優美にして婉曲な歌風を成したのであるが、其の弊としては、技巧の遊戲に墮して、感興の乏しいものとなつたのである。

更に內容を見るに、古今集時代の和歌は、弘仁前後に勃興した漢文學の素養の上に成立した、國民自覺の所產であるから、題材內容表現等に於て、漢文學の影響を受けた所が多い。特に著しい點を擧げれば、季節の推移に興味を持ち、それに伴なつて起る自然の變化に、細心の注意を拂ふやうになつた事と、作風が著しく主觀的となつて、自然を歌ふのにも、必ず自己の感想感慨を敍べるやうになつた事とである。自然と人事の融合の境地を求めることは、既に萬葉の赤人や家持等にも見えるのであるが、『古今集』になると、それが一般的傾向となり、且つ一層發達して殆ど完成の域に達して居る。か

くて自然と人事との一致に美を認める趣味はすべての歌人が抱いた所であるから、『古今集』全體は敍景の分子を含んでゐないものは無いと同時に、主觀的傾向の著しい點から見れば、集全體が優美にして醇雅な抒情詩となつたのである。併し『古今集』に於て發達した、此等の長所の一面にはまた缺陷があつた。優雅醇正を求めた結果、題材並に著想が自ら固定して、鶯の初音に立春を知り、散り敷く花に春の去るを惜み、時鳥の一聲に明け易き短夜をはかなみ、野分の風に秋の來るを驚き、降り積む雪に頭の白きを歎ずるやうに、四季の風物とそれに對する感情とは、略ぼ一定して變化に乏しくなつた。かくて作者は自ら技巧の妙味や、表現用語修辭の新奇を弄することに苦心してゐたのであつて、理智的にして不自然な作が多くなつたのは當然である。要するに『古今集』は、奈良朝末期の歌風を繼ぎ、漢詩文の感化を受けて、優美にして高尚な趣味を、平明にして流麗な形で歌ふやうになつた所に、其の長所があるのであつて、此の歌風に、これより後、詩境の故郷として長く慕はれたのであるが、其の弊としては、纖弱となり、理智的となり、技巧の末を弄ぶやうになつて、後の歌人に惡い影響をも與へたのである。

春日野の若菜つみにや白妙の袖ふりはへて人の行くらむ　紀貫之

櫻花咲きにけらしなあしびきの山のかひより見ゆる白雲　同

ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ　紀友則

花散れる水のまにまにとめくれば山には春もなくなりにけり　清原深養父

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる　藤原敏行

風吹けば落つるもみぢ葉水清み散らぬかげさへ底に見えつつ　凡河內躬恒

あさぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里にふれる白雪　坂上是則

此等は長所を發揮した作であるが、次に擧げる歌の如きは、其の缺陷を示すものである。

年の內に春は來にけり一年をこぞとやいはむことしとやいはむ　在原元方

梓弓春立ちしより年月のいるが如くも思ほゆるかな　凡河內躬恒

霜のたて露のぬきこそよわからし山の錦のおればかつ散る　藤原關雄

別れてふことは色にもあらなくに心にしみてわびしかるらむ　紀貫之

櫻花散りぬる風のなごりには水なき空に浪ぞ立ちける　同

古今集の古寫本

延喜當時の『古今集』は夙に燒け失せたのであつて、今日廣く行はれて居るのは、貞應元年十一月二十四日の奧書のある、藤原定家校定の貞應本である。定家は此の外に、嘉祿二年四月九日の奧書のある嘉祿本を遺して居るが、貞應本のやうに流布しなかつた。貞應本は整頓した本ではあるが、後人の手が加はつて居るのであつて、原本の面目はよほど失はれて居る。三井男爵家所藏の元永本は貞應本より古く、元永三年七月廿日の奧書があつて、『古今集』の撰進を去る二百十七年後(鳥羽天皇朝)のものであり、而も原本の面目を最もよく保存するものと云はれて居る。元永本の活字本には尾上博士の『校註古今和歌集』がある。

以上は完本であるが、更に古寫本の零本又は斷簡も尠くない。其の多くは平安朝の有名な歌人、又は書家の筆と稱せられ

傳貫之筆古今集
（山内侯爵家所藏）

いせうた
をふのうらにかたえさしおほひなるなしのなりもならずもねてかたらはむ

ふゆのかものまつりのうた
ふぢはらのとしゆきの朝臣
ちはやふるかものまつりのひめこまつよろづよふともいろはかはらじ

て居る。著しいものを擧げれば、貫之筆と稱せられる高野切、藤原佐理筆と傳へられる筋切、小野道風筆と言はれる本阿

彌切等を始めとして、源俊賴・藤原公任・同行成・同淸輔・同俊成等の手跡と傳へられるものなどもあつて、其の數は極めて多いのである。此等の中で、數も多く又最も尊重せられて居るのは貫之の高野切であつて、現存するものは卷一・二・三・五・八・九・十八・十九・二十の九卷に亙り、中にも卷五・八・二十の三卷は完備して居る。これ等の筆者は、貫之と稱せられて居るけれども、信じ難いことは、貫之の自筆の『土佐日記』を、定家が寫本するとき、特に其の筆跡を臨摸したもの（二一二頁圖版參照）と比較して明白である。さて高野切にも三種の別があつて、同一の筆でないことは定說となつて居るが、圖版に掲げた山内侯爵家の寫本は、卷二十の完本であつて、尾上博士の說では、行成の系統に屬する何人かの手に成つたもので、他の二種の高野切と共に、寛弘頃か又は更に下つて保延前後の筆であり、而も位置名望のあつた、能書家の手に成つたものであるといふことである。墨色の濃淡も巧みであり、線も優麗の中に氣力が備はり、文字の連續の上にも變化の妙があつて、平安朝中期に發達した草假名を見るべき好資料の一である。

紀貫之

次に撰者に就いて簡單に述べよう。紀貫之（天慶九年歿年六十五）は撰者の主位にあり、且つ他にも文藝上の功績があつて、後世和歌の權威と仰がれたが、其の官位は低かつた。『古今集』の序に御書所の預とあるが、後に加賀・美濃の介を務め、大監物右京亮などを經て、延長八年に土佐守に任ぜられ、承平四年に任が果てて歸京する時、『土佐日記』を書いた。天慶三年に玄蕃頭に任ぜられ、同八年には木工權頭となり、翌九年に歿した。勅命を奉じて『古今集』中の精撰歌その他を撰んで、『新撰和歌集』を作つたことは後に述べる。家集に『紀貫之集』十卷（群書類從所收）があるが、恐らく自撰ではなく、後人が分類編成したものであらう。

貫之の歌風

貫之の作歌は『古今集』に九十八首、『後撰集』に七十五首、『拾遺集』に百七首、『新古今集』に三十二、

首入れられ、（勅撰作者部類に據る。）これに其の他の勅撰集に取られてゐるものを合計すれば、總數四百四十餘首の多數に達して居る。此の數字を見ても察せられるやうに、貫之は後世人麻呂と共に歌聖と仰がれたのであるが、それは主として、『古今集』の歌風が尊重せられた結果、その代表的歌人としてである。古今集時代の歌人には、個性の鮮明な歌を詠んだ人は殆どないのであつて、貫之の歌風は其の時代を最もよく代表して居るのである。彼は感情に動かされて歌ふ事は殆どなく、主として理智によつて詠んだのであるから、其の長所は自ら表現格調などの如き形式方面に發揮せられたのである。卽ち流麗な聲調と巧緻な技巧とは其の長所であつて、情熱を缺き、動もすれば理窟に陷つて、感興に乏しいのは其の短所である。貫之が語句を洗煉し、技巧に苦心した歌人であつた事は、家集に同工異曲の作の多いのを見ても推量せられる。例へば

人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香ににほひける　（古今）

と類似した作を家集中に求めれば、左の如きものがある。

故鄕に今日來て見ればあだなれど花のこころぞ昔なりける
あだなれど櫻のみこそ故鄕の昔ながらのものにはありける
故鄕に咲けるものから櫻花色はすこしも荒れずぞありける

左に揭げるのは、貫之の作歌中で佳作と認むべきものである。

夏の夜のふすかとすれば郭公鳴く一聲にあくるしののめ　（古今）

逢坂の關の清水にかげ見えて今やひくらむ望月のこま　（拾遺）
おもひかね妹がり行けば冬の夜の川風さむみ千鳥鳴くなり　（同）
むすぶ手のしづくに濁る山の井のあかでも人に別れぬるかな　（同）

文章史上の功績

貫之はまた和文の發達の上に大なる貢獻を遺して居る。彼の記した和文には「古今集序」「大堰川行幸和歌序」『土佐日記』等がある。『古今集』の和歌の詞書は、もとから備はつてゐたものもあるであらうが、貫之の筆によつて統一せられた所が多からうと思はれる。なほ『古今集』の序文には、彼の和歌に對する本質論や批評を聞く事が出來るのであつて、後の歌學歌論の端緒となつて居る。

凡河内躬恒

貫之と竝べ稱せられたのは凡河内躬恒（歿年不詳）である。『古今集』の序には前甲斐少目（さうくわん）とあるが、延喜七年に丹波權大目となり、同十一年に和泉權掾に任ぜられた。官位は貫之に比して一層低い人である。其の歌風は大體貫之等と同じであるが、貫之に比して技巧が少く、卽興に長じ、又客觀的に詠んだ作が少くない。

わが宿の花見がてらに來る人は散りなむ後ぞ戀しかるべき　（古今）
春くれて寂しき宿はつれづれと庭しろたへに花ぞ散りける　（家集）
住の江の松を秋風吹くからに聲うち添ふる沖つしら波　（古今）
千鳥なく濱の眞砂をふみわけて行く旅人はあはれ誰ぞも　（家集）

此等が佳作である。

紀友則

次に紀友則と壬生忠岑は、前の二人よりも更に官位が低く、歌の伎倆も劣つてゐる。歿年も確かでない。友則は古今の序に大内記とあるが、其の後の閲歴は傳はつてゐない。其の歌風には幾分か萬葉の餘韻を存して居る。前に擧げた「ひさかたの光のどけき」の作の外にすぐれた歌としては、

君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る　(古今)

五月雨にもの思ひをれば郭公夜深く鳴きていづち行くらむ　(同)

夕されば佐保の川原の川霧に友まどはせる千鳥なくなり　(拾遺)

壬生忠岑

等を擧げる事が出來る。忠岑は藤原定國の隨身から身を起し、『古今集』撰進の時は左衞門府生であつたが、後に攝津權大目に任せられ、六位に敍せられた。

有明のつれなく見えしわかれより曉ばかりうきものはなし　(古今)

は代表作であつて、これに類した情趣を得意に詠んでゐる。

大荒木の森の下草しげりあひて深くも夏のなりにけるかな　(拾遺)

久方の月の桂も秋はなほもみぢすればや照りまさるらむ　(古今)

神なびの三室の山をけふ見れば下草かけて色づきにけり　(拾遺)

風吹けばみねにわかるる白雲のたえてつれなき君が心か　(古今)

此等が佳作である。

撰者以外の歌人

撰者と略ぼ同時代の歌人として名高いのは、清原深養父・平貞文・素性法師・藤原兼輔・藤原興風・坂上是

則、及び女流歌人の伊勢などである。此等の歌人は三十六歌仙中に數へられ、素性法師以下の人々には、それぞれ家集が傳はつて居る。此の中で清原深養父（歿年未詳）は清少納言の曾祖父であり、平貞文（延長元年歿）は左中將平好風の子で、業平のやうに好色風流の名が高く、後世貞文を主人公として、多くの女性との交渉を記した歌物語の『平仲物語』の如き作品が現れた。（此の物語に就いては後に言ふ。）また素性法師（歿年未詳）は僧正遍昭の在俗の頃の子であり、藤原兼輔（承平三年歿）は堤中納言と呼ばれた人である。而して最後に擧げた伊勢（天慶二年歿）は、延喜頃の女流歌人として最も名の聞えた人である。伊勢守藤原繼蔭の女で、初め七條后に仕へ、宇多天皇の寵遇を蒙つた。家集の『伊勢集』（一卷）の初めの部分は歌物語の體裁になつて居り、又集中には『萬葉集』の歌や、他人の作が混入して居る。恐らく伊勢が書き留めて置いた家集を基として後の人が編んだのであらう。

三　後撰集時代

梨壺の五人

『古今集』の撰定があつて後四十七年を經て、村上天皇の天暦五年に、宮中の梨壺（昭陽舍）に、始めて和歌所を置かれ、藤原伊尹（これただ）を別當とし、大中臣能宣・清原元輔・源順・紀時文・坂上望城の五人を寄人とし、『萬葉集』の訓釋に從事せしめられると共に、『古今集』に漏れた歌と、其の後の作とを撰集せしめられた。此の五人を後世梨壺の五人と稱したことが『袋草子』に見えて居る。當時は延喜の治世と共に並び稱せられた時代であつて、天下はいよいよ太平の春を迎へると共に、詩文もまた再び隆盛とな

り、和歌は益盛に行はれた時である。和歌の撰集を命じ給うたのは、『古今集』に倣つて第二の勅撰集を作らしめようとせられたのであるが、萬葉の訓詁に從事せしめられたのは、平安朝初期以來既に讀み難くなつてゐた『萬葉集』に、親しみを感じた爲であつて、當時の文壇に尙古的風潮が興つたことを示して居る。此の時に撰進したのは『後撰和歌集』であり、萬葉に下した訓點は卽ち古點と稱するもので、萬葉研究の處女地を拓いたのであるが、其の訓法は只これ以後の撰集に採られた『萬葉集』の歌の訓に、其の一斑を遺して居るだけである。

後撰集

和歌所の五人によつて撰ばれた『後撰集』は、『古今集』の例に倣つて二十卷より成つて居り、其の名は『古今集』に次ぐ勅撰集といふ意によるのである。併し其の體裁は極めて不備であつて、序を缺き、選擇にも杜撰な點が多く、又選歌も概ね優秀なものと認め難い。『古今集』に於て詞書がすぐれた和文で記され、又作歌との連絡に不離の妙があつたのに較べて、此の集のは文章が拙く、主客の混亂がある。かくの如く體裁に不備があり、選擇が杜撰である上に、奏覽のことも所見がないから、從來種々の批判を下して、或は撰者の伎倆を疑ひ、或は奏覽を經ない未定稿の儘であるとも言はれて居る。序文を闕くのは適當な文章家がなかつた爲であり、選歌が拙いのは『古今集』の遺漏を拾つた爲であるとも考へられるが、撰者の執つた態度には明かに非難を受くべき點がある。

『古今集』の撰者は新時代の歌風を確立しようとする意氣を以つて從事したのであつて、集中に收めた古今の歌はすべて嚴選されたのであり、且つ撰者は强い自信を抱いて、自己の作品を何等憚る所な

く多く取入れたのである。然るに『後撰集』の撰者は、自己の歌は一首も入れずして、却つて延喜頃の歌人の作を最も多く採り、當時のものは權門貴紳の作を比較的多く入れて居る。これは言ふまでもなく、『古今集』を典型とする保守的な當時の歌壇一般の風潮によるのであるが、それと共に撰者は伎倆を缺き、自ら信ずる力を缺いてゐたことを示すものである。なほ撰者が歌の價値判斷に於ても缺くる所があつた事は、戀の部六卷の多くが男女の贈答歌であつて、作品の價値よりも、寧ろ事實の興味に重きを置いた點を見ても明瞭である。かくて『後撰集』の成立した頃は、早くも保守退嬰の風を生じ、『古今集』の形骸を摸倣して、清新の氣を失つたのである。

源順

天暦頃の歌人で最も名高いのは源順（永觀元年歿七十二）である。嵯峨天皇の皇子大納言定の曾孫で、父は左馬允擧である。天暦七年四十三歳の時文章生に補せられ、後に和泉守となり、更に能登守となつたが、官位は滯り勝ちであつて、不遇の中に世を終つた。當時の學者は大抵和漢の學を兼ねてゐたが、順は其の代表的人物であつて詩文に長じてゐた。梨壺の五人の中に加はつて、『萬葉集』に訓點を施し、又名高い辭書の『倭名類聚鈔』十卷を作つた。なほ『竹取物語』『宇津保物語』『落窪物語』などの作者にも擬せられて居るが、これには疑問がある。其の詩文は『扶桑集』『本朝文粹』『朝野群載』等に散見し、和歌は家集（源順集一卷）の外に、『拾遺集』以下の勅撰集に多く取られて居る。當時の歌人は一般に技巧の末に囚はれて、詩趣の豐かな作を詠ずる者は殆ど無かつたのであるが、順は時代の傾向を代表する歌人であつた。

七夕は空にしるらむささがにのいとかくばかりまつる心を
露を重みたえぬばかりの青柳はいくめかけたるこがねなるらむ
をとどしもこぞも今年もをととひも昨日も今日も我が戀ふる君　（源　順　集）

此等によつて、彼の歌風を知る事が出來よう。なほ家集には、五月五日に菖蒲を奉る時の和歌を、獻上目錄の體に書いて

進上　こころざし
深　ふかき
右葉之菖蒲草　みぎはのあやめぐさ
千年五月五日可刈　ちとせのさつきいつかかるべき

の如き作があり、また藤原有忠の例に倣つて、四十八字の假名を首尾に一つづつ詠み入れた四十八首や、作歌を雙六盤の形に組合せたものなどがあつて、遊戲的な試みをして居る。順の歌集にはなほ、『源順馬名合』（一卷）群書類從所收がある。馬の毛色を詠んだ十番の歌合である。要するに順が歌人として重んぜられたのは、其の機智奇才によるのであつて、其の歌の價値は極めて低いのである。

當時の歌人

當時作歌に秀でたのは、五人の撰者の中では元輔・能宣であるが、撰者以外の人では、壬生忠岑の子忠見、平兼盛・源重之を擧ぐべく、女流では伊勢の女中務がすぐれて居る。元輔以下六人は三十六歌仙に數へられて居り、其の家集にはそれぞれ『元輔集』『能宣朝臣集』『忠見集』『兼盛集』『重之集』『中務

集』各一巻がある。何れも群書類從に收む。これ等の家集を見ると、大部分が題詠・屛風繪の歌・贈答歌などであつて、歌風は技巧的で、概ね文學的價値の低いものである。左に有名な作歌を各一首づつ掲げて置く。

秋の野の萩の錦を我が宿に鹿の音ながらうつしてしがな　（詞花）　元輔

御垣守衞士のたく火の夜はもえ晝は消えつつ物をこそ思へ　（詞花）　能宣

いづかたに鳴きて行くらむ時鳥淀のわたりのまだ夜深きに　（拾遺）　忠見

たよりあらばいかで都へつげやらむ今日白河の關は越えぬと　（同）　兼盛

村雨に立ちかくれせし柏木の靑葉に夏はあつまりにけり　重之

忘られてしばしまどろむ程もがないつかは君を夢ならで見む　（拾遺）　中務

日本紀竟宴和歌集

古今・後撰兩勅撰集以外に、當時の作歌を集めたものには、『日本紀竟宴和歌集』『新撰和歌集』『古今和歌六帖』などがある。朝廷で『日本書紀』を講ぜしめられることは、既に奈良朝の養老五年に行はれたのであつて、其の後國史に散見するものを擧げれば、康保二年・弘仁三年・承和六年・元慶二年・延喜四年・承平六年・康保二年に行はれて居る。書紀は大部のものであるから、講讀は三四年乃至七八年に亙つて行はれるのであつて、終了の後には列席した親王以下諸臣に宴を賜ふのである。これを日本紀竟宴といふ。竟宴には紀中の人物を題にして、和歌を詠ましめられたのであつて、現存するものは、元慶六年の竟宴和歌を以つて最初とするのである。尤も日本紀竟宴はそれ以前から行はれてゐたのである

が、弘仁時代には専ら詩を作らしめられたのである。現存する日本紀竟宴の和歌は『日本紀竟宴和歌集』二卷（續群書類從所收）に收められて居る。元慶六年、延喜六年、及び天慶六年の竟宴の作歌であつて、作者七十四人、歌數八十三首を含んで居る。而して元慶六年度のは、藤原國經の作歌二首あるのみであるが、此の時の和歌は勅撰集や、其の他の撰集に多少散見して居る。此等の作者の中には、勅撰集の作者もあるが、大部分は歌人でなく、殊に其の和歌は敍事的であるから、文學として見るべきものは極めて稀である。例へば

得₂事代主神₁　藤原佐高

須女美萬仁夜志末乎佐利弖奈美能宇倍乃阿遠布事加幾遍多比爲須留可那

得₂大鷦鷯天皇₁　藤原時平

多賀度能兒乃保利天美禮波安女能之多與母爾計布理弖伊萬蘇渡美奴留

かくの如く、和歌としては論ずるに足らないのであるが、後の詠史の祖となつた點に於て、注意すべきものである。

新撰和歌集

次に『新撰和歌集』四卷（群書類從所收）は、紀貫之が『古今集』を撰進した後に、更に醍醐天皇の勅を奉じて、『古今集』中の精撰歌、及び弘仁以降延長に至るまでのすぐれた歌人の秀歌を撰んだものである。貫之が記した序文によれば、勅命を蒙つた後に、土佐守に任ぜられたので任地に下り、政務の餘暇に撰定したのであるが、承平五年に任期が滿ちて歸京した時は、既に天皇の崩御の後であつたので、奏覽す

るに至らなかつたのである。和歌は

袖ひぢてむすびし水の凍れるを春立つけふの風やとくらむ

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる

のやうに春と秋、夏と冬、賀と哀、別と旅、戀と雜を、兩々雙べ揭げて居る。選歌の總數三百六十首を四卷としたのは、序に「蓋取三百六十日關四時耳」とあるのを見て明かである。

古今和歌六帖

次に『古今和歌六帖』（續國歌大觀・校註國歌大系所收）は當代の和歌を中心として撰集したもので、私撰歌集の中で注意すべきものの一である。一名を『紀氏六帖』又は『紀家六帖』といふのは、紀貫之の女なる紀內侍が撰んだものと傳へられて居るのに因るのであるが、（淸輔の袋草子の說）一說には村上天皇の皇子具平親王の御撰であるとも言はれて居る。（源家長の寫本の奧書に見える說）併し孰れも信ずべき說とも思はれないから、撰者は姑く未詳として置く外はない。從つて集の成立年代も確かにはわからないが、選出せられてゐる歌の最も新しいのは、花山一條兩帝の頃に歿した源重之・藤原高遠等の作であるから、一條天皇の頃に成つたものであらうと考へられる。內容は記紀の歌を始め、萬葉時代から圓融花山兩天皇の頃に至るまでの撰集・家集・歌合などから凡そ四千五百首を選出し、題によつて類別して、六帖十卷とした一大歌集である。此の集は題詠が盛に行はれるやうになつた時代の、要求に應ずるために編まれたもので、類題和歌集の嚆矢である。集中の歌に重出があり、又原作を誤つたり、作者を誤り記してゐるやうな粗漏はあるけれども、萬葉・古今などに見えてゐない作歌を傳へて居るのであつて、和歌史の研究

には貴重な資料である。

四　歌合の發達

歌合の起原

歌合の起原に就いては一般に、弘仁期に流行した闘草から起つたと見られて居る。闘草は闘花ともいつて、もと支那で行はれた遊戯である。『玉塵集』に「長安士女春時闘レ花、戴挿以二奇花多者一爲レ勝、皆用二千金一、市二名花一植二于庭苑中一、以備二春時之闘一也。」とあるので、其の一斑を覗ふ事が出來る。是が我が國にも流行した事は、『文華秀麗集』所載の滋野貞主作「觀レ闘二百草一簡二明執一一首」、及び之に和した巨勢識人の詩などによつて察せられる。闘草は即ち後の花合の起原であるが、花合は草合や五月五日の根合などと共に、物合の一種である。現在知られて居る花合の最も古いのは、寛平年間の「寛平菊合」であるが、歌合は既に是より前から行はれて居るのであるから、花合も亦古くから行はれてゐた筈である。而して「寛平菊合」は、後に述べるやうに、歌合と殆ど擇ぶ所がないのであるが、古くは闘草と同じやうに、草木の美を爭つたのであつて、和歌の優劣を決するやうな事は無かつたであらうと思はれる。要するに、花合はもと草木の花の美を爭ふ遊戯であつたが、後にはそれに和歌を添へて、花葉の優劣と共に、和歌の勝負をも判定するやうになり、更に變遷して和歌の勝負を主とし、草木の優劣を副とするやうになつた時、茲に始めて歌合の形式が成立したのである。

最古の歌合

歌合が始まつた年代は詳かでないが、文徳天皇の頃には既に内裏歌合が行はれたやうである。例へ

寛平期の歌合

ば『和歌現在書目錄』（續群書類從所收）の序中に、「歌合者田村二宮洞院百番艶流之濫觴也。」（田村とあるのは田村帝即ち文德天皇である。）と記し、また北畠親房の著と傳ふる『古今集聞書』には、「心がへするものにもが」（古今戀一）の解に、「此歌は文德天皇の御時、內裏歌合に讀る昭宣公の御歌也」と記して居る。次いで陽成天皇の元慶の頃には、「陽成院歌合」や「紀長谷雄家歌合」などが催されたことが、文獻に見えて居る。かくて光孝天皇の仁和年間になると、現存する最古の歌合の「在民部卿歌合」が行はれた。これは在原行平が民部卿であつた頃、即ち元慶の末若くは仁和の初年に、其の家で行はれたものであつて、今は『群書類從』に收められて居る。其の詳細な記事は傳はらず、歌人の名も記されてゐないけれども、郭公の歌を十番、戀の歌を二番合せて、勝負を定めたのであつて、未だ小規模の歌合であつた。仁和年中にはなほ、「仁和中將御息所家歌合」が行はれた事が、『古今集』の詞書によつて知られるのであるが、其の歌合は傳はつてゐない。

次いで宇多天皇の御代になると、いよいよ盛大に行はれるやうになつた。即ち寛平年間には、「寛平菊合」と「寛平御時后宮歌合」とが行はれ、共に稍委しい記事が傳はつて居るので、當時の花合や歌合の模樣を察する事が出來る。先づ「寛平菊合」（群書類從所收）は、「寛平御時菊合」とも呼ばれて居るのであつて、現存する花合の最も古いものである。此の菊合には、左方右方共に菊を植ゑた洲濱を奉つたのであつて、菊の枝には菊を題にして詠んだ和歌を、短冊に書いて結びつけたのである。此の菊合によると、當時の花合は既に、歌合と殆ど異なる所の無いものとなつてゐたのである。次に「寛平御時后宮

歌合」は、前番後番の二回行はれたのであつて、初めのは寛平六年正月十三日に行はれ、後のは寛平九年九月三日に行はれた。此の后宮を從來宇多天皇の皇后（七條后温子 藤原基經女）としたのは誤であつて、『大日本史料』第一編之二に、皇太后班子女王として居るのが正しい。即ち光孝天皇の中宮で、宇多天皇の御生母なる班子女王（仲野親王御女）で、當時洞院中宮又は洞院太后と申した。從つて『萬代集』には此の歌合を「洞院中宮百番歌合」と言つて居る。さて此の兩度の后宮歌合の歌は、『新撰萬葉集』に百七十首許り收められ、又『古今集』には五十七首入れられて居る。『群書類從』所收のものは、前後何れの歌合であるか詳かでなく、且つ末尾を闕いて居るのであるが、歌合の模樣は稍詳細に記されて居る。即ち此の歌合は、貫之・躬恒・友則・忠岑以下都合十七名許りの歌人を召して、春夏秋冬戀各二十番、即ち百番二百首を合せたのである。歌の勝負の記入もなく、從つて判詞も記されてゐないのであるが、從來に例のない大規模のものであつた事は明かである。

歌合の興隆

寛平年間には、宇多天皇の皇兄是貞親王にも歌合を行はれたのであつて、『古今集』に「是貞親王家歌合」の和歌が散見する。當時宇多天皇は殊に和歌を好ませられて、屢歌合を行はしめられ、又事ある毎に群臣に勅して和歌を奉らしめられた事は、『新撰萬葉集』上卷の序に「當今寛平聖主萬機餘暇、擧レ宮而方有レ事レ合レ歌、後進之詞人近習之才子、各獻ニ四時之歌一、初成ニ九重之宴一、又有ニ餘興一同加ニ戀思二詠一。」と記して居るのを見て明白である。此等の歌合は後世に傳はらなかつたが、源公忠の『公忠朝臣集』に「寛平の御時歌合に」と記した作歌があり、また『紀貫之集』に「亭子院の御門の歌合し給ふに云

云」の詞書の歌があるのを以つても、歌合が屢行はれた事は確かである。其の他時々群臣に和歌を奉らしめられた事は、古今・後撰其の他家集の詞書に「寛平御時云々歌奉れと仰せられければ」「亭子院の御屏風の繪に云々よませ給ひければ」「寛平御時御屏風に歌書かせ給ひける時」などと記した作歌の多いのを見て察する事が出來る。宇多天皇は御讓位の後も、なほ歌合や花合などを屢行はれたのであるが、現存するもので『古今集』の撰進以前に行はれたのは、「朱雀院女郎花合」（群書類従所收）である。これは醍醐天皇の昌泰元年の秋に、宇多上皇が后宮（藤原溫子）と共に、朱雀院で行はせられたもので、花の優劣と共に和歌の勝負を定められた事は言ふまでもない。要するに、歌合が特に盛に行はれるやうになつたのは寛平以後である。而して當時歌合や花合が盛になつたのは、班子女王や宇多天皇などが、率先してこれを奬勵し給うた爲であつて、宇多天皇の皇子の醍醐天皇の御代に至つて、『古今集』撰上の勅があつたのも當然の事と思はれる。

延喜頃の歌合

醍醐天皇の延喜年中には、歌合は益頻繁に行はれ、而も規模はいよいよ大きくなつた。延喜年間の歌合で後世知られて居るのは、延喜二年の「內裏歌合」以下、數回の「內裏歌合」を始めとして、同六年竝に同十三年の「亭子院歌合」、同十三年の「陽成院歌合」、同二十年・二十一年・二十二年の「京極御息所歌合」、其の他「貞文家歌合」「貫之家歌合」などである。此等の歌合の中で現存し、しかも劃期的なものと思はれるのは、延喜十三年の「亭子院歌合」である。今此の歌合に就いて述べるに先立つて、延喜頃に行はれた樣式の異なつた歌合に就いて一言述べて置く。延喜の頃特殊の樣式で行はれた歌合に、

「むかしい歌よみの秋を合せける」と標記した黒主豐主の歌合や、延喜二十一年三月七日の「京極御息所歌合」などがある。（共に宮内省圖書寮所藏の『歌合』と題する十卷本現存六卷に收められて居る。）

前者は例へば、

左　　くろぬし

おもしろくめでたきことをくらぶるに春と秋とはいづれまされり

右　　こたふ　とよぬし

春はただ花こそは咲けのべごとに錦をはれる秋はまされり

の如き問答形式のもので、この歌合に伍躬恒が歌を以つて判を加へて居る。又後者は

本

めづらしき今日の霞のやをとめを神もこひしとしのばざらめや

返

左持

やをとめを神ししのばばゆふだすきかけてぞこひむ今日のくれなば

右

ちはやふる神しゆるさば春日野にたつやをとめのいつかたゆべき

の如きものであつて、躬恒其の他の著名な歌人の本歌に對して、其の返歌を左右に番へて、判を下し

たものである。山岸徳平氏は、此等が歌合の最初の形式であらうと言つて居られる。

さて延喜以前の歌合花合に就いて、文獻の上から知り得るのは、以上の如きものであるが、延喜十三年の「亭子院歌合」になると、花合の形式は歌合に取入れられて、儀式が完備すると共に、すべての形式が備はつたやうである。此の歌合は、延喜十三年三月十三日に、宇多法皇の御所なる亭子院で行はれたのであつて、歌人は天皇・宇多法皇以下兼覽王・伊勢・貫之・躬恒・興風・是則・友則等である。而して序によれば、此の歌合には左右の頭、方の親王、方人・講師・員指(かずさし)の童などを定め、なほ儀式としては、樂を奏し、洲濱を奉り、上達部は階の左右に分れ、女藏人等も侍ひ、勝負を判じた後祿を賜はつたのである。かくて左右から洲濱を奉る事が全く儀式となつた事と、管絃の奏の行はれた事は、形式の發達上注意すべき事であるが、なほ判詞及び判の趣が傳はつて居るのは、歌合の研究に好資料を供給するのである。

「亭子院歌合」は「群書類從」「續國歌大觀」などに收められて流布して居るが、最近佐々木信綱博士が「扶桑珠寶」の一として複製刊行せられた醫學博士木村徳衞氏の藏卷は、平安時代末期の書寫であつて、流布本の誤を正すべき貴重な資料である。此の古鈔本は卷子本であつて、藤原俊忠が大部分を書き、其の父忠家が中間の十八首を書き、子の定家が校合したものであると言はれて居る。圖版に掲げたのは、忠家の筆寫の部分である。左に釋文を添へて置く。尤も便宜上所々に漢字をあてて置いた。

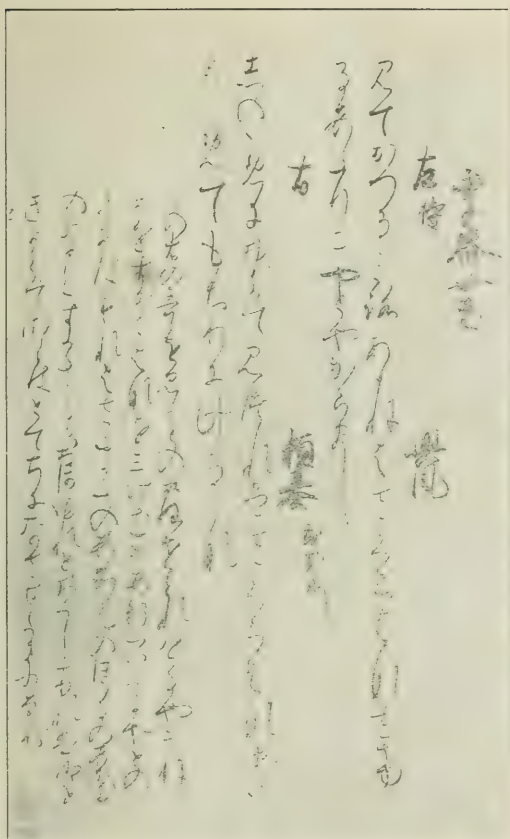
季　春　廿首

左持　　興風

見てかへる心あかねば櫻花咲けるあたりに宿やからまし

右　　頼基　或友則

しののめにおきて見つれば櫻花まだ夜ごめても散りにけるかな

亭子院歌合（木村德衞氏藏）
扶桑珠寶より

この右の歌を、帝の仰せられけるやう、寝眠をする花を見けむぞ、愛敬づいたるやとのたまはすれば、定方の朝臣昇の朝臣の、夜戸出姿こそおぼゆれと奏しければ、御ときよくて、さらばとて持になさせ給ふなり。

天暦期の歌合

延喜時代に次いで天暦年中には、七年並に九年に「内裏歌合」があり、十年三月には「麗景殿女御歌合」、同五月には「宣耀殿御息所歌合」、同八月には「坊城右大臣殿歌合」があり、又十一年二月には

「藏人所衆歌合」が行はれた。此等は現存するものであるが、此の外に散逸したものや、現存する歌合の年代未詳のもので、天暦年間に行はれたものも多からうと想像される。かくて歌合は益盛大に行はれるやうになつたのであるが、村上天皇の御代の代表的な歌合は、天德四年の「內裏歌合」であつて、其の前年には始めて詩合が行はれた。

天德詩合

天德三年の詩合は『天德三年八月十六日鬪詩行事略記』群書類從所收によつて窺ふ事が出來る。當日の夜清涼殿に於て、主上臨御のもとに行はれたのであつて、左右の頭・方人・講讀師などを定め、詩人は菅原文時・源順を左とし、大江維時・橘直幹を右として、十番まで鬪はしめられた。十番目に至つて、判者維時が勝負を決しかねて持とした時は、既に曉近くなつたのであつて、歌舞の奏を終つて入御になつた。卽ち此の詩合は歌合の行事に倣つて行はれたのである。

天德歌合

天德四年の「內裏歌合」は、「亭子院歌合」の頃に略ぼ完備した法式を承け、更に前年に行はれた詩合に倣つて、一層大規模の計畫を立てて行はれたのである。此の歌合は天德四年三月三十日に、清涼殿と後涼殿の間の廂で行はれたのであつて、儀式の次第は『群書類從』所收の「天德歌合」に記載せられた村上天皇の御記、殿上日記、及び左右の假名日記によつて、大體を窺ふ事が出來る。卽ち左右の頭には更衣左は藤原脩子右は未詳を任命し、念人(方人)には左右とも女官十二名、男官十五名、童は左右各七名をそれぞれ定め、歌人は左方藤原朝忠・坂上望城・大中臣能宣・少貳命婦・壬生忠見・源順・本院侍從の七名、右方平兼盛・藤原元眞・中務・藤原博古・清原元輔の五名、講師は左方源延光、右方源博雅、判者は小野宮左大臣藤原實賴と定められた。當日は申の二刻に主上の出御があり、やがて洲濱を奉る頃既に薄暮に及

んだので、南北の庭上に庭燎を焚き始めた。かくて判者が次々に勝負を決して、二十番までの判定を終へて、結局左方の勝と決し、管絃の御遊があり、饗宴を終つて主上が入御になつたのは、夜が白々と明けはなれる頃であつた。此の歌合には霞・鶯・柳・櫻・欵冬・藤・暮春・首夏・卯花・郭公・夏草・戀の十二題を二十番鬪はしめられたのであるが、二十番目は戀の歌であつて、

戀すてふわが名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか　（左）　忠見

忍ぶれど色に出でにけり我が戀は物や思ふと人の問ふまで　（右）　兼盛

であつた。雙方とも歌人は當代の名家であり、歌には優劣がなかつたので、判者も判定しかねて天機を伺ひ、遂に兼盛を勝と決したのであるが、忠見はこれより病を得て世を去つたと傳へられて居る。（沙石集）この一例によつても、當時歌合の勝敗が虚榮心に燃えてゐた歌人の間に、極めて重大視せられてゐたことは明白である。かくて「天德歌合」は極めて盛大に行はれ、其の行事を始めとして、番毎に加へられた判詞なども、詳細に記錄せられたから、爾來長く歌合の規範と仰がれたのである。

其の他の歌合

村上天皇の御代には「天德歌合」の後に、なほ應和二年五月並に八月兩度の「内裏歌合」があり、又康保三年八月十五日の夜には「内裏前栽合」が行はれた。次いで圓融天皇の天祿三年八月二十八日には「規子内親王家歌合」（野宮十番歌合）があり、また其の前後には「圓融院扇合」が催され、更に貞元二年八月十六日には「三條左大臣家歌合」が催された。此等は文獻に見えたものを擧げたのであるが、其の他にもなほ催されたであらうと思はれる。かくの如く歌合は時代を下るにつれて、益頻繁に且つ盛大

に行はれたのであるが、其の弊も亦少くなかつた。歌合には初から題があつて詠むのであつて、詠むよりも作る事が多いのであるから、其の歌風は自ら智的になり、技巧的に流れて、生氣のないものとなつた。古今集時代の和歌が理智的になり、技巧的になつた事は既に述べたのであるが、其の後題詠や歌合が益盛になつた結果、其の弊害はいよいよ甚しくなつて、却つて歌壇の墮落を導いたのは已むを得ぬ事である。

第四章　神樂と催馬樂

上古の歌舞音樂は、和琴や和笛の類を伴奏樂器とする單純なものであつたが、藤原奈良の時代に三韓・隋・唐・印度などから外來音樂が傳來し、此等が佛會に用ひられるやうになつてからは、雅樂寮に於ても主として外來の歌舞音樂を傳習せしめられたから、從來の歌曲はいよいよ萎靡して振はなくなつた。次いで平安時代になつて清和天皇の御代に、大嘗會に上古の歌曲を復興し給うて以來、固有の音樂と其の歌謠は始めて復活する機運に向つたのである。而して平安初期に制定せられた謠物にして現存する主なものは、神樂歌・催馬樂・風俗歌・東遊の四種である。

神樂は一に神遊ともいふ。天岩戸の前で天鈿女命が滑稽な歌舞を奏したと傳へられて居るから、上古から神慮を慰める爲に、神前で奏したものと思はれる。其の初めは定まつた舞も歌もなかつたので

あるが、後世漸く一定したのがここにいふ神樂歌である。現存する神樂歌の中の古いものは、奈良朝の頃に成つたのであるが、之に整理を加へたのは、清和天皇の御代から圓融花山兩帝の頃までの間であつて、最後に大修正を施したのは、左大臣源雅信であると云はれて居る。神樂は古くは豐樂院の清暑堂で行はれたのであるが、一條天皇の長保四年十二月に、始めて內侍所の庭上で奏せしめられて以後、賢所の大前で奏せられる事になり、更に白河天皇の承保年中から每年十二月に行はれる事になつて、今日に及んで居る。（それ以前は年々行はれる事はなかつた。）神樂歌は神社に於て行はれるものを含めていふ事もあるが、此所にいふ神樂歌は宮中の式樂に用ひられるものを指すのである。其の現存するものは凡そ八十首である。

神樂歌は初め採物と前張とに區分されてゐたのであるが、後に更に細分して庭燎・採物・大前張・小前張・星歌・雜歌の六部とし、此の順序によつて奏せられたらしい。採物は人長（卽ち樂長）が舞ふ時に手に執る物に因んだ歌であつて、神樂歌本來の面目を保つてゐるものである。前張は森嚴な神儀の後で、餘興として奏せられるもので、採物の歌が神事に關することを歌つて居るのに對して、寧ろ人事を主として居り、滑稽味を帶びたものが多い。又採物の歌は短歌體であるが、前張の中の大前張は主として短歌、小前張は短歌以外の形式のもので、民謠らしい自由な姿のものである。小前張は星歌・雜歌と共に、比較的に後から取入れられたもののやうである。前張の名義に就いては、餘興に用ひた催馬樂に基づくとする說もあるが、前張の「辟榛に衣は染めむ」といふ歌が、餘興の最初に奏せられたので、

其の冒頭の「さいばり」が、やがて前張の名稱となつたのであると見る說の方が優つて居る。神樂歌は笏拍子を取つて謠ふのであつて、伴奏樂器としては初め和琴と和笛を用ひたが、後に篳篥をも加へるやうになつた。歌に本と末があるのは、神座に向つて左を本方とし、右を末方として、樂人が左右に分れて奏する所から生じた區別である。神樂歌の現存する最古の寫本は、樂家安倍家所藏の『信義本神樂歌』一帖であつて、醍醐天皇の曾孫源信義の自筆と稱せられて居る。又神樂の古い譜本には、近來發見せられた近衞公爵家所藏の『神樂和琴秘譜』一軸がある。御堂關白道長の自筆と傳へられるもので、今は國寶となつて居る。信義本と共に複製せられて扶桑珠寶の一として刊行せられた。

催馬樂は主として近畿地方を中心とする古い民謠であるが、弘仁前後の頃から宮廷または上流の間に謠物として用ひられるやうになつたのである。催馬樂の名義に就いては『梁塵秘抄口傳集』（後白河院御撰）に、諸國から輸送する貢の馬を催す爲の民謠の義から出たものとしてあるが、『郢曲抄』（著者未詳）には催馬樂といふ唐樂があつて、其の旋法に合せて謠つたので此の名が起つたのであるといふ。なほ長瀨眞幸は宣長の說を承けて、催馬樂の初にある「いで吾が駒」の歌に、馬を催すことが謠つてあるから、やがて之を總名としたのであるといつて居る。要するに名義はなほ詳かでない。催馬樂の譜には源家流と藤家流とがあつた。源家流は宇多天皇の皇子敦實親王に起り、藤家流は源雅信から起つたといはれて居る。現存する最古の催馬樂譜本は帝室御物の『天治本催馬樂抄』であつて、藤家流の面目を窺ふことが出來る。これは崇德天皇の天治二年の書寫の轉寫本であるが、書風から推して平安時

代の筆寫であることは明かである。（圖版參照）なほ催馬樂の傳本で最古のものは、鍋島侯爵家所藏本であつて、是も平安時代のものかと言はれて居る。（最近扶桑珠寶の一として複製本が刊行せられた。）催馬樂に呂と律の別があるのは、歌曲の旋法による分類である。之を謠ふには神樂と同じく笏拍子を打つのであつて、伴奏には和琴と笛を用ひる。併し後には琵琶を用ひたことは、『源氏物語』などにも見えて居る。平安時代當時謠はれた歌謠の中で現存するものは六十一首である。此等の曲譜は傳存してゐるけれども、謠ひ方は南北朝頃までに絶えてしまつたのであつて、現在行はれて居る七曲は、江戸時代に復興せられたのである。

天治本催馬樂抄（帝室御物）
古典保存會複製本に據る

東遊

東遊は一に東舞といふ。東遊は大和地方の舞を倭舞といふのに對する名稱である。もと東國の民謠であるが、其の起原は詳かでない。之を奏した最古の記錄は『三代實錄』の貞觀三年東大寺大佛供養の條であるが、もと神樂と同じく、諸社の神前で奏せられたもののやうである。現存するものは六首で

あつて、長いのもあるが主として短歌である。

風俗歌

風俗歌は諸國の民謠であつて、其の本源は諸國(國名の明かな歌は、伊勢を除く外悉く東國)に於て長く傳誦せられた歌曲であるが、貴族の謠物となつたのは平安時代になつてからである。『古今集』に大歌所御歌として載せられて居るものの中には、神樂催馬樂などの歌曲の外に、「近江ぶり」「みづぐきぶり」「しはつ山ぶり」等の曲名のものがあるのは、その土地の風俗歌である。今文獻に遺つて居る風俗歌は、延喜年間に制定せられたもので、二十六首ある。其の歌曲は後に雜藝の一として、僅かに面目を保持してゐたのであるが、鎌倉時代に入つてから間もなく滅んでしまつた。

此等の特質

以上述べた四種の謠物は、奈良朝から平安朝初期の頃までに作られたものであつて、其の短歌形式のものは、萬葉から古今に移る過渡期の和歌として見る事が出來るのであるが、謠物として興味もあり、又後の謠物に關係があるのは、寧ろ長短樣々な形の民謠である。此等の民謠は主として人事を歌つたものであつて、其の半ばは野趣を帶びた戀愛を歌つて居る。而して此等の戀愛歌は、萬葉の相聞歌に比して遙かに複雜な抒情であつて、劇的なものが多い。抒情歌以外には祝賀の意を敍べたもの、風俗を歌つたもの、童謠めいたもの、滑稽又は諷刺を歌つたもの、其の外少數ではあるが敍景詩の如きものもあるのであつて、後の小歌の源流をなして居る。其の句形は極めて變化に富んでゐて、一句の音數は上古の歌謠の如く不定であるが、其の間に五七調と七五調とが錯雜して居る。句數は二句のものから十四五句までの種々の形があるが、特に多いのは五七五七七七の六句歌である。而して一首

で獨立してゐるのもあるいであるが、二節又は二節以上から成るものが多い。修辭は反覆を最も多く用ひ、譬喩には各種のものがあつて、和歌に見られない特色がある。又歌詞の間若しくは末尾には、「はれ」「おけ」「そよや」「なよや」の如き拍子の詞を置いて聲調を助けて居るのも、謠物として極めて興味がある。

神樂歌

採物　榊

本 榊葉の　香をかぐはしみ　とめくれば　八十氏人ぞ　まとゐせりける　八十氏人ぞ　まとゐせりける

神籬の　みむろの山の　榊葉は　神の御前に　茂りあひにけり　茂りあひにけり

小前張　蛬

本 きりぎりすの　ねたさうれたさや　御園生に參り來て　木の根をほりはんで　オサマサ　角折れぬ　オサマサ　角折れぬ

末 ねたさうれたさや　御園生に參り來て　木の根をほりはんで　オサマサ　角折れぬ

催馬樂

夏引

一段 夏引の　白絲　七量あり　さごろもに　織りても著せん　汝妻離れよ

二段 かたくなに　ものいふ女かな　汝麻衣も　我が妻の如く　袂よく　著よく肩よく　こくびやはらかに　織ひ

著せめかも

風俗歌

月　面

月のおもを　さわたる雲の　まさやけくみる　なはの　圓江(つぶらえ)の　秋なれば　霧立ちわたる　なはのつぶら江

第五章　物語の發達

一　物語の種類

物語は其の語が示す通り、もとは人々が好んで語る談話を指すのであつて、原始的なものは神話・傳說・說話の類であるが、平安時代の初期に假名文字が發達して、國文を自由に綴り得るやうになつてからは、目に訴へるものと、耳に訴へるものとが分離するやうになつた。是にいふ物語は、口々に語り傳へられた流動的なものに對して、文字に記されて固定したものを指すのである。而して平安時代の人々が物語と呼んだものは、後の小說と共通點の多いことは勿論であるが、其の範圍は極めて廣いのである。卽ち『榮華物語』は歷史であり、『今昔物語集』は說話であつて、共に創作的な小說ではない。又『伊勢物語』は一名を『在五中將日記』とも呼ばれ、『和泉式部日記』は『和泉式部物語』ともいはれたものであつて、日記と物語との間にも嚴格な區別が無かつたのである。要するに平安時代のいはゆる物

語は、創作的な敍事詩、即ち作り物語（今鏡卷十所見）を始めとして、和歌を中心興味とする歌物語（榮華物語淺緑卷所見）や、說話を記した說話文學や、自己又は他人の個人的傳記である所の日記文學や、作者が或目的のもとに史實を文學的に記述した、歴史物語などを包含して居るのである。此等の作品は其の創作心理はそれぞれ異なるのであるが、內容形式ともに共通した文學的特質を有する點に於て、之を物語と呼んだのである。併し國文學史上に於ては、之を分類して考察するのが便利であるから、今は一般の分類に從つて、物語（狹義の物語）・日記文學・說話文學・歴史物語の四種に分つて、別々に其の發達を記述することにする。

平安前期の物語

平安時代に入つて間もなく發達した假名文字を使用して、最初に書いた和文は、和歌の序や消息文や日記の類であらうと思はれるが、漢詩漢文が衰運に向つた頃には、和文で物語を綴る事も漸く行はれるやうになつたのである。當時書かれた物語（狹義の物語である。以下同じ。）は數多くあつたであらうと思はれるが、大部分は散逸したのであつて、（散逸物語については後に述べる。）幸に後世に傳はつたものは、僅かに『伊勢物語』と『竹取物語』の二篇があるのみである。此の二篇はたまたま物語發生當初に存した、二つの系統の代表的作品である。即ち『伊勢物語』は歌物語であり、『竹取物語』は作り物語である。記紀の神話傳說の中に歌謠を中心とするものがあり、又『萬葉集』の卷十六に有由緣歌の多くがあつて、其の詞書に「昔者有壯士云々」「昔者有娘子云々」などの如き冒頭のものがあるが、此等から系統を引いて、平安時代の初期に現れた和文の歌物語で現存するものは、即ち『伊勢物語』を最古とするのであつて、此の流

を汲んだのは『大和物語』である。又一方に於ては、記紀・風土記の如き上古の說話文學と、支那印度の傳說の影響を受けて成つた、『日本靈異記』などから系統を引いて現れたものは『竹取物語』であつて、これは傳奇的物語である。平安時代の作り物語は、此の二種の系統の物語を祖として發達したのであつて、長篇を見るに至つたのは圓融花山兩帝の御代である。後に述べる『宇津保物語』『落窪物語』などは其の頃現れた長篇物語の中で、幸に散逸を免れたものであつて、平安時代の物語の代表作『源氏物語』の出現を豫告して居るのである。是より平安時代前期に現れた物語について、記述しようと思ふ。

二　歌物語

『伊勢物語』は和歌を中心とする百二十五節（書物によつては百二十六となる）の小話を集めた歌物語である。各節は「昔男ありけり」または「昔男云々」で始まつてゐて、それぞれ獨立した昔男の物語のやうに見えるが、實は六歌仙の隨一といはれる在原業平の逸話、若しくは業平に假託せられた說話を集めたものであるから、一篇の物語は業平を主人公とする說話的歌物語と言つてもよい。而して其の個々の說話は、必ずしも業平の一生を、日を逐うて記したものではないけれども、第一段は初冠（うひかうぶり）に始まり、最後の段は「終に行く道とはかねて聞きしかどきのふ今日とは思はざりしを」の辭世の和歌に終つて居るのであるから、古くは之を業平一生の自叙傳、若しくは其の歌日記と見做したのであつて、『源氏物語』の總角

の巻には「在五が物語」と云ひ、また『狹衣物語』には「在五中將の日記」と呼んで居る。併し此の物語の中に含まれて居る和歌二百九首の中には、『萬葉集』に見えてゐるものが九首あり、また『古今集』中の讀人不知の作や、『古今和歌六帖』『後撰集』などに業平以外の人の作として載せられて居るものが、凡そ二十五首あるのである。從つて此の物語は業平の作歌を主とし、それに當時人口に膾炙した和歌を加へて、之を業平の逸話に附會して、其の歌の由來を語つた假構的歌物語であると見るのが正當である。

作者と成立年代

『伊勢物語』の作者に就いては、藤原淸輔の『袋草子』に「伊勢物語、業平朝臣所爲也」とあるけれども、此の物語の中の和歌には、前記の如く業平の作歌以外のものが混つて居り、又說話の大部分は到底業平の自記と見做し難い點があるのであるから、これを業平の作と見ることは出來ない。恐らくは業平の歿後に、何人かが業平の家集、又は歌日記の如きものを基にして、これを書き上げたのであらう。次に此の物語の成立年代についても、從來諸說がある。賀茂眞淵は其の著『伊勢物語古意』に、此の物語の中に元方・友則・忠岑を始め、天暦頃の橘直幹の作歌などがあることに注意して、天暦の末即ち『後撰集』に次いで成立したものであると云つて居る。併し眞淵が擧げた此等の歌人の作は、『古今和歌六帖』にあるものを指摘したのであつて、其の作家については異說があるのであり、且つ『古今和歌六帖』の撰者は、却つて『伊勢物語』からこれを拾收し、其の作者の名は異說によつて記したのであると見る說もあるのであるから、眞淵の說を其の儘に採用する事は出來ない。次に『古今集』の中の業

平の歌は、其の詞書が特に長く、しかも其の文章は『伊勢物語』と密接な關係があるのであつて、伊勢は古今の詞書に據つて書いたものか、或は反對に、古今の詞書は、伊勢を基にして記したものか、何れかであるやうに思はれるので、此の點に著眼して、伊勢と古今の前後を考證した學者もあるのである。併しこれは寧ろ古今の詞書が、伊勢に據つたものであると見るのが妥當である。かくて今日の學者は大體に於て、『伊勢物語』の成立年代を『古今集』の撰定以前として居るのであるが、物語の中に延喜天曆頃の和歌に附會した說話が散見する點から見れば、原作が成立した後に、更に後人の手によつて追加せられた所があると考へられる。卽ち原作が成つたのは、業平の歿後間もない頃であらうと思はれるが、其の後業平が傳說的人物として取扱はれるやうになつた頃、（天曆の頃であらう）更に增補して、遂に今日見るやうな形のものとなつたのであらうと思はれる。題號の「伊勢」に就いても、古來種々の說が行はれたのであるが、此の物語の古い異本の冒頭に、齋宮に關する說話があつた爲に、それに因んで此の名を以て呼ぶやうになつたのであらうとする『袋草子』の說は、最も穩かであらう。

內容

此の物語の說話の中には、業平の實歷もあるであらうが、大部分は業平に附會した說話であつて、其の多くは戀愛談である。尤も中には主從の情義、母子の眞情、友愛の情誼、旅のあはれなどをも含んで居るのであるが、何れの說話も多情多感な業平の熱情と、みやび心を寫す事を主眼として居るのであつて、作者の理想をここに見るのである。從つて全篇の物語は、概ね感慨の情に滿ちて居るのであるけれども、時として說話の結末に於て、輕妙な洒落に陷つて居る。これは『竹取物語』や『土佐日

記」などにも見受けるのであつて、機智を喜んだ當時の貴族趣味の現れである。說話の中心興味となつてゐる和歌の中には、古歌の語句を勝手に改めて引いたのがあり、又雜の歌を戀歌としたり、元來關係のない二つの歌を、贈答歌として利用するなど、作者の自由な假構的手腕は、和歌の上にも現れて居る。而して贈答歌は措辭の奇巧を爭つた當意即妙の詠であつて、必ずしも業平の伎倆を示すものではない。併しこれは當時一般の贈答歌の傾向であつて、平安時代中期以後の歌人が、之を必讀書として尊重したのも、主として此の贈答を模範としたのである。

傳良經筆伊勢物語（守屋孝藏氏藏）
古典保存會複製本に據る

文章は助詞接續詞を用ひることが少く、概ね短句を用ひて簡勁素朴であつて、而も優雅である。簡素で平淡な語句の中に、巧みに情景を寫し出して、千言萬語にまさる效果を收めて居るのは、此の物語の一大特長である。後の物語の多くは之を模範としたのであつて、其の影響は極めて大きい。篇中で最もすぐれて居るのは「西の對」四段「築土のくづれ」五段「東下り」八段「筒井筒」二十二段「交野の渚の院」八十一段「小野の山莊」八十二段「長岡の母」八十三段な

どである。

昔ひむがしの五條に、おほきさいの宮おはしましける西の對に、住む人ありけり。それを本意にはあらで行きとぶらふ人、心ざし深かりけるを、む月の十日ばかりに外に隱れにけり。あり所は聞けど、人の行き通ふべき所にもあらざりければ、なほ憂しとなん思ひつつぞありける。又の年のむ月に、梅の花盛りに去年を思ひ出でて、かの西の對に來て、起ちて見、ゐて見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に、月のかたぶくまでふせりて、去年を戀ひてよめる。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひと
つはもとの身にして

とよみて、夜のほのぼのと明くるに、泣く泣く歸りにけり。　（流布本伊勢物語）

「伊勢物語」には種々の異本がある。大體から見て、定家本・朱雀院塗籠本・眞名本の三種に分たれるのであるが、定家本には流布本の外に、天福二年書

傳定家筆伊勢物語（三條西伯爵家藏）

寫の奧書のある天福本、及び天福本の一本がある。朱雀院塗籠本は、高階成章の女二位尼が書寫したもので、朱雀院の塗籠に藏せられてゐたのを、定家の女民部卿局が寫したものを原本とするのである。また眞名本は眞名で書かれたもので、今共に『群書類從』に收められて居る。圖版に揭げた傳後京極良經自筆本は、鎌倉時代の中期を下らざる古鈔本（筆者の信

疑はなほ未詳」であつて、定家本の流布本の系統に屬する一異本である。又三條西家所藏本は、定家自筆と稱せられてゐる部分に、他の筆と交つてゐるが、其の奥書には「天福二年正月廿日己未申刻、凌二桑門之盲目一連日風雪之中、遂二此書寫一爲レ授二鍾愛之孫女一也。同廿二日校了」とあつて、いはゆる天福本である。圖版に示したのは定家自筆と稱せられる部分である。以上擧げた古寫本の外に、最近佐々木信綱博士が複製して世に紹介せられた傳藤原爲氏筆「異本伊勢物語」(大島雅太郎氏藏)がある。其の本文は流布本の誤を正すべき資料となるのであるが、卷末に添へられた校異の中には他本にない五段と和歌一首を含んで居る。

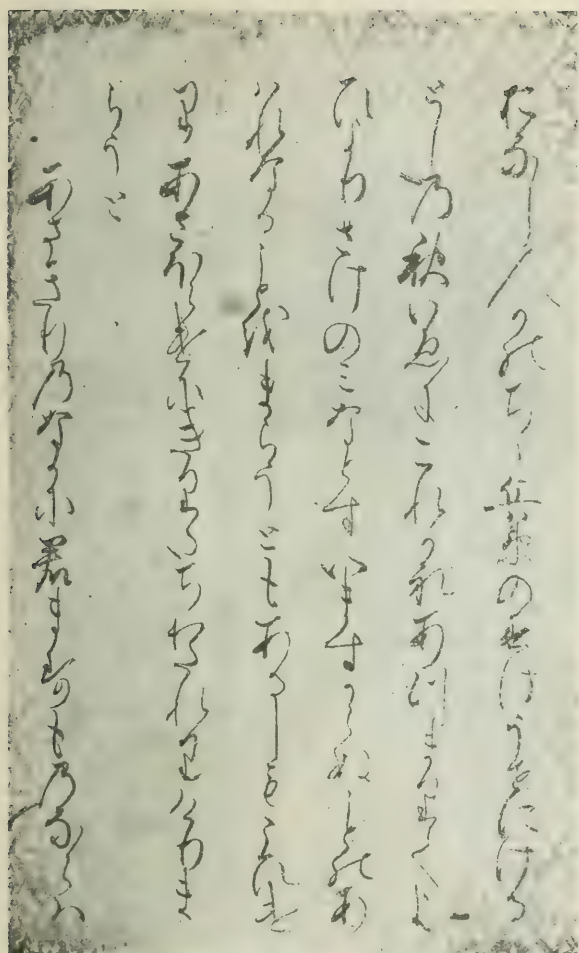
大和物語

作者と成立年代

『伊勢物語』の系統を引いて、天暦の頃に現れた歌物語は『大和物語』(二卷)(古寫本は一卷本)である。作者に就いては、業平の次子在原滋春とする説、(皇胤紹運錄)花山院の御撰とする説、(歌林良材抄)其の他一二の異説があるのであるが、いづれも根據が薄弱である。姑く作者未詳とするのが至當であらう。成立年代についても諸説があるが、井上文雄が其の著『冠注大和物語』の序論中に述べてゐる説は、最も傾聽すべきものである。卽ち同書に、此の物語の中に延喜の帝を「先帝」といひ、貞信公(藤原忠平)を「おほいまうちぎみ」といひ、又清愼公(小野宮實賴)を「今の左のおとど」などと記してゐるのを見ると、既に天暦の頃に何人かが書きかけて置いたのを、花山天皇の寛和・永延の頃に更に他の人が書き加へたものであつて、全部が一人の筆に成つたものでない事は、文章用語を見ても明かであると言つて居る。此の説は北村季吟の『大和物語抄』の説に基づいてゐるやうであるが、なほ藤岡作太郎博士は季吟の説を補足して、次の如く考證せられた。卽ち此の物語の中に見える「今の左兵衞督」なる師尹が其の官であつたのは、天慶十年から天暦七年までであり、また書中に「故大納言」とあるのは、天暦四年に卒した藤原淸蔭を指す

のであるから、此の物語の少くも一部分は、天暦四年から天暦七年までの間に書かれたものであらうと述べて居られる。(國文學全史平安朝篇) 右に擧げた二説によつて、『大和物語』が最初成立したのは天暦年中であつて、其の後の人が後半を書き繼ぎ、花山院の御代に今見るやうなものとなつたと見るのが妥當なやうである。次に題號の「大和」に就いても種々の説があるが、『伊勢物語』に對する名稱である事は明かであつて、「大和」には更に日本の意を聞かせて、諸國の事どもを書き集めた意味を含めてゐるのであらう。(大和を我が國の物語の義と見たのは『冠注大和物語』の説であるが、これは清輔の『袋草子』に、「其名日和語の由歟」とあるのに從つたのである。)

此の物語は約三百首許りの和歌を中心とする、古今の説話百七十餘條を集めたものであつて、其の組織は『伊勢物語』と同じであるが、彼の如く一人の主人公を以て全篇を貫くのでなく、個々の人物に關する歌物語を集成した點に於て相違して居る。なほ此の物語は前後の二部に分つことが出來る。前半の凡そ百三十餘段は、短い説話であつて、當代の贈答歌を中心とする歌物語である。又後半の約四十段はそれと稍趣を異にして、和歌よりも寧ろ説話を主として居るのであつて、其の大部分は古い典籍から取材して居る。例へば菟原處女・妥女の投身・姥捨山などである。卽ち此の物語は『伊勢物語』を摸倣しながら、興味の中心が説話に移動しつつある點に特徴があるのであつて、道長時代の散文全盛期に至る、過渡期の作品として注意すべく、又他の一面に於ては、やがて平安時代末期の『今昔物語集』以降の説話文學の先驅ともなつて居るのである。『大和物語』の説話の大部分を占めて居るのは、

戀愛に關するものであるが、殊に前半には實在の人物や、實際の事件に關するものが多いのは、『後撰集』の戀の部と相通ずる所があるのであつて、實社會の浮薄な事件に興味を抱いた時代の風潮の反映であると共に、作者が構想力を缺いてゐた事を暴露して居るのである。文章は『伊勢物語』を模範として、簡潔素朴ではあるが、稍冗漫に流れて力を缺き、且つ彼に見るやうな情熱と典雅とを缺く憾がある。かくて『大和物語』は種々の點に於て『伊勢物語』よりも遙かに劣るのであるが、後世伊勢・源氏と併せて、歌道の修養書として重んぜられた。例へば『八雲御抄』にも「伊勢物語・大

藤原爲家筆大和物語（前田侯爵家藏）

和物語・源氏物語、歌人の見るべきものなり。」と仰せられて居る。

此の物語にも種々の異本があつたらしく、北村季吟の抄に「此物語本の差異多し。六條家の本、二條家の本、其の外あまたかはり侍り。」と記して居る。抄の本文は定家自筆といはれる二條家本に從つたのである。現存する二條家本で管見に入つた最古の寫本は、前田侯爵家の尊經閣收藏の藤原爲家自筆本である。（圖版參照）此の書の奧書には、爲家の自筆で「弘長元年十二月比以二家本一令二書寫一之、同二年校合、六十五老比丘融覺」と記してある。融覺は爲家の法號である。蓋し此の物語の定本とすべきものであらう。

三　作り物語

竹取物語

右に述べた伊勢・大和は共に歌物語であるが、一方の作り物語の最も古いのは、『竹取物語』である。此の物語は『源氏物語』の繪合卷に、「物語のいできはじめの親なる竹取の翁」とあるによれば、古くは「竹取の翁物語」と呼ばれたらしく、又『源氏物語』の蓬生卷には、別に「かぐや姫物語」といふ名も見えて居る。「竹取の翁物語」又は「竹取物語」と呼んだのは、此の物語の冒頭に「今は昔竹取の翁といへる者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ萬づの事につかひけり。」とある其の翁によつたのであるが、「かぐや姫物語」と呼んだのは、一篇の主人公の赫映姫に基づくのである。さて此の物語の作者

作者と成立年代

を、俗に源順として居るのは信じ難いのであつて、作者未詳とすべきである。其の著作年代に就いては古來種々の說がある。本居宣長は『源氏物語玉の小櫛』に、延喜以後の作として居るが、其の門人田

中大秀の『竹取物語解』に、「源氏物語に、繪は巨勢相覽書(て)は紀貫之書けりと見ゆれば、延喜の以往(あなた)よりありし物なるべし。」と言つて居るのが最も穩當な意見である。更に年代を限定した説では『竹取物語新釋』〔春山頼母井上頼文兩氏の説〕に、物語の中に見える頭の中將、及び六衞司の官職設置の年代の上から、〔藏人所は弘仁元年に六衞司は同三年に設置せられた。〕弘仁二三年以後の作と推定し、又藤岡博士は其の著『國文學全史平安朝篇』に、此等の諸説に批判を下した後に、文章用語などの方面から見て、貞觀から延喜に至る三四十年の間に成つたものであると推定せられた。要するに延喜以前の作である事は、種々の點から見て疑のないことである。

梗概

此の物語の梗概は——昔竹取の翁といふ者があつて、或日竹の中から三寸ばかりの女の兒を見出して以來、節毎に黃金を見付けることが度重なつて富み榮え、女兒は成長してあたりも輝くほどの美人となつたので、赫映姫と名づけた。姫の噂を聞き傳へて、結婚を求める者は極めて多かつたが、中にも石作皇子・車持皇子・阿部御主人・大伴御行・石上麻呂の五人の貴公子は、最も熱心に通ひつめてゐたので、翁は姫に其の中の一人を擇んで婿とするやうに勸めた。姫は五人にそれぞれ佛の石の鉢・蓬萊の玉の枝・火鼠の裘・龍の首の玉・燕の子安貝を求めて來る事を要求し、それに應じ得た者を婿とすることを約束したので、五人は或は僞り、或は危險を冒しなどして孰れも失敗し、遂に戀は退けられてしまつた。次いで姫は更に宮中から入内を命ぜられ、帝の行幸を蒙つたが、これにも應ぜず、只帝と淸い交際を續けてゐた。然るに三年目の春頃から姫は獨り憂愁に沈み、果ては月前に泣き悲しんでゐる樣子

なので、翁らは怪しんで其の理由を尋ねると、姫はもと月界の仙女であつて、或罪によつて暫し下界に下されたのであるが、今年秋の十五夜には許されて召還される事になつたと告げた。事情を聞いた翁夫婦の歎はいふまでもなく、帝もかくと聞召してお驚きになり、當日には六衛司の侍二千人を遣はして、翁の家を守らしめられたけれども、迎へに來た天人には何者も力を失ひ、姫はもとの仙女となり、天の羽衣を著て昇天してしまつた。赫映姫を失つた翁らはやがて病み臥し、姫が遺した不死の藥と御文とを宮中に奉つたが、帝は不死の藥も今は何にしようぞと仰せられて、天に最も近い高山の頂で燒き捨てさせられたので、其の山を富士山と名づけたが、煙は今も縷々として空に立ち上つて居るといふのである。

『竹取物語』は右の梗概に見るやうに、古く記紀・風土記・萬葉などに散見する、求婚傳說や仙女說話などの系統を引いて現れた傳奇物語である。其の冒頭の一節を讀んでも明かであるやうに、御伽噺らしい色調を帶び、又各段落に語原の說明を下した洒落があるのは、上古の說話文學の形式を殘して居るのであるが、一方に於て外來の神仙譚竝に神仙思想の影響を多分に受け、而も平安時代の人情や趣味などを寫し出してゐる點には、平安初期の作品たる特質を認め得るのである。此の物語の源流を探れば、上古の說話の中に系統關係、または類似點を見出すのであるが、殊に後の羽衣說話の最も古い形式を有する、丹後國の比治山の天女の說話 栗田寛博士著古風土記逸文奈具社の條參看 とは最も深い關係があるやうである。併し作者の時代には、遣唐使等が將來した支那の『神仙傳』『列仙傳』 日本國見在書目錄所見 などが流布してゐたと

思はれるのであつて、此等の神仙譚から、種々の素材を得たことも想像せられる。此の物語の局部的の典據については、契沖の隨筆の『河社』（契沖全集第八巻所收）に、內外の典籍に亙つて詳しい考證が見えて居るが、小山儀の『竹取物語抄』や田中大秀の『竹取物語解』には更にこれを補つて居る。今此等の先賢の考證を綜合して概略を說明すれば、先づ物語中の人物に就いては、竹取の翁は『萬葉集』の巻十六の竹取翁の長歌から得て居り、赫映姫の名は『古事記』の垂仁天皇の條にある、伽具夜比賣を借りたのであらうが、五人の貴公子の中には、大伴御行・石上麻呂の如き、史上の人物の名も見えて居る。次に構想上の準據については、赫映姫が竹の中から生れた筋は、『廣大寶樓閣善住祕密陀羅尼經』（略稱『寶樓閣經』不空三藏譯）や『後漢書』の西南夷傳に相似た說話があり、佛の石の鉢は『西域記』や『普曜經』に見え、蓬萊の玉の枝は『列子』に、火鼠の裘は『神異記』に、龍の首の玉は『莊子』『太平廣記』等に、燕の子安貝は『史記』の三代世表に、それぞれ其の原據を求め得るのである。尤も作者が此等の典據を直接に見たのであるか、或は間接に引いたのであるか、その邊のことは詳かでないが、孰れにしても素材を自由に利用して、思ふさまに幻想の世界に飛翔した伎倆に對しては、驚くのほかはない。

構想

更に作者の創作力に就いていへば、元來此の物語は御伽噺めいた說話ではあるが、比較的に變化に富み、稍複雜な筋のものであつて、勝れた創作的伎倆を發揮して居る。今其の長所を擧げるならば、廣く內外の素材を利用しながら之に囚はれることなく、國民的情趣に立脚して、一篇の美しく淨らかな說話を構成してゐる事、天界の仙女を主人公として空想世界に遊びながら、よく當時の貴族社會の

實生活を寫して、二つの世界の對照竝に調和に成功して居る事、赫映姫が賤しい翁の手に育てられて以來、昇天するまでの經過に、漸層法の妙を示して居る事などである。尤も詮索すれば短所もないではない。例へば、五人の貴公子の失敗が最初から豫想せられるものである事、人物の描寫が外面的輪郭的である事、翁の年齡に前後の矛盾があり、又赫映姫の生立ちに不自然な點のある事、滑稽な描寫がなほ低級である事などである。併し此の物語は、童幼婦女を讀者に豫想した一篇の童話的物語であるから、右の如き缺點は素より大なる瑕瑾とはならないであらう。最後に文章は短句を連ね、平明な語を用ひて簡素であり、修辭上の技巧を用ひる事も少いのであるが、而も緻密な描寫にも成功し、どことなく優雅な趣があつて、一千年前の古物語としては、極めてすぐれた特質を備へてゐると謂ふべきである。なほ此の物語には十五首の歌があるが、此等は作者の詠歌であるらしく、其の歌風は文章と同様に素朴であり平明であつて、『伊勢物語』の和歌より更に古い時代の面目を存して居る。

傳奇的物語の『竹取物語』が出てから、凡そ百年の間は和歌の勃興期であるが、物語も亦徐々に發達して、寫實的物語の『源氏物語』に移る過渡期の作品が、數多く作られたのである。試みに『枕草子』の「物語は」の條を見ると、住吉・宇津保・殿うつり・月待つ女・交野の少將・梅壺の少將・人め・國讓・埋れ木・道心すすむる・松が枝・狛野の物語など十二の名を擧げて居り、なほ他の條には『落窪物語』が出て居る。又『源氏物語』の卷々に散見する古い物語の中で、右に洩れたものを拾つて見ると、「芹川の大將」「藐姑

射の刀自」「正三位」「からもり」(「かはほり」の誤かとも言はれて居る。)などがある。かくの如く『源氏物語』が出現するまでに、數々の作品が現れたのであるが、其の大部分は散逸したのであつて、後世に傳はつたものは、僅かに『宇津保物語』と『落窪物語』の二部だけである。(『住吉物語』も此の頃作られたのであるが、現存するのは『落窪物語』を粉本として後世改作したものであつて、原作の儘ではない。)而して此の二種が特に散逸を免れたのは、他の作品に比して傑出してゐた爲であらうと思はれるのであるから、これを當時の代表作と見做して差支ないであらう。

宇津保物語

『宇津保物語』は二十卷(刊本三十冊)から成る大作である。『源氏物語』の註釋書『紫明抄』(素寂撰)に源順の作として居り、また細井貞雄の『空穗物語玉琴』には、紫式部の父藤原爲時の作かと言つて居るが、此等は確かな根據のある説ではない。併し内容文體などから推考して、男子の作である事は確かである。作の成立年代に就いても種々の説があるが、物語の中に朱雀院及び其の皇子たちの事が見えて居るから、冷泉天皇から圓融天皇の初頃までの間に、現れたものと見る説に從ふべきであらう。此の物語と『落窪物語』との前後に就いても、説が分れるのであるが、物語の發達の上から見れば、恐らく宇津保の方が先であらうと思はれる。此の物語の卷名は俊蔭・藤原君・忠乞(ただこそ)などのやうに、篇中の主要な人物によつたものがあり、又梅笠花・嵯峨院・吹上・祭の使の如く、内容に縁のある雅名を附けたものもある。

傳本

『宇津保物語』が一條天皇以前から人々に讀まれてゐたことは『枕草子』に、中宮の御前で此の物語

中の人物の涼・仲忠の優劣を論じた事が見え、又『源氏物語』の繪合の巻に、竹取の翁に宇津保の俊蔭を合せて爭うた事が見え、なほ螢の巻にも此の物語中の藤原君の女の事が見えて居るので、一般を推測することが出來る。然るに其の後人々の注意を牽かなくなつたやうであつて、順德院の『八雲御抄』には、『源氏物語』『狹衣物語』『宇治大納言物語』などの名は見えてゐるに拘らず、此の物語の名は見えてゐない。又鎌倉時代の初めに現れた『無名草子』(王朝文學の批評を物語體に記したもの)にも、宇津保の事は見當らない。かくて此の物語は、近古に至つて一時忘れられてゐたのであるが、その後再び世に出るまでに、編次に錯簡を生じ、文章に誤字脱漏を生じて、現在の刊本となつたのである。江戸時代になつて、巻の順序の訂正を試みた人は少くなかつた。桑原やよ子の『宇津保物語考』、本居宣長の『玉勝間』巻二に引いてゐる田中道麿の說、細川貞雄の『宇津保物語玉松』の說などは、其の著しいものである。此等の中で最も見るべきは道麿と貞雄の說であつて、近來の活版本は此の何れかに據つて居る。

此の物語の首巻は俊蔭巻である。巻の主人公の藤原俊蔭は皇女腹に生れ、年十六の時遣唐副使となつて彼の國に渡る途中、風浪の難に遭つて波斯國に漂流し、天人から琴の名器を授けられ仙人に就いて祕曲を學んで、年三十九で歸朝した。(波斯國の事は遣唐使漂流の史實と佛教說話から取材したのであらう。)俊蔭は歸朝の後、音樂によつて帝の寵遇を蒙り、一女に琴と祕曲を授けて世を去り、其の女は父母の歿後落魄してゐる中に、藤原兼正と契つて一男仲忠を擧げた。仲忠は六歲の頃母と共に北山

の奥に移り、大木のうつぼに棲んでゐたが、母から琴を學び、野獸を感動させる程の音を搔き鳴らしたので、様々な禽獸は食物を運んで母子を養つた。仲忠は十二歳の頃まで山に棲んでゐたが、琴の音

宇津保物語　（中將水無瀨殿筆寫春日詣巻）
前田侯爵家所藏

を聞いて尋ねて來た兼正に迎へられて、母と共に京に歸り、三條堀河に一家を構へる事になつた。（以上は俊蔭巻の梗概であつて、物語の名は言ふまでもなく、大木のうつぼに基づいたのである。）其の後の物語を略述すれば、當時左大將源正頼は藤原君といつて、一家繁榮してゐたが、其の第九の君貴宮（あてみや）（物語の女主人公）は絶世の美人であつたので、其の才色を傳へ聞いて思ひを寄せる者が極めて多かつたが、其の中には熱心に言ひ寄る皇子を始め、富有で吝嗇な三

春高基や、年老いた太宰帥滋野眞菅などがあり、又殿上人にはかの仲忠を始め、才學に長じた良峰行政などがあり、また貴宮の兄仲澄も竊かに胸を焦す一人であつた。其の後更に貴宮の周圍には、有德の入道忠乙、才學に長じ音樂に秀でた源涼、學問に熱心な藤原季英(藤英)などが次々に現れて、遂げられぬ戀に懊惱するのであるが、貴宮は遂に東宮に召されて入内したので、幾多の懸想人は失望落膽し、中には山に籠つたり、出家入道する者があつた。(貴宮を中心に多數の貴公子の戀を次々に描寫したのは、『竹取物語』の趣向を摸倣したのである。)其の後東宮の治世となつて、貴宮(藤壺女御)が生んだ一宮と、藤原兼正の女(梨壺女御)が生んだ二宮との間に位爭が起り、それを中心として、源藤兩家が互に權勢爭奪の鬪爭を續けたが、帝はもとより藤壺を寵愛せられて居るから、先例を破つて一宮を東宮とせられた。一方貴宮と相對的に描寫されてゐる仲忠は、其の後帝の皇女を夫人に迎へ、官位累進して大將となり、其の女犬宮も父や祖母に琴を學んで世に名高くなり、一家擧つて音樂の爲に榮えた事を語つて、遙かに俊蔭の卷に照應させて擱筆して居る。

『宇津保物語』は右の梗概によつても明かであるやうに、『竹取物語』の構想を踏襲して、更に人物を多くし、筋を複雜にしたのであるが、とかく散漫に流れて讀者に倦怠を感じさせるのは、創作的伎倆の不足を暴露するのである。なほ作者は宮廷を背景として、世相人情の描寫に力めながら、至る所に幻想的怪異的要素を加へて、兩者の不調和に陷つたのは、現實世界と月世界とを巧みに渾融せしめた『竹取物語』に比較して、遙かに見劣りがする。文章は短句を連ね、時に漢文脈を加味して簡潔である

が、概ね平坦であつて情味に乏しい。かくて此の物語は、分量に於ては『源氏物語』の前驅たるに恥ぢないのであるが、質に於てはなほ幼稚の域を脱してゐないのであつて、中古以來源氏の爲に壓倒せられて、世に忘れられたのも當然である。併し竹取から源氏に移る途上の作品としての特徴を持つて居り、且つ『源氏物語』の作者には、少からぬ影響を與へたのであるから、文學史上に於ては重要な位置を占めて居るのである。

落窪物語

『落窪物語』は『宇津保物語』と同じ時代に、恐らくはそれに次いで現れた作品であらう。四卷若しくは三卷から成る小規模の作品である。作者を源順とする說には容易に從ひ難いのであるが、文章が簡潔である事や、敍事に滑稽卑俗な事が散見する點などから推して、男子の手に成つたことは明かである。成立年代も明かでなく、從來種々の說が現れたのであるが、『枕草子』の「成信の中將は」の條に、「げに交野の少將もどきたる、落窪の少將などはをかし。」とあるから、此の草子より前に現れた事は確實である。

梗概

此の物語の梗概は下の通りである。中納言忠賴の先妻の腹に生れた才色兼備の姬君が、其の繼母に憎まれて、寢殿の放出の落窪なる一室に置かれて、落窪の君と呼ばれ、あらゆる侮辱と迫害に惱まされてゐた。（物語の名は主人公の落窪の君から出て居る。）此の姬君には、主人思ひの阿漕と呼ぶ侍女があつて、日夜慰められてゐたが、たまたま阿漕の許に通つて來る帶刀が姬君の境遇に同情して、當時聲望を一身に集めてゐた左近少將に近づいて其の事を語ると、少將は大いに同情を寄せると共に、

其の才色を愛でて、竊かに姫君を救ひ出して結婚した。其の後少將は官位頻りに昇り、左大臣を經て太政大臣にまで進み、姫君は夫の濃かな愛情を受けて幸福な生活に入り、其の兒女もそれぞれ榮達して、一家悉く榮華を極めるのである。然るに一方中納言夫婦と其の子女は、少將から種々な方法で復讐せられ、最後には落窪の君が亡き母から讓り受けた三條の邸宅を、中納言の手で修理した後に、少將の爲に奪はれてしまつた。かくて復讐を遂げた少將は、中納言を迎へて落窪の君に對面させると、父も始めて北の方の非道な仕打を憤り、且つ後悔をしたので、是より少將は中納言及び其の子女の非運に同情して恩顧を與へ、頻りに其の立身を計つてやり、姫君も亦父母に孝養を盡して、老後を幸福にしたといふのである。

此の物語に取扱つた主題は、古今東西に例の多い繼子いぢめの說話である。而して此の種類の物語は、可憐な繼子が後に幸福な生活に入り、これを虐待した繼母が、後に逆境に陷つて後悔するといふのが定型となつて居る。併し『落窪物語』には憐むべき繼子を救ひ、憎むべき繼母に對しては復讐をする、左近少將の仁俠的精神を寫した後に、更に轉じて少將夫婦が舊怨を忘れて、却つて中納言家に庇護を加へたことを物語つて、人情美を添へて居るのであつて、此等は此の物語の特色である。『落窪物語』は家庭的事件を取扱つたものであるから、筋は單純であり、場面も局限せられ、人物も少數で足りるから、複雜な內容を物語つた宇津保に比して纏りがあり、筋の運びも自然であつて、一段と勝れた作品となつて居る。なほ此の物語の長所として擧げ得るのは、親子夫婦主從の間の人情を寫して居

る事、中納言の北の方・落窪の君・阿漕などの性格の描寫が、或程度まで成功して居る事、對話や手紙によつて、動作性格事件の發展などを精細に表現して居る事などである。但し作者は外面的な事件の敍述に主力を注いで、感情の描寫に重きを置かず、又背景卽ち自然の描寫も殆ど顧みなかつたのは、『源氏物語』に較べてなほ遙かに幼稚な感じがするのである。此の物語が當時相當に持て囃されたことは、『枕草子』や『源氏物語』に屢引かれて居るのを見て想像せられるのであるが、なほ源氏の作者には、少からぬ影響を及ぼしたらしいのであつて、多くの類似點を見出すのである。

其の他の繼子物語

『宇津保物語』の忠乙の生立には、繼子いぢめの性質を帶びた所があるのであるが、後世改作された『住吉物語』の原作も亦、繼子物語であつたやうである。其の他『源氏物語』の螢の卷に、「繼母の腹ぎたなき昔物語も多かるを云々」とあるから、『落窪物語』と同類の物語は、當時幾らも現れたのである。其の後『落窪物語』の系統を引いて、鎌倉時代になつて現れた物語には、現存する『住吉物語』や『小夜衣』があり、また室町時代には『小落窪』『鉢かづき』を始めとして、幾つもの類型的の作品が現れたのである。

第六章　日記文學

日記文學

平安時代の日記が廣義の物語の一と見られた事は、既に前章の冒頭に述べたのであるが、今更に日

記の發達、及び本質に就いて略述して置く。日記はもと漢文で記された公私の記錄を指す名稱であつたが、假名文が發達して以來、和文を用ひて自己又は他人の生活を回顧して、自敍傳的に記したものが現れるやうになつてからは、之をも日記と呼ぶやうになつた。和文の日記は『土佐日記』に始まる。此の日記は歌物語の形式によつて記した旅日記であるが、其の後同じ形式によつて、自己の感情生活を告白したり、史上の著名な人物の逸事を記したものなどが現れ、更に宮廷の公事節會の有様などを記述したものが發生したのである。かくて和文の日記は物語と接近し、又一方では歴史物語と密接な關係を結ぶやうになつたのであるから、日記は一に物語とも呼ばれた。例へば『多武峯少將物語』は『高光日記』とも呼ばれ、『和泉式部日記』は一名『和泉式部物語』と稱せられて居る。要するに和文の日記の中には紀行があり、自敍傳があり、隨筆の性質を帶びたものがあり。公事朝儀などを記したものなどがあつて、其の内容は極めて廣いのであるが、過去の經驗を追想し憧憬し批判した文學であつて、主觀的態度の著しい作品である點に於て、物語と區別せられるのである。

土佐日記

和文の日記の祖と言はれる『土佐日記』は紀貫之の作である。貫之は醍醐天皇の崩御の年なる延長八年に、土佐守に任ぜられて任地に下り、四年の任期が滿ちて、朱雀天皇の承平五年の初めに京に歸つた。此の日記は承平四年十二月二十一日に、國守の館を立ち出でた時から、翌年二月十六日に京の故宅に到著するまでの五十餘日に亙る日々の船路の有様を記したものである。此の日記が成つたのは、

『古今集』を撰んだ延喜五年から、三十年の後であるから、作者の晩年の筆である。（香川景樹の『土佐日記創見』の說によれば、貫之が七十三四歲の頃の作である。）漢文の日記は奈良朝以來あるのであるが、國文で記すのはこれが最初であるから、貫之は冒頭に、「男もすといふ日記（にき）といふ物を、女もして試みむとてするなり。」と書いて居る。從つて一篇の日記は、女子の作に假託せられて居るのであつて、貫之は船君として記されて居る。

內容

此の日記に現れた作者の感情の主なるものは、任地で永眠した女兒の追慕、船路の艱難及び海賊襲來の憂慮、歸京に對する喜悅などであるが、其の間に屢滑稽諧謔に心を遣つて居る。滑稽諧謔といふも主として、「潮海のほとりにてあざれあへり。」といひ、「一文字をだに知らぬ者しが、足は十文字に蹈みてぞ遊ぶ。」といふ類の言語の洒落である。香川景樹は是を、胸中の悲哀憂愁を遣る爲であると見て居るのであるが、吾々は寧ろ徒然を慰める當座の洒落であつたと見たいのである。貫之の作歌が一般に理智的であり、技巧的であるやうに、此の日記も亦同樣であつて、情熱を缺いて居る。旅の日記に於て最も見るべきものは自然描寫であるが、貫之の自然觀照は概ね類型的であつて、深みがない。貫之はまた義理堅い頑固な性格の人であつたらしく、文中至る所に其の一端が覗はれるのであるが、殊に故宅に歸著して隣人の無責任を咎めてゐる筆端には、其の人となりが最もよく現れて居るやうに思はれる。

文章

『土佐日記』の國文學史上に於ける價値は、內容にあらずして、寧ろ其の文章にあるのである。貫之

は中年の頃に「古今和歌集序」「大堰川行幸和歌序」などを記して居るのであるが、其の文章は、語句の彫琢形式の整齊に囚はれて、とかく內容が空虛になつて居る。然るに『土佐日記』の文章は遙かに平淡であり、輕妙であり、且つ簡潔流暢である。是は作品の性質にもよるのであるが、また作者の年齡の關係から起る文體の相違でもあらうと思はれる。併し此の日記にもなほ、漢文から學んだ理智的な技巧は至る所に見える。例へば

此の折にある人々、をりふしにつけて、唐の歌ども時に似つかはしきをいふ。また或人西國なれど、甲斐歌などうたふ。かく歌ふに、ふなやかたの塵も散り、空行く雲もたゞよひぬとぞいふなる。

と云ひ、又

黑崎の松原を經て行く。所の名は黑く、松の色は靑く、磯の波は雪の如くに白く、貝の色は蘇芳にて、五色に今一色ぞ足らぬ。

と記して居る類である。思ふに此の日記の文章上の長所は、率直にして簡潔な表現にあるのである。

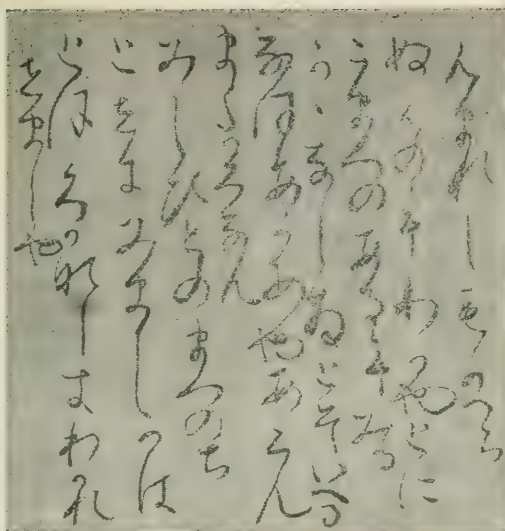
例へば、

これより今は漕ぎはなれて行く。これを見送らむとてぞ、此の人どもは追ひ來ける。かくて漕ぎ行くまにまに、海のほとりにとまれる人も遠くなりぬ。舟の人も見えずなりぬ。岸にもいふ事あるべし。船にも思ふ事あれどかひなし。

又その日その日の天氣模樣を記して、「日照りて曇りぬ」といひ、「日ひと日風やまず。爪はじきをして

古寫本

寢ぬ。」と記し、また「よもすがら雨やまず、今朝も。」と記してゐるが如きは、簡潔の妙を得て居る。なほ此の日記に當時の俗語俚諺を記して、地方の情況を寫して居るのも興味あることであつて、此の後に現れた女流の日記などには、到底見られない特徴である。かくて『土佐日記』は、伊勢や竹取の文章から更に一歩を進めてゐるのであつて、貫之が和文の發達に貢獻した功績は少くなかつたのである。

『惠慶集』の詞書の中に、『土佐日記』が繪に描かれてゐたことが見えて居るから、此の日記は早くから世に持てはやされ、從つて古寫本も種々あつたのであらうと思はれるが、現存する最古の寫本は、前田侯爵家所藏の定家の自筆本である。此の本は京都の蓮華王院に傳はつてゐた、貫之の自筆本（現存せず）を定家が寫したもので、卷末には特に貫之の筆跡を臨摸した、二葉を添へて居るのである。圖版に掲げたのは卽ち其の前葉である。尤も

定家筆土佐日記（貫之の筆の臨摸）
前田侯爵家所藏

此の寫本の奧書によれば、定家が之を筆寫したのは、文曆二年七十四歳の時であり、而も老病に罹つて眼もよく見えなかつたといふのであるから、之を以て貫之の眞蹟を、正確に傳へたものとする事は出來ないのであるが、大體の面目を想像する事は出來るのである。かくて此の臨摸の部分は、貫之筆と稱せられる古筆の眞僞を識別する上に、貴重な資料である

ばかりでなく、古代の草假名の一般を推察する事も出來るのである。

作者

『土佐日記』は歌物語の系統を引いた旅日記であるが、更に此の形式を自己の感情生活の記録に應用したのは、それより三十餘年後に現れた『蜻蛉日記』三卷である。日記の名は上卷の終に「なほ物はかなきを思へば、あるか無きかの心地するかげろふの日記といふべし。」とあるのによつたのであるが、かげろふに就いては陽炎であるとする説と、蜻蛉と見る説とがある。作者は藤原倫寧(ともやす)の女である。藤原兼家の妻となつて右大將道綱を生んだ人であるが、其の名は傳はつてゐない。其の兄弟には、四納言の一人で有名な歌人の長能があるが、道綱の母も亦當時世に知られた歌人であつた事は、『枕草子』『大鏡』などにも見えて居り、其の作歌は此の日記にあるものの外に、『道綱母集』一卷があり、又勅撰集にも多く載つて居る。『尊卑分脈』に「本朝第一美人三人内也」と記して居るのは俗説であるが、才色兼備の貞淑な婦人であつた事は、此の日記の記事によつて明かである。

内容

作者の夫の兼家(正暦元年歿年六十二)は九條師輔の第三子で、關白道長の父である。兼家は當時の貴族の習慣として、幾人もの妻妾を持つてゐた。攝津守藤原仲正の女(時姫)を始め、倫寧の女、皇后宮大夫藤原國章の女(對の御方)などは、妻といふべき人であるが、なほ此の日記によれば、宰相源兼忠の女、町の小路の女、小野宮實頼の召人近江なども其の妾であつた。作者が兼家と結婚する前に、第一夫人の仲正の女は道隆を生んだのであるが、其の後引續き道兼(粟田殿)・道長(御堂關白)・超子(贈皇后宮)・詮子(東三條女院)を生んで居る。それに引きかへて、此の日記の作者は道綱を生んだばかりであり、

而も其の家の權勢もなく、また兼家とは性格の相違があつた爲に、夫の愛情は仲正の女に獨占せられ勝ちであつて、其の一生は苦悶に滿ちてゐたのである。さて日記は天暦八年に兼家(年二十六)が通ひそめて。互に和歌を贈答した夢心地の頃から始まつて居る。其の翌年道綱を生んだ後には、早くも兼家には新しい愛人が出來て、足も遠くなつた爲に、作者は嫉妬怨恨煩悶の中に、惱みの多い月日を送るやうになつた。かくて康保元年に、最愛の母を喪つた頃から性格も一變して、憂鬱になつて、或は山寺に籠り、或は遠く初瀬石山に詣でたが、更に天祿二年には西山の鳴瀧に籠つて尼とならうとしたが、果さずして山を下りた。此の頃から記事が詳密になつて居るので、故藤岡博士は、作者が日記を思ひ立つたのは、天祿二年の頃であつて、それ以前の事は回想して附け加へたのであらうと言つて居られる。(國文學全史平安朝篇)其の後作者は漸く一種の諦めに到達すると共に、我が子道綱に對する母性愛に目覺めて、長く續いた胸中の苦惱から脫却し、最後には夫の愛人で、今は故人となつた兼忠の女が生んだ姬君を引取つて養女とするほどの、平和な心持になる事が出來た。かくて日記は、天延二年兼家四十六、道綱二十歲の時で終つて居るのであるが、其の間で天德三年から應和元年までの三箇年の記事は闕けて居る。

特色

要するに此の日記は前後二十一年間に亙る夫婦愛の破綻に對する、嫉妬怨恨焦燥反抗など、樣々な心境を告白した物語である。當時兼家の如き敏腕家で多情な貴紳を夫として仕へた女子は、多くは此の日記に見るやうな運命に泣いたのであらうと思はれるが、此の作者の如きはその代表的な女性であ

つて、しかも豐かな文才があつたから、率先して此の一篇の人生記錄を書き遺したのである。殊に此の作者には、一夫を守る純情と一子に濺ぐ情愛とがあつた爲に、此の日記に一層深みを加へ、貴さを増してゐる。上卷は過去の追憶を記したものであるから、さまで勝れてゐないが、中卷以下の記事には、纖細な感情と靜寂な自然觀照との交錯による、しめやかな心境が記述されて居るのであつて、此の人ならではと思はれる特長がある。此の日記は其の冒頭の詞を見ても明瞭であるやうに、第三人稱で記した一種の物語となつてゐる。而して其の心境は『源氏物語』の作者と相通ずるものがあつたらしく、部分的に影響の痕を見出す事が出來るのである。

文章は時に簡素で古色を帶びて居るが、概ね章句を長々と連ねて切目がなく、主格の省略もあつて稍難解である。殊に流布本には至る所に錯簡があつて、意義の通じない所が多い。契沖の校合本や數種の書入本は傳はつて居るが、古寫本の善本が發見せられない限り、難澁は免れないであらう。左に掲げる一節は、天祿元年の秋に石山寺に籠つた最終の夜から、歸りがけまでの記事であつて、日記中のすぐれた文章である。

さては夜になりぬ。御堂にて萬づ申して泣き明かして、曉方にまどろみたるに、見ゆるやう、この寺の別當(べたう)とおぼしき法師、銚子に水を入れて持て來て、右のかたのひざに入りくと見る。ふと驚かされて、佛の見せ給ふにこそはあらめと思ふに、まして物ぞ哀れに悲しく覺ゆる。明けぬといふなれば、やがて御堂よりおりぬ。まだいと暗けれど、海のうへ白く見え渡りて、さいふ／＼人二十人ばかりあるを、乘らむとする舟の岸

かげの方へばかりに見くだされたるぞ、いと哀れにあやしき。御あかし奉らせし僧の見送るとて岸に立てるに、ただざし出でにさし出でつれば、いと心細げにて立てるを見やれば、かれは目なれにたらむ一つに、悲しくやとまりて思ふらむとぞうる。男ども「今來年の文月ともたび參らむよ」と呼ばひたれば、「さなり」と答へて、遠くなるままに、影のごと見えたるもいと悲し。空を見れば、月はいと細くて、影は海のおもてにうつりて、あま風打ち吹きて、海の面いと騒がしうきら〳〵と騒ぎたり。若き男ども聲細やかにて、面やせにたるといふ歌を謠ひ出でたるを聞くにも、つぶ〳〵と涙ぞ落つる。

多武峯少將物語

『蜻蛉日記』と略ぼ同時代に成つた物語體の日記に、『多武峯少將物語』一卷がある。一名を『高光日記』といふ。高光は九條殿藤原師輔の八男で、兼通・兼家等の弟であり、從つて道長の叔父に當る。『尊卑分脈』によれば、母は醍醐天皇の皇女の雅子内親王である。高光は從五位上右近衛少將兼備後權介にまで昇つたが、俗界を脫離する志を抱き、村上天皇の應和元年に、俄かに「かくばかりへがたく見ゆる世の中にうらやましくも澄める月かな」の一首を詠み置き、愛著の絆の斷ち難い三つばかりの姬君（後の具平親王の北方）を始め、妻や妹などを振り棄てて比叡山に上り、横川の增賀上人について薙髮し、法名を如覺といつた。翌二年には更に多武峯に移り、草庵を結び極樂房といつたが、正曆五年三月に示寂した。榮華物語、三十六歌仙傳及び多武峯略記による。家集に『高光集』一卷がある。出家の前後のことは『榮華物語』月宴の卷に見えて居るが、其の終に「これは物語につくりて、世にあるやうにぞ聞ゆめる。哀なることには、このことをぞ世にはいふ。」とあるのは、即ち此の物語を指して居るのである。

此の物語は、高光が應和元年十二月五日に、橫川に上る前後のことから書き出して、翌年の夏の頃までのことを歌日記の形式に記したものであるが、事實を傍觀的態度で記し、高光には敬語を用ひて居るのであるから、高光の自記でない事は明白である。恐らく高光の歿後に於て、其の近侍の者が書き殘したのであらう。內容は高光の出家を中心として、周圍の人々の悲歎のさまを次々に記し、なほ和歌や消息の贈答を列ねて居るのであつて、日記にして物語の性質を兼ねた作品である。文章は冗漫で變化が無く、文學としての價値は勝れてゐないのであるが、歌日記若しくは歌物語から、寫實的物語に移る過渡期にあるものとして、注意すべき作品である。

第三篇　平安時代後期

第一章　時代の概觀

平安時代後期は前後の二期に分つ事が出來る。前半期は一條天皇から後三條天皇に至る凡そ八十五年間であつて、藤原氏の極盛時代であり、後半期は白河天皇から安德天皇に至るまでの百十年間であつて、所謂院政時代である。

道長と賴通

前半期の初めに、藤原氏は同族の間に關白職爭奪のあさましい爭を續けたが、遂に道長の勝利に歸し、伊周及び其の弟隆家等は配流の憂目に遭つた。是より道長は攝政關白となつて政權を掌握し、又四人の女子を宮中に納れて後一條・後朱雀・後冷泉三帝の外祖父となり、權勢と財力にまかせて榮華の限りを盡した。道長は晩年に京極第の東に法成寺を營んで住み、其の輪奐の華美結構の壯麗は、極樂淨土を此の世に見るやうであると言はれた。即ち御堂關白の稱のある所以である。道長の長子賴通は父の後を承けて、後一條天皇から後朱雀天皇まで三代五十餘年の間、攝政關白の重職にあつて驕奢を極めたが、晩年には宇治の別業を寺とし、一代の名匠を集めて平等院を建て、地方の騷擾には目もくれず、專ら風流奢侈に耽つてゐた。世に賴通を宇治關白と呼んだ。

美術工藝の發達

道長・賴通父子の時代は、刀伊の入寇、平忠常の反、前九年の役などがあつたが、畿內は平穩無事であつたから、京都に於ける貴族社會の文化は、益發達して爛熟期に達した。當時藤原氏一門は悉く文藝を好み、其の保護と奬勵に力めたから、美術工藝は特に著しく發達して、藤原時代特有の優美典雅な特徴を發揮した。卽ち建築は規模の雄大なものの無い代りに、結構樣式は優美纖麗となり、室內の裝飾調度もこれと調和して絢爛華麗を極め、螺鈿蒔繪の如き精巧な技術が長足の進步を遂げた。當時彫刻には、鳳凰堂の本尊阿彌陀如來の作者として名高い定朝以下の名匠が輩出して、豐滿穩和な姿態に華麗な彩色を施したものを作つたが、繪畫も亦鳳凰堂の壁畫に不朽の名を傳へた宅磨爲成、及び爲成と同時代の畫工春日隆能・隆親父子等が、光彩眼を奪ふばかりの畫風を創めた。當時の美術工藝は何れも唐風摸倣の域を脫して、獨自の發達を遂げたのであるが、文學に關係の深い文字の如きも著しく進步して、當代藝術の一に數へられる程になつた。是より先前代の末期に、小野道風の如き名手があつて、平安趣味の優美な書風を創めたのであるが、道長の頃には更に藤原佐理・藤原行成の如き書家が現れて、特に連綿流麗な草假名に妙筆を揮つたのであつて、此等の書體を模範として記された當代の文學は、優雅な料紙と相俟つて、時代の趣味を遺憾なく發揮したのである。

貴族の日常生活

平安京裏の貴族が、花鳥風月を友として詩歌管絃に耽り、情趣にあこがれて日夜美的生活に溺れてゐた事は、既に前期の概觀に述べたのであるが、藤原氏極盛期は其の頂上を極めた時である。當時の廷臣は實務に與る事を喜ばず、年中行事を唯一の公事と心得てゐたから、恒例及び臨時に行はれる儀

式典禮は益其の數を增し、儀容の壯麗なる事は目も眩くばかりであつた。正月の元日節會・白馬節會などに始まつて、十二月の御佛名に終るまで、月々に取行はれる樣々な公事節會に、衣冠束帶の公卿殿上人が、色とりどりの十二單を著飾つた女房と、袂を列ねて堂上に居竝んだ光景は繪よりも美しく、庭上に立てた左右の舞臺に舞人が絢爛な舞の袖を飜せば、妙なる樂の音に日も暮れて、庭燎は赤々と燃えまさり、獻酬朗詠に夜の更け行くまでおもしろく樂しく遊んだ有樣は、當代の文學殊に貴紳の日記の主要部分を占めて居る。當時の貴族は遠く旅行する事を好まなかつたが、單調な日常生活に倦怠を感じた彼等は、賀茂石淸水などの行幸に陪從し、花や紅葉に誘はれて洛外に遊ぶことは最も喜ぶ所であつて、金銀彩色目もあやな牛車を列ねた行列の美しさ、さては池の面に龍頭鷁首の舟を泛べて管絃を奏し、詩歌を唱和した行樂のさまは、四周の風物と相俟つて繪卷物その儘の美觀を呈した。なほ當時の貴紳は一般に女性的な趣味を好んだから、遊戲の如きも主として室內で行ふものが流行した。詩合・歌合・花合

貴族管絃の圖

（侯爵德川義親氏所藏物語繪卷）

は既に前期以來流行してゐるが、此の時代になると更に、扇合・貝合・繪合・物語合・香合の如き優美な競技が夜を徹して行はれた。而して此等の社交的な遊には、必ず貴紳淑女が打交つて、感情の動くにまかせて自由な戀愛に走つたのであるから、風儀は著しく頽廢し、淫蕩の風は宮廷にまで及んだ。

一切の生活様式が情趣本位となつた當時に、儒教が何等の權威を持つてゐなかつたのは勿論であるが、佛教も亦時代の傾向に支配せられて、形式的となり享樂的となつた。當時藤原氏を始め一般貴族は、悉く佛法に溺れたのであつて、彼等は競うて大寺を建て、諸佛を造り、洪學能辯の高僧を招いて盛な佛事供養を營んだ。道長が晩年に造つた法成寺金堂の莊嚴無比は、今更記すまでもない事であるが、其の落慶供養の偉觀は、當時に於ても天下の耳目を驚かした程である。試みに其の佛會の莊嚴の一端を言へば、堂前の廣庭には水晶の如き銀砂を敷き、池水には色々の蓮花の造花を挿し、花毎に佛像を安置し、池畔の樹木には様々の寶石を附けた羅網を懸け、本尊の前には金銀七寶で飾り立てた造花や佛供などを奉り、靈香あたりにただよふ時、黄金の鈴の音鳴り響けば、舞臺の上では次々に佛の國の舞樂が奏せられたのであつて、全く極樂淨土の莊嚴を其の儘現出しようとしたのである。（榮華物語音樂の巻參照）其の規模には大小の差があつても、當時貴族社會に行はれた佛會の盛觀は、凡そかくの如きものであつて、修法供養に百僧千僧を集め、佛前に千燈萬燈を捧げて、ひたすら儀式を壯麗にする傾向は、此の時代から平安末期にかけて彌盛であつた。かくて佛事供養が趣味的に又數量的に盛大を極めたのは、既に述べたやうに、貴族社會を風靡した唯美思想に支配せられたのであるが、一面には又此の頃

盛になつた、欣求淨土の思想の影響を受けて居るのである。淨土思想の淵源は奈良朝にあるのであるが、其の後最澄及び其の高弟圓仁・良源を經て稍著しくなり、平安朝中期の空也上人・慧心僧都等に至つていよいよ盛になり、遂に一般の信仰を支配するに至つたのであつて、藤原氏極盛期に佛教藝術が盛に起つたのも、一は此の思想の影響によるのである。

藤原氏の衰運

藤原氏全盛期に於ける京都の文化、並に貴族の生活狀態は、大體右に述べた通りであるが、次いで院政時代になると、さしもに隆盛を極めた藤原氏も權勢を失墜し、それと共に貴族的文化も漸く崩潰したのである。平安時代の貴族は多くの莊園を領してゐたが、殊に藤原氏は權勢にまかせて、天下至る所に莊園を持つてゐたのであつて、右大臣小野宮實資は嘗て「天下之土地悉爲二一家領一、所領無二立錐地一歟、可レ悲之世也。」と歎じた程である。然し藤原氏が長い間驕奢を極めた結果は、先づ經濟上の窮乏を來したのであるが、偶賴通の晩年には、剛毅英邁な後三條天皇が萬機をみそなはせられて、貴族が唯一の財源としてゐた莊園の積弊を一掃せられると共に、從來行はれてゐた國司の重任を禁じ、賣官の弊を改め、且つ質素儉約を旨として奢侈の風を矯正せられ、次いで白河天皇は父帝の御遺志を紹述して藤原氏を抑制し、專ら朝權の回復を圖り給うたから、藤原氏の運命は年を逐うて窮迫した。白河天皇が御讓位の後、院中で政を執り給うて以後の百年間は、卽ち院政時代であつて、後年政權を掌握した武士階級は、事ある每に京都に出て威力を振ふやうになつた。

武士階級の擡頭

是より先平安時代前期に於て、藤原氏が他氏を壓迫して獨り權勢を恣にして以來、榮達の望を失つた皇族または貴族の多くは、地方官を所望して任地に下つたのであるが、彼等は平安貴族が地方の行政を顧みなかつた間に、頻りに賦課を重くして私腹を肥やし、又任期が過ぎた後も其の儘土著して豪族となる者が多かつた。源平二氏はかかる豪族中の最も有勢な者であつて、共に東國に起り、兵力と財力とを蓄へて、時機の到來を待つてゐたのである。抑東國は上古以來武力發動の本源地であつて、其の民は奈良朝の頃の宣命に「是の東人は常に曰く『額には箭は立つとも背は箭は立たじ』と云ひて、君を一つ心を以ちて護る者ぞ。」と言はれた所謂東人の子孫であつて、主從の義を辨へ、尙武の氣象に富んだ素朴な武士である。彼等は古くは或は防人(さきもり)となり、或は蝦夷征伐に當つて武士的試錬を積んだのであるが、近くは地方の反亂を平定して、頻りに武技を錬り、意志を鍛へたのであつて、源平二氏に仕へて花々しい勳功を立てた武將は、殆どすべて東國に育つた者である。

源平二氏の興隆

源平二氏が世に現れたのは、朱雀天皇の御代の承平・天慶の亂以後であつて、これより藤原氏に重く用ひられて、事ある每に武名を揚げた。殊に源賴信は後一條天皇の御代に平忠常の亂を平げ、其の子賴義は後冷泉天皇の朝に前九年の役を鎭め、更に其の子義家は白河天皇の御時に後三年の役を鎭定して、源家の武威は大いに揚り、東國武士は競うて其の麾下に集まり、隱然一大勢力となつた。一方平氏は貞盛が將門を滅ぼして以來其の名が漸く顯れたが、院政時代に源氏と共に朝命を奉じて、諸大寺の僧兵の橫暴を鎭めて、益朝廷の信任を蒙るやうになつた。平氏はもと源氏と共に東國に起つたので

あるが、源氏が專ら東國地方に武威を輝かしたのに對して、寧ろ關西の海賊討伐の事に當つたから、其の威信は自ら西國に扶殖されたのである。西國武士は東國武士に比して遙かに劣つてゐたから、武力の上から言へば、平氏は到底源氏に及ばなかつた。併し平忠盛が白河鳥羽兩院の寵遇を蒙るに及んで、其の顯達は源氏を凌駕し、更に保元平治二度の亂に清盛が殊勳を奏して以來、源氏は一時衰へたのに反して、平氏は獨り全盛を極め、遂に藤原氏に代つて政權を握るやうになつた。

平氏の滅亡

平清盛は平治の亂後官位累進し、六條天皇の御代には從一位太政大臣に至り、其の長子重盛は内大臣に任ぜられ、一門の公卿十六人、殿上人三十餘人、所領は全國の半ばを過ぎる程の榮華を極めた。かくて清盛は藤原氏の先蹤に倣つて、其の女徳子(建禮門院)を高倉天皇の皇后として外戚の威を振ひ、朝威を憚らずして專横を極めたから、遂に天下の人心を失つたのであるが、加之平氏の一門は京都に住んで以來、貴族的文化に眩惑して、柔弱優雅な公達となつてしまつたから、名は武家であつても、實は公卿となつたのであつて、源氏が再び勢を得るに及んで、脆くも滅亡したのは當然の事である。併し其の榮華が僅かに二十年で終を告げ、しかも一門悉く西海の藻屑と消え去つたのは、餘りにはかない末路である。

藤原氏極盛期の文學

平安時代後期の世相は大體述べ終つたから、最後に此の時代の文學の傾向に就いて略述する。藤原氏の全盛期は唯美主義を奉じて、情趣本位の生活を營んだ時であるから、文藝は特に發達して空前の

偉觀を呈したのである。一條天皇は嘗て「朕の治世に誇るに足るものは多くの人材を得た事である。」と仰せられたが、當時の人材は卽ち文藝に長じた才子名媛である。當時の中心人物たる道長は、學問を好み文藝に秀で、且つ其の一大保護者であつたが、同時代の名士には藤原公任・藤原齊信・源俊賢・藤原行成の如き所謂四納言があつた。此等の人々は門閥があり、且つ才藝に長じてゐた爲に、特に其の名が聞えたのであるが、藤原氏の出でない大江匡衡・大江以言(これとき)・源爲憲・紀齊名(たりな・ときな)・慶滋保胤等は官位も沈滯し、從つて文名もさまで顯れなかつた。匡衡以下の人々は當代の學者文人であるが、更に一大光彩を放つたのは、幾多のすぐれた女流文學者の輩出した事である。

才子名媛の輩出

此の頃藤原氏は外戚の權を恣にする爲に、競うて其の女を入内させたのであるが、後宮に於ては皇后中宮女御更衣が互に君寵を爭ひ、孰れも才媛を擇んで侍女としたから、多くの閨秀作家が輩出したのも偶然ではない。卽ち一條天皇の皇后定子(道隆の女)の女房には、『枕草子』を書いた清少納言や歌人の馬内侍があり、中宮彰子(道長の女)の女房には、『源氏物語』の作者紫式部を始め、和歌に秀でた和泉式部・伊勢大輔等があつた。其の他當代の才媛にはなほ、赤染衞門・出羽辨・小馬内侍・小式部(和泉式部の女)大貳三位(紫式部の女)菅原孝標の女等があつた。

和歌の盛行

當時男子の學問は依然として漢學であつたから、知名の學者が相當に現れた。尤も當時の詩文は概ね辭句の彫琢に苦心して、内容を顧みなかつたから、文學として見るべきものが少くなつたのであるが、和歌は極めて盛であつた。當時男子の歌人としては藤原公任を始め、藤原實方・能因法師・藤原長能・源道濟・大中臣輔親等があつたが、女流には前記の才媛が相踵いで現れた。併し一般の歌風は『古今

集』を典型として、専ら優麗な調を喜び、思想表現共に陳腐平板に流れたいであつて、自由奔放の才を發揮した和泉式部や、和歌の革新を唱へた曾禰好忠の如き歌人も、時流を動かすに至らずして、保守的な公任をして徒らに名聲を擅にせしめたのである。かくて和歌は、歌人が輩出した割合に、實質的には却つて沈滯したのであるが、好忠の革新の聲は、院政時代に於ける新傾向發生の誘因となつたのである。

散文の黄金時代

詩文や和歌が振はなかつたのに反して、物語日記は前代の後を承けて頂點を極めた。卽ち平安朝文學の雙璧たる『源氏物語』『枕草子』を始めとして、『紫式部日記』『和泉式部日記』『更級日記』等が現れて、女流文學は百花繚亂の盛況を呈した。此等の作品は其の種類は異なつて居るけれども、作者が生活せる現代を理想的時代と信じて、花やかな日常生活を其の儘寫し出さうとした點に於て共通して居る。而して此等の作者はそれぞれ洗煉せられた詩的感情と、豐富な創作的伎倆に惠まれてゐたのであつて、其の纖細流麗な和文は、內容と相俟つて、國文學史上に異彩を添へたのである。殊に『源氏物語』は理想的寫實主義の物語として最高の位置を占めたのであつて、一度此の傑作が現れて以來、長く物語の模範と仰がれたのであるが、次いで現れた『狹衣物語』『濱松中納言物語』『夜半の寢覺』などは何れも之を摸倣しつつ、一面には新工夫を凝して、却つて非寫實主義の作品となり、文學的價値はいよいよ低下したのである。

院政時代の文學

『狹衣物語』以下の作品が成つたのは、院政時代であらうと思はれるが、此の頃の文學は從來の單調

で優弱な作風に倦怠を感ずると共に、一方に於ては時世の動搖に刺戟せられて、漸く文藝革新の機運が起つたのであつて、內容形式共に新しい傾向を帶びるやうになつた。漢詩漢文は時代を下るに從つて、益創作力が衰へた結果、過去の作品の撰集を作る事が行はれ、又窮屈な法式から脫離して、平明な詩文を作るやうになつた。次に物語は從來の思想の範圍から出て、描寫の方面に新生面を拓かうとして、或は奇拔な趣向を立て、或は怪奇醜惡な事象を描いて、却つて創造力の缺如を暴露するに至つた。かかる時代に『提中納言物語』の如き短篇の物語が生れ出たのは、寧ろ當然のことであるが、更に

物語日記の展開

物語日記は一轉して、『榮華物語』『大鏡』などの如き、過去の花やかな時代を物語る歷史物語に展開して行つた。歷史物語は想像や趣向などに、さまでの苦心を要しない作品であるが、更に一方に於ては古今東西の說話を集めた『今昔物語集』や、過去の著名な人物の逸事佳話を收めた『打聞集』『江談抄』などが次々に現れたのは、創作的氣力の枯渴を示すものである。而して歷史物語と說話文學とは、共に鎌倉時代の新興文學に系統を引いて居るのである。

和歌の興隆

散文學に起つた新氣運にも增して著しいのは、歌壇に起つた新しい傾向である。院政時代の歌人には、保守革新二派の別を生じて互に論爭したのであつて、其の對立の狀態は、此の時代に於ける公卿對武家の如きものであつた。卽ち當時歌壇の改新を提唱したのは源經信・俊賴父子であつて、大なる波瀾を起したのであるが、これに對して保守派の驍將には、藤原基俊・同顯輔・同淸輔があつて、互に對峙して下らなかつた。かくて院政時代の末期には歌學歌論が盛に起り、勅撰集が成る每に盛な甲論乙駁

があつたのであるが、一代の耆宿藤原俊成によつて新舊兩派は統一せられて、穩健な歌風と歌學の大成を見るに至つた。要するに院政時代は、詩文や物語が時代を下るにつれて衰頽したのに反して、和歌は末期に近づくに從つて彌發達したのである。而して俊成によつて大成せられた歌風と歌學は、鎌倉時代の初期に至つて頂上に達するのである。

第二章　後期の和歌

一　前代繼承期

前代繼承期は一條天皇から後三條天皇までの凡そ九十年間である。此の時代は散文の全盛期であるが、和歌も亦外面的には極めて盛であつた。而して此の時代を代表する勅撰集は、一條天皇の御代になつた『拾遺和歌集』である。此の集の撰者に就いては、花山院御撰説と藤原公任説とがある。當時此の集と前後して成つた撰集に『拾遺和歌抄』（十卷）（群書類從所收）があつて、集は此の抄を增補したものと見る説と、反對に抄は集の抄本であるとする説とがある。從つて『拾遺集』の撰者に關する問題は、集と抄の關係と結び付いて、益紛糾して來るのである。是までに現れた諸説は次の四種に分たれる。

拾遺集と拾遺抄

（一）　集を花山院御撰とし、抄を公任撰とする說。

『八雲御抄』『井蛙抄』『拾芥抄』『勅撰次第』『大日本史』等の說。

（二） 集を公任撰とし、抄を花山院御撰とする說。

『八雲御抄』及び『拾芥抄』の一說。

（三） 集と抄と共に花山院御撰とする說。

『袋草子』、顯昭の『後拾遺抄』、『群書類從』所收の『拾遺抄』奧書に見える塙保己一の說、和田英松博士の說。（『列聖全集』の「皇室御撰解題」所見）

（四） 集と抄と共に公任の撰とする說。

『日本古典全集』の『拾遺和歌集』解題の說。

集並に抄の撰者に就いては、斯くの如く諸說があるのであるが、集だけに就いては、既に『後拾遺和歌集』の序に、「花山の法皇は、さきの二の集に入らざる歌を取り拾ひて、拾遺集と名づけ給へり。」と記されて居る。これは『拾遺集』の成立時代を去る事餘り遠くない時の說であるから、信ずべきものと考へられる。次に集と抄の前後、及び其の成立年代に關しても諸說がある。塙保己一は此の二書の歌人の官位を調査して、抄の成立を長德二年とし、集は其の後數年の間に增補されて、長保二年頃に成つたのであると言つて居る。（拾遺抄の奧書） 次に藤岡作太郎博士は、二書の歌人の官位及び詞書を勘考して、抄は長德三年以後、集は長保三年までの間に成立したものとして居られる。（國文學全史平安朝篇） 次に和田英松博士は、兩書の官位詞書を考證し、なほ藤原行成の日記なる『權記』に、「長保元年十二月十四日癸亥、詣二東院一奉レ返下先日所二借給一拾遺抄上歸レ宅。」（○東院は行成の祖父伊尹の室惠子女王の邸で花山院の御座のあつた所） とあるのを引いて、抄が長德

三年七月から長保元年十二月迄の、二年半の間に成立した事の殆ど確定的な意見を發表せられ、なほ集は抄を補つて、寛弘二年六月から同五年二月法皇崩御の時までの間に、成つたものであらうと言はれた。（列聖全集皇室御撰解題）かくて集は抄を増補して成つたものである事は、略ぼ確定したのであるが、集の成立年代に就いては、未だ確證が見當らないのである。尤も和田博士の説には聽くべき所が多いのであつて、從來信じられてゐたよりも、十數年後に成つたもののやうである。

三條西公條筆　拾遺和歌集
（三條西伯爵家所藏）

『拾遺和歌集』は二十巻より成り、千三百五十一首を收めて居る。短歌以外に長歌五首旋頭歌四首

連歌六首（連歌といふ名稱は用ひてゐない）を含んで居る。編纂の方法は大體『古今集』に據つてゐるのであるが、序文を缺き、部門を一層細分して稍繁雜になつて居る。哀傷の部の終に佛教關係の歌を載せて居るのは、『後拾遺集』に至つて設けられた神祇釋敎部の前驅として注意せられる。「拾遺」と名づけたのは、古今後撰二集に洩れた歌を拾ふといふ義であるが、實際は二集の作歌をも重ねて採つて居る。又『萬葉集』の歌を百二十餘首採つて居るのは初から採る方針であつたのであらう。古い歌人の中で最も多く採られたのは、柿本人麻呂と紀貫之とであつて、各百首許り見えて居る。萬葉の歌を多く入れたのは、前代に行はれた梨壺五人等の萬葉訓詁の事業があつて以來、此の集が漸く歌人の間に親しまれるやうになつた結果である。又古今後撰時代の歌を多く收めてゐるのは、當時の歌壇に前代尊重の保守的傾向が盛であつた爲である。かくて『拾遺集』は『後撰集』の延長とも見らるべき歌集となつたのであつて、古を重んじ現代を輕んじたのであるから、當時の歌人の作は比較的少く採つて居る。現代の歌人で最も多く採られたのは公任であるが、其の歌數はなほ十五首に過ぎない。（花山院の御製は一首も載つてゐない。）而して其の他の歌人の作は十首内外である。要するに『拾遺集』は『古今集』を模範とする當時の風潮に支配せられて居るのであつて、其の歌風は前代を墨守して生氣がなく、且つ一層技巧を弄び、一般になだらかな調が喜ばれるやうになつて居る。併し後世古今後撰と合はせて三代集と稱し、長く歌壇の典型として尊重せられた。

藤原公任

拾遺集時代の歌壇に最も名聲の高かつたのは藤原公任（長久二年歿七十六）である。公任は小野宮實頼の嫡孫で

あり、太政大臣頼忠の子であつて、御堂關白道長とは從兄弟の間柄である。彼は道長の赫々たる權勢に壓倒せられて、思ふ儘の立身が出來なかつたばかりでなく、從弟の藤原齊信にも位階を超えられたので、不平の餘り晩年に正二位權大納言を辭し、其の後間もなく出家して、北山長谷の山莊に隱栖し長久二年に世を去つた。世に四條大納言といふ。公任は名門の出である上に、和漢の學に通じ、故實に明るく、且つ多藝の人であつたので一代の尊信を受けた。其の著書には組織立つた歌論の最初と云はれる『新撰髓腦』一卷（現在のものは後人の假託の書であると云ふ）を始め、『和歌九品』一卷（群書類從所收）などがあり、其の撰著には『和漢朗詠集』二卷、『三十六人撰』一卷、『金玉集』一卷（以上二部群書類從所收）などがあり、また有職の書には有名な『北山抄』十卷がある。

『三十六人撰』は俗に『三十六歌仙』ともいふ。人麻呂赤人から始めて、主として延喜天暦頃の歌人三十六人の秀歌百五十首を選んだものである。卽ち人麻呂・貫之・躬恒・伊勢の各十首、家持・赤人・業平・遍昭・素性・友則・猿丸・小町・兼輔・朝忠・敦忠・高光・公忠・忠岑・齋宮女御・賴基・敏行・重之・宗于・信明・清正・順・興風・元輔・是則・元眞・小大君・仲文・能宣・忠見の各三首、兼盛・中務の各十首を選出して居る。また『金玉集』は卷頭に倭歌得業生柿本末成撰とあるが、公任の撰である事は『俊賴口傳』『古來風體抄』（俊成の撰）『和歌現在書目錄』等に見えて居る。人麻呂赤人を始め、主として三代集時代の歌人、凡そ四十人の作七十八首を選んで、四季戀雜に部類したものである。『和漢朗詠集』に就いては次章に述べる。

公任は博識多藝であつたが、和歌の才は必ずしも聲望に伴なはなかつたのであつて、此の點では源

順に似て居る。しかも順よりも遙かに世の尊敬を受けたのは、名門の學者であり、且つ歌學を樹てた爲である。其の作歌を見ると、趣向に於ては見るべきものもあるが、情趣表現などは『古今集』から殆ど出てゐないのであつて、貫之に比して更に劣つて居る。家集には後人が編んだ『前大納言公任卿集』一卷(群書類從所收)があつて、六百首許りの歌を收めてゐる。

春來てぞ人もとひける山里は花こそ宿のあるじなりけれ　(拾遺)

うき世をば峯の霞やへだつらむなほ山里は住みよかりけり　(千載)

瀧の音はたえて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞えけれ　(拾遺・千載)

朝まだき嵐の山のさむければもみぢの錦きぬ人ぞなき　(拾遺)

すむとても幾代もすまじ世の中に曇りがちなる秋の夜の月　(後拾遺)

此等が公任の代表的の作である。

曾禰好忠

公任によつて代表せられる拾遺集時代の歌壇が行きつまつた時、傳統を破り時流に反抗して、異彩を放つたのは曾禰好忠(歿年未詳)である。其の傳は詳かでない。『袋草子』や『大鏡裏書』などに、丹後掾であつた事が見え、又曾禰丹後掾を略して曾丹後または曾丹(そたん)と呼ばれたのを慨歎した事が傳はつて居るから、官位の低い人であつたと思はれる。好忠の不遇を歎じた作は家集にも見える。『今昔物語集』『大鏡裏書』などに據ると、寛和元年二月十三日に、圓融院が船岡山で子日の御遊を催された時、藤原兼家・同公季以下、大中臣能宣・平兼盛・清原元輔・源重之・紀時文等の歌人を召して和歌の會を開かれたが、

好忠はお召を蒙らずして推參し、兼家等に無禮を咎められて、其の席から追ひ退けられたと云ふ。思ふに好忠は地位が低かつたばかりでなく、頑迷狷介の人であり、且つ自負心があつた爲に人々に嫌はれ、其の歌才も世に認められなかつたのであらう。

好忠の家集に『曾禰好忠集』一卷（群書類従所收）がある。世に『曾丹集』の名で知られて居る。其の作歌を見ると、當時一般に古格になづんで平板に流れてゐたのに較べると、題材用語表現などが清新であり、且つ自由奔放の妙があつて、時代の歌風から一頭地を拔いて居るのである。併し時流に對して反抗的態度をとつて、殊更新奇な題材を捉へ、用語の如きも故意に耳遠い古語や俗語平語などを自由に取入れて、奇狂に陷り蕪雜な作となつたのは其の缺點である。かくて好忠は當時としては、思ひ切つた傳統打破を主義とした爲に、嘲笑を買ひ排斥を受けたのであるが、後世に至つて多くの知己を得たのであつて、やがて起るべき和歌革新の先鋒となつたのである。

荒小田のこぞの古根のふるよもぎ今を春べとひこばへにけり　（新古今）

鳴けや鳴け蓬が杣のきりぎりす過ぎ行く秋はげにぞ悲しき　（後拾遺）

の如きは當時奇矯な作と言はれたものであるが、

三島江に角ぐみわたる蘆の根のひとよの程に春めきにけり　（後拾遺）

御園生のなづなの莖も立ちにけりけさの朝菜に何を摘ままし

上そよぐ竹の葉なみの片寄りを見るにつけても夏ぞ涼しき

くもりなき大海の原を飛ぶ鳥のかげさへしるく照れる夏かな

山城の鳥羽田のおもを見わたせばほのかに今朝は秋風ぞ吹く　（詞花）

人は來ず風に木の葉は散りはてて夜な夜な蟲は聲かはり行く　（新古今）

此等は著想表現ともに清新であつて勝れた作である。思ふに好忠の清新な用語格調や自然に對する客觀的な態度などは、『萬葉集』から學ぶ所があつたのであらう。而して好忠によつて創められた此等の新しい傾向は、後の歌壇に非常な影響を與へたのである。

好忠は時流に反抗して嘲笑せられたが、當時名を知られた歌人には能因法師・藤原實方・藤原長能・藤原高遠（大貳高遠）・源道濟・大中臣輔親・公任の子定賴等があつた。中でも名聲の聞えたのは實方と能因とである。

藤原實方

實方は小一條左大臣師尹の孫、侍從定時の子で、從四位上左近衛中將に昇つた。長德元年に一條天皇の御前で、藤原齊信が實方の

櫻狩雨はふりきぬ同じくは濡るとも花の蔭に宿らむ

の作を稱揚した時、傍にあつた藤原行成が、歌は面白いが振舞はをこがましいと言つたのを實方が怨んで、行成の冠を打落した。天皇は實方の不敬をお怒りになり、歌枕を探つて參れと仰せられて陸奥守に貶し給うたが、長德四年に其の地で歿した。家集に『實方朝臣集』一卷（群書類従所收）がある。

能因法師

實方よりも更に勝れた歌人は能因法師である。俗姓を橘永愷（ながやす）といひ忠望の子である。文章生となつたが、後に出家して能因といひ、攝津の古曾部に住んでゐたので、世に古曾部入道と呼んだ。和歌を

藤原長能に學んで出藍の才があつた。能因は後の西行のやうに旅行を好んだのであつて、奥州を歴遊して詠んだ作は、後の紀行に引かれて人口に膾炙して居る。編著には『玄々集』一巻、『能因歌枕』一卷、『八十島記』(今傳はらず)などがある。『玄々集』(群書類從所收)は紀貫之の『新撰和歌集』に倣つて、永延以後寛德以前の歌人八十八人の秀歌百六十餘首を撰んだもので、卷頭に漢文の自序がある。

心あらむ人に見せばや津の國の難波わたりの春の景色を　(後拾遺)
山里の春のゆふぐれ來て見れば入相の鐘に花ぞ散りける　(新古今)
我が宿の梢の夏になるときは生駒の山ぞ見えずなりける　(後拾遺)
夕されば潮風こしてみちのくの野田の玉川千鳥なくなり　(新古今)

此等が能因の佳作である。

和泉式部

曾禰好忠が革新の第一聲を放つた頃、女流歌人に和泉式部があつて、自由奔逸な感情を清新な調で歌ひ、當時の歌壇に異彩を添へた。式部は當時の閨秀歌人中第一位に位するばかりでなく、平安朝を通じて一流の歌人である。和泉式部の生涯を知るには、其の家集日記を始め、『榮華物語』『大鏡』『御堂關白記』(道長の日記)などに散見する、斷片的な資料に據るほかはない。和泉式部と呼ばれたのは、夫の和泉守橘道貞の官名に因るのであるが、江式部とも呼ばれたのは、越前守大江雅致(まさむね)の女であるからである。併し式部の名は誰の官名に基づくか詳かでない。初め道貞に嫁して小式部を生み、後に冷泉天皇第三皇子の爲尊親王に愛せられ、親王の薨後には更に其の御弟の帥宮敦道親王の寵を蒙つた。其の放

縱な戀愛生活は、當時にあつても非難せられたのであつて、親交のあつた赤染衞門も嘗て其の節操の乏しいのを諫めて、

うつろはで暫し信太の森を見よかへりもぞする葛のうら風

の一首を贈つたが、式部は

秋風はすごく吹くとも葛の葉のうらみ顔には見えじとぞ思ふ

といふ返歌を與へて顧みなかつた。併し道長は式部の學才を認めて、寬弘五六年の頃其の女である中宮上東門院に仕へさせ、後には更に式部の女小式部をも召して内侍とした。式部は其の後丹後守藤原保昌の妻となつて任國に下つた。當時小式部は幼少であつたが、中納言定賴が、「丹後よりの返事は得給へるや。」と尋ねると、とりあへず

大江山いくのの道の遠ければまだふみも見ず天の橋立　（金葉）

と答へたと云ふ。小式部も當時名を知られた歌人であつたが、萬壽二年に母に先立つて世を去つた。其の時母が娘の遺子を見て詠んだ歌は、

留めおきて誰をあはれと思ふらむ子はまさるらむ子はまさりけり　（後拾遺）

といふのである。

和泉式部の家集には『和泉式部集』五卷（群書類從所收）と『和泉式部續集』二卷（續群書類從所收）とがあり、また日記には『和泉式部日記』一卷がある。其の一生が戀愛に陶醉したものであるから、家集の大部分も亦戀の歌

であつて、多情多感な心情を自由に率直に歌つて居る。卽ち式部は情熱的な歌人であつて、戀愛の作の外には弱々しい寂寥の感を歌つて居り、又自然を詠んだものには情景融合の妙があつて、著想表現ともに清新である。

岩つつじ折りもてぞ見るせこが著し紅染のきぬに似たれば　（後拾遺）

聲聞けば暑さぞまさる蟬の羽のうすき衣は身に著たれども

思ふこと皆盡きねとて麻の葉を切りにきりても祓へつるかも

萩原を朝立ちくれば枝はさも折れば折れよと花咲きにけり

うき事も戀しきことも秋の夜の月には見ゆる心ちこそすれ

寂しさに煙をだにも斷たじとて柴折りくぶる冬の山里　（後拾遺）

待つ人の今も來たらばいかがせむ蹈まま惜しき庭の雪かな　（詞花）

つれづれと空ぞ見らるる思ふ人天降り來むものならなくに

ともかくも云はばなべてになりぬべし音に泣きてこそ見せまほしけれ　（千載）

如何にせむ如何にかすべき世の中を背けば悲し住めば憂し　（玉葉）

此等が和泉式部のすぐれた作である。

赤染衞門

後世和泉式部と竝べ稱せられた女流歌人は赤染衞門である。赤染時用の女であるが、實は平兼盛の子であると傳へられて居る。（袋草子）父の時用が右衞門尉であつたので、赤染衞門と呼ばれた。長じて名

儒大江匡衡に嫁して擧周と江侍從とを生み、又道長の妻倫子の女房となつた事がある。擧周は詩文に長じ、東宮學士となり、大學頭式部權大輔に累進した人であり、江侍從は女流歌人として其の名を知られた。赤染衞門の家集には『赤染衞門集』二卷（群書類從所收）がある。其の歌才は和泉式部に匹敵するものではないが、時流に棹さした歌人であるから、當時に於ては名聲が高かつたのである。人口に膾炙する作は、

やすらはで寢なましものを小夜ふけて傾くまでの月を見しかな（後拾遺）

かはらむと祈る命は惜しからで別るると思はむほどぞかなしき（詞花）

の二首である。前者は道隆に愛せられた妹に代つて詠んだ歌であり、後者は其の子擧周の病の平癒を住吉明神に祈つた時の作である。

和泉式部・赤染衞門の外に、當時名を知られた閨秀歌人は極めて多かつたが、中でも名高いのは伊勢大輔・馬內侍・紫式部等である。伊勢大輔は大中臣輔親（能宣の子）の女で、筑前守高階成順の妻となつた人であり、馬內侍は源時用（或云赤染時用）の女である。共に家集がある。紫式部には家集もあるが、『源氏物語』中の作歌には殊にすぐれたのが多い。

二　保守改新對立期

保守改新二派の對立

『後拾遺集』が撰進された白河天皇の御代から、『詞花集』が撰定せられた近衞天皇の御時に至るまで

の八十年間を假に一期として、保守改新對立期と名づける。拾遺集時代は所謂三代集時代の末期であつて、當時歌壇の權威であつた藤原公任は紀貫之の亞流で、しかも遙かに劣り、時代の歌風も前代を守株して、それに及ばなかつたのである。然るに此の時代になると、前代に異端者として擯斥された曾禰好忠や、當時未だ眞價を認められなかつた和泉式部の歌風に刺戟せられて、新しい傾向が盛に起り。又一方には保守派の間からも勝れた歌人が現れて、保守改新二派の對立を見るに至つたのであるが、實力は寧ろ前者にあつて、歌壇は大體に於て改新派によつて支配せられたのである。而して此時代に歌風の上に勃興した新傾向は、好忠等によつて導かれた用語の自由、淸新な情趣、自然の客觀的描寫などの上にあるのであるが、なほ歌學歌論も著しく發達を遂げたのである。

後拾遺集

勅撰集は『拾遺集』以後、物語日記などの散文に壓倒せられて、およそ八十餘年の間撰上の御沙汰が無かつたが、白河天皇の御代に『後拾遺和歌集』が撰ばれ、是より歌壇は漸く活氣を呈して、再び興隆するに至つた。撰者の藤原通俊（康和元年歿五十三）が白河天皇の勅命を蒙つたのは承保二年で、年二十九の時であつたが、政務多忙の爲捗らず、十餘年を經て應德三年九月に至つて奏覽した。二十卷より成り、千二百十八首の短歌を收め、卷頭には通俊の筆に成つた序がある。部立に雜の部に神祇釋教を設けたのは、當時法樂の和歌が流行し、また經文に因んだ詠歌が盛に行はれた結果である。又『古今集』の例に倣つて誹諧歌の目を置いて居る。撰定の方針は序によれば、『拾遺集』以後當代に至るまでの作を選んだのであつて、『萬葉集』や三代集を始め『三十六人撰』『和漢朗詠集』『玄々集』、其の他の撰集に入つて

ゐるものを避けたのである。併し實際には杜撰がある。集中に多くの歌を入れられたのは和泉式部の六十七首を筆頭に、相摸の四十首、赤染衞門の三十二首、能因法師の三十一首、伊勢大輔の二十七首等である。撰者は又現代の作をも比較的に重んじたのであるが、同一歌人の作を多く採らなかつたのであつて、通俊自身のは僅かに五首であり、當時歌人としてすぐれた源經信のは六首である。要するに通俊は、徒らに過去を尊重した後撰・拾遺二集の傾向を改めて、近代及び當代を重んじたのであるが、中心を道長時代に置いて現代の作を多く採らなかつたのは、自信に於てなほ缺くる所があつたのであらう。後拾遺集時代には前代と同じく題詠が盛に行はれ、又本歌取りが流行したから、一般の歌風は技巧的であつて、實感を缺いたのであるが、時勢に伴なふ新傾向も漸く認められるのである。佛教思想が浸潤した結果、幽寂な情景を詠む傾向が漸く著しくなつた事や、一般に雄勁な調が喜ばれるやうになつた事などは、此の集に認められる新しい傾向である。

『後拾遺集』は通俊が一人で撰んだのであり、しかも彼は必ずしも一流の歌人でなかつたばかりでなく、其の撰定には疎漏な點があつた爲に、種々の惡聲が起つた。住吉の神主津守國基は撰者に小鯵を贈賄して、比較的多くの歌を採られたといふので、當時此の集に「小鯵集」の異名が起つたと言はれて居るが、殊に名高いのは源經信の作といはれる『難後拾遺抄』(一卷)(續群書類従に收む)である。此の書は、『後拾遺集』中の難ずべき歌を八十四首拔出して、それに非難攻擊を加へたものである。通俊はこれに對して、紀貫之の『新撰和歌集』の例に倣つて、更に『後拾遺集』の中から名歌を抄出して、『續新撰和歌集』を公

にしたと傳へられて居る。

藤原通俊

さて撰者藤原通俊（康和元年歿五十三）は太宰大貳經平の子である。政務に通じてゐた爲に白河天皇に重用せられ、從二位權中納言に至つた。和漢の學に兼ね通じ、大江匡房と並稱して近代の名臣といはれた。『後拾遺集』撰進の勅を蒙つたのは、通俊が自ら所望したのであると傳へられて居る。通俊はさほど勝れた歌人でなく、家集も傳はつてゐない。又其の後の勅撰集に入れられた歌數も極めて少い。當時一流の歌人は次に述べる經信である。

源經信

源經信（承德元年歿八十二）は宇多源氏の後裔で、左大臣重信の孫、民部卿道方（母師輔女）の六男である。正二位大納言に昇り、晩年に桂の里の別業に棲んだので桂大納言と呼ばれた。承保三年十月（六十一歳）白河天皇が大堰川に行幸せられて、詩歌管絃の三舟を泛べて、群臣をして各其の長ずる所に從つて分乘せしめられた時、經信はおくればせに參つて、乘せらるる儘に管絃の舟に乘つて琵琶を彈じ、次いで詩を賦し、更に和歌を詠じて叡感に與つたといふ。即ち三舟の才があつたのである。詩歌管絃に兼ね通じた人には先に公任があつたが、經信の和歌の才は公任を遙かに凌駕してゐた。經信の作歌は『後拾遺集』には僅かに六首入れられたのであるが、次の『金葉集』には二十七首採られ、また『新古今集』には十九首採られて居る。其の歌風には客觀的傾向が著しく、また平明な中に一種清新な所があつて、新古今風の先驅となつて居る。公任以後さまで勝れた歌人が出なかつた時、たまたま經信が現れたのであるから、當時大いに尊重し、朝廷の和歌の會には必ず召され、又一般に判者として重んぜられた『八雲御抄』

にも「只經信一人天下の判者にて並びなし」と仰せられて居る。家集には後人が代々の勅撰集などから選出した『大納言經信卿集』一卷丹鶴叢書所收がある。左に彼の傑出した作を擧げて置く。

山深み杉のむらだち見えぬまで尾上の風に花の散るかな　（新古今）
玉柏庭も葉ひろになりにけりこや木綿しでて神祭るころ　（金葉）
夕されば門田の稻葉おとづれて蘆のまろやに秋風ぞ吹く　（同）
引板はへて守るしめ繩のたわむまで秋風ぞ吹く小山田の庵　（續古今）
三室山紅葉散るらし旅人の菅の小笠ににしきおりかく　（金葉）
月淸み瀨々のあじろに寄る氷魚は玉藻にさゆる氷なりけり　（同）
沖つ風吹きにけらしな住吉の松のしづえを洗ふしら波　（後拾遺）

『後拾遺集』が成つてから四十一年を經て、崇德天皇の御代大治二年に、『金葉和歌集』が撰ばれた。撰者源俊賴が白河法皇の院宣を蒙つて一度撰進したのは天治元年であるが、其の後再三修訂を命ぜられて、三度目に嘉納せられたのは大治二年である。現今流布してゐる八代集本は再度本であつて、三度目の奏覽本は今『續群書類從』に收められて居る。此の集は題號にも新味が見えてゐるが、卷數も從來の型を破つて十卷となつて居り、又部門も簡單になつて、春・夏・秋・冬・賀・別離・戀上・戀下・雜上・雜下となつて居り、なほ雜下の中に連歌の部を新たに設けて居る。連歌は既に『拾遺集』にも收められてゐるのであるが、當時は歌人の餘技として盛に弄ばれるやうになつたから、特に其の部門を設けたのであ

源俊頼

る。歌數は傳本によつて多少の出入はあるが、『袋草子』には「凡六百五十四首、此外連歌十六首。」とある。從來の勅撰集の歌數の約半數である。撰歌は『後撰集』以後の作歌を採つて居るのであるが、大體に於て現代を重んじたのであり、又同じく現代の歌人といつても、保守派の藤原基俊の如きは僅かに三首を入れられて居るのに反して、撰者自らのは三十五首で最多數を占め、其の父經信のは二十六首を收めて居る。かくて俊頼は極めて積極的な態度を以つて撰に當つたのであつて、體裁內容共に從來の勅撰集に比して餘程面目を新たにしたのである。併し撰者に對して反感を抱く者も多かつたのであつて、『後拾遺集』に異名を與へたやうに、此の集にも「臂突集」の異名があつた。臂突の意義に就いては種々の說があるが、『悅目抄』には「えせ集」の義であると言つて居る。なほ此の集の初度本が成つた時、藤原顯仲は大治元年に『良玉集』十卷を撰んで非難を加へたが、(八雲御抄)今傳はつてゐない。

『金葉集』の撰者の源俊頼(大治四年歿七十餘)は經信の子で、左京大夫木工權頭に任ぜられ、從四位上に敍せられた。歌學者として重きをなした藤原基俊に對して、歌才に於て一世に卓絕してゐた。其の父經信は後拾遺集時代の一流の歌人であつたのに拘らず、撰者となることが出來なかつたのであるが、俊頼は『金葉集』の撰者となつて、大いに面目を施したのである。家集には有名な『散木奇歌集』(十卷)がある。此の集は卷一から卷四までを四季の部とし、卷五を祝・別離・羇旅の部とし、卷六を悲歎・神祇・釋教の部とし、卷七・八を戀、卷九・十を雜の部としてゐる。而して四季を更に月々に細分したのは『曾丹集』の例に傚つたのであるが、卷九の終に「恨躬恥運雜歌百首」を收め、又卷十には長歌・(反歌を含む)旋頭歌・混

本歌・折句歌・沓冠折句歌・隱題・連歌を收めてゐるのは、既に其の異材を示すものである。

俊頼は奔放不羈の才にまかせて、新奇な題材を捉へ、警拔な表現を試み、殊に奇怪な古語外來語俗語などを好んで用ひたのであつて、是より先に革新の第一聲を揚げた曾禰好忠は、ここに始めて知己を得たのである。而して好忠の『曾丹集』が、當時嘲笑せられたのに反して、『散木奇歌集』が一代の歌人に大なる刺戟を與へたのは、時勢の變遷の然らしむる所である。併し俊頼が時流に反抗して、わざと耳馴れぬ地名物名奇語などを用ひたのは、奇矯難解の謗を免れないのであつて、左に掲げる作の如きは其の弊に陷つたものである。

をぐろざきぬたのねぬなは蹈みしだき日も夕ましに蛙鳴くなり

きぎす鳴くすだのに君がくち据ゑて朝蹈ますらむいざ行きて見む

篝火のほ影にみれば丈夫はたももいとなくこひこくむらし

此等の歌は當時既に難解の評があつたものであつて、壽永二年には此等の作歌九十九首を抄出して註解を試みた、顯昭の『散木集註』（一卷）が現れた。併し俊頼の家集が悉く晦澁の作であるのではなく、中には平明流暢なものがあり、殊に清新な感覺を優麗な調で歌つた佳作が少くないのである。

山櫻咲きそめしよりひさかたの雲ゐに見ゆる瀧の白絲

風吹けば蓮の浮葉に玉こえてすずしくなりぬひぐらしの聲

この里も夕立しけり淺茅生に露のすがらぬ草の葉もなし

うづら鳴く眞野の入江の濱風に尾花波よる秋のゆふぐれ

此等は『金葉集』に入れられた佳作であるが、なほ勝れた作を擧げれば、

日ごかりは遊びて行かむ影もよし眞野の萩原風たちにけり

夕まぐれ戀しき風におどろけば荻の葉そよぐ秋にはあらずや

夕されば萩女郎花なびかしてやさしの野邊の風のけしきや

松風のおとだに秋はさびしきに衣うつなり玉川のさと　（千載）

日くるればあふ人もなしまさき散る峰の嵐の音ばかりして　（新古今）

俊頼は歌學に於ては、次に述べる基俊の右に出る事は出來なかつたのであるが、『俊賴口傳』（一卷）一名俊賴無名抄の如きは、後の歌學に影響する所が多かつた。

藤原基俊

俊頼と對峙して溫雅を旨とした保守派の歌人は藤原基俊康治元年歿八十八である。道長の次男賴宗の孫であり、右大臣俊家の子であつたが、門地を恃み才に矜つて世に容れられず、爲に官位も停滯して、從五位下左衞門佐で終つた。基俊は歌才に於ても又判者としての名望も、俊頼には及ばなかつたが、歌學者としては一代に重んぜられた。基俊は公任に私淑し、其の撰に倣つて『新撰朗詠集』（一卷）を撰び、また公任の歌學を承けてこれを世に盛ならしめた。（『新三十六人撰』一名新三十六歌仙も基俊の撰著であると言はれて居るが、これには疑問がある。）歌學の著書に『悅目抄』があつたが、原本は夙に散逸したのであつて、現存するものは後人の手に成つた假託の書である。家集には『藤原基俊集』（一卷）群書類從所收があ

る。其の上卷は堀河院に奉る爲に撰んだのであり、下卷は其の後の歌及び舊作を集めたのである。

春雨のふりそめしより片岡の裾野の原ぞあさみどりなる　（千載）

いとどしく賤の庵のいぶせきに卯の花くたし五月雨ぞ降る　（同）

夏の夜の月待つほどの手すさびに岩もる清水幾むすびしつ　（金葉）

昔見し人は夢路に入りはてて月とわれとになりにけるかな

誰がためにいかにうてばか唐衣千たび八千たび聲の恨むる　（千載）

まきもくの檜原の山の木の間よりかのこまだらに洩れる月影

此等によつて基俊の歌風を察する事が出來る。

藤原顯季

俊頼・基俊等と同時代の著名な歌人に、なほ六條家の祖藤原顯季（保安四年歿六十九）がある。左大臣魚名の三男末茂の裔で、隆經の子である。其の母（藤原親國の女）が白河天皇の御乳母であつたので、天皇の寵遇を蒙り、正二位修理大夫に任ぜられた。家集を『六條修理大夫集』（一卷）（群書類從所收）といふ。顯季の子顯輔孫の清輔三代は平安末期に於ける歌學の重鎭となつた。顯季に就いて特に記すべきは、釋奠に擬して始めて

人麿影供の嚆矢

人麿影供を行ひ、影前歌會を催した事である。當時は『萬葉集』を尊重するやうになつた結果、柿本人麿を崇拜する風が盛に起つたのであるが、顯季は人麿の畫像を寫し、藤原敦光（明衡の子）に畫讚を請ひ、元永元年六月十六日に當代の名流を招いて、盛な影供を執行し、且つ各和歌を詠んで獻じたのである。當日集まつた人は敦光・俊頼・顯仲・宗兼・道經・爲忠、及び顯季の子長實・顯輔等であつて、獻歌の題は「水

風晩來」であつた。詳細は敦光の『柿本影供記』群書類従所收に記されて居る。

さて勅撰集は『金葉集』に次いで『詞花和歌集』が撰ばれた。近衛天皇の御時に崇德上皇の院宣によつて、顯季の子顯輔が撰んだ。其の成立年代に就いては、『袋草子』に「天養元年六月二日奏レ之奏覽之後返給」と見え、また『八雲御抄』には「天養元年六月二日奏レ之、仁平又奏レ之。」と記され、また『拾芥抄』には「天養元年甲子六月二日、依崇德院勅顯輔撰レ之、仁平又奏レ之」とあるが、いづれも其の文意が明瞭でないので、從來二樣の解釋が下されて居る。卽ち院宣を奉じたのは天養元年で、奏覽したのが仁平年中であると見る說と、天養元年に一度奏覽して訂正を命ぜられ、更に奏覽したのが仁平年中であるとする說とがある。仁平は四年に改元して久壽となつたのであるから、此の集が修正の上奏覽せられたのは、天養元年を去る七八年後であつて、『金葉集』を去る二十四五年後である。歌數は凡そ四百十首であつて、勅撰集中で最も小規模の集である。卷數は十卷で序がないことも『金葉集』と同じであり、また部立も大體金葉と同じである。但し『金葉集』に設けた連歌の部を此の集に廢したのは、撰者が比較的に穩健を期した爲であらう。歌數の少い割合に作者の數は二百名に近いのであるから、同一人の作歌を多く採らなかつたことは言ふまでもない。最も多くの作歌を採られたのは拾遺・後拾遺時代の曾禰好忠の十七首、和泉式部の十六首、大江匡房の十四首、源俊賴の十一首などであつて、撰者が新しい歌風の宣傳に努めたことは明白である。併し當代の歌人の作を採ることは比較的に少く、關白藤原忠通の七首を筆頭として、撰者のは崇德院御製と共に六首に過ぎないのは、『金葉集』

の撰定の方針に比して、著しく穩健になつてゐる事を示すものである。『後拾遺集』以來慣例となつた勅撰集に對する論難は、此の集にも加へられたのであつて、藤原教長は『拾遺古今』（二十卷）を撰し、（今傳らず）又長門前司藤原爲經は『後葉和歌集』（二十卷）を作つて難じたのである。

藤原顯輔

藤原顯輔（久壽二年歿六十六）は顯季の子で官位は正三位左京大夫に至つた。保守派の基俊、革新派の俊頼に對する中立派の歌人であつて、新舊二派を折衷し、新古兩樣の歌を詠んだ。

秋風にたなびく雲の絶間より洩れ出づる月の影のさやけさ　（新古今）

夜もすがら富士の高嶺に雲消えて清見か關にすめる月影　（詞花）

などは世に知られてゐる佳作である。家集に『左京大夫顯輔卿集』（一卷）（群書類從所收）がある。

百首和歌の起原

金葉・詞花が撰ばれた頃から、從來の歌合の外に百首和歌が流行した。百首和歌で現存する最古のものは、『和歌現在書目錄』の序に、百首の濫觴としてゐる源重之及び相摸の作である。源重之（長保二年歿）のは、冷泉天皇が東宮（憲平親王）であらせられた頃に奉つたもので、春夏秋冬各二十首戀雜各十首である。今『重之集』（群書類從所收）に收められて居るのがそれである。次に相摸（大江公資の妻。乙侍從）のは、彼女が東國に下つた時箱根權現に手向けたもので、『相摸集』（群書類從所收）に載つて居る。（此の時代の歌人の曾禰好忠の家集『曾丹集』にも百首和歌と標記したものがあるが、是は五十首づつ二度に詠まれたものを、後人が斯く題したもののやうである。）此等は何れも一人が詠んだ百首であるが、多人數が同じ題で詠んだのは、康和年中の「堀河院御時百首」であつて、是より百首和歌が屢行はれるやうになつた。

堀川百首

「堀河院御時百首」は、堀河天皇の康和年間に、藤原公實・大江匡房・藤原顯季・源俊頼・藤原基俊等男女十六人に命じて、春二十題夏十五題秋二十題冬十五題戀十題雜二十題に就いて、百首の歌を奉らしめられたものである。各題に就いて一人が一首づつ詠んだのはこれが最初であつて、後世百首和歌の模範とせられた。『群書類從』に收められた『堀河院御時百首和歌』(一卷)がそれである。

永久百首

「堀河院百首」に次いで「永久百首」が行はれた。これは鳥羽天皇朝の永久四年十二月二十日に、源顯仲・藤原仲實・源俊頼・源忠房・源兼昌・皇后宮女房常陸・其の妹の六條院女房大進の七人に仰せられて奉らしめられたもので、これも各題につき各一首づつ詠進したのである。前の「堀河百首」に續くものとして、「堀河後度百首」といひ、また「堀河百首」を「堀河太郎百首」と呼ぶのに對して、「堀河次郎百首」と稱せられて居る。『永久四年百首』(一卷)も『群書類從』に收められて居る。

久安百首

堀河兩度の百首に次いで行はれたのは前後兩度の「久安百首」である。前囘のは傳はつてゐないが、第二囘目のは近衞天皇の康治年間に崇德上皇から題を賜ひ、其の後七八年を經て、久安六年に全部の詠進を終つたもので、作者は崇德院を始め奉り、藤原公能・藤原教長・藤原顯輔・藤原顯廣(後の俊成)・藤原清輔・待賢門院女房堀川等男女十四人である。『群書類從』に收められてゐる『久安六年御百首』(一卷)は、其の後作者の一人なる顯廣(當時四十歲)が、更に院の命を奉じて作者別に部類して奉つたものである。此の百首の和歌で『千載集』以後の勅撰集に採られたものは、六十五首の多きに上つて居る。

天の河横ぎる雲やたなばたの空だきものの煙なるらむ　(詞花)　顯輔

夕されば野べの秋風身にしみて鶉なくなり深草のさと　（千載）　顯廣（俊成）

しほがまの浦吹く風に霧はれて八十島かけて澄める月影　（同）　淸輔

長からぬ心もしらず黑髮の亂れて今朝はものをこそ思へ　（同）　堀河

などは「久安百首」中の作である。右に述べた「堀河百首」があつて以後、百首和歌は益盛に行はれると共に、規模も漸く大きくなつたのであつて、鎌倉時代以後には七百首・千首などが流行するやうになつた。

『詞花集』を撰ばしめられ、「久安百首」を召され、又御親ら百首を詠ませられた崇德院（長寬二年崩御年四十六）は、詞花集時代の一流の歌人に伍して劣り給はぬ程の歌才を有つて居られた。院が御幼少の頃から和歌を嗜み給うて、屢和歌の會を催された事は、『今鏡』の「春のしらべ」の卷に見えて居る。心ならず御讓位になつたのは御年二十三の時であるが、初度の百首を召されたのは御在位の頃であつた。當時有名な歌人の顯輔父子を始め、俊成・西行等も和歌の道によつて親しみ奉つたのであつて、院の和歌の御上達には、少からぬ影響があつたであらうと思はれる。院が保元の亂の後讚岐に遷幸せられて、其の地で崩じ給うたのは、後の後鳥羽・土御門・順德三上皇と共に、國史上はた國文學史上の悲痛な出來事である。崇德院は遷幸の後全く歌道を棄てて、專ら佛道を勵み給うたのであつて、纒まつた御集は傳はつてゐないが、「久安百首」や代々の勅撰集、其の他に傳へられて居る御製が少くない。勅撰集には總數七十七首（重出一首）載つて居るが、特に『千載集』に二十三首入つて居るのは、俊成が御同情申し上げた關係

女流歌人

もあるであらう。御製は時代の影響を受けて、概ね沈痛悲哀の調を帶びて居る。

花は根に鳥は古巣にかへるなり春のとまりを知る人ぞなき（久安、千載）

秋の田の穂なみも見えぬ夕霧に畦づたひして鶉鳴くなり（續詞花）

吹く風も木々の枝をば鳴らさねど山は久しき聲ぞ聞ゆる（久安、千載）

瀬を早み岩にせかるる瀧川のわれても末にあはむとぞ思ふ（詞花、百人一首）

しののめの明け行く空にかへるとて落つる涙や道芝の露（後葉）

松が根も枕もなにかあだならむ玉の床とてつねの床かは（久安、續詞花、千載）

此等によつて御歌風を窺ひ奉る事が出來るのであるが、保元の亂後御落飾の時に、

憂き事のまどろむ程は忘られて覺むれば夢の心地こそすれ（保元）

と歌はせられ、又讃岐の松山におはしました頃、

濱千鳥あとは都にかよへども身は松山に音をのみぞ泣く（保元）

思ひやれ都はるかに沖つなみ立ちへだてたる心細さを（風雅）

と詠じ給うたのは悲愴の極みである。

詞花集時代には女流歌人が多かつた。殊に名高いのは待賢門院女房堀川、祐子内親王（後朱雀帝皇女）の女房紀伊、花園左大臣（源有仁）家の女房小大進、白河院の女房周防内侍（周防守平繼仲の女）等である。就中最も勝れたのは堀川である。源顯仲の女で中古六歌仙の一人に數へられた。家集には『待賢門院堀川集』一卷（群書類從所收）が

ある。

三　歌壇統一期

歌壇統一期

歌壇統一期は、近衞天皇の御代の終頃から、安德天皇の壽永二年に『千載集』が撰定されるまでの凡そ三十年間である。此の時代には顯輔・淸輔父子の六條家に對して、二條家の祖となつた俊成があつて、互に歌壇に覇を競うたのであるが、大勢は俊成に傾いて、遂に其の歌風が一世を風靡したのである。當時の和歌は個性に目覺めた前代を承けて、內容形式ともに完成の域に入つたのであつて、やがて來るべき『新古今集』の歌風の基礎が成立した時である。而して此の時代を代表する集は『千載和歌集』であつて、最も注意すべき歌人は保守革新二派を統一した俊成である。

千載集

『詞花集』が撰ばれて後は、保元平治の二度の亂があり、次いで源平二氏の爭亂が起つて、世相は著しく險惡になつたから、勅撰集の御沙汰も三十年間許り途絕えてゐた。壽永二年になつて、藤原俊成が後白河法皇の院宣を奉じて撰集に着手したのは、平家一門が都落をする數箇月前の事であつて、平忠度が落ち延びるとき俊成の邸をおとづれて、近く撰ばれる撰集の中に、一首なりとも入れられんことを乞うたことは、『平家物語』の佳話となつて居る。俊成は其の後四年を經て、平家滅亡の後なる文治三年に『千載和歌集』の撰を終へたのであつて、序文によれば、文治三年九月二十日に撰進したのである。併し俊成の子定家の日記『明月記』の文治四年四月二十二日の條に、「巳刻許、入道殿令參

藤原俊成

院給、爲勅撰集奏覽」也。日來自筆御清書、云々」とあるのによれば、一度奏覽した後更に訂正の上淨書して奉つたのは文治四年四月二十二日である。此の集は後拾遺の體裁に復して、卷數を再び二十卷とし、部立もそれに倣ひ、なほ序文を添へて居るが、更に『古今集』の例に倣つて、雜歌の中に短歌(長歌の事)旋頭歌・物名・誹諧歌などを加へて居る。其の特質は金葉詞花の新奇に走らず、『古今集』の理想を復活すると共に、平安末期に成長を遂げた情景融合の新味を取り入れて、詩趣の豐かな新しい歌風を宣揚した點にある。集中の歌數は千二百八十餘首であつて、序文によれば、『後拾遺集』に撰び殘された上正暦の頃から、下文治の今に至るまで、二百年許りの間の歌を選出したのであるが、大體に於て近代に重きを置いて居る。最も多くの歌を採つたのは俊頼の五十二首であつて、之に次ぐのは撰者の三十六首であり、それ以下は基俊二十七首、崇德院御製二十三首、俊惠法師二十二首、和泉式部二十一首、道因法師二十首、清輔十九首、西行十七首、後德大寺實定十五首、待賢門院堀川十五首、源賴政十四首などである。武人の賴政の作が十四首採られて居るのは殊に注意せられる。かくて此の集は新舊二派を調和して、比較的公平穩健であつたから、從來の撰集に對して起つたやうな甚しい非難の聲を聞かなかつた。ただ美作前司入道勝命の『難千載』(今傳らず)が現れたくらゐのものである。(八雲御抄)

『千載集』の撰者藤原俊成は道長の五男長家(御子左家の祖)の曾孫で、祖父の忠家父の俊忠の三代は、相次いで歌人として聞えてゐたが、特に俊成は平安末期を飾る歌人として最も其の名が顯れた。俊成は鳥羽天皇の永久二年に生れ、初め名を顯廣といつたが、仁安二年五十四歲の時俊成と改めた。初め六條家

の顯輔の養子となつたと云はれて居るが、佐々木博士の『日本歌學史』によれば、葉室顯頼の家に養はれたのである。俊成は父祖の血を承けて、幼少の頃から歌を詠み、保延六年(二十七歳)には述懷百首を作り、崇德院の「久安六年御百首」に和歌を召される光榮を得たのは、三十七歳の時であつて、これより歌人としての名望は年と共に高まり、多くの歌合の判者に推され、官位も此の頃から次々に昇つた。其の後位は正三位官は右京大夫兼皇太后宮大夫に迄なつたが、安元二年(六十三歳)に病の故を以て官を辭し、入道して

藤原俊成筆千載集切

(藤原銀次郎氏藏)

釋阿といつた。かくて文治三年に七十四歳で『千載集』を撰進して以後は、いよいよ歌道の長老となり、晩年には極めて多幸な日を送り、元久元年に九十一歳の高齢で他界した。家集の『長秋詠藻』(三卷)は晩年に詠草を整理したものであつて、七百首許りの作を收めて居る。但し此の家集は俊成の全集で

はない。代々の勅撰集を始め歌合百首の類に見えてゐる歌で、家集に載つてゐないものが極めて多いのである。「長秋」は皇后御殿の漢名長秋宮によつたのであつて、彼の得意時代に奉じた皇后宮大夫、及び皇太后宮大夫の官名に基づいたのである。左に『長秋詠藻』及び勅撰集中から俊成の傑作と思はれるものを抄出して置く。

おもかげに花の姿をさきだてて幾重越え來ぬ峯の白雲　（新勅撰）
またや見む交野の御野の櫻狩花の雪ちる春のあけぼの　（新古今）
過ぎぬるか夜半のねざめの時鳥聲は枕にある心ちして　（千載）
昔おもふ草のいほりの夜の雨に涙なそへそ山ほととぎす　（新古今）
伏見山松のかげより見渡せばあくる田の面に秋風ぞ吹く　（同）
住みわびて身を隱すべき山里にあまり隈なき夜半の月かな　（千載）
雪ふれば峯の眞榊うづもれて月にみがける天の香具山　（新古今）
戀せずば人は心もなからまし物のあはれはこれよりぞ知る　（家集）
浦づたふ磯の苫屋の楫まくら聞きもならはぬ浪のおとかな　（千載）
風さやぐさ夜のねざめの寂しきにはだれ霜ふり鶴さはに鳴く　（玉葉）

俊成の歌風

さて俊成は幼少の頃から俊頼の歌風に私淑してゐたのであるが、俊頼の歿後（俊成二十五歳の時）には、基俊の該博な歌學を慕つて、其の教を受けたのである。從つて俊成の歌風は新舊二派の折衷調和の上に成つ

幽玄體

たのであつて、各の長所を取つて清新にして而も溫雅である。かくて從來歌壇に對峙してゐた保守更新二派は、俊成に至つて始めて統一せられ、彼によつて大成せられた二條家の家風は、長く模範と仰がれたのである。俊成はまた歌學に於ては幽玄體を主張し、且つこれを自己の歌に實現して、一代に尊重せられた。俊成が幽玄なる語を用ひたのは、仁安元年の「中宮亮重家朝臣家歌合」の判詞を以て初見とするのであるが、其の師基俊は更に古く、長承三年の「中宮亮顯輔家歌合」の判詞に之を用ひて居る。抑幽玄といふ語は、既に『文鏡祕府論』や『古今集』の眞名の序などに見えて居るのであるが、これが國文學の一の主義として顯著になつて來たのは、平安朝中期からである。卽ち道長時代に頂點を極めた「もののあはれ」は、幽玄味の源泉と見做すべきものであつて、基俊に至つて和歌の標準に用ひられ、更に俊成に至つて強調されたのである。而して俊成の所謂幽玄體は、從來の優美典雅な情趣の上に、平安朝末期に一般人心に浸潤した無常觀の影響を受けて、靜寂な心境を求める傾向を帶びて來たのである。要するに俊成が和歌の理想とした幽玄味は、平安末期に起つた文學的思潮の特徴を代表するものであつて、此の境地は其の後鎌倉時代の初に至つて、益圓熟して『新古今集』の特質となり、次いで室町時代の連歌や謠曲の趣味となり、更に下つて江戸時代に於ける芭蕉一派の俳味ともなるのである。

藤原清輔

俊成と對立した歌人は顯輔の子の清輔である。清輔（治承元年歿七十四）は父祖に較べて官位ともに劣り、太皇太后宮大進に任ぜられ、正四位下に敍せられたが、晩年には病の爲に出家した。父の歌學を承けて、

弟の顯昭と共に六條家の歌學を大成して、一代に重んぜられた。歌學の書には『奧儀抄』三卷、『袋草子』四卷、『和歌初學抄』四卷などがあり、又撰著には『續詞花和歌集』『牧笛集』『和歌一字抄』『和歌題林』などがある。尤も『牧笛集』以下の三部は今傳はつてゐない。『續詞花集』二十卷群書類從所收は二條天皇の勅を奉じて、『詞花集』の續篇として撰んだのであるが、撰を終へた頃天皇が崩御になつたので奏覽を經ず、從つて勅撰に準ぜられなかつたのであると言はれて居る。八雲御抄參看 此の集は一條天皇朝以後の歌人の作九百八十餘首を選出し、勅撰集の部立に倣つて部類して居る。淸輔は俊成・西行と共に、當時の有名な歌人であつて、其の歌風は平明であるが、縱橫奔放の才があり、又豐かな想像力があつた。家集に『淸輔朝臣集』一卷群書類從所收がある。

唐國の虎ふす野べににほふとも花の下には寢てもかへらむ
夕潮に由良のとわたるあま小舟霞のそこに漕ぎぞ入りぬる
手枕にかきやる髮のみだれまで曇りも見えぬ秋の夜の月
冬枯の森のくち葉の霜のうへに落ちたる月の影のさやけさ　（新古今）

此等が淸輔の作として注意すべきものである。なほ家集中には萬葉の影響を受けたものが散見する。俊成・淸輔以外にすぐれた歌人には、西行法師・後德大寺實定・顯昭法橋・寂蓮法師・俊惠法師等がある。此等は鎌倉時代にかけての人々であるから、今は西行法師に就いて述べ、其の他は次篇第二章に讓ることにする。

平安時代末期の歌人で、俊成が「壯年の昔より互に己を知れるによりて、二世の契を結び」といひ、又後世からは俊成と竝び稱せられたのは西行法師である。西行の傳記資料には、西行の作といはれる『撰集抄』及び其の弟子の蓮阿が西行の和歌についての談話を記したと稱せられる『西公談抄』を始めとして、作者未詳の『西行物語』『西行四季物語』『西行一生涯草紙』などがある。併し『撰集抄』と『西公談抄』は共に後人の手に成つた假託の書であり、又それ以下の書は一種の傳記物語であつて、謬說が多いことは、既に世の定說となつて居る。かくて世に流布して居る西行の傳には信を置き難いものが多いのであるから、吾々は直接西行の遺品及び『吾妻鑑』、其の他當時の記錄などに據るより外はない。

西行は俵藤太秀郷の九代の後裔であつて、俗名を佐藤義清（憲清又則清とも記す。）といひ、鳥羽天皇の元永元年に生れた。長じて武道に通じ、また和歌に巧みであつたので、鳥羽上皇に召されて北面の侍となつて知遇を蒙り、左兵衞尉に任ぜられ、又崇德天皇に召されて內裏にも度々伺候し、歌人としての名聲は夙に上下に聞えてゐたが、保延六年に年二十三で突如として遁世し、法名を圓位又は西行と號した。其の出家の動機に就いては種々の說があるが、恐らくは世相の醜さを痛感するか、又は世の無常を感じた爲であらう。遁世の後十七年目には保元の亂に逢ひ、かねて和歌によつて親しみ奉つた崇德院が讃岐に遷幸し給うて後、更に數年にして其の地で崩御になつたことは、彼の半生に暗い影を投げたやうである。保元に次いで平治の亂が起り、洛中は再び修羅の巷となつたが、其の晚年には源平二氏の爭亂を見聞したのであつて、彼は其の後半生に無常の限りを見盡したのである。西行は憂世を離脫した出

家とはいひながら、なほ現世の無常に對する苦悶を抑へることの出來ない情熱の人であると共に、憂世の花月に對する愛著の絆を斷ち去り得ない風流詩人であつた。かくて變轉極まりなき亂世を眺め續けた彼は、只風月を友とし詩歌の世界に放吟して、胸中の憂愁苦悶から遁れようとしたのであつて、出家の後は意の向く儘に、至る所に假の庵を結び捨てて、絶えず東西に行脚したのである。西行はかねて眞言宗に歸依してゐた爲に、屢高野山に籠つて修行したのであるが、又熊野に詣で、大峰にも分け入つて、難行苦行の試錬を受け、更に弘法大師の靈蹟を慕つて讃岐に渡り、善通寺のほとりに草庵を結んだことがあり、又崇德院の白峰御陵に詣でて追慕の涙を灑いだのである。近畿地方は至る所を放浪したやうであるが、殊に花にあこがれて屢吉野山に登り、又篤く伊勢神宮を崇敬して、度々大廟に參拜して居る。其の他西は安藝の宮島に詣で、更に筑紫にも渡つたらしく、東は小夜の中山を二度越えたのであつて、

年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山

と歌つて居る。再度東國に下つたのは文治二年六十九歲の時であつて、途中鎌倉で賴朝に面接して、歌道竝に兵法について問はるるままに聊か武道の事を語り、贈物として銀の猫を授けられたが、門外の兒童に與へて飄然と立去つた。（吾妻鏡文治二年八月の條參照）其の後白河關を過ぎ、阿武隈川を渡つて信夫の里に出で實方の墓を弔ひ、松島を一見して平泉に秀衡を訪づれ、更に出羽に越えて象潟に遊んだ事は、家集によつて知る事が出來る。歸途の路筋は不明であるが、姨捨山・諏訪湖・木曾を遍歷したのは、此の時

であらうと思はれる。かくて文治五年には長い漂泊によつて磨き上げられた心を抱いて、河内の弘川寺で病を養つてゐたが、翌建久元年二月十六日に年七十三で入寂した。嘗て

願はくは花のもとにて春死なむそのきさらぎの望月の頃

と詠んだが、一日の差はあつたにしても、本懐を遂げ得たのは奇縁である。

西行は晩年に東北の長途の旅を終へた後、文治四五年の頃平素詠んで置いた和歌を撰んで諸社に奉納する志を抱き、十二巻の歌合を作つた。其の中で現存するものは伊勢内宮に奉る爲に集めた『御裳濯川歌合』と、外宮に捧げるための『宮河歌合』の二巻だけである。（共に群書類從所收）前者は左山家客人、右野徑亭主の兩方に別つて、三十六番に合せて判を俊成に仰いだもの、後者は玉津島海人と三輪山老翁の左右に分つて、これも三十六番に合せて判を定家に求めたものである。

西行の家集には『山家集』（二巻）があつて、普通に行はれて居るのは俊成・定家・家隆・良經・慈鎭の五人の家集と併せて六家集として刊行せられて居る所の、いはゆる六家集本である。此のほかに『西行法師家集』（一巻）及び『異本山家集』がある。前者には洩れた歌が多いが、後者は流布本の誤を正し遺漏を補ふべきものが多い。（先年藤岡博士が刊行せられた活字本がある。）西行の和歌を見るべきものにはなほ此の外、最近佐々木信綱博士が世に紹介せられた定家の手澤本の『西行の歌集』（一巻）がある。此の書は其の表紙に「聞書集」と記し、下に「西行上人の」と附記してあつて、短歌二百六十一首連歌二首を收めて居るが、此の中百四十九首は從來全く世に知られてゐない歌である。是に「聞書集」と題し

たのは、西行と親しかつた或人が、其の詠歌を聞き取つて書き記した集である爲である。而して佐々木博士の說によれば、此の集には定家が點を加へた作が十六首あつて、其の中八首が『新古今集』に入れられて居るのを以て見ると、新古今を撰ぶ時の資料に供せられたものであらうといふ事である。

西行は連歌師の宗祇、俳聖の芭蕉と共に、風月に放吟した三大自然詩人の一人であつて、而も其の先驅である。其の家集には時代の歌風に見るやうな、掛詞・緣語の末技に煩はされた作があり、又平明に過ぎて凡庸に近い歌も混つて居る。併し清澄な心を以て、靜寂なる自然を泌々と眺め入つた觀照の態度と、一切の虛飾を去つて、率直に自己の心境を敍べた作歌の態度に至つては、實に古今獨步である。燈火を挑げ盡して苦吟した、俊成の優麗な作と竝べて見るときは、餘りに自然であり、平淡であるとも思はれるが、自然に對する深い思慕の情と、人生に對する懊惱哀愁の切情を敍べた作歌は、讀む者をして限りなきなつかしさを覺えしめるのであつて、後世動もすれば俊成以上の歌人である如く稱揚せられてゐるのも此の爲である。かかる特質は、忍苦の漂浪生活から得た所が多いのは素よりであるが、一は其の人格の然らしむる所であつて、强い厭離の心がありながら、なほ人生竝に自然に對する愛著の念を斷ち去ることの出來なかつた熱情が、彼獨得の藝術的な深みを加へて居るのである。家集に花と月とに對する感情を歌つた作が極めて多いのも、西行の特色である。

花にそむ心のいかで殘りけむ捨てはててきと思ふ我が身に　（千載）

よしの山梢の花を見てしより心は身にもそはずなりにき　（續後拾遺）

佛には櫻の花をたてまつれわが後の世を人とぶらはば　（千載）
よられつる野もせの草のかげろひて涼しく曇る夕立の空　（新古今）
わづかなる庭の小草の白露を求めてやどる秋の夜の月
なかなかに心つくすも苦しきに曇らば入りね秋の夜の月
おもかげに君が姿を見つるより俄かに月のくもりぬるかな
人知れぬ涙にむせぶ夕暮はひきかづきてぞうち伏されける
寂しさに堪へたる人のまたもあれな庵ならべむ冬の山里　（新古今）
つくづくと物を思ふにうちそへて折哀れなる鐘の音かな　（玉葉）
いづくにか眠り眠りてたふれふさむと思ふ悲しき路芝の露
遙かなる岩のはざまに獨りゐて人目つつまず物思はばや

此等が西行の代表的な作である。

第三章　朗詠和讃雜藝

奈良朝以來行はれた謠物に、神樂歌・催馬樂などがあつたことは、既に述べた通りであるが、散文學が隆盛になつて、詩歌が振はなくなつた道長時代に、過去の詩歌を謠ふ朗詠が流行したのは當然であ

朗詠

る。朗詠はもと詩句を吟誦することから發達したもので、初めは感興にまかせて自由に朗吟したので あるが、後には一定の詩歌を一定の曲節によつて吟誦するやうになつた。又伴奏樂器は初めは琴や琵琶を用ひたのであるが、後世は笛篳篥笙などを加へるやうになつた。朗詠の起原は奈良朝の頃にあつたであらうと思はれるが、之に一定の曲節を附けたのは平安朝初期であつて、醍醐天皇の御代には、催馬樂と同じく、源家流と藤家流とが竝立してゐた。平安時代初期に朗詠せられた詩句は比較的少數であつたが、時代を下るに從つて漸く其の數を增したのである。

和漢朗詠集

朗詠を集めた最初のもので、而も最も廣く行はれたのは、藤原公任の撰んだ『和漢朗詠集』である。二卷から成り、上卷は春夏秋冬の四部門（更に六十目に分つ）に分つてあるが、下卷は全部雜であつて、更に之を風・雲・晴・曉・松・竹・草・鶴・猿・管絃等四十八目に分類して居る。此の集に收められた詩句は五百八十七首であり、和歌は二百十七首であつて、作者は本朝五十二人支那二十八人である。詩文は平安朝初期以來愛讀せられた『文選』『白氏文集』などを始めとして、本朝の詩文集の中から、朗詠に適する佳句麗章の二行を拔いて居る。更に作者の主なるものと、其の句數とを擧げれば、最も重んぜられて居るのは白樂天の詩句であつて、其の數は百三十五句に達し、これに次ぐものは菅原文時の四十三、菅原道眞の三十八、源順の二十九、大江朝綱の二十八であつて、本朝のは主として弘仁から寬平頃までの詩人である。次に和歌は人麻呂・赤人等の作もあるが、主として三代集の中のものを採擇してゐるのであつて、貫之・躬恒等の作が最多數を占めて居る。卽ち『和漢朗詠集』に收められたものは、主として歷史的

に著名な詩歌であつて、現代の作品を輕く見てゐる事は、當時の和歌撰集と同樣である。

『和漢朗詠集』は、延喜から天暦にかけての詩人の、大江維時（應和三年歿六十七）が撰んだ『千載佳句』に倣つて編纂したものであつて、それに載つて居る句を多く採錄して居るのである。併し和歌を收めたのは公任の『和漢朗詠集』が最初である。此の集の中の詩句は、其のすべてが吟誦せられたのでなく、實地に朗詠せられた確證のあるものは其の一部分に過ぎない。而して和歌も亦朗詠に適したものは、朗吟せられたのであらうと思はれるが、其の證左は文獻に見出されない。なほ朗詠の詩章の訓は、平安時代に行はれた詩文の訓法によつたものであつて、出來る限り國訓で讀んで居る。從つて此の集の漢詩文は、一種の飜譯文學ともいふべきものであつて、これが後の戰記文學などの文章に及ぼした影響は少くない。左に『和漢朗詠集』中の詩文の佳句を掲げて置く。

背レ燭共憐深夜月　踏レ花同惜少年春　白樂天

誰家碧樹鶯啼而　羅幕猶垂　幾處華堂夢覺而　珠簾未レ卷　謝觀

誰謂水無レ心　濃艶臨兮波變レ色　誰謂花不レ語　輕漾激兮影動レ脣　菅三品

秦甸之一千餘里　凜凜氷鋪　漢家之三十六宮　澄澄粉飾　公乘億

強呉滅兮有二荊棘一　姑蘇臺之露瀼瀼　暴秦衰兮無二虎狼一　咸陽宮之煙片片　源順

遺愛寺鐘欹レ枕聽　香爐峰雪撥レ簾看　白樂天

古寫本

『和漢朗詠集』の古筆切古寫本の類は極めて多い。時代が古く且つ完本は多くはないが、帝室御物の四種の如きは、殊に古

筆の逸品と稱せられて居る。御物の四種の中で完本は、傳藤原行成筆の巻子本竝に粘葉本と、傳藤原公任筆二巻の三種であつて、他の一種の傳源俊頼筆は一部分である。此等の中で殊に勝れてゐるのは、圖版に示した傳行成筆の粘葉本であつて、料紙の文様色彩は優雅にして力のある筆致と相俟つて、名狀すべからざる美しさがある。行成は道風佐理と併せて所謂三蹟と稱せられた名手であつて、其の筆蹟として傳へられて居るものは可なり多い。中にも『和漢朗詠集』のが最も多いのであつて、完本だけでも御物の外に關戶氏藏本原氏藏本などがある。此等は必ずしも同筆でなく、且つ行成の眞蹟としての確證のあるものは一つもないのである。併したとへ行成の筆でないとしても、何れも平安朝中期の名手の書である事は疑のない事であつて、御物の粘葉本の如きは古筆の至寶である。

傳行成筆和漢朗詠集（御物）

新撰朗詠集

公任の『和漢朗詠集』の後およそ百年を經て、藤原基俊の手に成つた『新撰朗詠集』二巻が現れた。こ

れは部立・品題・作家など、すべて公任の『和漢朗詠集』に倣つたものであつて、詩文五百四十餘句、和歌二百首許りを收めて居る。此の集の詩歌は、公任の集の遺漏を拾つた爲に一段と劣つて居り、從つて實際に朗吟せられたものも一層少いのである。

朗詠は催馬樂と共に主として遊宴の席で歌はれたものであるが、平安時代の中期以後、佛敎が益盛に行はれるやうになつて、佛會に唱へる謠物が發達した。佛會に用ひられた謠物は卽ち聲明である。聲明は平安朝の初期に起つて、末期に至つて大成せられたもので、專ら天台眞言二宗に行はれたものであるから、自ら二つの流派があつた。聲明の謠物は、主として三寶を禮讃するものであつて、梵語のままで唱へるのを梵讃といひ、漢譯したものを漢讃といひ、漢譯を國語に改めたものと、新たに國語で作つたものとは、共に之を和讃といつて居る。梵讃・漢讃は別として、和讃には散文に近いものもあるが、歌謠の形式をとつて居るものには短歌形式や、七五七五七五七五の今樣形式を始めとして、七五の句を中心として、長短樣々な句形を雜へた長篇に至るまで、種々のものが行はれた。而して何れも一定の曲節を附けて唱へたのであつて、次に述べる雜藝に大なる影響を與へて居る。當時の和讃で後世名高いのは、空也上人の作と傳へる「空也和讃」と、惠心僧都源信の作と稱する「天台大師和讃」「來迎和讃」等數種の和讃である。中にも傑作と稱せられるのは源信の「極樂六時讃」であつて、七五の句八百から成る長篇で、詞藻が流麗であり情熱が籠つて居る。左に揭げるのは其の中の「中夜和讃」の一節である。

夜ノ境シヅカニテ　閻浮ノ昔ノ日ニ似タリ
漸ク佛所ニ近ヅキテ　目ヲ擧ゲ瞻廻(ミメグ)ラセバ
中臺高廣寶縵等　無數ノ莊嚴具足セリ
寶帳寶網寶幡蓋　寶鐸寶鈴寶瓔珞
此等ヲ廻リテ億千ノ　宮殿樓閣莊嚴具
上下四方重々ニ　光明照シ輝ケリ
中央最上地ノ上ニ　大寶蓮花王ノ座アリ
毘楞伽寶臺ヲナシ　百寶色相葉ニ具セリ
八萬四千葉アリテ　無量妙寶具レリ
葉葉毎ニ百億ノ　大寶摩尼ヲ飾レリ
一一ノ珠ニハ悉ク　千ノ光明照セリ
知ルベシ八萬四千ノ　大千界ノ日輪ヲ
集メタルガ如クシテ　無漏(ムロ)ノ萬德莊嚴ス
如來此ノ座ノ上ニシテ　大寂定ニ入リ給ヒ
相好圓滿シ給ヒテ　金山王(コンセンノウ)ノ如クナリ

平安朝末期に、神事遊宴佛會を始め遊女傀儡などの間に行はれた諸種の謠物は、之を總括して雜藝

と呼んだのであるが、郢曲の名によつて呼ばれたものも大體に於て同じである。雜藝の歌謠の形式は多種多樣であつて、作られた年代も新古樣々であり、從つて種類の名稱も極めて多いのである。而して此等の歌謠を集めたものに『雜藝集』があつたことは、後白河院御撰の『梁塵祕抄口傳集』卷十（十卷より成り、零本卷十は『群書類從』に收められて居る。）に「我獨雜藝集をひろげて、四季の今樣・法文・早歌に至る迄、書きたる次第を歌ひ盡すおりもありき。」とあるので明かであるが、散逸して傳はらなかつた。『雜藝集』に次いで、後白河院は『梁塵祕抄』（二十卷）を撰び給うたのであつて、これが室町時代まで存在したことは、『徒然草』に「梁塵祕抄の郢曲のことばこそ、またあはれなる事は多かめれ。」とあるので明白であるが、これも後世湮滅した。然るに明治四十四年に其の卷二が發見せられ、次いで翌年にまた卷一と『梁塵祕抄口傳集』卷一との斷簡が發見せられて、歌謠史上に貴重な資料を提供したのである。今は共に佐佐木信綱博士篇『梁塵祕抄』に收められて居る。

現存する『梁塵祕抄』零本は僅かに一部に過ぎないのであるから、其の全豹を窺ふ事は出來ないけれども、卷二には法文歌・四句神歌・二句神歌の三種を收めて居る。法文歌は主として今樣體であつて、二百二十首を存して居り、內容は佛教に關するもので、和讃の系統に屬するものである。四句神歌は今樣體の外に、六句七句より成るものもあつて、二百四首を存し、內容は主として神佛の信仰に關するものであるが、雜の中には庶民の生活に觸れた民謠や、後の俚謠に關係の深い各種の興味ある歌がある。而して二句神歌は上下二句から成る短歌形式のもので、百二十二首を存し、神樂の系統に屬する

（欄外見出し：雜藝集／梁塵祕抄／梁塵祕抄の歌謠）

ものであるが、雜の歌には民謠めいた各種の謠物がある。『梁塵祕抄』の零本によつて雜藝の一般を想像するに、神樂・催馬樂・風俗・朗詠・和讃・今樣などの系統を引いて、多種多樣の發達を遂げたものであつて、當時の和歌が貴族趣味の上に立つて、狹隘な天地に跼蹐してゐたのに對して、寧ろ庶民の生活に立脚して、彼等の感情を自由に且つ生々しく傳へて居るのである。

佛は常にいませども、現ならぬぞあはれなる、人の音せぬ曉に、ほのかに夢に見え給ふ。（法文歌）

峯に起き臥す鹿だにも、佛になることいと易し、おのれが上毛をととのへ、筆に結ひ、一乘妙法書いたんなる功德に。（同）

極樂淨土の東門に、機織る蟲こそ桁に住め、西方淨土のともし火に、念佛の衣ぞいそぎ織る。（四句神歌）

我をたのめて來ぬ男、角三つ生ひたる鬼になれ、さて人に疎まれよ、霜雪霰降る水田の鳥となれ、さて足つめたかれ、池の浮草となりねかし、と搖りかう搖り搖られありけ。（同）

をかしく屈まる物はただ、海老よ弶よ牝牛の角とかや、昔冠の巾子とかや、翁の杖衝いたる腰とかや。（同）

吹く風に消息をだに託けばやと思へども、よしなき野べに落ちもこそすれ。（二句神歌）

山伏の腰につけたる法螺貝の、丁と落ち、ていと割れ、碎けてものを思ふ頃かな。（同）

稻荷には禰宜も祝も神主も無きやらん、社こぼれて神さびにけり。（神社歌）

神ならばゆらさららとをり給へ、いかなる神か物恥はする。（同）

此等によつて一般を推す事が出來るであらう。

第四章　物語の隆盛

一　源氏物語

紫式部

平安時代前期の末頃に現れた『宇津保物語』『落窪物語』などの後を承けて、物語の頂點を極めたのは『源氏物語』である。此の物語は藤原氏極盛期を代表する傑作であるばかりでなく、國文學史を通じて第一位を占めるべき作品である。作者は越前守藤原爲時の女紫式部である。爲時は藤原冬嗣の六男良門の後裔で、堤中納言兼輔の孫、雅正（まさただ）の子である。爲時は文章生に擧げられ、詩文と和歌に長じてゐたのであつて、其の詩は『本朝麗藻』に載つて居り、又和歌は『後拾遺集』及び『新古今集』に入れられて居る。爲時の子には紫式部の外になほ、男子に惟規（のぶのり）・惟通・定暹阿闍梨等があつたが、惟規は式部の兄であつて、詩文と和歌を善くした。惟規の作歌は『後拾遺集』及びそれ以後の勅撰集に散見する。要するに紫式部は文學者の血統を承けて生れたのである。紫式部の實名は明かでなく、其の歿年も詳かでない。女房名を一に藤式部と呼ばれたのは、氏の藤によるのであるが、紫式部と稱せられた事に就いては諸說がある。もと藤式部といはれたのを、『源氏物語』中の人物の紫上に因んで斯く呼んだのであると言ひ、又藤の花のゆかりに據つたのであるとも言はれて居る。式部と呼ばれたのは、兄惟規が式部丞であつた爲であらう。なほ『紫式部日記』によれば、一條天皇が『源氏物語』を賞揚せられて、「此の

人は日本紀をこそ讀みたまふべけれ。誠に才あるべし。」と仰せられたので、「日本紀の局」と呼ばれたといふのであるが、これは一時的の事であらう。式部は長じて左衛門權佐藤原宣孝の妻となつた。宣孝は良門五世の孫であるから、式部と遠祖を同じうする同族の人である。二人の間に大貳三位を生んだが、長保三年に夫に先立たれた。時に式部は未だ三十歳に達してゐなかつた。三四年の後上東門院彰子に仕へたのであるが、其の頃の生活の一部分は日記によつて窺はれる。『源氏物語』を書き始めた年代は詳かでないが、日記には三個所に見えて居る。殊に寛弘五年十月の條に、公任が「あなかしこ、此のわたりに若紫やさぶらふ。」といつて、式部の部屋を窺つた事が見えて居るから、此の頃までに若紫の巻を書き上げてゐた事は明かである。式部が此の大作に著手したのは、恐らく夫に先立たれた寡婦としての淋しさを、しみじみ感じてゐた頃であらうと思はれるが、斯かる大部のものが一朝にして成る筈はないから、宮仕の間も書き續けたのであつて、其の全部が完成するまでには前後に亙つて、かなりの年月を要したであらうと思はれる。紫式部は『源氏物語』以外に、なほ短篇の物語を幾つか書いたやうである。それは日記に

局に、物語の本ども取りにやりて、隱し置きたるを、御前にある程に、やをらおはしましてあさらせ給ひて皆ないしのかんの殿〇中宮の御妹妍子に奉り給ひてけり。よろしう書きかへたりしは皆ひき失ひて、心もとなき名をぞとり侍りけむかし。

とあるのによつて推量せられる。

紫式部の學才

紫式部の學才性格などは、其の作品の『源氏物語』『紫式部日記』『紫式部集』などによつて窺ふことが出來る。幼少の頃から聰明であつた事は、父が兄の維規に『史記』を講じて居るのを傍で聞いて、兄よりも却つて善く記憶したので、父が歎息して「口惜しう男子(をのこご)にて持たらぬこそ幸なかりけれ。」と言つた事(紫式部日記)に徵して知られるが、漢學の素養のあつた事は、日記の中に、中宮の爲に樂府を講じた事を記して居るのを見ても察せられる。式部が和歌に秀でてゐた事は『源氏物語』の中の和歌や家集を見て明白であるが、歌學音樂書畫に識見を有つてゐた事も、『源氏物語』や家集によつて知られる。式部の學識才能はかくの如くであるが、なほ性行の一端は其の日記家集などによつて窺ふ事が出來る。この事は更に『紫式部日記』の條に述べるつもりである。

源氏物語創作の動機

紫式部の閲歷は大體右に述べた通りであるが、更に式部が『源氏物語』を書いた動機に就いて一言して置く。式部は幼少の頃から文學を好んでゐたやうであるが、偶當時は女流文學の全盛期であつて、すぐれた閨秀作家が次々に現れて、或は和歌に、或は散文に、それぞれ其の天分を發揮した時であるから、彼も亦その風潮に刺戟せられて、此の創作を思ひ立つたのであらうと思はれる。而して當時は平安文化が最高潮に達した時であつて、花やかな貴族社會の生活狀態は、之をありの儘に記しても千載に傳ふべき價値があつたのであるから、式部は更に感情生活までも如實に傳へようとの抱負のもとに、此の作品に筆を染めたのであらうと考へられる。式部が物語を歷史以上に價値のあるものと認めてゐた事は、『源氏物語』の螢卷に、作者自らが作中の人物源氏君の口を借りて述べた言葉によつて窺

はれる。即ち式部は「日本紀などは唯かたそばぞかし」と言つて、人生を寫すには歴史は到底物語に及ばない事を斷言して居り、更に物語に就いては次の如く述べて居る。

その人の上とてありの儘に言ひ出づる事こそなけれ、善きも惡しきも世に經る人の有樣の、見るにも飽かず聞くにもあまることを、後の世にも言ひ傳へさせまほしきふしぶしを、心にこめ難くて言ひ置き始めたるなり。善きさまに言ふとては善き事の限りをえり出で、人に從はむとては又惡しき樣の珍しき事を取り集めたる、皆かたがたにつけてこの世の外の事ならずかし。

吾々は此の言葉によつて、作者が從來の作り物語と趣を異にする、寫實小說を書いた所以を知り得るのである。

源氏物語の規模

さて『源氏物語』は光源氏の君を主人公とする物語であるので、斯く名づけたのである。五十四帖からなる長篇であつて、其の一々の卷には、桐壺・帚木・空蟬・夕顏といふやうに優雅な名が附けてある。これは『宇津保物語』などの先例に傚つたのである。此の物語に取扱はれた人物は、三百人以上に達して居るが、主要人物だけでもなほ三十人に上り、事件の延長は前後七十年に及んで居る。『源氏物語』はかくの如き大規模の作品であるが、これを大別する時には、前篇後篇の二部に分けて見る事が出來る。其の前篇は桐壺から河竹に至る四十四帖であつて、記す所は主として主人公源氏君の花やかな一生である。後篇は橋姬から最終の夢浮橋に至る十帖であつて、これには源氏君の子なる薰大將を主人公として、其の失意の半生を寫して居るのである。而して後篇は其の背景を宇治にとつて居るから、

平安朝末期以來これを宇治十帖と呼んで居る。

此の物語の組織並に梗概は以下述べる通りである。前篇は帝の寵遇を一身に集めた源氏君の母なる更衣が、弘徽殿の女御を始め周圍の女房達の壓迫を受けて、早く世を去つた事から始まる。三歳で母を喪つた源氏君は、世にも稀な美貌と才藝を兼ねて、父帝の寵愛を受け、人々にも敬愛せられて成長し、やがて元服して左大臣の女葵上を娶つた。併し源氏君は、葵上に對しては眞の愛情を感じなかつたのに反して、帝が新たに入内せしめた藤壺女御は、亡き母に生寫しであつた爲に頻りにつき纒つたのであるが、それが何時しか戀愛に變つて行つた。かくて藤壺を戀した事は、源氏君の後半生に暗い影を投げる事になるのであるが、青春の血に燃えて居る頃は、花に狂ふ蝶のやうに幾多の女性と交渉を重ねて行くのであつて、作者は此の間に、當時の貴族社會に於ける戀愛生活の種々樣々な姿を寫して居るのである。作者は元來源氏君を理想的な男性として描いて居るのであつて、葵上の兄なる頭中將の如きは、源氏君を一層引立てる爲に配して居るのであるが、一方では源氏君に養はれて居る紫上を、理想に近い女性として寫し出して居るのである。從つて源氏君と關係のあつた、夕顏・空蟬・六條御息所以下多數の女性は、それぞれ長所のある婦人として描かれては居るが、これも畢竟中庸を得た紫上を完璧たらしめる爲に、點出した觀があるのである。かくて源氏君は榮華の限りを盡し、思ふ事の成らぬはない幸福な日を送るのであるが、藤壺が生んだ皇子（冷泉院）が實は源氏の因果の子である爲に、胸中の苦悶は絶間がなかつた。加ふるに葵上は一子夕霧を生んで俄かに逝去し、六條御息所は其の女

秋好の齋宮に隨つて伊勢に下り、父帝は病を得て崩御せられ、藤壺も出家して、源氏君は哀別離苦を嘗め盡した。是より先源氏君は花の宴の夜に、弘徽殿の女御の妹で東宮に奉る豫定であつた朧月夜內侍の袖を捉へて、新たに罪を重ねたのであるが、偶二人の關係は內侍の父に見顯された。內侍の父はかねて源氏に敵意のある、今を時めく右大臣であるから、源氏君も其の壓迫に堪へかねて、遂に自ら須磨明石に配所の月を眺める身となつた。明石で見出した明石上は、紫上に次いで物語中の重要な女性であるが、源氏が二年半の後罪を許されて都に歸つた時、迎へられて嵯峨に棲み、其の腹に生れた少女（明石中宮）は紫上に引取られて育てられた。源氏は歸京の後再び衆望を一身に集め、藤壺の薨去の悲はあつたが、其の腹に生れた冷泉院の治世となつて、內大臣太政大臣を經て太上天皇に準ぜられ、榮達の頂上に達した。併し四十の賀を迎へた時は榮華も盡きて、漸く秋風落莫の境に入つたのである。殊に異腹の御兄にあたる朱雀院から賜はつた皇女の三宮が、頭中將の子柏木君と契をこめて薫君を生んだのは、源氏が犯した過去の罪の應報であつて、不義の子を我が子として養ふ源氏の心中には、悔恨の情に堪へないものがあつた。源氏が女三宮を得て以來、是まで平和で樂しかつた紫上との間に、悲しむべき破綻を生じたのは當然の事であるが、朱雀院の崩御に次いで、朧月夜內侍は尼となり、柏木君は犯した罪の呵責に堪へずして病歿し、女三宮も深い哀愁の爲に俄かに出家し、なほ源氏が最愛した紫上も亦病の爲に他界したので、源氏は重ね重ね人生の悲哀を味つて、悲痛の底に落ちて行つた。かくて源氏の晩年は極めて寂しく悲しいものとなつたので、遂に紫上の一週忌に遁世の志を抱くに至

つた。以上は桐壺から幻に至るまでの四十一帖の梗概であるが、幻の卷の次には源氏の死を書くべくして、本文の無い雲隱がある。此の卷に就いては古くから種々の說があつて、或は作者が卷名のみを記して、わざと源氏の死を書かなかつたのであると言ひ、或はもと本文も備はつてゐたのであるが、後世散逸したのであるとも言はれて居るのであるが、これは平安末期の頃、誰かが卷名のみを加へたのであると見る說に從ふべきである。而して雲隱の次の三帖には、源氏薨去の後の事や薫君の生立などを描いて居るのであつて、是は言ふまでもなく宇治十帖に移る準備である。

後篇は、表面源氏君と女三宮の間に生れた子となつて居る薫大將を主人公とし、今上（朱雀院の皇子）の后明石中宮の御腹の匂兵部卿宮（今上第三皇子）を副人物として、源氏の異母弟八宮（桐壺帝の第八皇子）の大姫君・中姫君及び浮舟君との間に起る戀愛の鬪爭を物語るのである。而して此の十帖は、前篇の若菜卷以後に語り來つた現實的悲哀の後を承けて、薫大將と浮舟君の不思議な運命と、憂愁苦悶に滿たされた人生とを中心として描いて居るのであつて、花やかで幸福であつた源氏の物語と、對照の妙を得て居るのである。即ち薫大將は生れながら暗い影を引いて居る沈鬱な性質の人で、早くから現世の享樂的生活を厭ひ、只佛道にのみ心を牽かれて居るのであるが、偶宇治に晩年を寂しく佛に仕へてゐる八宮から、其の美しい二人の姫君の後見を託された。八宮はやがて世を去り、薫大將は大姫君を戀して、或時意中を打明けたが退けられて、中姫君との結婚を勸められた。併し中姫君は却つて匂宮に奪はれ、且つ大姫君ははかなく歿したので、薫君は失意と懊惱に日を送るやうになつた。其の後薫大將は、亡き大姫君に

似た其の異腹の妹浮舟君を見出して、宇治の山莊に棲ませて寵愛するのであるが、浮舟は多情な匂宮に近づかれて、二人の貴公子の間に挾まれて悶え苦しんだ擧句、一夜脫け出て宇治川に身を投げたが果さなかつた。浮舟君は横川の僧都に介抱せられて蘇生し、やがて北山の小野に隱棲して尼となつたが、人傳にかくと聞いた薰大將は、行方を尋ねて消息を送つた。併し生ける屍となつた浮舟君はすげなく使を還して、返事さへ與へなかつたので、薰大將はいよいよ思ひ亂れてゐるといふ所で物語は終つて居る。かくて作者はなほ後を書くつもりであつたであらうとも想像せられるのであるが、餘韻を殘して筆を收めたものとも見られるのである。

先進文學の影響

如何なる作品も前代文學の影響を受ける事なくして現れるものではない。『源氏物語』もまた過去の種々な作品から、直接間接に多大の影響を受けて居る事は言ふまでもない。中にも源氏君を中心として、十數人の女性との間の種々な戀愛生活を描寫した事、中心人物と交渉のある幾多の人物が、次々に現れては間もなく姿を消して行く事、重要な位置を占める女性が、多くは幼少の頃父を喪つた薄倖の人物である事、物語に詩的興味を添へる爲に、至る所に和歌を挿入して居る事などが、それぞれ竹取・伊勢・落窪・宇津保などの先進文學に學ぶ所が多かつた事は、既に從來論ぜられて居る所である。併し紫式部は極めて優秀な創作家であつたから、從來の作品の影響を受けながら、自分が親しく經驗した現實社會から種々の材料を取り、又周圍の人々から聞き取つた樣々な實話を本とし、なほ曾遊の地を背景に取入れ、且つ此等の素材を自己の人生觀によつて、統一し理想化して居るのである。かくて

『源氏物語』は從來現れた架空的な傳奇物語や、和歌の趣味を生命とする斷片的な歌物語などから、更に一歩を進めて、實社會を寫し人生を描いた理想的寫實小說となつたのであつて、作り物語は此の作品に至つて殆ど完璧に近いものとなつたのである。

結構布置

『源氏物語』が古今に卓絕する所以は、結構と描寫と文章の三方面から批判する事によつて、略ぼ盡されるやうである。此の三方面は素より離るべからざる關係があるのであるが、今は便宜上それぞれ引離して考察しようと思ふ。結構布置の方面に於て第一に擧げ得るのは、對照の妙を得て居る事である。

（一）對照の妙

人物に就いて見ると、貞操の堅固な空蟬は、たやすく靡いた軒端の荻と對照せられて居り、意志の弱い内氣な夕顏は、淋しく自己を守り通した前齋院の槿君と性格相反する人物として寫されて居り、又端正でよそよそしい葵上は、情熱的で嫉妬心の强い六條御息所と對照的に寫されて居る。更に男性を例として言へば、外面浮華に見えても、一度契つた女を終生見棄てなかつた源氏君は、表面謹直を裝うて、實際は輕薄多情な頭中將と對比されて居るのであるが、殊に對照の最も著しいのは、快活で浮氣な匂宮と憂鬱で眞面目な薰大將である。なほ巧妙な對照は人物以外にもある。例へば若紫と末摘花、紅葉賀と花宴、葵と榊、澪標と關屋の如きは、卷中に描寫せられてゐる事象に對比の妙があるばかりでなく、卷の名までも對になつて居る。

（二）變化の妙

人物や事件の對照は程度を超えると、技巧の跡が見えて却つて單調になり、又感興を殺ぐのであつて、此の物語にも其の弊を認めるのであるが、作者は巧みに變化を與へて、多くの場合其の缺陷から

免れて居る。從つて第二に擧ぐべきは變化の巧妙な事である。此の物語が主として戀愛を寫して居る事は言ふまでもないが、戀愛の對象となつた幾多の女性は、身分年齡境遇容貌性格などがそれぞれ異なつて居り、之を見初めた動機や事件の發展にも、各變化の妙があるのであるが、其の戀愛生活は動もすれば類型的になり易い。作者はこの單調を破る爲に、或は末摘花・源内侍・近江の如き女性を拉し來つて三樣の滑稽を寫し、或は眞木柱及び夕霧の卷に見るやうな破鏡の歎を描いて居る。其の他人事の背景となつてゐる季節や場所は、それぞれ異なつて居り、なほ各卷の年月の長さにも長短があるのであつて、變化の妙は作品全體の上に認められる。

（三）連鎖の妙

第三の特長は連鎖の巧妙な事である。例へば帚木卷の雨夜の品定めに、頭中將が物語つた常夏の女は、夕顏卷の伏線であり、夕顏君を取殺した物の怪は、葵卷に至つて六條御息所の生靈の祟であつた事を知らしめ、若紫卷で播磨守の子良淸が、源氏に語つた明石入道父子の話は、やがて明石卷に實現せられ、又須磨卷で源氏が書き集めた繪は、絢爛な繪合卷の準備であつたのである。これは初めの卷卷に於ける連鎖の著しい點を擧げたのであるが、更に部分的に見て行くと、作中の人物が次々に登場して、一人づつ姿を消して行く有樣や、後篇に現れて來る主要な人物が、源氏の晩年に引續き誕生して居るのも、極めて自然的に寫されて居る。かくて人物や事件が常に連絡を保ちつつ、次の卷の端を開いて居るのは、長篇物語の結構として極めて巧妙である。

（四）全篇の統一

第四は全篇に統一のある事である。今最も著しい例を擧げれば、源氏君がおほけなくも藤壺に懸想

したのは一大過失であつて、其の後半生は良心の苛責に惱まされ、苦悶に滿たされたばかりでなく、其の罪は子に報いて、夕霧は雲井の雁との間を割かれたのであるが、更に恐るべき報は、女三宮が柏木と契つて不義の子薫君を産んだ事である。源氏君の一生涯が花やかであり、幸福であつたのに反して、薫君が生れながらにして沈鬱な厭世家であり、其の一生が失意絶望煩悶で滿たされたのは、畢竟因果應報の理に支配されたのであつて、この思想は個々の事件を統一する根柢となつて居る。『源氏物語』はまた愛慾の半面に潛む懊惱哀愁を寫し、花やかな生活の裏面に横たはる哀別離苦を描いて、全篇に沈痛悲哀の空氣を漂はせて居る。これは作者の淋しく惱ましい境遇が然らしめたのであらうけれども、實社會の反映でもあり、又當時一般の人心を支配した無常觀の影響にもよるのである。其の動機は何れにあるにしても、物語全體の上に與へた哀愁感傷の色調は、全體に統一を與へ、人生觀に一種の深みを加へる效果があつたと言ふべきである。

描寫法

（一）人物の描寫

此の物語の結構布置に技巧の妙がある事は大略右に述べた通りであるが、更に人物社會自然などの描寫の手腕を考察する時、作品の價値は一層明瞭になるのである。作者が人物の描寫に實在の人物をモデルに用ひた事に就いては、從來考證せられて居るのであるが、作者は更に之を理想化すると共に、主要人物の個性を書き分け、なほ時としては性格の發展にも意を用ひて居る。光源氏の性格は稍理想に過ぎて居る慊があるが、頭中將や薫大將などの個性は明瞭に描かれて居り、又女性では藤壺・紫上・空蟬・夕顏・六條御息所・浮舟などが、それぞれ性格の異なる人物として、ありありと想像せられるやうに

寫されて居る。併し作中の人物は動もすれば類型的な感がするのであるが、人物の心理描寫には最もすぐれた手腕を發揮して居る。桐壺帝が弘徽殿の女御と桐壺更衣の間に立つて懊惱せられる有樣や、更衣がはかなく死んだ後のやるせない淋しさ悲しさなどは、讀者が開卷第一に驚歎する所であるが、次々に寫し出される戀愛關係の心理描寫や、生別死別の悲哀や失望懊惱などは、女流獨得の細緻な筆によつて、極めて精細に描寫されて居る。作者は男女の情事を寫す時には、概ね簡潔に且つ婉曲に記して居るのであるが、感傷的な心境の描寫には、冗漫をも厭はず、微に入り細を穿つて居るのであつて、此の作品に不朽の生命を與へたのも、主として悲劇的心理描寫の巧妙によるのである。

（二）社會的背景

次に注意すべきは背景描寫である。背景は之を社會描寫と自然描寫の二つに分けて考察する事が出來る。作者は物語中の人物を生々と寫し出すと共に、現實社會をも如實に描き出さうと努めたのである。源氏君や頭中將を中心とする多くの女性との交渉は、藤原氏全盛時代に於ける、貴族の愛慾生活の實相を網羅して居るのであるが、それと共に行幸公事節會供養を始めとして、詩歌管絃蹴鞠賭弓繪合韻塞圍碁の如き、優雅な遊に耽つた文藝本位の時代相を遺憾なく描寫して居る。此等は貴族社會の風流な一面であるが、其の反面の描寫としては、婦人を中心とする權力の爭や虛榮の奴隷となつて浮沈する人生を寫し、或は嫉妬猜疑怨恨の如き女性的な感情から起る陰險な謀計や、物の怪生靈などに對する恐怖などを描き、或は人生の樣々な悲哀を織り交せて、當時の社會生活の明暗表裏を歷史以上に精細に描寫して居る。

（三）自然と人事の調和

物語の要素として自然描寫が重んぜられる事は勿論であるが、作者は此の方面にも特に傑出した天分を發揮して居る。紫式部は鋭敏な感受性と細緻な觀察力とを有してゐたのであつて、人物の性格や心理の描寫に獨得の伎倆を示したのも、是によるのであるが、自然描寫に於ては、或は情調を具體化し、或は情景を融合して、一篇の物語を優美な抒情詩たらしめて居る。例へば桐壺更衣の死は物悲しい秋景色の中に寫されて居り、源氏の方違は清涼な中川の宿に描かれ、生先見えて美しい紫上の幼時は、綠に霞む北山の晩春に描き出され、末摘花のあらはな姿が曉の雪の光に見顯されたのも面白く、野分のあした千草の咲き亂れた中に、夕霧君が紫上を見初めたのも配合の妙を得て居る。其の他人事と自然の調和は至る所に見出されるのであり、卷の名までも自然の景物から取つたのが多い。

作者が人事並に背景の描寫に成功して居る事は以上述べた通りであるが、これは言ふまでもなく勝れた文章の力に俟つ所が多い。『源氏物語』の文章は女流文章の最も洗煉せられたものである。主格を省略し、連綿と語句を連ね、しかも朦朧とした婉曲な言ひ廻しは、當時の上流婦人の口語その儘を聞くやうであつて、抒情にふさはしく、又心理の描寫に適して居る。微細な敍事や感傷的な抒情になる時、動もすれば冗漫に流れる慊はあるが、時に簡潔で餘韻のある筆致もあつて、概ね變化に富んで居る。桐壺更衣の重態を描いて、「いと匂ひやかに美しげなる人のいたう面痩せて、いとあはれと物を思ひ泌みながら、言に出でても聞えやらず、あるかなきかに消え入りつつものし給ふを、」と敍し、また「息も絕えつつ、聞えまほしげなる事はありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、」といふが如

く、類似の形容を重ね、心行くまで細々と述べ來り述べ去る手腕は、全く堂に入つたものであるが、更に人事から自然に入り、自然から人事に移る微妙な筆致に至つては、古今獨歩といふべきである。同じ桐壺卷に、帝が更衣の死後悲歎に沈んで居られる有樣を敍して、「ただ涙にひぢて明かし暮らさせ給へば、見奉る人さへ露けき秋なり。」と記したのは、一語にして季節を知らせ、しかも後段の敍景の端を開いた名文句として知られて居るが、これに似た妙所は他に幾らもある。『源氏物語』中の名文として古來最も喧傳せられて居るのは、桐壺卷の靫負命婦が勅使として更衣の母を訪づれた一節と、須磨卷の源氏君の配所の生活を記した「須磨にはいとど心盡しの秋風に」以下の一節であるが、これに類した情景融合の詩的な名文は、殆ど何れの卷にも見出される。左に掲げるのは夕顏卷の物語を中心として描寫した曉の情景である。

文例

八月十五夜、隈なき月影に隙多かる板屋のこりなく漏り來て、見ならひ給はぬ住居のさまも珍しきに、曉近くなりにけるなるべし、隣の家々あやしき賤の男の聲々目さまして、「あはれいと寒しや。今年こそなりはひにも賴む所少く、田舍の通ひも思ひかけねば、いと心細けれ。北殿こそ聞き給へや。」など言ひかはすも聞ゆ。いとあはれなる己がじしの營に起き出でて、そそめき騷ぐも程なきを、女いと恥かしく思ひたり。艶だち氣色ばまむ人は、消えも入りぬべき住居の樣なめりかし。されどのどかに、つらきも憂きもかたはら痛きことも思ひ入れたる樣ならで、我がもてなし有樣はいとあてはかに兒めかしくて、またなく亂がはしき隣の用意なさを、如何なる事とも聞き知りたる樣ならねば、なかなか恥ぢかがやかむよりは、罪免されてぞ見え

ける。ごほごほと鳴神よりもおどろおどろしく踏み轟かすからうすの音も枕上と覺ゆ。あな耳かしがましとこれにぞ思さるる。何の響とも聞き入れ給はず、いとあやしう目覺ましき音なひとのみ聞き給ふ。くだくだしき事のみ多かり。白妙の衣うつ砧の音も、かすかに此方彼方聞き渡され、空飛ぶ雁の聲取り集めて忍びがたき事多かり。端近き御ましどころなりければ、遣戸をひき開け給ひて諸共に見出し給ふ。程なき庭にされたる呉竹、前栽の露はなほかかる所も同じごときらめきたり。蟲の聲々みだりがはしく、壁の中のきりぎりすだに間遠に聞きならひ給へる御耳に、さしあてたるやうに鳴き亂るるを、なかなか様かへて思さるるも、御志一つの淺からぬに、萬づの罪ゆるさるるなめりかし。白き袷薄色のなよよかなるを重ねて、花やかならぬ姿いとらうたげにあえかなる心地して、そこと取り立てて勝れたる事もなけれど、細やかにたをたをとして、物うち言ひたるけはひ、あな心苦しとただいとらうたく見ゆ。

短所

『源氏物語』が持つ長所は、略ぼ右に擧げたやうな點にあるのであるが、一面にまた缺點短所と見るべきものも決して少くない。著しい二三の點を擧げて見れば、源氏君を餘りに理想的人物に書き上げた事、一般に女性の描寫に成功して居るのに比して、男性の描寫が見劣りのする事、四季折々の優雅な生活を繰返し敍して單調に流れ、又人物若しくは人事の描寫が丁寧反覆に過ぎて、動もすれば冗漫の慊のある事、比較的重要な人物の前後の關係が時に省略に過ぎて居る事、人物の對照や人事の照應が稍巧緻に流れて居る事、前篇に源氏君の一生を長々と敍したのに對して、後篇には中心となるべき人物がなく、規模も餘りに狹小である事などである。併し此等の缺點は、前に擧げた幾多の長所によ

つて十分補はれて居るのであつて、國文學史上一流の傑作である事は否定し難いのである。

『源氏物語』の古い校本で後世に傳はつたのは藤原定家の青表紙本と、河内守源光行及び其の子親行の河内本とである。此の二種の系統本は、凡そ室町時代の中頃まで並び行はれたのであるが、宗祇等が定家を尊信して青表紙本を流布させて以來、河内本は殆ど顧みられなくなつたのであつて、『湖月抄』以下の諸註も總べて青表紙本を用ひて居る。定家校合の青表紙本の行方は明かでないが、前田侯爵家所藏の花散里と柏木の二帖は定家自筆と稱せられてゐる。次に河内本は親行が父の業を繼いで二十種以上の諸證本を參照し、而も晩年まで校合の手を休めなかつたと言はれて居るから、校本としての價値の高い事は勿論である。現存する河内本の完本で最も古いのは、德川義

河内本源氏物語（德川義親侯藏）

親侯所藏の北條實時所持本である。此の書は多數の能筆に書寫させたもので、正嘉二年五月六日の奥書がある。（圖版參照）此の外河内本の完本には東山文庫の元德二年の寫本があり、又缺本にはそれより古く延慶二年から應長元年の間に數人が筆寫した平瀨本や、三河の鳳來寺俗稱峯の藥師の藏本等がある。なほ河内本に極めて近いものに、藤原長親（號耕雲）が書寫した耕雲本の系統に屬する東山文庫本、曼珠院本、金子元臣氏藏本等がある。尤も後の二本は缺本である。源氏物語繪卷で世に名高いのは、平安時代末期の土佐隆能筆と稱せられるものである。此の繪卷は五十四帖全部あつたか否か明かでないが、宿木の卷が現存する所から考へると、全部描かれたもののやうである。而して現存するものは、尾州德川侯爵家の三卷と、男爵益田孝氏所藏の一卷とである。卷頭圖版に示したのは卽ち德川家所藏のものである。

二　源氏物語以後

源氏以後の物語

『源氏物語』はそれが世に現れた當時、既に世評が高かつたことは、作者自らの日記の中にも見えて居るが、なほ菅原孝標の女が記した『更級日記』によつて一層明瞭である。かくて『源氏物語』が一度現れて以後の物語は、殆どすべて其の後塵を拜したのであつて、しかも多くは之を摸倣して失敗に終つて居る。此の間にあつて、『源氏物語』の型を破らうとする意圖のあつたことは勿論であつて、殊更に奇拔な構想を試みたり、特異な性格の人物を描寫して居るのは、其の著しい點であるが、一面には又平安末期の時代思潮の影響を受けて、或は思ふにまかせぬ人生のあぢきなさを歎じ、或は現實世界を遁れて、靜寂の境地に引籠らうとするやうな傾向がある。此の傾向は既に源氏の宇治十帖にも見えて

居るのであるが、其の後の物語には一層それが著しくなつて居るのであつて、既に述べた「後拾遺集」以後の和歌が辿つた道もこれと同じである。而して「源氏物語」以後に現れた多くの物語の中で、現存するものは「狹衣物語」「濱松中納言物語」「夜半の寢覺」「とりかへばや物語」「堤中納言物語」の五篇である。以下その各に就いて概說しよう。

「源氏物語」以前に現れた古物語の多くが散逸したやうに、源氏以後にも多數の物語が作られて、其の大部分は後世に傳はらなかつたのである。それ等の散逸した物語に就いて考察する時の參考となるものには、鎌倉時代に成つた「風葉和歌集」「無名草子」「和歌色葉集」「明月記」などがあるが、なほ近來のものでは、黒川春村著「古物語類字鈔」(墨水遺稿卷一)黒川眞賴著「考古畫譜」(黒川眞賴全集第一第二)朝倉無聲著「日本小說年表」等がある。

狹衣物語

「狹衣物語」は四卷あつて、題名は狹衣大將が源氏宮を慕つて詠んだ「いろいろに重ねては著じ人知れず思ひそめてし夜半の狹衣」から出て居る。

作者

作者に就いては、藤原定家の作といはれる「僻案抄」に前齋院禖子內親王(後朱雀院皇女)に仕へた女房の宣旨の作とする說を掲げて居り、四辻善成の「河海抄」には、紫式部の傳を記した中に「後左衞門權佐宣孝に嫁して大貳三位辨局（狹衣作者）を生む」と記して居る。從來は「河海抄」の記事に基づいて、此の物語の作者を大貳三位とし、或は辨局であるとして居たのであるが、(大貳三位と辨局とは同人である事は、最近明かにせられた。)これは畢竟母紫式部が源氏の作者である事から推測した根據なき說である。併し一說にいふ宣旨は、源賴國の女であつて、「僻案抄」の說は基づく所があつたものらしく、且つ「僻案抄」は「河海抄」よりも、更に古い時代の書であ

るから、比較的信ずべきもののやうである。かくて作者の問題が未だ確定しない現状であるから、著作年代を定める事も困難であるが、大體に於て後冷泉天皇の御代から、堀河鳥羽兩帝の頃までの間に作られたものと考へられる。

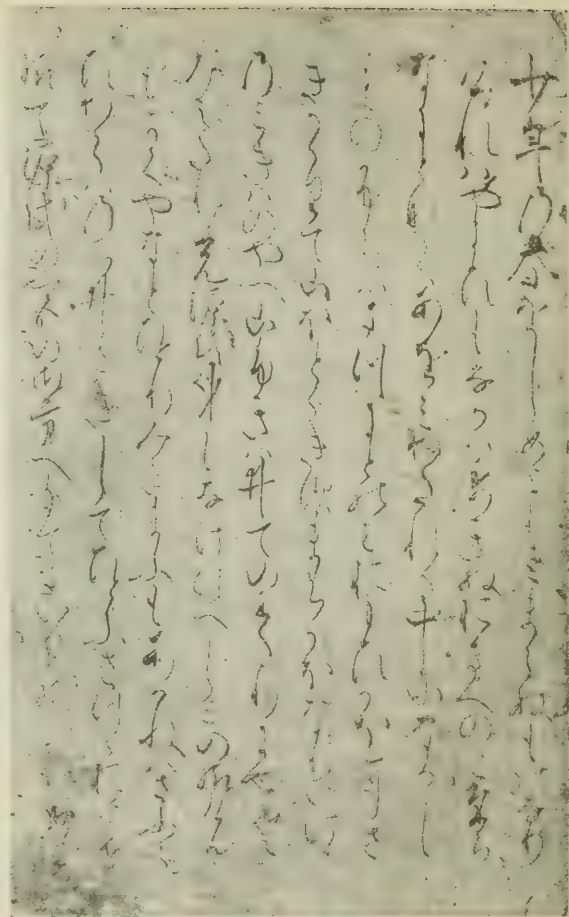
此の物語は容貌才藝共に勝れた狹衣大將を主人公とする長篇の物語である。狹衣大將は帝の御おぼえもめでたく、世の名聲も高かつたが、外面的に幸福であつたのに反して、内心は常に淋しい人であつた。それは源氏宮といふ麗人に對して、一生遂げられぬ戀に泣いてゐたからである。たまたま誘拐せられて行く飛鳥井姫君を救つたのが緣となつて、其の姫君と契をこめて一人の姫君を生んだ。又帝はかねて女二宮を狹衣大將に賜はる思召があつたが、大將は源氏宮を憚つて、之を辭退して置いたのであるが、ふとした機會に此の宮と通じて一子を儲けた。かくと知つた女二宮の母宮は、外聞を恥ぢてそれを我が子と稱してゐたのであるが、心の惱みから遂に他界せられ、女二宮は間もなく尼になつた。大將は源氏宮に對する氣兼ねのために、女二宮に對しても又飛鳥井姫君に對しても、愛情はありながら然るべき措置をとらずして、荏苒日を過してゐたのであるが、其の中に飛鳥井姫君は乳母の奸計に陷つて、式部大輔の妻となつて筑紫に下る途中、狹衣大將の事を思ひ出して海に身を投げたが、救はれてこれも亦尼になり、やがて病歿した。かくて狹衣大將は二人の子を持ちながら、いづれをも我が子と呼ぶ事の出來ないのが、悲しく淋しかつた上に、源氏宮は終始つれなくもてなすので、胸中の苦悶は晴れる時とてはなかつた。其の後源氏宮は春宮に召される事に決定したので、狹衣大將はま

た新たに嫉妬の情に苦しむ身となつたが、神託があつて源氏宮は齋院となつた。そこで大將は執拗に齋院を訪づれたけれども苦衷は容れられず、また一方では尼になつた女二宮を口說いたけれども、其の甲斐がなかつたので、遂に遁世を思ひ立つたが、たまたま神の御告があつて、遂げる事が出來なかつた。其の後大將は宰相中將の妹で、其の容貌が源氏宮に似てゐる姬君を妻に迎へて、僅かに悶々の情を慰める事が出來たのであるが、なほ心の中は常に充たされなかつた。かくする中に祥瑞があり、又天照大神の神託があつて、帝は遂に位を大將に讓り給うたので、表面はいともめでたく榮えたといふのが、其の梗概である。

『狹衣物語』の寫本は三十餘種あるが、書寫の時代も古く、又流布本に比して異同の最も多いのは、岐阜の深川淳一氏の所藏本である。もと西本願寺の藏本であつて、卷四を闕いて居る。奧書が無いので筆者を知る事は出來ないが、筆致料紙などから推して、鎌倉時代初期のものであらうと言はれて居る。圖版に揭げたのは其の冒頭であつて、入江相政氏の好意によつて撮影したものである。

特質

此の物語の構想は極めて整然としてゐるが、大體に於て『源氏物語』を學んだ跡が歷然として居る。卽ち狹衣大將は光源氏に相當するが、其の性格は薰大將を摸倣してゐる。又飛鳥井姬君は夕顏と浮舟君とに似た點があり、狹衣大將と女二宮との關係も亦、源氏君と藤壺との關係から思ひ付いたのである。其の他の人物や部分的の構想の上にも、類似點は少くないのである。作者は元來、狹衣大將を外面的には光源氏以上の人物として、描かうとする意圖を抱いてゐたやうであるが、實際の結果に於て

狹衣物語（深川淳一氏藏）

は、却つて薫大將にも增した淋しい人間になつたのであつて、現實生活と內面に潛む精神生活との矛盾や不調和を取扱つた所に此の物語の特徵があると言へるであらう。而して物語中に夢幻的靈異的な事件があると共に、一方には稍露骨な官能描寫があり、また一般に頽廢的な氣分が漂つて居るのは、平安時代末期文學に共通する特徵である。さて此の物語は『源氏物語』に比して寧ろ變化に富んで居るのであるが、而もよく統一がとれて居るのは、作者が可なり勝れた創作力を持つてゐた爲であらうと思はれる。

濱松中納言物語

『濱松中納言物語』は一名を『御津の濱松物語』といひ、また『濱松物語』とも呼ばれて居る。『丹鶴叢

書所收の四巻本及び其の系統の寫本は、首巻と末巻とが闕けて居るのであるが、最近尾上八郎博士所藏の五巻本が世に紹介せられて、終の一巻を加へることが出來た。（圖版參照）併し首巻は未だ發見せられてゐない。題名は、主人公の中納言が唐に居る頃、日本を慕つて詠んだ「日の本の御津の濱松今宵こそ我を戀ふらし夢に見えつれ」（現存巻一）といふ歌から出て居るのである。

濱松中納言物語（五巻本）
文學博士尾上八郎氏藏

梗概

其の梗概は、幼少の頃父を喪つた才色兼備の中納言が、母の再婚した左大將の家に養はれて居る中、かねて式部卿宮に奉る豫定であつた大將の大姫君と通じて怒に觸れ、大姫君との仲を割かれた。其の頃中納言は、亡父が唐の皇子に生れ替つてゐる事を夢に見て彼の國に渡り、高陽縣に居る母后と皇子とに逢つた。此の后は其の父が使節となつて日本に渡つた頃、上野宮の姫君と契つて儲けた女であるが、中納言は后の容貌が大姫君に似てゐたので、戀ひ慕ふやうになり、佛の定めた宿命と知つて一夜の契を結んで、

二人の間に若君が生れた。中納言は三年の後、后が生んだ若君を連れて歸朝し、今は尼となつて居る大姫君と淸い交際を續けてゐたが、唐を出る時に、后から生母(上野宮の姫君)へあてた手紙を託されてゐたので、それを携へて吉野の奥に訪れて見ると、后の母も今は尼になつて居たが、落飾の前に帥宮との間に生れた美しい姫君を、中納言に預けて間もなく世を去つた。中納言は吉野の姫君を伴なつて京に歸つたが、其の後姫君にはわらは病に罹り、淸水に籠つてゐる中に、色好みの式部卿宮に見そめられて盜み去られた。中納言は行方を失つた姫君を探しあぐんでゐると、或夜唐の后が夢に現れて、中納言を慕ふ餘り吉野の姫君の腹に宿つた事を告げた。一方姫君は其の後日每に病氣が重くなつたので、式部卿宮ももてあまして、遂に中納言を呼び寄せて二人で看護すると、漸く快方に向つた。宮は其の頃、亡くなられた東宮の後を繼ぐ事になり、姫の傍を離れてゐたので、中納言は傍に人の居ないのを幸に、意中を打明けて口說いたが、姫は既に宮の胤を宿してゐたので如何ともする事が出來ず、出產の日は益迫つて來た。かくて翌年唐から音信があつて、后が世を去つた事などを知らせて來たので、中納言はあれやこれやの悲しみに、泣いて日を送つてゐるといふ所で此の物語は終つて居る。

此の物語も亦構想人物背景などに於て、『源氏物語』を摸倣してゐる事が、隨所に指摘せられるのである。試みに主要な點に就いて云へば、主人公の中納言は、明かに源氏君と薰大將とを併せたものであり、中納言と唐の后との關係には、源氏君と藤壺との關係を摸倣した痕があり、又姫君と吉野の尼君とは、藤壺の尼君・紫上・宇治の八宮・浮舟君などから取つて居るのである。併し作者が源氏の摸倣か

ら更に一步を進めて、新生面を拓かうと力めた事は明かであつて、女の主人公を唐の后とし、背景を遠く唐にまで擴張してゐるが如きは、其の最も著しい點である。併し唐に於ける異國情調に少しも現れずして、宇津保の波斯國の描寫よりも更に見劣りがするのであるが、殊に人物背景が唐土と日本に分れてゐる爲に、屢夢によつて之を結合するやうな不自然に陷つたのは、大きな缺點である。かくて此の物語には缺點も少くないのであるが、全體の構成は比較的に秩序が立つて居り、人物も少數であるから纒まりがあるのであつて、『狹衣物語』に次いで見るべき作品である。中納言の父が唐の皇子に生れ替つたり、唐の后が吉野の姫君の腹に宿つた事を語つて居るのは、共に佛敎の轉生說の影響であるが、其の他至る所に宿世を重んずる思想が見え、又夢に佛の示現する事が頻りに見えて居るのは、作者の特色でもあるが、畢竟淨土思想が浸潤して、頻りに幻想的境地を求めた時代の文學の、一般的傾向を追つたものである。

作者

作者に就いては、從來『更級日記』の奧書によつて、菅原孝標の女とせられて居る。藤岡博士は此の物語と『更級日記』とに夢の記述の多い事と、『源氏物語』の摸倣の著しい事とを擧げて、孝標の女の作とする說に從つて居られ、更に最近尾上博士の藏本によつて、末卷を紹介した松尾聰氏は、右の外に夢の特質が一致して居る事、可笑味の缺如して居る事、感傷的な父性愛を描いて居る事、宿命を重んじてゐる事などの共通點を擧げて、孝標の女の作である事を考證せられた。（國語と國文學 昭和六年四月）

とりかへばや物語

狹衣や濱松中納言などに次いで現れたと思はれるものは、『とりかへばや物語』『夜半の寢覺物語』

などである。現存する『とりかへばや物語』を、原作の儘であると見る說もあるが、恐らくは鎌倉時代になつて、多少改作せられたものであらう。併し大體に於て、原作の面目を保つて居るものであらうと思はれる。此の物語は四卷から成つて居るが、稀に三卷本・五卷本・七卷本などがある。さて此の物語は權大納言の異腹の兄妹二人の變態心情を中心とする物語である。即ち兄は生來女のやうに柔和であり、妹は反對に男性的であつたので、親が取り替へばやと願つたといふので、此の物語の名があるのである。父母は此の男の子を女姿にし、女の子を男裝させて育てたのであるが、成長して妹は右大將になり、兄は宣耀殿の尙侍となつた。物語は此の變裝した男女を中心として、戀愛生活を寫して行くのであるが、最後に或る夏の頃、右大將が實は女であることが露顯して、宇治に遁れて女に復歸し、尙侍も亦其の所在を尋ねて男になつて、それぞれ結婚生活に入つて、めでたく榮えるのである。作者は詳かでない。此の物語にもまた源氏を摸倣した所があるが、性格の描寫を缺き、ひたすら奇異な構想によつて讀者の好奇心を唆らうとしたいは、物語の頹廢を語るものである。變裝した二人の生活には、院政時代の優柔淫靡な世相が反映して居る。

『夜半の寢覺』は一名『小夜の寢覺物語』又は『寢覺物語』といはれて居る。刊本はなく、數種の寫本が傳はつてゐる。卷數は普通五卷である。鎌倉時代に改作せられた痕が見え、しかも編次の錯簡があり、なほ闕本である。即ち橫山由淸の說によれば、卷二と卷三との間と終とに闕卷があるのである。『更級日記』の奥書に、「夜半の寢覺・御津の濱松・自ら悔ゆる・朝倉などは、此の日記の人の作られたると

ぞ」とあるのによれば、菅原孝標の女の作であるが、其の基づく所は明かでない。內容は、源氏の大臣の宮腹に生れた美貌で音樂に長じた乙姬君(寢覺の上)と、關白の子で中宮の御兄なる中納言とが窃かに契を結んだが、父大臣の怒に觸れて、別れ別れに思はぬ結婚生活に入り、遂げられぬ戀に泣いてゐる中に、姬君は夫に先立たれ、中納言は妻を失つて、始めて二人が圓滿に結婚した事を物語つて居る。其の構想には、源氏や狹衣と類似する所が多い。題名は物語の中に散見する「寢覺」又は「夜半の寢覺」といふ語に基づくのである。

堤中納言物語

『源氏物語』以後に現れた物語で、同じく過去の物語から影響を受けながらも、特殊の形式と特異の趣向を立てて異彩を放つたのは『堤中納言物語』である。此の物語は從來の物語と異なつて、獨立した短篇、卽ち

花櫻折る少將。このついで。蟲めづる姬君。ほどほどの懸想。逢坂越えぬ權中納言。貝合。思はぬかたにとまりする少將。縹の女御。灰墨。よしなしごと。

內容

の十篇から成つて居る。此の十篇の中、半數は戀愛を主題として居るが、其の他は種々の物から暗示を得たらしく、それぞれ異なつた題材を取扱つて居る。而して十篇の物語に共通する特徵は、事件の顚末を語らずして、人生の一斷面を描寫して居る事と、奇警な構想若しくは特異な人物を取扱つて居る事である。例へば「このついで」は、春雨の降るつれづれな日に、中宮の御前で宰相中將は、或公達が通つてゐた女の許から、二人の間に生れた愛兒を連れ歸らうとして、女の哀れな歌に感じて、思ひ

止まつたといふ話を語り、中納言の君は、清水寺に籠つて隣の部屋に居る哀れな女の樣を見た事を語り、少將の君は、東山に行つた時美しい若い女が尼になるのを覗き見た事を語つたが、そこへ主上が參られたので、話を中止したといふ趣向の物語である。(物の隙間から覗き見る趣向は、「花櫻折る少將」「蟲めづる姬君」「貝合」「はなだの女御」などにも用ひられて居る。)また「蟲めづる姬君」は、按察使大納言の姬君で、不氣味な毛蟲を集めて樂しんでゐるのを、或上達部の婿の右馬助が物蔭から覗いて見ると、なりふりかまはず蟲の世話をしてゐる姿が、餘りに異樣であつたので驚き呆れたといふ筋である。また「灰墨」は、零落した賤しからぬ女を妻に持つ男に新しい愛人が出來て、それを家に引取らせられる事になつた爲に、もとの妻に因果を含めて追ひ出したが、見送つて歸つた童が、其の悲歎の樣を細々と語つたので不憫に思ひ、再び妻を引戾したが、或日かの戀人の事を思ひ出して突然訪れると、女は狼狽して化粧する時、白粉と灰墨とを取違へて顏に墨を塗つて、男を呆然たらしめたといふ物語である。(これに似た矛盾から起る滑稽は、「花櫻折る少將」や「思はぬ方にとまりする少將」の結末にも取扱つてある。)また一篇の物語に奇異な構成を試みたのは「よしなしごと」であつて、これは殆ど全部が、或法師が女の許へ品々の物を借りに遣る一通の手紙から成つて居る。かくて『堤中納言物語』は過去の文學若しくは說話などから取材し、且つ時代の文學に共通する特徵、例へば耽美主義的傾向や、哀愁を伴なふ神祕的氣分の如きを帶びて居るのであるが、從來の作品に例のない構想から成り、殊に國文學史上最初の短篇小說であるといふ點に於て、極めて注意すべき作品である。

題號及び篇數

さて此の物語の題名の堤中納言は、藤原兼輔であらうと思はれるが、兼輔は延喜頃の歌人で、從三位中納言に昇り、賀茂川堤に居を構へて堤中納言と呼ばれた人である。然るに現存する此の物語中には、堤中納言に關する事は更に見當らないのであるから、題號は後世誤つて附けたのであつて、もとは各卷獨立してゐて、總名は無かつたもののやうである。なほ此の作品は最初十篇以上あつたのが、後世散逸したのであらうとも考へられて居る。例へば「蟲めづる姫君」の末尾には「二の卷にあるべし」と記されて居るが、其の續篇が無く、また最後の「よしなしごと」の終には、「冬ごもる空のけしきに」といふ冒頭で始まる殘闕めいたものがあるのであつて、此等の點から見ると、現存する十篇は偶散逸を免れたものであつて、もとはなほ幾つか存在したのではないかと思はれるのである。併しこれは作者が故意に斯かる奇拔な趣向を試みたいのであつて、元來十篇のものであつたかも知れないのである。今は姑く元來十篇から成るものと見て置く。

作者

作者を古くは堤中納言としてゐたのであるが、內容文章などから見ると、到底延喜頃の作とは信じられないのであつて、それより遙かに後のものである事は確かである。而して作風や文章などから見て、男子の手に成つた事も疑のない事である。尤も作者を二人以上と見る說もあるのであるが、趣向や文體に共通性があり、又「花櫻折る少將」の背景が春で、それ以下各篇が季節を追つて序列せられ、最終の「よしなしごと」が歲の暮である事などから見ると、やはり全部が一人の手によつて作られたやうである。

次に此の物語の成立時代に就いて、『日本文學全書』の解題に、作中に根合の事が見えて居るのを擧げて、根合は後冷泉天皇の永承六年に始めて行はれたのであるから、此の作品はそれ以後に成つたものであるとして居る。又藤岡作太郎博士の『國文學全史（平安朝篇）』には、鳥羽天皇又は近衞天皇以後のものであらうが、數篇が同時に成つたか、又時代を隔てて成つたかは未だ詳かでないと言つて居られる。なほ此の物語の名は『無名草子』には無いが、『風葉和歌集』（龜山天皇の文永八年に成る）には始めて見えて居るのであるから、鎌倉時代中期以前の作である事は確かである。近年此の物語の眞價が認められるやうになつて、題號作者の問題と共に成立年代に就いても、詳密な考證が次々に現れたのであるが、大別すれば鎌倉時代中期の作とする說と、平安末期の作とする說とに分れるのである。是を鎌倉時代の作とするのは、主として引歌や用語などの方面から推考して居るのであるが、現存するものには鎌倉時代に改修せられた跡が見えるのであつて、原作の成立はやはり平安末期であらうと思はれる。

堤中納言物語（高松宮御文庫本）

此の物語の古寫本は未だ發見されてゐない。現存の寫本は何れも江戸時代のものであるが、圖書寮所藏の飛鳥井本(二本)や、内閣文庫の藏本などは、稍古い面目を傳へて居るやうである。圖版に掲げたのは、高松宮家の允許を得て撮影した有栖川王府本であつて、圖書寮本と同じ系統のものである。一篇一册になつてゐて、菊桐の文様のある表紙には「堤中納言」と標記して、其の下に篇名が細書されて居る。

文章

最後に此の物語の文章は、左に掲げる一節を見ても明かであるやうに、概ね流麗暢達である。

去年の秋頃ばかりに、清水に籠りて侍りしに、傍に屛風ばかりをはかなげに立てたる局の、にほひいとをかしう、人少ななるけはひして、折々うち泣くけはひなどしつつ行ふを、誰ならむと聞き侍りしに、明日出でなむとての夕つ方、風いと荒らかに吹きて、木の葉ほろほろと谷のかたざまに崩れ、色濃き紅葉など局の前には隙なく散り敷きたるを、この中隔ての屛風のつらに寄りて、ここには眺め侍りしかば、いみじうしのびやかに、

　いとふ身はつれなきものを憂きことを嵐に散れる木の葉なりけり

「風の前なる」と聞ゆべき程にもなく、聞きつけて侍りしほどの、まことにいと哀れに覺え侍りながら、さすがにふと答へにくく、つつましくてこそ止み侍りしか。

これは「このついで」の中の、中納言の君の物語である。

平仲物語

『源氏物語』以後に現れた平安朝末期の作り物語の事は、以上で終つたのであるが、なほ此の頃に成つた歌物語に『平仲物語』一卷(靜嘉堂文庫所藏。寫本)がある。一名を『平仲日記』(本朝書籍目錄所見)又は『貞文日記』(河海抄所見)と

呼んで居る。平仲は右中將好風の子平貞文の事であつて、字を仲といつたので、世に平仲と稱したのである。貞文は在原業平と好一對の好色風流の歌人と考へられたから、種々の傳說が傳はつたのである。此の物語は『伊勢物語』の形式に倣ひ、或る男（卽ち貞文）と種々な女性との關係を、長短三十餘條の歌物語に綴つたのである。各段が「さて」「又」の如き接續詞で連鎖せられて居る點は、『伊勢物語』と異なるのであるが、實在の人物が現れて居る事は同じである。文章は擬古的であつて古色を帶びて居り、男子の筆に成つた事も疑のない事であるが、作者は詳かでない。成立年代は文章から見ると『大和物語』の時代、若しくはそれよりも古いもののやうに思はれるのであるが、山岸德平氏は勅撰集に載つてゐる貞文の和歌と、此の物語の和歌との關係から考察して、『千載集』より後に成立したものであらうと言つて居られる。

第五章　隨筆及び日記

一　枕草子

『源氏物語』と並んで平安朝文學の二大傑作といはれるものは、淸少納言の隨筆の『枕草子』である。淸少納言の曾祖父淸原深養父は、古今集時代の歌人として聞え、父の元輔は學者であり、又『後撰集』の撰者の一人であつた。かくて淸少納言は歌の家に生れたのであるが、歌に長じてゐなかつたので、

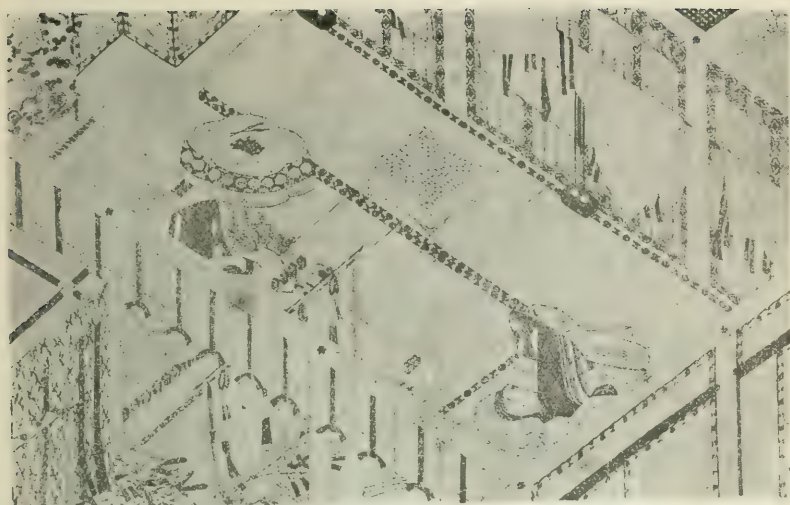
其の天分を詩的散文に向けて『枕草子』を書いたのである。(家集に『清少納言集』があるが、歌數は僅かに三十首許りであつて、歌よりも其の詞書が勝れて居る。)彼の傳もまた詳かでない。『枕草子』の記事によれば、一條天皇の正暦二年の頃、年三十に近づいて始めて宮廷に奉仕し、當時の中宮(後に皇后)定子の方に近侍して殊遇を蒙り、長保二年十二月に、中宮が御産の爲御年二十五で崩じ給うた後は、宮仕を辭して里に歸つたやうである。而して晩年に落魄して孤獨な生活を送つてゐた事は、勅撰集中に見えてゐる贈答などによつて想像せられる。清少納言と呼ばれたのは、姓の清原に因るのであるが、少納言は誰の官職に基づいてゐるか詳かでない。

『枕草子』には三巻本・五巻本・七巻本などがある。題名は皇后宮が、御兄伊周から奉つた料紙を清少納言にお示しになつて、「これに何を書かまし」と仰せられたのに對して、「枕にこそはし侍らめ」と答へたので、それを賜はつたといふ記事に據つたものであるが、此の名は筆者が自ら命じたのではない。古くは「清少納言記」(禁祕抄八雲御抄所見)とも「清少納言枕草子」(仁和寺書籍目錄所見)とも呼ばれたのである。『枕草子』は隨筆といはれて居るけれども、主觀的な日記に對する、客觀的傾向を帶びた日記と見ることも出來るのである。尤も其の記述は年月を追うたものでなく、思ひ出したまま、興の湧くままに記したものである。從つて執筆の年代も一樣でないのであつて、内容によつて判斷すれば、大部分は筆者が約十年の宮仕の間に記し、又宮廷を退いた後にも、宮中生活を回想して書き繼いだものであると想はれるが、中には宮廷奉仕以前の記事も雜つて居る。而して記事の最も多いのは長德年間である。

内容の特色

『枕草子』は凡そ三百段許りの長短樣々な章段から成つて居るが、其の過半數を占めて居るのは物盡しである。物盡しには「山は」「海は」「家は」のやうに、單に物の名を列擧したものと、「すさまじき物」「心ゆく物」「うつくしき物」のやうに、折に觸れ心に浮んだ事象を、類別的に列記したものとある。前者は主として和歌の題目となる物を列ねたのであつて、必ずしも作者の創意ではないが、後者は作者の精細な觀察眼に映じた、個々の印象を連想を追つて列記したのであつて、一篇の美しい散文詩となつて居る。物盡しの外には、自己の經驗若しくは見聞に入つた事實を、稍長く記述したものがある。「翁丸」「雪の山」「頭中將との不和」「宮に始めて參りたる頃」「積善寺の供養」の類がそれである。此等は全體的には纏まつた一篇の物語と見做されるのであるが、部分的に見て行くと、特殊な人物や事件に對する、斷面描寫の連續から成つて居るのであつて、畢竟物盡しと同じ傾向を帶びて居る事を認めるのである。かくて此の草子は、人事並に自然に對する斷片的な觀察を次々に臚列して、人生の實相を描き出した所に特色があるのである。

觀察の特徵

清少納言は情熱的感傷的な他の女流作者と異なつて、周密且つ冷靜な觀察力と、驚くべき鋭敏な感受性を持つてゐた。從つて此の草子には、自然及び人生に對する極めて精細にして清新な描寫が滿ちて居る。試みに二三の例を擧げて見れば、「小白河殿の法華八講」の段には、六月半ばの日盛りを背景として、幾多の上達部の個々の服裝や態度や言動などが、極めて鮮明に描かれて居り、「九月ばかり夜ひと夜」の段には、雨上りの秋の朝に於ける露の風情が、驚く程纖細に寫生せられて居り、また「正月

枕草子繪卷（淺野侯爵家藏）

十餘日の程」の段には、厚い雲の浮動する冬空、荒畠の土の色、桃の木の特性、及びそれを中心に動く童の群が、簡潔な語句によつて生々と描き出されて居る。人事と自然の交錯した美しい情景は至る所に見出されるのであるが、自然の中に自己を描き、又は特殊な人物を點出して氣分を具體化する事は、清少納言の得意とする所である。彼は又人物の言語動作や物の動的姿體美を巧みに捕捉して、それぞれの情景を鮮明に表現する事に妙を得て居る。例へば卷頭の「春は曙」に描かれた天象・動物・人事の殆どすべてが動的であるが如き、「又うつくしき物」に、雀の子、鷄の雛、小兒などの特殊な動作の美を寫して居るが如きである。更に驚歎すべきは、作者の纖細な感覺的描寫である。例へば「にくきもの」の段には、蚊が細聲に名のつて來る時の羽風や、蚤が衣をもたげるやうにして跳り歩くのを憎んで居るが如き、「心

にくき物」の段に、物を隔てて聞き取つた微かな物音の美趣を連ねて居るが如き、また「いみじう暑き頃」の段に、牛の鞦の怪しい香や、松明の煙の香などを捉へて居るが如きであつて、五感のすべてに亙つて、これほど鋭敏な感受性を持つてゐた作者は、古今稀であらうと思はれる。かくて『枕草子』には、細微な觀察力が特に異彩を放つて居るのであるが、併し清少納言も亦時代の兒である。其の題材は宮廷生活の範圍に限られ、其の觀察は狹少な貴族的趣味以外に出る事は稀であり、しかも多くは皮相的であつて、事象の內部を深く覗くやうな事はなかつた。

性格の反映

『枕草子』はまた作者の性格の反映として見る時興味がある。清少納言は勝氣な強情な性格を持ち、且つ和漢の學に通じた才氣煥發の才媛であつた。從つて自己を中心とする記述には、學才を衒ふ自讚が多く、又人事や事物の觀察には機智のひらめきがあり、奇警な著眼がある。又漢詩文の知識や咄嗟の機才によつて、齊信や行成の如き堂々たる男子を顏色なからしめた負けじ魂があつたと共に、生昌や方弘のやうな無才愚直の人を揶揄嘲笑するやうな驕慢があつた。同じ宮廷にあつて、彼と競爭の立場にあつた他の女流作者に就いて、何等記す所が無かつたのも、それ等を眼中に置くに足らぬ者と考へた爲であらうと思はれる。清少納言の性格は凡そかくの如くであるが、其の半面には、嬰幼兒の可憐な動作に心を牽かれ、犬猫のやうな弱い者には溫い同情を寄せる程の、女らしい感情があつた。殊に殊遇を蒙つた皇后定子に對しては、無上の尊敬を拂ひ、其の悲しむべき御境遇に對しては、無二の同情者となつたのであつて、此の草子中には皇后に關する記事が多く、其の容姿才藻を讚美し、且つ

坤徳を稱揚して居るのである。淸少納言を評して、同情のない辛辣な批評家であると云ひ、又好んで人の缺陷弱點を擧げて嘲笑する皮肉屋であるとするのは、楯の兩面を觀る用意を缺いたものと謂ふべきである。蓋し淸少納言には、さまでの惡意があつたのではなく、寧ろ率直純眞な性情の人であつたと思はれる。要するに淸少納言は、情熱的な紫式部に對して、冷靜な態度で人生の姿を眺め、周到且つ緻密な觀察力によつて、あらゆる美を捕捉したのである。同じく敍事に長けてゐた此の二大作者が、一人は纏綿錯綜した感情の美を捉へて、人事の推移發展の有樣を敍し、一人は豐富な印象を次々に列擧して、人生の斷面を見せたのは、全く個性の相違に基づくのである。紫式部が其の日記中に、「淸少納言こそしたり顏に、いみじう侍りける人、さばかり賢しだち、眞字書き散らして侍るほども、よく見ればまだいと堪へぬこと多かり」と評したのは、和泉式部などに對して下した批評を合せ考へて見ると、やはり嫉妬心の雜つた、競爭意識から出た評語であらうと思はれるのである。

『枕草子』の文學的價値の一半はまた文章にある。其の記述の中には「雪の山」や「積善寺の供養」のやうに、數千語を連ねたものもあるが、概ね短篇であつて、中には數語又は一二行で盡きてゐるものもある。更にそれぞれの段を見ると、長短樣々な文や句が錯綜して居り、主題や事象は連想の絲を辿つて次々に轉變して、一篇の上に美しい律的變化がある。此の點に於ては後の俳文に似て居る。更に稍長い敍事文を見ると、秩序が整然としてゐて冗漫がなく、巧みに省略法を用ひて、簡勁にして流麗である。其の他才氣縱橫の筆を揮つて、或は警拔に或は犀利に、樣々な筆致を見せて居る。殊に「網代

は走らせたる。人の門の前などより渡りたるを、ふと見やる程もなく過ぎて、供の人ばかり走るを、誰ならむと思ふこそをかしけれ。」と云ふやうな瞬間の印象の描寫や、「遠くて近きもの。極樂・船の道・人の中」と簡潔に云つてのけた奇警な筆致の如きは、何人の追隨をも許さぬ妙味がある。作品の性質を異にする『源氏物語』と並べて、之を同一の標準によつて批評する事は出來ないけれども、單に文章の上から比較する時は、紫式部は到底清少納言を凌駕する事が出來なかつたのである。

『枕草子』は鎌倉時代には、『源氏物語』の爲に其の眞價を蔽はれてゐたのであるが、南北朝時代になつて、兼好法師がこれに倣つて『徒然草』を書いて以來、二大隨筆として重んぜられるやうになつた。其の後江戸時代の初期には、之に擬した假名草子などが現れ、次いで松平樂翁の『花月草紙』などが出たのであるが、其の影響は『風俗文選』以下の俳文にも及んで居る。

『枕草子』には異本が極めて多いのであつて、古典中で定本の整定に最も困難を感ずるものの一となつて居る。從來刊本として廣く行はれたのは、慶安年中の刊本、古活字本、岡西惟中の旁註本、加藤盤齋の萬歳抄本、北村季吟の春曙抄本などである。此等は五卷本又は七卷本の系統に屬するものであるが、更に系統を異にして古い面影を保存してゐると思はれるものに、堺本、宸翰本、及び數種の三卷本がある。宸翰本は『群書類從』に收められて居るが、其の他は寫本で傳はり、從來世に流布しなかつた。圖版に掲げたのは三卷本の系統に近い前田侯爵家所藏の四卷本であつて、鎌倉時代の中期を下らぬ書寫であると言はれて居る。枕草子繪卷で名高いのは淺野侯爵家所藏の一卷である。南北朝頃の製作であつて、纖細な線を以つて寫し、賦彩の代りに濃淡二樣の黒色を用ひ、唯人物の口唇のみに朱を點じたのは、他の絢爛な繪卷と全く異な

る所である。箱書に「後光嚴院宸翰女筆」とあつて筆者の名は傳はつてゐないが、恐らく女性の手に成つたものであらうと云はれて居る。（縮詞は宸翰本枕草子に當るもの）圖版に示したのは、「雪の山」の段の「侍の長なるもの、柚の葉の如くなる宿直衣の袖の上に、青き紙の松につけたるを置きて、わななき出でたり。云云」の一條を描いたのであつて清少納言が碁盤を踏臺にして、御格子を一人で上げようとした時の樣を描いたものである。

前田侯爵家藏枕草子（尊經閣叢刊より）

左に文例を示す爲に短篇二章を掲げて置く。

あてなるもの　薄色に白がさねの汗衫。かりの卵。削氷のあまづら入れて新しき金椀に入れたる。水晶の數珠。藤の花。梅の花に雪の降りかかりたる。いみじう美しきちごの覆盆子などくひたる。

○

五月ばかりなどに山里にありくいとをかし。草葉も水もいと青く見えわたりたるに、上はつれなくて、草生ひ茂りたるを、ながながとただざまに行けば、下はえならざりける水の深くはあらねど、人などの歩むに、走りあがりたるいとをかし。左右にある垣にあるものの枝などの、車の屋形などにさし入るを、急ぎて捕へて折らむとする程に、ふと過ぎてはづれたるこそいと口惜しけれ。蓬の車に押しひしがれたるが、輪のまはりたるに、近ううちかかりたるもをかし。（内閣文庫所藏三卷本）

二　女流日記

前期以來貴紳の間に後日の參考に資する爲に、公私の日記を記す事が行はれた。藤原氏全盛期に成つたものには、關白道長の『御堂關白記』（原本三十六卷現存十三卷）右大臣小野宮實資の『小右記』四十七卷、權大納言藤原行成の『權記』十五卷、左大辨源經頼の『左經記』十五卷などがある。此等は日本式漢文で記されたものであつて、文學的價値は無いのであるが、當時女房が和文を用ひて自己の感情生活を記したものは、文學的作品として重きをなして居る。以下それ等の女流日記に就いて述べようと思ふ。

和泉式部日記

『枕草子』と前後して現れた女房の日記には、『和泉式部日記』『紫式部日記』稍おくれて『更級日記』

などがある。『和泉式部日記』は一名を「和泉式部物語」と呼ばれて居る。其の内容は其の日其の日の事を記し留めたのでなく、筆者が自ら第三人稱で記した感情生活の記述であるから、一名を物語の名で呼ばれたのである。併し文章よりも寧ろ和歌を主として居る點から言へば、歌日記といひ得るのである。此の日記は自敍傳であり、和歌は明かに和泉式部の作であるから、筆者が和泉式部である事は疑ふ餘地がないやうである。其の記す所は、一條天皇の長保五年四月頃、冷泉院第四皇子の帥宮敦道親王が和泉式部の許を訪づれて、互に和歌の贈答のあつた事から始まつて、翌寛弘元年正月に至るまでの短日月の戀愛生活である。文章は時に優艶の趣がないでもないが、槪ね率直に眞情を表現したものであつて、『蜻蛉日記』に較べると遙かに劣つて居る。かくて此の日記の見るべき所は、文章にあらずして、其の和歌にあるのである。熱情的な作者が、現實生活の中に美的情趣を求めた心境は窺はれるけれども、其の頽廢的な愛慾生活には、無自覺な性格が現れて居るのであつて、世の非難を受けたのも當然と思はれる。和泉式部の家集が比較的大部のものであるから、此の種の日記を他にも書いたのであらうと想像せられるけれども、今傳はつてゐない。

紫式部日記

『和泉式部日記』よりも勝れて居るのは『紫式部日記』(二卷)である。紫式部が夫の宣孝に死別して後上東門院に仕へてゐた頃の日記である。其の内容は一條天皇の寛弘五年七月、土御門殿（道長の邸）に於ける上東門院御産前の御祈に始まり、第二皇子敦成(あつひら)親王（後一條天皇）御誕生前後の御模樣や公事などを敍して、同年の冬に及び、翌寛弘六年には正月三日と十一日の事のみを記し、更に寛弘七年の正月の公事節

會、及び第三皇子敦良親王(後朱雀天皇)御誕生後の五十日の御祝の事を記して筆を擱いて居る。寛弘六年並に七年の記述が、正月の事のみで其の後に及んでゐない事、及び寛弘六年正月三日と十一日の記事の間に、日記以外の女房の人物評と、筆者の述懐感想や教訓的の記述が介在して居る事などを見ると、現存するものは完本ではなく、しかも錯簡のある事は疑のないことである。關根正直博士は、其の著『紫式部日記精解』の總說の中に、中根香亭翁が著者に語つた說として、「寛弘六年正月三日の次に、同輩宮人を評し、自己の所懷を漏らせる數節は、必ず式部より他人に送りたる消息文なるべし。元來この日記は數十卷ありけむを、式部その中より數節を抄出し、別に彼の消息文を添へて他に寄せたるものならむ。」といふ說を引き、更に木村架空氏が其の編著『紫女手簡』中に、中根翁の此の意見に基づいて、此の日記は抄錄でなく、脫漏であつて、消息文は式部が其の女に與へたものであるとする說を揭げた後、次の如き意見を述べて居られる。

そもそも此の書抄錄か脫漏か。按ふに日記の名はあれども、日次を逐うて錄し行きたるものならず。或は當時に筆とりたるもあり、後日に追記したる所もありし短篇零冊に過ぎざるべし。元來數十卷を重ねたるものならば、今少しは殘れる部分も、他書に引用せられたる文句などもあるべきに、聊かもさることなきにて察すべし。彼の消息文はた別に寫し傳へたるものの、日記の中にさしはさまれたる儘に、彼處ここに轉傳し、いつしか本文と共に寫しとられて、一つに綴られたるものと見ゆ。

この推定にはなほ研究の餘地があるであらうが、後世に傳はつた日記が全部でない事は明瞭である。

紫式部日記繪卷（藤田家藏）

此の日記の主要部分を占めて居るのは、殊に敦成親王の御誕生前後の模樣は、精細に記されて居るので節會のめでたき有樣であるが、殊に敦成親王の御誕生前後の模樣は、精細に記されて居るのであつて、服裝調度諸儀式などを始め、道長夫妻以下男女の言語動作などに至るまで詳密に記されて居るのは、當時を研究する者に對して好資料を提供するものである。かくて此の日記は宮廷の花やかな御有樣を寫した點に於ては『枕草子』に似て居るのであるが、其の態度は大いに異なつて居る。清少納言は自己の觀察した所を客觀的に直敍して居るのであるが、此の日記は寧ろ主觀的傾向が勝つて居るのであつて、宮廷のめでたき有樣を目撃して、ひたすら美的幻想に耽つて居り、又自己を顧みては一種の寂寥を感じて居るのである。殊に興味のあるのは、女房の人物評論と自己の述懷である。其の人物評

論は、清少納言が主として宮廷の貴紳を觀察したのに反して、專ら宮中の女房に關するものであるのは、二人の性格の相違を示すのであるが、其の忌憚なき批評は容姿性格才藝に及んで居るのであつて、多くの女房の面目がありありと想像せられる。併し和泉式部・江侍從・清少納言などの文才に對して加へた批評と、自己に關する記述とを對比する時には、筆者の性情もまた讀者の眼前に躍如たるものがあるのである。安藤年山(爲章)が此の日記を資料として『紫家七論』を著して、彼の學才德操などを賞揚したのは、此の日記を皮相的に觀察したのであつて、當つてゐない所が多い。何となれば、筆者が和泉式部以下の才媛に對して辛辣な批評を試みた態度には、明かに驕慢があり、嫉妬が混つて居るのであり、また道長と交渉のあつた事や、また上中宮を始め公任などから、自己の才藝を賞揚せられた事を記した點には、自負心があり、虛榮心があるのであつて、「一といふ文字をだに書きわたし侍らず、いとてづつにあさましく侍り。」と言つて居るのも、畢竟表面謙讓を裝つて居るものと見られるのである。要するに此の日記は、『源氏物語』を書いた式部の內面考察に對して、極めて興味ある資料を提供するのである。

文章は元より洗煉せられた『源氏物語』に比すべきものではないが、自然と人事の融合した敍事にはすぐれた所がある。左に掲げる冒頭の一節は殊にすぐれて居る。

秋のけはひの立つままに、土御門殿の有樣いはむかたなくをかし。池のわたりの梢ども、遣水のほとりの草むら、おのがじし色づきわたりつつ、おほかたの空も艶(えん)なるにもてはやされて、不斷の御讀經の聲々あはれ

まさりけり。やうやう涼しき風のけしきにも、例のたえせぬ水の音なひ、夜もすがら聞きまがはさる。御前にも近うさぶらふ人々、はかなき物語するを聞こしめしつつ、なやましうおはしますべかめるを、さりげなくもて隱させ給へる御有様などの、いと更なることなれど、憂き世のなぐさめには、かかる御前をこそ尋ね參るべかりけれと、うつし心をばひきたがへ、たとしへなく萬づ忘るるにも、かつはあやしき。

『紫式部日記』の名は、藤原定家の『明月記』や『本朝書籍目錄』『無名抄』などに見えて居るが、古寫本は未だ發見せられてゐない。此の日記の繪卷で名高いのは、現在蜂須賀侯爵家久松子爵家其の他に分藏せられて居る四卷であつて、繪は藤原信實、詞は後京極攝政良經の筆と傳へられて居る。筆者に就いては確證がないのであるが、鎌倉時代初期の製作である事は疑のない事である。詞の字體も優麗であるが、殊に繪は描寫が纖細秀麗であり、賦色が優婉を極めて居るのであつて、鎌倉時代の大和繪中の典型的傑作と言はれて居る。圖版に掲げたのは藤田家所藏（秋元子爵家舊藏）の一部分であつて、嘗て『國華』に掲載せられたものを複寫したのである。

繪　卷

更級日記

『更級日記』は和泉式部や紫式部の日記より稍おくれて、康平二三年の頃に記された。筆者は菅原道眞五世の孫に當る菅原孝標（たかすゑ）の女であつて、其の母は倫寧の女であるから、『蜻蛉日記』の作者の姪である。此の日記の作者は文學の好愛者であり、貞淑溫順な性質の女であつたが、其の一生には幾多の波瀾があつた。作者は好んで幻想の世界に住んで、現實の苦惱を忘れようとしたらしく、此の日記には夢幻的な記述が多く、他の女流日記と異なる特徵がある。而して此の日記は、作者が十三歲の時寬仁四年九月に、父上總介が任期を終へて、一族と共に任國から京に歸る時の東路の旅に始まり、歸京の

後かねて噂に聞いて憧憬れてゐた『源氏物語』を耽り讀んで、窃かに自ら浮舟君を理想とした空想を記して居る。併し作者の身邊には、様々な哀別離苦が起つたのであつて、泌々幻滅の悲哀を味はふと共に、其の性格も著しく變つたやうである。かくて三十二歳の頃、一時後朱雀天皇第三皇女祐子内親王

定家筆更級日記（帝室御物）
扶桑珠寶に據る

に仕へたのであるが、其の後は家庭にあつて老いた父母につかへ、又姉の忘形見である二人の女を養育しつつ寂しく暮してゐた。作者は始めて宮仕をした前後に、橘俊通と結婚したのであるが、其の後一男一女の母となつてからは、母性愛と夫婦愛とを感じて、多幸な生活を續けてゐた。併し作者が五十歳の時、夫は信濃守となつて任國に下り、其の翌年には夫に先立たれたので、境遇も一變してひまなき涙に日を送る身となり、それと共に再び空想にあこがれるやうになつて、ひたすら淨土に思を馳せてゐた。かくて此の日記は夫の歿後で終つてゐるのであつて、寡居の淋しさに、過ぎし四十年の生活を思ひ浮べて記したもののやうである。思ふに作者が幸福な日を送つたのは、夢心地であつた少女時代と、結婚生活を營んだ後半生とであつて、概して悲しい月日を

過した不遇な女性である。才學を兼ねて宮廷を誇りかに振舞つた紫式部や清少納言とも異なり、花に狂ふ胡蝶の如き和泉式部とも異なつて、飽くまで温良であり、圓滿であつた筆者の如き女性は、當時としては珍らしい例といふべきである。此の日記は晩年になつて記した回想錄であるから、記述は簡略であり、才藻は紫式部清少納言などに比べて一段と劣るのであるが、純情の溢れてゐる所が讀者を感動させるゆゑである。要するに此の日記は『蜻蛉日記』と共に、當時の女性の境遇を記述した、好一對の日記文學である。流布本には七箇處に錯簡があつたが、大正十三年に佐々木博士玉井幸助兩氏が、流布本の原本である定家自筆の御物本に就いて訂正せられた。御物本の複製本は今『扶桑珠寶』の一として刊行せられた。圖版に掲げたのがそれである。此の日記を更級といふのは、作者が夫の喪に籠つて居る頃、甥が尋ねて來たのを喜んで、

月も出でて闇にくれたるをばすてに何とてこよひ尋ね來つらむ

と詠んだ歌に基づくのであつて、更級はまた夫の最後の任國なる信濃の地名でもある。文章は平明且つ流麗である。左に掲げるのは、幼い頃『源氏物語』にあこがれた事を記した一節である。

文例

かくのみ思ひ屈じたるを、心も慰めむと、心苦しがりて、母物語など求めて見せ給ふに、げにおのづから慰みゆく。紫のゆかりを見て、續きの見まほしく覺ゆれど、人語らひなども得せず。誰も未だ都馴れぬほどにてえ見つけず。いみじく心もとなく、ゆかしく覺ゆるままに、此の源氏の物語、一の卷よりして皆見せ給へと、心の中に祈る。親の太秦に籠り給へるにも、異事なくこの事を申して、出でむままに此の物語見はてむ

と思へど見得ず。いと口惜しく思ひ歎かるるに、叔母なる人の田舍より上りたる所に渡いたれば、「いと美しうおひなりにけり」など、あはれがりめづらしがりて、歸るに「何をか奉らむ。まめまめしき物はまさなかりなむ、ゆかしくし給ふなる物を奉らむ。」とて源氏の五十餘卷櫃に入りながら、ざい中將・とほぎみ・芹河・しらら・あさうづなどいふ物語ども、一袋とり入れて、得て歸る心地の嬉しさぞいみじきや。はしるはしる僅かに見つつ、心も得ず心もとなく思ふ源氏を、一の卷よりして人もまじらず、几帳のうちに打臥して、引出でつつ見る心地、后の位も何にかはせむ。晝は日ぐらし、夜は目の覺めたる限り、火を近くともして、これを見るより外の事なければ、おのづからなどはそらに覺え浮ぶを、いみじき事に思ふに、夢にいと淸げなる僧の、黄なる地の袈裟著たるが來て、「法華經五卷をとく習へ」といふと見れど、人にも語らず、習はむとも思ひかけず、物語の事をのみ心にしめて、我は此の頃わろきぞかし、盛りにならばかたちも限りなくよく、髮もいみじく長くなりなむ。光の源氏の夕顏、宇治の大將の浮舟の女君のやうにこそあらめと思ひける心、まづいとはかなくあさまし。

讃岐典侍日記

『更級日記』に次いで現れたのは『讃岐典侍日記』(二卷)である。作者を沖の石の讃岐(源賴政女)とする說は時代が合はないから、藤原顯綱の女とする說に從ふべきである。顯綱は道綱の孫で、其の女なる筆者は、堀河天皇の御乳母を勤めた伊豫三位兼子で、後に典侍となり、天皇の崩御の後には鳥羽天皇に仕へ奉つた。(最近玉井幸助氏は作者を兼子の妹長子とする說を發表せられた。長子も堀河天皇に仕へ、後更に鳥羽天皇にも奉仕したのであつて、日記の內容と符合するのである。)此の日記には、嘉承二年

六月堀河天皇の御惱の初から崩御に至るまで、親しく看護し參らせた有樣を詳かに記し、次いで即位せられた幼い鳥羽天皇に仕へ、天仁元年の踐祚大嘗會を拜するまで、前後二年間の事を記して居る。筆者の嚴肅な感情は漲つて居るが、記述は冗漫であつて、文學的價値は乏しい。加持祈禱が專ら天台密教の形式によつて行はれて居るのは、平安時代後期の宗教の特徴を示すものであつて、公事節會に關する詳密な記事と共に、國史の研究には貴重な資料となるものである。『紫式部日記』などに見られた事實の記述が、『讚岐典侍日記』に至つて一層顯著になつたのは、理想的寫實主義の『源氏物語』以下の物語から、歷史物語や說話文學を派生した傾向と一致するのである。

第六章　歷史物語と說話文學

一　歷史物語

平安時代末期には、過去の花やかな時代を回想し憧憬する傾向が盛であると共に、從來の文化を承けて、更に新しいものを生み出さうとする精神が盛に起つた。かかる傾向は、是までに述べた和歌や物語などにも見受けられるのであるが、玆に記す所の歷史物語と說話文學には、特に其の傾向が著しく現れて居る。卽ち歷史物語は在來の作り物語の形式の影響を受け、過去の花やかな時代から素材を取つて、之を新しい構想法によつて記した一種の物語であり、說話文學も亦前代の著名な說話や逸話

を集めて、之を或目的のもとに分類した小話集であつて、此等は何れも、やがて起るべき鎌倉時代の新興文學の先驅となつて居るのである。而して平安末期に現れた歴史物語は『榮華物語』『大鏡』及び『今鏡』の三種である。以下それ等に就いて述べよう。

『榮華物語』は四十帖から成つて居るが、刊本には別に目錄と系圖を一卷として添へて居る。宇多天皇の御代から堀河天皇の寛治六年に至るまでの十五代の事蹟を、假名文で記した歴史物語であつて、形式は編年體の歴史に倣つて居る。其の內容は前後二百年に亙つて居るのであるが、冒頭の宇多醍醐朱雀三帝の御代には、只皇子皇女及び藤原氏の系譜などを略述したまでであるから、實際は村上天皇以後、藤原氏で言へば九條師輔以降の、百四十八年間の事を記して居るのである。其の中でも特に記述が詳密になつて居るのは、御堂關白道長の榮華の一生であつて、全體のおよそ四分の三卽ち四十帖中の二十八帖を占めて居り、しかも作者は物語の中に、屢「榮華」といふ言葉を用ひて居るのであるから、題名の由來する所は自ら明白である。此の物語は古くから『大鏡』と共に一名を「世繼」又は「世繼物語」と呼ばれて、兩者を混同した時代があつたのであるが、元來世繼は歴史の義であつて、もと『榮華物語』の別名であつたのが、後には『大鏡』の一名としても用ひられたのである。各帖の題名には、記事や文詞や和歌などによつて、「月の宴」「花山」一本「花山尋ぬる中納言」「さまざまの悅」「見はてぬ夢」「浦々の別」「耀く藤壺」「鳥邊野」などのやうな、優美な名を附してあるが、これは從來の物語の例に倣つたの

である。

組織

『榮華物語』は第三十帖と第三十一帖との間に境界を設けて、上篇下篇の二つに區分する事が出來る。其の區分の根據としては、第三十帖の「鶴の林」の末尾に「次々の有樣どもまたまたあるべし。見聞き給ふらん人も書きつけ給へかし。」と記されて居る事、第三十一帖の「殿上の花見」に第三十帖より前を指して、「上の卷に記したれば新しくも申し立てず。」と云ひ、又第三十六帖「根合」にも、「榮華の上の卷には殿の御子はおはしまさずと申したるに云々」と記して居る事などを擧げ得るのである。卽ち上篇は「月の宴」から「鶴の林」に至るまでの三十帖であつて、發端を姑く除いて、村上天皇朝から後一條天皇の萬壽五年二月まで、八十餘年の間の事蹟を記して居る。而して下篇は「殿上の花見」から最後の「紫野」までの十帖であつて、上篇の終の道長薨去の後を承けて、後一條天皇の長元三年十一月以後、堀河天皇の寛治六年二月に至るまで、六十二年間の事を記して居る。かくて上篇下篇の間には二年餘の記事を缺き、又下篇にも後冷泉天皇の末頃から後三條天皇の初頃まで、三年許りの記事を缺いて居るのであるが、是は元來記事が無かつたのであらう。

作者

此の物語の作者に就いては、從來種々の說が現れた。古く鎌倉時代末期の『日本紀私抄』には、全部を赤染衞門の作として居るのであるが、室町時代の『本朝書籍目錄』には藤原爲業（ためなり）の作とし、『尊卑分脈』にも同樣の說を揭げて居る。其の後江戶時代になつて、契沖は『百人一首改觀抄』の追考（刊本所載）に、上下の二篇に分つべき事を論じて、上篇を赤染衞門の作、下篇を出羽の辨の作とし、次いで安藤爲章

は其の著『榮華物語考』に、若し舊説の如く赤染衞門の著作とする時には、萬壽年間には六七十歳になり、更に寛治六年まで生存して居たとすれば、百二三十歳になる筈であると言つて赤染衞門説を否定し、更に作者を推考して、堀河天皇以後の男子の手に成つたもので、古記錄や赤染衞門紫式部などの日記及び其の家集から拔き書きして、女子の作に擬したものであらうと言つて居る。又野村尙房の『榮華物語事蹟考勘』には、作者を赤染衞門とし、土肥經平の『榮華物語目錄年立』には、爲章の説に反對して上篇を赤染衞門の作、下篇を後人(或は出羽の辨か)の續撰とし、又大石千引の『榮華物語考難注』には、上篇を赤染衞門の作、下篇を爲業の作として居る。其の他伴蒿蹊・伴信友・足代弘訓・岡本保孝等も作者に就いて論じて居るのであるが、上篇を赤染衞門の作とする説は最も有力であつて、近くは和田英松博士も『榮華物語詳解』の解題に、姑く此の説に從つて居られる。然し下篇の作者に就いては、江戸時代以來種々の説が現れて、未だ定説を見ないのである。今二三の説を擧げれば、土肥經平は契沖と同じく、下篇になつて始めて出羽の辨の歌が多く出てゐるのに基づいて、出羽の辨の作かと言つて居るが、大石千引は既に述べたやうに、下篇を爲業の作とし、木下幸文は初の六卷と後の四卷を別別の人が書いたものであると言ひ、屋代弘賢・岡本保孝等は三人の手に成つたものであるとし、また和田博士は、下篇の第三十六帖「根合」までに出羽の辨の歌が十八首あるが、それ以下には出羽の辨に關する事が見當らない事、及び出羽の辨は後一條天皇の御乳母であるから、寛治の頃まで生存して居たとすれば、百歳以上になる事などを擧げて、彼の手記したるものが入つて居る事は認めて居られるが、

下篇全體を其の作とする說を排して、別に作者と推定すべき人は見當らないと言つて居られる。以上擧げた諸說を通覽するに、上篇を赤染衞門の作とするのは、鎌倉時代末期以來最も廣く行はれて居る說であつて、作者と成立年代との關係から見ても不都合はないのであるが、其の論據は薄弱であり、又下篇を出羽の辨の作とするのは稍根據があるのであるが、終篇の成立年代まで生存したとは思はれないから、一部の作者としてはとにかくとして、下編全部の作者とは認められない。なほ全部又は下篇の作者として爲業が擧げられて居るが、爲業は和田博士の考證に從へば、丹波守爲忠の子で、鳥羽天皇から高倉天皇の御代の頃まで生存した人であるから、稍時代が後に屬し、而も作者としての根據が薄弱である。要するに上篇下篇とも作者に就いては、なほ今後の研究に俟つ所が多いのである。

次に著作年代に就いても從來考證せられて居るのであるが、これも明確に定める事は困難である。今それ等の考證を一々述べる暇はないが、岡本保孝が「日蔭の蔓」と「疑」の兩卷の記事によつて、上篇を寬弘八年の頃宮廷の事を知つてゐた人で、それより更に十八九年後に書いたものであらうと言つたのは參考すべき說であつて、和田博士も此等を引いて、長元二年から同六年の間に書かれたものである事を考證して居られる。次に下篇に就いては從來あまり研究せられてゐないのであるが、これも和田博士は、本書の中に寬治以後の人物や官位などが混入してゐない事、又寬治以後に關する事項が紛れ込んでゐない事などを擧げて、寬治以後間もなく成立したものであらうと言ひ、なほ「讃岐典侍日記」の嘉承二年十二月朔日鳥羽天皇御即位の條に、下篇を引いて居る點から、寬治六年以降嘉承元年以

前の十四五年間に書かれたものであると說かれたのは、注意すべき說である。

『榮華物語』は女流の日記や家集や古記錄などを資料として編述したものであるが、殊に主要な材料となつたのは日記である。例へば「初花」の巻には『紫式部日記』を引用した所があり、前篇の「日蔭の鬘」「木綿四手」「若枝」「玉の飾」の諸巻、及び後篇の「歌合」「晩待星」「布引の瀧」などの巻にも、女房の日記若しくは家集に據つたと思はれる節々がある。從つて此の物語の記す所は、皇室並に道長以下一門に關する事が主となつて居るのであつて、政治上の記事は全く無く、源平二氏の事も多くを語らず、地方の狀態は伊周及び隆家の配流を記した條に、聊か見えて居るばかりであつて、刀伊の入寇、平忠常の亂、前九年及び後三年の役の事さへも記されてゐない。かくて此の物語は歷史として見る時は、記述が一局部に限られて居るのであるが、公事節會を始め、修法・供養・葬式・出產や詩歌管絃の遊などを極めて精細に記し、なほ貴族社會を中心とする事件は、概ね正確に傳へて居るのであるから、當時を研究する者にとつては貴重な資料となるのである。次に文學上の作品として見るならば、此の物語が種々の點に於て『源氏物語』に倣つて居る事は、從來屢論ぜられた所である。其の著しい點は、上篇三十帖下篇十帖から成つて居るのが、源氏の四十四帖と宇治十帖とに似て居る事、及び上篇が道長を中心として記し、而も道長を光源氏に擬して居る事などである。併し內容は主として事實の臚列であり、しかも道長の榮華の有樣を極力讚歎して、動もすれば誇張に過ぎて居るのであつて、當時の裏面や上流の隱事の如きは之を記す事を避けて居る。從つて『榮華物語』の記述の態度は、次に述べる

『大鏡』に比して大いに趣を異にして居る。例へば『大鏡』には、道兼が父と心を合せて花山天皇を出家させ奉つた惡事を發いて居るのであるが、『榮華物語』には道兼を善人として記して居り、又三條天皇の御讓位に就いて、『大鏡』には道長の壓迫に基づく事を諷して居るのであるが、此の物語には帝の御意志から出たもののやうに記して居るのである。

文章

此の物語の上篇は諸材料を多く引用して居るが、下篇は單に材料を並列し、而も引用の範圍は狹い。文章は上下兩篇を通じて時に優艶の趣はあるが、概ね冗長で氣力を缺き、殊に下篇は一體に拙劣である。漢語佛語を多く交へて居るのは平安末期の文章の特色であつて、鎌倉時代の新文章への推移を示すものである。此の物語の中で敍事のすぐれて居るのは、伊周・隆家の左遷の悲しみを記した「浦浦の別」の卷、三條天皇が道長の邸に行幸せられて、中宮妍子が產み奉つた若宮（陽明門院禎子）と初の御對面のあつた事を記した「蕾の花」の卷、尙侍嬉子の薨去の悲歎を物語つた「楚王の夢」の卷、公任出家の模樣を寫した「衣の珠」の卷などである。なほ記述は稍煩瑣ではあるが、法成寺御堂の造營を記した「疑」の卷、及び御堂の供養の莊嚴を物語つた「音樂」の卷にもすぐれた個所がある。左に揭げるのは「疑」の卷の法成寺造營の一節である。

文例

日々に多くの宮達・大臣・上達部・さるべき人々參りまかで立ちこむ。さるべき殿ばらを始め奉りて、宮々の御封・御庄どもより、一日に五六百人千人の夫どもを奉るも、人の數多かる事をば、かしこき事に思したち、國々の守ども、地子官物はおそなはれども、只今はこの御堂の夫役。材木・檜皮・瓦など多く參らするわざを、

我も我もと競ひ仕うまつる。大方近きも遠きも參りこみて、品々方々、あたり〳〵に仕うまつる。或所を見れば、御佛仕うまつるとて、佛師ども百人ばかり並みゐて仕うまつる。同じくはこれこそめでたけれと見ゆ。御堂の上を見上ぐれば、工匠ども二三百人登りゐて、大きなる木どもには太き綱をつけて、聲を合せてえさまさと引上げ騒ぐ。御殿の内を見れば、佛の御座作り輝かす。板敷を見れば、木賊・椋の葉桃のさねなどして、四五十人手毎に並みゐて磨き拭ふ。檜皮葺・壁塗・瓦作なども數を盡したり。又年老いたる翁などの三尺ばかりの石を、心に任せて切りととのふるもあり。池を掘るとて四五百人おり立ち、山を疊むとて五六百人登りたち、また大路の方を見れば、力車にえも言はぬ大木どもに綱をつけて、叫びののしり引きもてのぼるあり。鴨川の方を見れば、筏といふものに榑・材木を入れて、棹さして心地よげに謠ひののしりて持てのぼるあり。大津梅津の心地するも、西は東といふ事は是なりけりと見ゆ。磐石といふばかりの石を、はかなき筏に載せて率て來れど沈まず。すべて色々樣々、いひ盡しまねびやるべき方なし。かの須達長者の祇園精舍造りけんも、かくやありけんと見ゆるを、冬の室夏の風各ことごとなり。

『榮華物語』の刊本には元和寛永頃の活字本、明暦二年の版本(流布本)などがあり、古寫本には爲親本・桂宮本・神宮文庫本などがある。古寫本の中で最も注意すべきは三條西伯爵家の藏本である。此の本は『實隆公記』文龜三年九月五日の條に、「兼又榮花物語續世繼本有二沽却本一(東山殿御本也)共以美麗尤所望之物也」と記されて居るものである。十七冊の完本であつて前半十冊(二十帖)は題簽に「榮花物語」とあるが、後半七冊(殘り二十帖)には「世繼」と題してあつて書物の形も小さい。前半は鎌倉時代初期の筆寫であらうと思はれるが、後半は其の末頃か又は南北朝頃に寫されたもののやうである。

圖版に示したのは前半の一部であつて、伯爵家の好意によつて撮影掲載する事を得たものである。

三條西伯爵家本榮華物語

此の物語の繪卷には、鎌倉時代末期に成つた駒競行幸繪卷がある。此の繪卷は萬壽元年九月に、關白賴通の高陽院殿で競馬の催があつた時、後一條天皇の行幸があり、又太皇太后宮や東宮の行啓があつた時の有樣を描いたもので、今は三條公爵家と岩崎男爵家とに其の殘卷が存して居る。繪は光時、詞書は尊道法親王の御自筆と傳へられて居る。併し繪の手法は御物春日權現驗記繪卷に酷似して居るから、高階隆兼が描いたのであらうと言はれて居る。彩色目を奪ふばかりで絢爛を極めて居る。此の繪卷の殘卷中の、池に龍頭鷁首の樂船を浮べた部分は、最も見るべき所であるが、近來屢書中に插繪として揭げられて居るから、今は割愛する事にした。

『大鏡』も亦藤原氏の榮華の有様を記した歷史物語であつて、古くは一名を「世繼物語」ともいつた。古寫本はすべて三卷本であるが、古活字本を始め流布本は一般に八卷となつて居る。流布本は三卷本を增補したもので、記事が稍詳密になつて居るが、事實の重複があり、また齟齬する所があるのは、後世の加筆のある事を示して居る。（古本の事は下に述べる）

組織

『大鏡』の卷頭には序に相當する一段の物語があつて、本書の組織を說明して居る。卽ち萬壽二年五月に北山の雲林院の菩提講に、大宅世繼といふ百九十歲（流布本には百五十歲）になる老翁が、夏山繁樹と稱する百八十歲（流布本には百四十歲）の老人を相手に、說教が始まるまでの御伽にといつて懷古談を試みるのを、其の傍に居合せた一人の若侍が最も熱心な聽手となつて、時々合槌を打つといふ趣向から成つて居る。（世繼は主として表面の史實を語り、繁樹は寧ろ其の裏面を語り、若侍は現代を代表して批判を試みて居る。）作者が萬壽二年五月の雲林院の菩提講を背景に取つたのは、此の寺で每年五月に盛な菩提講が行はれた爲でもあるが、更に此の年四月には皇后娍子の御葬儀があり、次いで五月には滿中陰の御佛事が營まれた事から思ひ付いたのであらう。又作者が一篇の物語を三人の假想人物の對話形式によつて記したのは、芳賀博士が言はれたやうに、『源氏物語』の雨夜の品定から思ひ付いたかも知れないが、恐らくは『法華經』などに見る方便說教の問答形式を摸倣したのであらう。

本書の目的は、作者が序の中に世繼の口を借りて、次のやうに述べて居る。

まめやかに世繼が申さむと思ふ事はことごとかは。只今の入道殿下の御有樣の世にすぐれておはしますこと

を、道俗男女の御前にて申さむと思ふが、いと事多くなりて、數多の帝后また大臣公卿の御上を續くべきなり。その中にさいはひ人におはしますこの御有樣申さむと思ふ程に、世の中の事の隱れなくあらはるべきなり。傳にうけたまはれば、法華經一部を說き奉らむとてこそ、先づ餘教をば說き給ひけれ。それを名づけて五時教とはいふにこそはあなれ。しかの如くに、入道殿の御榮えを申さむと思ふ程に、餘教の說かるると言ひつべし。

これによつて、本書が道長の榮華の有樣を中心として居る事は明かであるが、なほ分量を見ても、古本三冊の中で下卷は道長の傳に當てられて居る。かくて『大鏡』は『榮華物語』と同じやうに、藤原氏の榮華を物語る爲に書かれたのであるが、彼が編年體であるのと異なつて、これは『史記』や『漢書』の如き支那の正史に倣つて紀傳體を摸して居る。我が國で紀傳體によつて歷史を書いたのは是が最初である。卽ち『大鏡』の組織は、先づ文德天皇から後一條天皇まで十四代の天皇の御略傳を記して本紀とし、次いで冬嗣から道長に至るまでの攝關大臣二十人の事蹟を記して列傳に擬し、なほ最後に賀茂石淸水の臨時祭の起原、延喜天暦の治世、村上源氏の由來、其の他歌物語などを多く記して居るのは志類に擬したのである。要するに『大鏡』の內容は、文德天皇の御卽位の年なる嘉祥三年から、道長が薨ずる前々年、卽ち後一條天皇の萬壽二年五月に至るまで、前後百七十六年間の藤原氏を中心とする歷史物語である。而して『榮華物語』より更に溯つて記したのは、藤原氏興隆の由來を一層詳かにする爲であるが、道長の薨去までを記さずして萬壽二年で切上げたのは、榮華の絕頂を語つて餘韻を存して

置いたのである。

題號

書名は作者が自ら命名したのであつて、書中（後一條天皇の條下）に繁樹が、

あきらけき鏡にあへば過ぎにしも今ゆくすゑの事も見えけり

と歌つたのに對して、世繼が

すべらぎのあともつぎつぎ隱れなく新たに見ゆる古鏡かも

と返した二首の唱和から取つたのである。

作者

『大鏡』の作者に就いては從來種々の說が現れた。『本朝書籍目錄』に世繼の作者を藤原爲業とし、また『尊卑分脈』にも「爲業世繼作者云々」とあるので、從來爲業の作と言はれてゐたのであるが、此等の世繼は『榮華物語』を指したのである。一說に又藤原能信の作とするのは、『日本紀私抄』の書入に見える說であつて、能信は道長の子で賴通の異母兄弟である。能信說は萩野博士も重きを置かれ、井上通泰博士も一說として擧げて居られるのであり、又近年西岡虎之助氏は、書中の諸條件と合致する事を擧げて此の說を强調せられた。（史學雜誌三十八篇七號）併し能信は後冷泉天皇の治曆元年に七十一で薨じたのであつて、本書の著作年代はそれ以後であらうと思はれるから、此の說には從ひ難い。其の他井上通泰博士は枇杷殿の皇太后宮大夫源道方を作者に擬して居られ、關根正直博士は道方の子桂大納言經信を作者として居られるが、未だ確定說はないのである。

著作年代

次は著作年代の事であるが、本書に後一條天皇を當帝といひ、後朱雀天皇を今の東宮といひ、道長

を只今の入道殿下といひ、賴通を今の關白といつて居るのを始めとして、人物の官位などもすべて道長の晩年を現在として記して居るのであり、殊に後一條天皇の條には、「位に卽かせ給ひて十年にやならせ給ふらむ。今年は萬壽二年乙丑の歳とこそ申すめれ。」と記して居るのであるから、表面萬壽二年の作に擬して居る事は明瞭である。作者が萬壽二年で擱筆したやうに裝つて居るのは理由がある。此の年天變地妖が頻りにあつた事は、書中にも「さて今年こそは天變頻りにし、世の妖言などよからず聞え侍るめれ。」と記されて居るのであるが、なほ『榮華物語』によれば、此の年に惡疫が流行して、權門の名士が續々世を去つたのであり、殊に道長は七月に小一條院女御寬子を喪ひ、次いで八月には後朱雀院の皇后嬉子に先立たれて、悲歎の涙にくれたのである。卽ち萬壽二年の春は道長の榮華が頂上を極めた時であつて、其の年の秋には既に榮華が下坂に向つたのであるから、作者は萬壽四年の道長の薨去を待たずして、筆を收めたものと思はれる。

『大鏡』が萬壽二年の作に擬して居る事は以上述べた通りであるが、高倉天皇の嘉應二年(一一七〇年)の著作となつて居る『今鏡』の雲井の卷には、『大鏡』を指して「古き物語」と言つて居るから、それより遙か以前に作られた事は疑のない事である。然らば果して何時頃の著作であらうか。萩野博士は萬壽二年以後の著作である證據として、次の三箇條を提示せられた。（藤岡博士著國文學全史平安朝篇參照）(一)書中に『今昔物語集』の記事と共通の誤があるのは、彼に據つたものであらうから、本書は『今昔物語集』より後に成つたものである。(二)後一條天皇の御傳中に、藤原氏の太政大臣を十一人數へて、其の中二人は出家して諱が

ないと記して居るのは、兼家と道長を指したのであるが、これは畢竟道長に諡號のない事を知つて書いたのであらうから、本書は道長薨去の後に書かれたものである。（三）書中に村上天皇の御母（穩子）を大后といひ、圓融天皇の御母（安子）を中后といひ、後三條天皇の后（茂子）を今后と言つて居るのは、後三條天皇の女御茂子が白河天皇を生み奉つて、皇后となり給うた後に生じた語であるから、本書の成立は白河天皇以後である。以上が萩野博士の所說の大要である。藤岡博士は此の說を肯定した後に、更に傍證として次の三箇條を擧げて居られる。（一）嬉子の御懷姙の事を記して、「姙じ給ひて七八月にぞ當らせ給へる。入道殿の御有樣見奉るに、必ず男子にてぞおはしまさむ。此の翁更によも申しあやまち侍らじと、扇を高く使ひつつ言ひしこそをかしかりしか。」とあるのは、後冷泉天皇の降誕を知つて書いたものである。（二）源師房の傳に將來の顯達を豫言した書樣が見えて居る。（三）三條天皇の皇女一品宮禎子の事を記した條に、後に後朱雀天皇の後宮に入つて、後三條天皇を生み奉つた事を寓して居る。此の三箇條を提示して『大鏡』は白河天皇以後の作で、『今鏡』の成つた高倉天皇より少し前に書かれたものであらうと推考して居られる。國文學全史平安朝篇

右に述べた萩野藤岡兩博士の意見があつて以來、一般に白河天皇以後『今鏡』以前の著作であるとせられてゐたのであるが、近年西岡虎之助氏は、兩博士が擧げられた徵證に對する反證を擧げて、萬壽二年に成立したものであると主張せられた。史學雜誌三十八篇七號　其の反證として擧げられた中には、明かに從來の失考を正すべき點もあるが、藤岡博士が擧げられた傍證に對する反駁の如きは首肯し難いのであ

り、殊に萬壽二年の著作とする決論には從ひ難いのである。元來流布本は古本に改訂を加へ增補を試みたものであるから、本書の成立年代を內部徵證によつて勘考するには、必ず原作に近い古本に據らねばならぬ事は勿論である。三卷本の古寫本を見ると、萬壽二年に於ける翁の年齡が、世繼百九十歲繁樹百八十歲と記されてゐて、書中に「世繼年百歲に多く餘り二百歲に足らぬ程にて云々」とあるのとよく合致するのであるが、一方に於て世繼の生年月が、清和天皇の貞觀十八年正月十五日となつてゐるのと照合する時には、四十年の誤差を認めるのである。此の點は流布本に世繼百五十歲繁樹百四十歲と訂正して居るのが正當であるが、原作者が斯かる誤に陷つたのは、たまたま本書が貞觀十八年から百九十年の後（後冷泉天皇の末頃）に書かれた事を暗示するものとも考へられるのである。次に右大臣師輔の傳に伊賀の前司資國の名が見えて居るが、（古本流布本共に見ゆ）『大鏡裏書』に「長久四年正月二十四日兼伊賀守元皇后宮權大進。」とあるのに據れば、資國が伊賀守に兼任したのは萬壽二年から十九年後であつて、書中に前司と記されて居る點から推考すれば、本書の成立年代はそれより少くも數年後でなければならぬ。以上述べた二項から考へると、此の物語の著作年代は萬壽二年を去る事、三四十年後であらうと思はれるのであるが、なほ本書の記事と交渉のある『今昔物語集』『江談抄』『打聞集』などとの比較對照によつて、成立の前後を明かにする事も必要である。今此等の考證を試みる暇はないが、現存する『打聞集』の寫本は崇德天皇の天承三年（一七九四年）に筆寫せられたもので、其の內容には『大鏡』によつて記された所が少くないのであるから、『大鏡』の成立はそれより何年か前である事も疑

のない事である。要するに本書の成立年代は、後冷泉天皇の末頃から崇德天皇の天承三年に至るまでの、約七十年間であらうと思はれる。

特質

『大鏡』に記す所は、道長を頂點とする藤原氏興隆の歷史であるが、それには先づ外戚となつて權勢を恣にするに至つた事情を明かにする必要があるから、物語は天皇の御略傳から始まつて居る。併し帝王傳は皇室と藤原氏との關係を明かにするのが眼目であるから、皇位繼承の次第と皇妃皇子皇女の事を略述するに止めて、主力を攝關傳に注いで居るのである。攝關傳の中心は素より道長にあるのであるから、其の記述は代を下るに從つて漸く詳密になり、最後の道長に至つて最も詳細に記されて居る。かくて『大鏡』は道長の榮華を中心として、其の人物や榮達を極力讚歎して居るのであつて、此の點は『榮華物語』に似て居るのであるが、記述の態度や描寫の方法は著しく異なつて居る。以下此の物語の特質を略述しよう。

裏面の描寫

『大鏡』の最も著しい特色は、主として貴族社會の裏面を暴露して居る事である。例へば道兼が父兼家の孫に當る懷仁親王(一條天皇)を立て奉る爲に、花山天皇を出家入道させ奉つた陰謀を語り、或は敦明親王(小一條院)が道長等の陰險な壓迫に堪へかねて、自ら東宮の位を去り給うた內情を摘發し、或は道長が執政の宣旨を蒙るに至つた裏面に、東三條女院の力ある後援があつた事を記して居るやうに、藤原氏の顯榮の反面に橫たはる醜惡を暴露した記事は、書中至る所に見出される。かくて作者は史實の裏面を發くと共に、花やかな貴族生活の陰翳をも寫し出して居る。冷泉天皇を惱まし奉つた御

物怪や、三條天皇の御眼疾が、共に元方の怨靈の祟であるとする說を擧げ、又師輔が百鬼夜行に出遭つた話や、兼家が法興院で妖怪に襲はれた話などを記して居るのは其の著しい例であるが、其の他權門の背後に漲る陰慘な空氣は所々に見えて居る。作者は又史上の人物の性格を巧みに描寫して居るのであるが、是も主として逸事や性癖などを物語つて居る。例へば時平に笑癖のあつた話、永平親王が晴れの大饗で御本性を暴露せられた話、道隆が酒豪であつた話、隆家が花山院や道長に對して剛直であつた話、村上天皇の皇后（師輔の女安子）に嫉妬の御性質があつた話、敦道親王の妃（道隆三女）が輕率な振舞をせられた話などである。

批判的態度

『大鏡』の第二の特色は、史實に批判を加へて居ることである。即ち作者は屢繁樹や若侍の口を借りて、世相や事件に批判を下して居るのであるが、時には史上の人物の言葉や世評に託して、作者自身の批評を洩らして居る。例へば作者は表面道長を口を極めて稱揚して居るのであるが、一方では大齋院（選子內親王）の道長に阿諛する老猾を、隆家が評して「追從（つゐそう）深き老狐」と言つた事を記し、又隆家が道長の專横を憤つて、「あはれの人非人やと申さまほしくこそありしか」と言つた事を記し、なほ翁の述懷中に、道長が法成寺御堂の造營に、公の調役を徵發した不都合を諷して居るが如き所に、作者の辛辣な批判的態度を覗ふ事が出來る。要するに『大鏡』は史論の性質を帶びた一種の裏面史である。

文章

此の物語の文學的價値は構想の巧妙である事、事件の記述が整然として而も變化に富んで居る事、人物の性格描寫が勝れて居る事、折に觸れた詩歌を引き又假想人物の劇的描寫を交へて、興味を添へ

て居る事などにあるのであるが、此等の長所は文章の力に俟つ所が多い事は勿論である。其の文章は從來の物語文を模範として概ね優雅であるが、雅言の間に荒涼・懈怠(けたい)・過差・閑散・恪勤・興言(きようけん)・風流者(ふうりうざ)・如泥(にょでい)人(にん)の如き當時通用の漢語を混へ、又滅罪生善・往生極樂・過去聖靈・一切衆生の如き佛語を用ひて、格調は雄勁簡潔で表現に力がある。平安初期以來漢文から離れて長足の進歩を遂げた假名文は、末期に至つて再び漢文と提携したのであつて、『大鏡』や下に述べる『今昔物語集』などに用ひられた新文體は、やがて起るべき戰記物語の文章の先驅となつて居るのである。左に『大鏡』の文體を示す爲に、粟田殿道兼が花山天皇に御出家を勸め奉つた一條を抄錄して置く。

あはれなる事はおりおはしましける夜は、藤壺の上の御局の小戸より出でさせ給ひけるに、有明の月のいみじう明かりければ、「顯證にこそありけれ、いかがすべからん。」と仰せられたるを、「さりとてとまらせ給ふべきやう侍らず。神璽寶劍わたり給ひぬるには。」と粟田殿さわがし申し給ひけるは、まだ帝(みかど)出でさせおはしまさざりけるさきに、手づからとりて春宮の御方に渡し奉り給ひてければ、歸り入らせ給はん事はあるまじく思して、しか申させ給ひけるとぞ。さやけき影をまばゆく思し召しつる程に、月の面に叢雲のかかりて少し暗がり行きければ、「わが出家は成就するなりけり。」と仰せられて歩み出でさせ給ふ程に、弘徽殿の女御の御文の日頃破(や)り殘して、御目もえ放たず御覽じけるを思し召し出でて、「しばし」とて取りに入らせおはしましかし。粟田殿の「いかにかくは思し召しならせおはしぬるぞ。只今過ぎばおのづから障りも出でまうできなん。」とそらなきし給ひけるは。さて御門より東ざまにゐて出だし參らせ給ふに、晴明が家の前を渡らせ給

へば、みづからの聲にて手をおびただしくはたはたと打つなる。「帝おりさせ給ふと見ゆる天變ありつるが、既になりにけりと見ゆるかな。參りて奏せん。車に裝束せよ。」といふ聲を聞かせ給ひけん、さりとも哀れに

大鏡　千葉胤明氏藏

（古典保存會複製本に據る）

思し召しけんかし。「かつかつ式神一人内裏へ參れ。」と申しければ、目には見えぬものの戸をおしあけて御後をや見奉らせけん、「只今これより過ぎさせおはしますめり。」といらへけるとかや。その家土御門町口なれば、御道なりけり。花山寺におはしましつきて御髪下させ給ひて後にぞ、粟田殿は「罷り出でて大臣にもかはらぬ姿今一度見え、かくと案内も申して必ず參り侍らん。」と申し給ひければ、「朕をばはかるなりけり」

とてこそ泣かせ給ひけれ。あはれに悲しき事なりな。日頃かく御弟子にてさぶらはんと、契りすかし申し給ひけんがおそろしさよ。東三條はもしさる事やし給ふと危さに、さるべくおとなしき人々、何がしかがしといふいみじき源氏の武者たちをこそ、送りに添へられたりけれ。京の程は隱れて堤のわたりよりぞ、うち出で參りける。寺などには、若しおして人などやなし奉るとて、一尺ばかりの刀どもを拔きかけてぞ守り申しけるとぞ。

古寫本

『大鏡』に三卷本とそれを增補した八卷本との二つの系統の本がある事は既に述べた。原本に近い三卷本の古寫本には德川義親侯所藏の應永九年書寫の完本を始め、近衞公爵家藏本二種、圖書寮藏桂宮本、圖書寮藏寫本、東京帝室博物館藏本などがある。此の外に鎌倉末期の寫本と思はれるものに、千葉胤明氏藏本一帖があるが、是は缺本であつて、三卷本の上卷の後半と中卷の後半とに相當する部分を存するのみである。德川侯爵家本は『岩波文庫』に收められ、千葉本は古典保存會でコロタイプ版に複製せられた。圖版に揭げたのは其の複製本に據つたのである。

『大鏡』の繪卷には高松宮家(舊有栖川宮)御收藏の八軸がある。古いものではないが他に類のないものである。

今鏡

『大鏡』に次いで成つた歷史物語は『今鏡』である。古本は三卷であるが、刊本は分冊して十卷として居る。一名を「續世繼」「新世繼」又は「小鏡」といふ。「續世繼」と「新世繼」は共に『大鏡』の續篇の意であるが、一名「小鏡」の由來に就いては、書中に次の如く記してある。

古を鑑み今を鑑みるなどいふ事にてあるに、古もあまりなり。今鏡とや言はまし。まだをさをさしげなる程よりも、年もつもらず見めもささやかなるに、小鏡とや付けまし。

蓋し「今鏡」は今の歷史の意であり、「小鏡」は『大鏡』に對する名稱である。『今鏡』は『大鏡』の後を承けて、後一條天皇の萬壽二年から、高倉天皇の嘉應二年に至るまで、百四十六年間の事蹟を記したもので、藤原氏は道長の子賴通から基房に及んで居る。體裁は『大鏡』に倣つて、假想人物の物語として記して居るのである。即ち初の「すべらぎ」の上中下三卷を帝紀とし、次の「藤波」の上中下三卷と「村上源氏」の卷と「みこたち」の卷とを列傳とし、終の「昔語」の卷と「打聞」の卷とに、主として古い歌物語を記して居るのは、言ふまでもなく紀傳體を採用したのである。かくて本書は以上述べたやうに十卷に分たれて居るのであるが、更に各卷を章に分つて居るのは、從來の歷史物語と異なる點である。尤も各章の名に、雲井・子の日・初春・星合・望月の如き雅名を附けたのは、『榮華物語』の例に倣つたのであらう。

内容

一篇の組織は『大鏡』を摸倣して居るのであつて、其の發端には著者が親しい友と共に長谷寺に詣でた序に、大和の寺々を巡る途中、ある樹陰に憩うてゐる所に、『大鏡』に見えてゐた世繼の翁の孫に當る、百歳にも餘る老嫗が來合はせて、昔物語をするといふ趣向から成つて居る。作者は『源氏物語』を慕つて居るのであつて、發端に現れて來る老嫗を紫式部の局に仕へた女であるとし、又諸所に源氏禮讃の詞を挿入して居る。記述中世相人情を描き、また屢宗教・音樂・詩歌などの趣味に關する事を多く述べて居るのは、平安朝末期の文化の特徴を示して居るのであつて、時代を窺ふべき資料に富んで居る。終の「昔語」と「打聞」の卷には『大和物語』の例に倣つて、文藝に關する斷片的な多くの說話を收め

作者

古寫本

毛利家舊藏今鏡　傳藤原爲家筆寫）

て居るのであるが、これも平安時代末期の文學に見る傾向と共通して居る。文章は『大鏡』には遠く及ばないけれども概ね優雅であつて、卷末に近づくにつれていよいよ圓熟した筆致を示して居る。此の書の成つた年代に就いては、序に嘉應二年庚寅とあるので明かであるが、著者については『增鏡』の序に「何某のおとどの書き給へりと聞き侍りし今鏡」とあるのによれば、其の頃既に作者の名を逸してゐたのである。伴信友の『續世繼考』には、作者を中山內府忠親（建久六年歿六十五）とし。また黑川春村の『碩鼠漫筆』も此の說に從つて居るが、屋代弘賢は源內大臣通親の作とし、（校本增鏡の序に註す）關根博士も其の著『今鏡新註』に通親說を說いて居られる。要するに作者に就いては未だ確說がないのである。

『今鏡』の古寫本では、毛利子爵家舊藏本（胡蝶裝二十三帖）が最も古いやうである。この本は「新世繼物語」と題してあつて、爲家・爲氏・定圓阿闍梨（定家の子）坊門局・民部卿局等の手で書寫せられたといふ古筆了音の識語がある。圖版に示したのは「武藏野の草」の冒頭で

あつて、藤原爲家筆と稱せられて居る。（山岸德平氏の好意によつて同氏所持の寫眞を以て製版した。）

二　說話文學

説話文學

平安時代の末期には、一は過去の花やかな時代の文化を回想する風潮に支配せられ、一は創作的氣力を缺いた結果として、前代の逸話傳說を蒐集し、或は漢籍佛典などから佛教說話を始めとして、種種の小話を採集する事が流行した。此の傾向は前節に述べた『大鏡』の終の部分や、『今鏡』の打聞の卷などにも見えるのであるが、此等の斷片的な小話を教訓寓意若しくは興味の爲に蒐集し分類して、獨立した作品としたものは卽ち說話文學である。平安末期に現れた說話文學は、鎌倉時代に續出するそれ等の作品の魁となつて居るのであつて、前代の種々な說話を集成すると共に、後の說話文學を導いた點に於て、重要な位置を占めて居る。而して平安末期に現れた說話文學には種々のものがあるが、最も大部のもので代表的な作品は『今昔物語集』である。

今昔物語集

是より先說話集には、弘仁時代に『日本靈異記』があつたが、其の後此の系統を引いて現れた佛教說話集には、永觀二年に成つた源爲憲（寛弘八年歿）の『三寶繪詞』などがあり、更に下つて平安時代後期になると、慶滋保胤の『日本往生極樂記』（寛和年間成る）鎭源の『大日本法華驗記』（長久二年成る）などが現れた。『今昔物語集』は卽ち此等の系統を引いて現れ、しかも前代の種々な說話を集大成したもので、三十一卷から成る我が國最大の說話集である。此の書を今昔と名づけたのは、各の說話が「今は昔」で書き起してある

爲であるが、一名を『宇治大納言物語』とも呼んで居るのは、宇治大納言隆國の著作とする說に基づくのである。隆國は一條天皇の頃に四納言の一人に數へられた源俊賢の子で、官は正二位權大納言に至つたが、晩年に病の爲に致仕して出家し、白河天皇の承保四年に七十四歲で薨じた。宇治に別墅を構へて棲んだので、世に宇治大納言と呼んだ。鎌倉時代に作られた『宇治拾遺物語』の序によると、隆國は晩年に宇治の平等院の一切經藏の傍なる南泉房に籠つてゐた頃、往還の人々を呼び集めて昔物語をさせ、それを記し留めて一篇の物語を編んだと云つて居る。これは『今昔物語集』の成立に關する言傳へであるが、其の內容を見ると、民間の說話を材料としたものも少くないが、主として支那印度の經典史籍雜書を始め、我が國の物語日記國史記錄などを廣く涉獵して取材し、且つ之を分類して成つたものである事が明かであるから、右の所傳は後人の附會說であらうと思はれる。作者は古くから隆國とせられて居るのであるが、隆國が著したのは後に散逸した『宇治大納言物語』であるとも言はれて居り、また內容から考察して、藤原氏と叡山に關係のあつた橘氏などの手に成つたものであらうとも言はれて居る。『今昔物語集』と『宇治大納言物語』との關係に就いて、故佐藤誠實博士は「宇治拾遺物語考」（史學雜誌十二篇第二號所載）に於て、『本朝書籍目錄』に「宇治拾遺物語二十卷源隆國」とあるのは『今昔物語集』と同書であり、又『古今著聞集』の序に「宇縣亞相巧語之遺類」とあるのも同じもので、一に『宇治大納言物語』ともいつたのであると言はれ、芳賀博士も此の說に從つて居られるが、（攷證今昔物語集の序論）坂井衡平氏は『宇治大納言物語』を後世散逸した別書とし、『今昔物語集』は隆國以後に成立した書であると論じられ

た。（今昔物語の新研究）要するに『今昔物語集』と『宇治大納言物語』との關係並に作者に就いては、なほ研究を要するのであるが、現存の『宇治拾遺物語』（十五卷）は鎌倉時代に、『今昔物語集』其の他から材料を取つて作つたものであり、又今の『宇治大納言物語』（三卷）は、原本が散逸した後に成つた僞作であつて、これは『宇治拾遺物語』より更に後のものである事は確かなやうである。

内容

『今昔物語集』は卷一から卷五までを天竺部とし、卷六から卷十までを震旦部とし、卷十一以下を本朝部として居るのであるが、今は其の中の卷八・卷十八・卷二十一の三卷が缺卷となつて居る。其の說話は佛教の教訓に關するものが最も多いのであつて、佛陀經典の不可思議威力を說き、佛土欣求の教を諭し、宿報轉生の說を說き、寫經造佛の功德を語る類の說話が大部分を占めて居る。佛教說話以外のものは、史上の人物の逸傳や、武將節婦孝子盜賊などに關する說話や、生靈鬼物譚・藝術說話・戀愛譚などであつて、此等の說話の中には、當時の他の物語に見る事を得ない武士及び庶民の、生活並に思想を窺ふべき多くの資料があつて、極めて興味がある。蛇淫・狐妖・鬼物・天狗・仙人などに關する陰慘な傳說は、もと印度に起り、支那を經て我が國に傳はつたものであるが、平安時代末期の人心に大なる影響を與へた事は、此の物語の上によく現れて居る。かくて本書は文學としてよりも、各種の說話を集成した點に價値があるのであつて、思想史や風俗史の研究上の貴重な資料であり、また國語資料としても尊重すべきものであるが、殊に後の文學に豐富な材料を提供した點に於て、國文學史上注意すべき作品である。

『今昔物語集』の文章は平安時代中期の末頃から發達した和漢折衷體である。これより先平安初期の漢文は、やうやく和臭を帶びて來たのであるが、國文が發達するに從つて其の影響を受け、漢文と國文の中間に位する一種の新文體を生じたのであつて、『今昔物語集』の文章の如きは、平安末期に至つて發達した新文體であつたのである。而して其の文章は漢語漢文脈を豐富に使用した簡勁素樸なものであつて、技巧を弄する事なく眞率である所に、和文と異なる別個の味がある。此の文章は鎌倉時代の普通文の源泉となつて居る。さて『今昔物語集』の考證には、岡本保孝の『今昔物語出典考』などがあるが、芳賀博士の『攷證今昔物語集』は本文の校訂と考證とに苦心を重ねられた善本である。又此の書の研究には坂井衡平氏の『今昔物語集の新研究』がある。左に掲げる一節は、『源平盛衰記』にある有名な袈裟御前の話の源となつた傳說であつて、もと支那の『劉向列女傳』節義部や『晉書戴記』第十四苻融傳などにある傳說の系統を引いて居るのである。

長安女代レ夫達レ枕爲レ敵被レ殺語

今昔震旦ノ唐ノ代ニ、長安ニ一人ノ女有ケリ、形美麗ニシテ心正直也。其ノ女ニ夫有リ、其ノ夫ニ敵有リ。其ノ敵此ノ女ノ夫ヲ殺サムガ爲ニ其ノ家ニ來レリ。其ノ時ニ其ノ夫他所ニ行テ、其ノ家ニ无シ。敵見ルニ夫无ケレバ妻ノ父ヲ捕ヘテ縛ル。女父被レ縛レタリト聞テ内ヨリ出タリ。敵女ヲ見テ告テ云ク、我レ汝ガ夫ヲ殺サムガ爲ニ此ニ來レリ、而ルニ汝ガ夫无シ、汝ヂ若シ夫ヲ不レ出ズバ、汝ガ父ヲ殺サムト。女敵ニ答ヘテ云ク、豈ニ夫ノ无キ故ニ父ヲ殺ス事有ラムヤ。然レバ君我ガ言ニ隨テ、後ノ時ニ此ノ家ニ來テ我ガ夫ヲ可レ殺。此ノ寢屋ニハ夫ハ

東枕ニ臥シ、我レハ西枕ニ臥ス也、後ニ來ラム時東枕ニナラム夫ヲ可レ殺ト。敵此ノ事ヲ聞テ父ヲ免シテ去ヌ。其ノ後夫來レリ。妻夫ニ語テ云ク、今夜ハ我レ東枕ニ臥サム、君ハ西枕ニ臥セト云テ臥ヌ。卽チ敵入リ來テ、東枕ナル妻ヲ、此レ夫也ト思テ殺シツ。其ノ時敵キ既ニ妻ヲ殺セリ、夫ハ命ヲ存セリ。敵キ此レヲ見テ痛ミ歎ク事无レ限シ。然レバ此レ妻ノ夫ニ代テ枕ヲ替ヘテ被レ殺ル也ケリト知ヌ。其ノ後敵大キニ此レヲ哀ムデ、永ク怨ノ心ヲ止メテ、始メテ骨肉ノ契ヲ成ケリ。然レバ昔ハ如レ此ク我ガ身ヲ棄テ、夫ノ命ヲ生タル女人有ケリ。此レ極テ難レ有キ事也ゾト、聞ク人皆云ヒケルトナム語リ傳ヘタルトヤ。（今昔物語集卷十）

「今昔物語集」と略ぼ時代を同じうして成つた同類の說話集に、近來發見せられた「打聞集」がある。古典保存會で複製刊行した山口光圓師所藏の「打聞集」がそれである。もと二三帖あつたものの殘卷一帖（表紙には下帖とある）であつて、表紙に「桑門榮源」（傳未詳）と記されて居るのは筆者であらうが、原作者は未詳である。（書寫の年代は崇德天皇の長承三年頃である。）現存する此の殘卷には佛敎に關する印度・支那及び本朝の說話二十七條を收めてゐるのであつて、各條は「昔」の語で始まつて居り、文體用字法なども殆ど「今昔物語集」と同じであるが、稍簡潔である。所載の說話の大部分（二十七條中二十條）は「今昔物語集」と同一のものであるが、仔細に見て行くと必ずしも一致しない所があるから、直接の關係があるか否かは明白でない。併し「宇治拾遺物語」と比較すると、一致する說話は少いけれども、（二十七條の中一致するものが七條ある。）其の內容から語句に至るまで類似する所が多いから、此の間には密接な關係があるであらうと云はれて居る。（古典保存會刊本の橋本進吉氏解題參照）

江談抄

同じく平安時代末期に成つた說話集の類に『江談抄』がある。當代の名儒大江匡房（天永二年歿七十一）が、故事を語り詩文を論じた談話を集錄したもので、筆者は少納言通憲の父藤原實兼である。從來筆者は未詳とせられてゐたのであるが、藤岡作太郎博士並に和田英松博士は、『今鏡』第十の「敷島のうちぎき」の條に「藏人實兼と聞えし人の、匡房の中納言の物語に書ける文にも云々」とあるのに據つて、實兼の筆錄である事を考證せられた。此の書には流布本（群書類從所收）の六卷本の外に、近年發見せられた二種の異本がある。流布本は第一公事・攝關家事・佛神事、第二第三雜事、第四題無し、第五詩事、第六長句となつて居る。第二第三の雜事の中には殊に音樂に關する事を多く記し、第四には詩句の對句の事を主として語り、第五詩事には和漢の詩家の逸事を收め、叉第六長句の後半にも同じ類の事實談を載せて居る。即ち『江談抄』の內容は公事に關する事もあるが、主として和漢の詩人に關する詩話であつて、而も事實談が多いのは『今昔物語集』と異なつて居るが、文體用字法などは略ぼ同じである。

異本江談抄

異本『江談抄』の一は、醍醐寺三寶院所藏の『水言抄』一帖である。水言は江談の二字の偏を取つたので、內題には「江談抄」と記してある。此の一帖は『江談抄』の卷四及び卷五の零本であつて、筆錄者たる、實兼の孫なる、醍醐寺座主勝賢（建久七年寂）の筆になつたものである。而して他の一種は神田喜一郎氏所藏の『江談抄』殘卷一帖であつて、筆者は未詳であるが、書寫の時代は平安時代末期か、鎌倉時代初期の頃であると云はれて居る。此の二種の異本殘卷は、匡房の談話を聞くが儘に筆錄したものの轉寫本であつて、內容は共に流布本の各卷に散在するのであるが、順序は全く異なつて居る。要するに此

の二つの異本は、原本の形を最もよく保存するものであつて、流布本は此等を本とするか、或は實兼筆錄の草稿を本として、後人が整理し且つ分類したものであらう。

唐物語

當時の說話集になほ『唐物語』一卷（續群書類從に收む）がある。作者は詳かでない。王子猷・白樂天・朱買臣・望夫石・西王母・楊貴妃・上陽人・王昭君・潘岳などの如き、支那の有名な史話傳說を二十七話收めたもので、すべて漢文から飜譯してゐる。此等の說話の中には、『濱松中納言物語』に引かれて居るものがあるから、其の頃既に流布してゐたのであらう。文學的價値は乏しいのであるが、漢文を飜譯した點に興味があるのであつて、支那人が詠んだ詩の如きものも和歌に代へてゐる。題號は『大和物語』に對する名であり、形式も亦歌物語に傚つて居る。

篁物語

平安末期に現れた說話文學で現存するものは以上の如きものであるが、此の外になほ歌日記の形式から成る個人の說話集に『篁物語』がある。彰考館及び圖書寮に收藏せられて居る寫本一卷がそれである。此の書を『大和物語』に次いで成つたものと見る說もあるが、其の性質內容文章などから推考する時は、平安末期の初頃に成つたもののやうに思はれるから、此所に述べて置く。一名を「篁日記」又は「小野篁集」と言つて居るのは、多くの和歌を含んで居る爲であるが、內容は實錄の性質を帶びた說話文學である。其の內容は小野篁と異腹の妹との戀愛を語り、又篁が右大臣の三女の婿になつて、頻りに榮達した事を敍して居るのである。要するに過去の著名な人物を追懷する興味から作られたものであつて、文章は伊勢・大和を摸倣して居る。

第七章　後期の漢文學

寛弘期の漢文學

平安朝後期の初め御堂關白の時代は女流文學の黄金時代であつて、男子の文名は寧ろ世に顯れなかつた。併し當時漢詩文の大家には大江匡衡・大江以言・紀齊名・慶滋保胤等があり、又皇族には具平親王があつて、詩文の隆盛は延喜天暦に次ぐと稱せられて居る。

大江匡衡

一條天皇の御代の漢文學の巨擘は大江匡衡（長和元年歿六十一）である。維時の孫で重光の子である。幼少の頃維時に學び、天延年中秀才に補せられ、次いで文章博士となつた。一條天皇に進講し、また勅を奉じて『白氏文集』に訓點を加へた事があるが、なほ東宮學士となつて敦康親王の侍讀ともなつた。和漢の學を兼ね、詩と和歌を善くし、歌集に『大江匡衡朝臣集』一卷（續群書類從に收む）があり、又詩集に『江吏部集』三卷（群書類從所收）が傳はつて居る。吏部は匡衡の官式部大輔の唐名である。文章は『本朝文粹』『朝野群載』等に多く載錄せられて居る。

大江以言

大江以言（寛弘七年歿五十六）は維時の甥なる大隅守仲宣の子である。藤原篤茂に學び、長保寛弘の頃文章博士となり、式部權大輔を兼ね、文名は匡衡・齊名等と匹敵してゐた。詩文集は傳はつてゐないが、作品は當代の詩文の撰集中に散見する。紀齊名（長保元年歿三十四）は父祖を詳かにしない。本姓は田口氏であるが、後に紀氏を名乘つた。橘正通に學び、大內記に任ぜられ、越中權守式部少輔を兼ねた。詩文に秀で『齊名集』（一卷）があつたが後世散逸した。慶滋保胤（長德三年歿）は陰陽曆數の家な

る賀茂忠行の子であるが、家學を棄て姓を改めて慶滋と稱し、菅原文時の門に學んだ。大内記に任ぜられ近江掾を兼ねたが、晩年には佛教に歸依して名を寂心と改めた。六條の居に池亭を造つて「池亭記」を書き、又『日本往生極樂記』群書類從所收を著した。『慶保胤集』二卷があつたが今傳はつてゐない。具平親王寛弘六年薨四十六は村上天皇の第七皇子で中務卿であつた。諸藝に達して居られたが、殊に詩文に長じ、兼明親王(前中書王)と並べ稱せられて後中書王と呼ばれた。以上略傳を記した諸家の外に、高階積善・源爲憲・菅原輔正・藤原有國等も亦詩文に長じてゐたが、今は其の名を擧げるに止めて置く。

長元永承期の漢文學　藤原明衡

後一條・後朱雀・後冷泉三天皇の頃になると、漢文學は稍衰へたのであるが、獨り藤原明衡あきひら歿年未詳があつて一代の碩學と稱せられた。明衡は式家の人で山城守敦信の子である。和漢の學を兼ね、又佛典にも通じ、詩文と和歌に秀でてゐた。一條天皇から後冷泉天皇に至るまで五朝に歴仕し、晩年には大學頭右京大夫に任ぜられ、文章博士を兼ね、又後冷泉天皇の康平年中には、東宮學士ともなつて一世に重んぜられた。其の編著に『本朝文粹』を始め『雲州往來』『本朝秀句』『新猿樂記』等があるが、『本朝秀句』(五卷)は湮滅して傳はらない。

本朝文粹

『本朝文粹』(十四卷)は支那の『文選』に比すべきもので、嵯峨天皇の弘仁から後一條天皇の長元に至るまで、二百餘年間の詩文(主として文章)を類別的に撰集したものである。書名は宋の姚鉉の『唐文粹』から取つて居るが、其の編纂法は『文選』に倣つたのである。作者は天皇皇子以下諸家六十七人に及び、平安時代の漢文學の精華は殆ど此の書に集まつて居る。次に『雲州往來』(二卷)群書類從所收は一名を「雲州消息」「明衡往來」「明衡消息」などと呼ばれて居る。雲州は著

者が出雲守であつたのに據るのである。正月から十二月に至るまでの、消息や上啓などを集めたもので、當時手簡の軌範として廣く行はれたものであるが、其の内容には時代の世態風習などを窺ふべき資料に富んで居る。此の書は所謂往來物の祖であつて、是より何々往來と名づけた同類の書が次々に現れた。(守覺法親王の著と傳へられる『釋氏往來』、著者未詳の『十二月往來』、後京極良經作と傳へられる『新十二月往來』、玄慧の作といはれる『庭訓往來』、著者未詳の『異制庭訓往來』、一條兼良の著と言はれる『尺素往來』などは其の著しいものであるが、就中『庭訓往來』以下の三部は最も著名である。)次に『新猿樂記』(群書類従所收)は猿樂見物の一家族に假託して世相を記したもので、文體は『雲州往來』に似て居る。其の内容は西の京に住む右衞門尉なる者の三人の妻と、其の間に生れた娘十六人男八九人が、各容貌性格を異にし、樣々な職業に從事して、それぞれ器量藝能を發揮した有樣を寫して居るのであつて、當時の男女の風俗や生活狀態を知るべき好資料である。

院政時代の漢文學

院政時代になると、漢文學は稍活氣を帶び、平安時代の詩文に最後の光彩を添へた。當時文名の高かつたのは大江匡房・藤原敦基・藤原敦光・藤原季綱・清原賴業・藤原通憲(入道信西)などである。殊に

大江匡房

大江匡房(天永二年歿七十一)は匡衡の曾孫で、(成衡の子)博學宏才にして古今の典故に通じ、詩歌に巧みであつて、名聲が最も高かつた。四歲の頃から書を讀み、十一歲で詩を作り、當時神童と呼ばれたが、後に後三條天皇の寵遇を蒙り、權中納言太宰權帥に昇り、正二位大藏卿にまで進んだ。世に江納言・江帥・江都督・江大府卿などと呼ばれた。其の詩文は『續本朝文粹』『朝野群載』『本朝無題詩』などに多く收

載せられて居る。匡房は和歌にも長じてゐたのであつて、家集の『江帥集』の外に、『後拾遺集』以下の勅撰集や歌合に多く散見する。其の著書は極めて多いが、中でも最も名高いのは、關白師通の命に依つて書いた『江家次第』である。四方拜以下宮中の年中行事を始めとして、朝儀政務等に關する一切の公事を記したもので、もと二十一卷あつたが、今は卷十六と卷二十一の二卷を闕いて居る。其の他匡房の一代の經歷を記したものに『暮年記』一卷があり、また當時の世相を窺ふべき資料には『遊女記』『傀儡子記』『狐媚記』（以上各一卷群書類從所收）などがある。匡房の詩話文話等を筆錄した『江談抄』に就いては既に述べた。

藤原敦光（久安元年歿八十三）は明衡の子で、兄の敦基と共に文章博士となり、父子共に詩文を以て一世に聞えた。『本朝帝紀』『續本朝秀句』（三卷）などの編著があつたが、前者は後世散逸した。其の詩は『本朝無題詩』に六十餘首載つて居る。文才に於ては寧ろ匡房の上にあつた。藤原通憲（信西）は詩文には長じてゐなかつたが、學者として注意すべき人である。季綱の孫實兼の子で、少納言に昇り、博學多才を以て聞えてゐた。後白河上皇の御信任を得て權勢を振つたが、平治の亂に大和の山中に匿れ、遂に自殺した事は周知の事である。通憲は政務の傍『法曹類林』二百三十卷及び『本朝世記』三十卷を著したが、共に其の大部分を散逸して、今は僅かに類林の零本三卷と世記の殘篇一卷を存して居る。

後期の漢文學の傾向

平安朝後期の詩文の大家に就いては略ぼ述べ終つたから、今此の時代の漢文學の傾向について略述しよう。一條天皇は學問文藝を奬勵し給うたから、其の御治世には詩文の大家が相踵いで現れたので

詩文集

あるが、一般に字句の彫琢にのみ苦心して、内容を顧みなかつたから、實質に於ては延喜天暦に比して遙かに低下したのである。當時の漢文學者は又時代の傾向に支配せられて一般に佛教を尊信し、佛法禮讚の詩文を作る者が多かつた。慶滋保胤が嘗て「世有勸學會、又有極樂會、講經之後、以詩而讚佛、今此供花之會、何無歎佛之文哉」本朝文粹卷十と言つたのは、當時の風潮を語るものであるが、なほ一般に呪願・願文・諷誦文・縁起の如き、佛教關係の文筆に主力を注いだ事は、『本朝文粹』以下の詩文集を見ても明かである。平安時代末期の思想界を風靡したのは、空也源信等の鼓吹によつて盛になつた淨土思想であるが、殊に源信が寛和元年に著作した『往生要集』(三卷)は最も廣く行はれた。此の書は穢土の厭離すべく淨土の欣求すべき所以を說いたものであるが、當時は又極樂往生の素懷を遂げたと稱せられる人々を羨望する者が多かつたのであつて、保胤がそれ等の話を集めて『日本往生極樂記』を著して以來、同類の書が續々現れた。匡房の『續本朝往生傳』、三善爲康の『拾遺往生傳』、及び『後拾遺往生傳』などは其の著しいものである。

最後に平安時代後期に成つた詩文集に就いて述べて置く。當時の詩文集として名高いのは、先に擧げた『本朝文粹』の外に、『續本朝文粹』『朝野群載』があり、又詩集に『扶桑集』『本朝麗藻』『本朝無題詩』などがある。『續本朝文粹』は『本朝文粹』以後の文を類別的に輯めたもので、藤原季綱の撰といはれて居るが、岡田正之博士は之を疑問として居られる。『本朝書籍目録』には十三卷とあるが、『群書類從』に收められてゐるのは十卷本である。『朝野群載』は永久三年に三善爲業が撰んだ文集であつて、

もと三十巻あつたのであるが、散逸して今は二十一巻を存して居る。花山法皇・前中書王・源順・大江匡衡・同匡房・同佐國・同以言・源經信・菅原輔正等の文章及び編者の作を收載して居る。『扶桑集』は紀齊名の撰であると言はれて居るが詳かでない。『江談抄』に長德年中の撰として居る。もと十二卷であつたが、散逸して今は只卷七と卷九の殘缺二部を存するのみである。群書類従所收『本朝通鑑』に據れば、延喜頃から一條天皇頃までの詩文を集めたものであるが、大部分を失つたのは惜しい事である。『本朝麗藻』は『江談抄』に高階積善の撰として居る。久保得二博士は、一條天皇の寛弘五年から八年に至る四年間に成つたものである事を考證せられた。村上天皇から一條天皇に至る四五十年間の詩を類別的に編んで、上下二卷としたのであるが、今は上卷の首尾を缺いて居る。最後の『本朝無題詩』は、一條天皇から鳥羽崇德兩帝の頃までの、百餘年間の詩家三十餘人の作七百餘種を三十六部門に類別したものである。撰者未詳であるが、久保博士は集中に藤原忠通の詩の大半(九十一首)を收錄して居る點から考へて、忠通の左右の者が主命を承けて編んだのであらうと言つて居られる。題名に就いて『本朝一人一首』には、編纂が成つて未だ其の名を題しなかつたのを、後人が姑く無題詩と名づけたのであらうと言つて居るが、無題は古人の句を題として詠ずる句題に對して、それ以外の詩を廣く指す語であるから、恐らく編者がかく命名したのであらう。此の集は平安時代に成つた詩集の最後であつて、其の後鎌倉時代になつて、五山の詩僧の集が現れるまでは、詩文集を見なかつた。

第四篇　鎌倉時代

第一章　時代の概觀

鎌倉室町時代

鎌倉時代は次の室町時代と合せて鎌倉室町時代といひ、又近古時代とも呼ばれて居る。鎌倉室町時代は源頼朝の幕府創業に始まり、北條氏執權時代・南北朝時代・室町幕府時代（其の後半凡そ一百年間は戰國時代）を經て、安土桃山時代（一に織田豐臣時代）に至るまで、前後四百二十年許りに亙つて居る。此の時代は、貴族文化の平安時代と平民文化の江戸時代との中間に横たはる一大過渡期であつて、武士並に僧侶の活躍した時代である。而して此の四百二十餘年の間は政治上の混亂時代であり、戰亂が續いた時代であつて、學問文藝は萎靡して振はなかつたから世に暗黑時代といつて居る。併し公卿に代つて新たに興つた武家は、從來閑却せられてゐた地方の行政に意を用ひ、又僧侶と共に新文化の傳播に努力したから、地方の文化は漸く發達の途に就く事が出來たのである。從つて當時の文化は、たとひ前代の如き光輝を放たなかつたとしても、我が國民が始めて國民的自覺のもとに活動を開始した點に於て、極めて注意すべき價値を有つて居るのである。鎌倉室町時代は建武中興を堺として、二つの時代に分つ事が出來る。鎌倉幕府の創設から北條氏の滅亡に至るまでの凡そ百五十年間は、卽ち鎌倉時代であつて、南北朝時代

以後の凡そ二百七十年間は。廣義に於ける室町時代である。

鎌倉時代は政令が鎌倉幕府から出た時代であつて、新氣運は鎌倉を中心地として、關東に起つたのであるけれども、京都に於ける公卿の傳統的文化は、決して衰亡に歸したのでなく、公武の兩文化は對立して相互に影響を及ぼし、遂に末期に至つて調和したのである。

武家社會の生活

今鎌倉を中心とする武家社會を見ると、彼等は政治の實權を握ると共に、過去の貴族生活が殘した積弊を一掃する爲に、思ひ切つた改革を斷行したのである。即ち繁縟にして實際に迂遠な律令を棄て、簡單明瞭にして實行し易い武家式目を定め、風流奢侈の生活を退けて、簡易質素を旨とし、情趣尊重の風潮を排して意志を重んじ、ひたすら武士的精神の養成に努力したのである。試みに武家の生活の一端を見ると、京都に於て發達した寢殿造は廢れて、板葺に遣戸明障子を塡めた簡素な武家造となり、形式に流れて實用に不便な束帶直衣は、動作に便利な直垂水干となり、詩歌管絃の如き銷閑の具は顧みられずして、犬追物・笠懸・流鏑馬・卷狩の如き、實用主義の剛健な遊技が流行した。かくて衣食住を始めとして、一般世相は面目を一新したのであるが、其の革新の原動力となつたものは、地方の武士の間に傳統的に保有せられてゐた、國民固有の尙武の氣象である。元來尙武の精神は上古以來連綿として國民の間に傳はつてゐたのであつて、平安時代には地方の武士社會に潛んでゐたが、其の末期に至つて之を發揮する機會が多くなるに從つて漸く發達に向ひ、主從間は恩義によつて堅く結び

貴族文化の移植

付けられ、戰場に臨んでは一身を節義の爲に犧牲とする、忠勇の美風が養成せられたのである。其の後鎌倉時代になつて、幕府は武技の錬磨を奬勵し、質實剛健の氣風を鼓吹すると共に、敬神崇祖の精神を涵養したから、武士的精神はいよいよ向上發達したのであつて、上位にある者の風は自ら下を化して、一般國民も亦武勇を尙び、質素儉約を守るやうになつた。

鎌倉幕府の設立は政治史上の一大改革であつたばかりでなく、武士の勃興に伴なふ新鮮な意氣によつて、各方面に刷新改良が行はれたのである。然るに關東武士は兵馬によつて政權を獲得した後、更に文化的施設に著手するに當つて、自己の知識修養の極めて貧弱なことを悟り、新たに京都の貴族的文化を攝取する必要に迫られた。開幕の當時賴朝は、大江廣元・中原親能・三善康信の如き明法家を招いて政治の顧問として以來、學識ある公家にして幕府に仕官する者が多く、それ等の人々によつて京都の文化は絕えず移植せられたのであるが、それと共に柔弱な遊樂の風も亦移されたのである。かの賴家實朝等が管絃蹴鞠の遊に耽り、和歌繪合の會を催して、政務を怠つたといはれて居るが如きは、其の著しい例である。かくて幕府に於ては、武家本來の面目を維持しようとする硬派と、京都風を取入れて文化の向上を圖らうとする軟派とがあつて、互に軋轢してゐたのであるが、大勢は軟派に傾いて、當代の末期には鎌倉武士は全く京都風の摸倣者となつたのである。從つて當代の社會の表面に立つて飛躍したのは武士であつたけれども、學問藝術の如き文化方面に於て、常に範を垂れたのは公家であつて、武家特有の文化ともいふべきものは、此の時代を終るまで遂に完成するに至らなかつたの

である。

公家の生活

翻つて京都の公家を見ると、政權が一たび幕府に移つて以來、廷臣の間には王政の復活を夢見て、徐ろに畫策する者があつたが、之に期待を持たなかつた人々は、關東に下つて幕府に仕官し、其の他の氣力なき一般の貴紳は、進んで新境地を拓く事もなく、徒らに過去の幻影を追うて無意義な生活を送つてゐた。併し王政復古の希望は、絶えず廟堂貴紳の腦裏に流れてゐたのであつて、討幕の擧は承久の變に一敗地に塗れたけれども、末期に至つて遂に成功して建武中興を見たのである。此の間一般の公卿は權力と財力を失ひ、學問文藝からも離れて、其の生活は悲慘を極めたのであるけれども、其の精神生活の基調となつた現在の世相に對する不滿と、王朝の盛時を回顧し憧憬する念とは、有職故實の尊重となり、古典文學の勘校註釋の事業となつたのであつて、假令それは消極的であつたとしても、公家の學問文藝が京都に於て維持せられた事は、次に述べる佛教界の活躍と共に、文化史上注意すべき事である。

新佛教の弘通

以上述べた所は、公武兩文化對立の世相の概要であるが、當時の思想界を支配したものは佛教である。而して佛教も亦新舊兩派の對立を見たのである。卽ち天台・眞言・法相等の如き舊宗派は、京都を中心地として、宗閥によつて專ら教權の擁護に努めたのに對して、新たに興つた禪宗及び淨土門の諸宗は、新時代の内部的欲求を滿たすべき平易な教義を說いて、武士平民の階級に渴仰せられたのである。社會百般の事に亙つて國民更生の氣運が勃興した當時に、宗教界空前の改革が行はれたのは當然

であつて、新興宗派は悉く開幕當初の僅か六七十年間に引續き開立せられて、上下一般の人心を教化したのである。

禪宗

禪宗の教義は、遠く孝德天皇の御代に入唐僧道昭が法相と共に之を傳へ、其の後最澄・圓仁・圓珍等も之を傳へたのであるけれども、未だ獨立した一宗派となるには至らなかつた。鎌倉時代の初め宗教思想の動搖する時に當つて、新たに宋から臨濟派を傳へたのは榮西（えいさい）（建保三年寂七十五）であつて、立宗を宣したのは後鳥羽天皇の建久二年である。次いで其の高弟道元（建長五年寂五十四）が更に曹洞を傳へて以來、禪宗は漸く隆盛になり、鎌倉を始め京都及び諸國に弘通した。禪宗は不立文字・教化別傳と稱して、學問修養の功によらずして、直ちに自己反省によつて悟を開かしめようとする簡易な宗派であるから、武士本來の精神と容易に調和して、武士道の發達に著しい影響を與へたのである。かくて禪宗は、從來の舊佛教が淨土の莊嚴彌陀の尊容に憧憬する空想を打破して、人々をして自己を省察せしめ、自己の偉大なる力を認識させたばかりでなく、日常生活にも影響を及ぼして、衣食住の面目を一新し、又禪味を生命とする美術工藝や茶道の發達を促して、一般民衆の趣味生活にも多大の感化を與へた。

新宗派の開立

禪宗は主として公武に歸依せられ、京都鎌倉を中心に榮えたのであるが、淨土宗やそれから分化した新宗派は、寧ろ廣く民間に信仰せられた。平安末期以來一般民衆は、濁惡の世を見盡して現世に望を絶ち、ひたすら來世の安樂を希ふやうになつたのであるが、此の時救民濟世の一大使命を負うた高僧が續々蹶起して、新時代に適した新宗派を開いたのは當然である。即ち高倉天皇の御代には、法然

上人が淨土宗を創めて、念佛の敎を弘めたが、其の高弟親鸞上人(弘長二年寂九十)は新たに一向宗(淨土眞宗)なる一派を立てて、專ら他力往生を說き、且つ僧侶の肉食妻帶を許して、宗敎と實生活との接觸を圖つた。其の後日蓮上人(弘安五年寂六十一)は淨土宗を始め既成宗派に反對して法華宗を創め、法華一乘の妙法に歸すべき事を唱へ、又一遍上人(正應二年寂五十一)は淨土門から出て特に阿彌陀經を尊重し、自行他化を本旨とする時宗を開き、諸國を遊行して念佛を勸めた。此等の新宗派は其の宗旨を異にして居るけれども、舊佛敎が經典や儀式を重んじて、實生活に迂遠であつたのに反して、直ちに心底の琴線に觸れようとした點に於ては共通するのであつて、其の簡易卑近な敎理は、高僧の熱烈な傳道精神と相俟つて、遍く上下の人心に浸染したのである。

儒學

佛敎と共に思想界に著しい影響を與へたのは儒敎である。是より先平安末期に於て、漢文學は年々凋落の運命を辿つたのであるが、安元三年四月の京都の大火に、當時僅かに殘骸を留めてゐた大學寮を始め、勸學院や奬學院等が燒失して以來、公家の敎育機關が絕えた爲に益衰頽を來したのである。かくて鎌倉時代には朝紳の間に僅かに家學を維持する者があつた以外には、一代を代表すべき學者もなく、一般貴族は全く無學となつた。京都に於ける漢學の退廢に反して、鎌倉武士の間には、京都から下つて幕府に仕へた諸博士を師として、漢學を講習する事が流行し、やがて文武の稽古は將軍たる者の必須の敎養と考へられるやうになつた。當時鎌倉の執權の中にも或は學者を聘して講筵を開き、

金澤文庫

或は和漢の書を集めて學問の奬勵に力める者が少くなかつた。殊に北條時政三代の孫なる實泰の子實

時（建治二年歿五十三）は深く學問を好み、武藏國久良岐郡金澤鄉（六浦莊）の別業に、廣く內外の典籍を蒐集して子弟の修學に供へ、遂に文庫を設けて子孫の學問所とした。有名な金澤文庫が是である。其の後實時の子顯時及び孫の貞顯も亦父祖の志を嗣いで、頻りに古書を集めたから、金澤文庫は鎌倉時代に於ける一書院の觀を呈したのであるが、其の後室町時代戰亂の世になつて、天下の典籍が殆ど散逸した時も、此の文庫は上杉憲實が興した足利學校と共に、文教の維持に大なる貢獻をしたのである。當代の漢學が主として武家の間に維持せられた事は以上述べた通りであるが、一方に又入宋の禪僧が新たに宋學を傳へて、儒學の發達を促した事も亦注意すべき事である。從來貴族の間に行はれた漢學は歷史詩文の學を主とし、經學はなほ訓詁の學に止つてゐたのであるが、當時學僧が北宋の性理學、即ち朱子學を傳へて以來、儒教の倫理學的方面の講究が始まつた。而して朱子學は武士道の發達に著しい影響を及ぼし、又一般の道德思想の向上に尠からぬ感化を及ぼしたのである。

宋學

鎌倉時代の國文學

　最後に鎌倉時代の國文學の傾向を見ると、京と鎌倉、公卿と武士が相對立してゐた世相は、即ち文學の上にも認められるのであつて、新舊兩樣の文學が明白に對立してゐる。京都の公家は政治上の實務に離れて以來閑散な身となつたけれども、意氣全く銷沈して因循固陋に陷つたから、文學も亦活氣を失つて、徒らに過去を摸倣し、傳統を尊重して、創作的氣力は枯渇してしまつた。殊に小說は最も不振であつて、只平安朝の物語の糟粕を嘗め、形骸を踏襲するに止まつて、何等の新味を見なかつた。而して物語類の衰退した結果として、舊聞異事の輯錄が行はれて種々の說話集が現れると共に、

新興文學

一方では前代の盛時を憧憬する風潮に支配せられて、古典の註釋批評の流行を招來し、又假託的僞書の續出を見るに至つた。かくて公家社會の散文學は沈滯の極に達したのであるが、さすがに和歌は當代を通じて隆盛であつて、『新古今集』以下十四度の勅撰集が撰ばれた。尤も實際の隆盛は初期の四十年間許りであつて、承久以後には歌道の師範家を生じて、子孫相續いで門閥を爭ひ、形式の末に拘泥する無意義な法式は、一般の歌風を陳腐平凡に導いたのであつて、和歌も亦年を逐うて墮落したのである。公卿の文化が尙古趣味に囚はれて、振はなかつたのに反して、鎌倉武士は潑剌たる意氣を以つて、新文化の建設に努めたのであるが、彼等は素より文筆の心得がなかつたから、文教の方面は專ら公家の力に俟つたのである。從つて武士の文學としては、三代將軍實朝を始め、一部の上流武門の間に和歌が行はれた位のものであつて、其の他には見るべきものがなかつた。卽ち當代の新興文學は、主として僧侶又は佛教の渇仰者の間から現れたのであつて、『保元物語』『平治物語』『平家物語』『源平盛衰記』等の戰記物語、長明の隨筆『方丈記』、及び前代の『今昔物語集』の系統を引いた『宇治拾遺物語』『十訓抄』『古今著聞集』の如き說話文學などは、其の代表的なるものである。此等の作品は、情趣本位であり刹那主義であつた過去の文學と異なつて、現世主義を排斥して永遠の生命に生きようとする、眞摯な精神が漲つて居るのであるが、舊文學の餘勢はなほ殘存して、或は王朝趣味に對する强い憧憬があり、或は感情と意志の衝突に對する苦悶があり、又穢土を厭離し淨土を欣求しながら、なほ現實生活に對する愛著の絆の斷ち難い惱みが滿ちて居るのである。

新興文學は行詰つた王朝文學から新たに一生面を拓いたのであるが、其の文辭は又我が文章史上に一時期を劃したのである。殊に戰記物語は、其の內容が新舊兩思想の錯綜と佛教思想との混入によつて、獨得の美を構成して居るのであるが、文章に於ても優麗な和文に剛健な漢文調を交へて、遒勁簡潔の中に優雅な趣があり、用語も雅言漢語佛語俗語を自由に混用して、內容にふさはしい形式の美を發揮して居る。戰記物語の文章はなほ古典趣味から蟬脫してゐない所に妙味があるのであるが、當時日蓮や親鸞などが記した法語や書翰の文體は、從來の修辭的法格に囚はれる事なく、一に情熱と思想の力とによつて草したものであつて、時文を最もよく代表して居る。其の他僧侶の手に成つた佛教說話集や高僧傳などの中にも、文章史上注意すべきものが尠くない。

第二章　和歌の變遷

一　新古今時代

鎌倉時代初期の四十餘年間は、平安時代末期に引續いて、和歌が隆盛を極めた時である。此の時代は『新古今集』を以つて代表させる事が出來るから、一般に新古今時代と呼ばれて居る。新古今時代には後鳥羽・土御門・順德三帝を始め奉り、後京極良經・藤原定家・藤原家隆以下、幾多の傑出した男女の歌人が一時に輩出した。殊に後鳥羽院は稀に見る和歌の叡才を抱かせられ、且つ斯道の奬勵に力め給

うたから、當代の和歌は後鳥羽院を中心として隆昌を極めたのである。今『新古今集』に就いて述べる前に、先づそれ以前に行はれた百首和歌や歌合の盛況を略述しようと思ふ。

左大將家百首歌合

第一に擧ぐべきは建久四年の秋に、後京極良經の家で催された「左大將家百首歌合」即ち「六百番歌合」（續國歌大觀に收む）である。これは當代の名家十二人が百首づつの歌を合せたのであつて、作者は左方は良經・季經・兼宗・有家・定家及び顯昭、右方は家房・經家・隆信・家隆・信定及び寂蓮であり、判者は歌壇の元老俊成で、時に年八十の高齢であつた。平安時代末期以來、勅撰集に對して辯難攻撃を加へることが盛に行はれたのであるが、此の歌合の俊成の判に對しては、顯昭の有名な「六百番陳狀」があつた。顯昭は當代歌道の代表者たる定家の好敵手であつたが、此の陳狀は彼の歌論を最もよく示したものとして、古來重んぜられて居る。（『群書類從』に收められて居る『顯昭陳狀』は其の前半であつて、全體は宮內省圖書寮所藏の古寫本によつて窺はれる。）「六百番歌合」に次いで注意すべきは正治二年に行

後鳥羽院御百首

はれた二度の「後鳥羽院御百首歌」である。『續群書類從』の『正治二年百首和歌』は初度のであつて、歌人は後鳥羽院・惟明親王・守覺法親王・式子內親王以下、良經・通親・俊成・定家・家隆・慈圓・寂蓮等男女二十三人である。此の百首は前代に行はれた「堀河百首」「久安百首」と共に著名なものであつて、其の作歌で『新古今集』に入れられたものが少くない。次に二度目のは作者十一人（後鳥羽院・範光・雅經・具親・隆實（後改信實）・家長・長明・慈圓・季保・宮內卿・越前）であつて、『群書類從』所收の『正治二年第二度百首和歌』がそれである。正治二年には此の外になほ『三百六十番歌合』（續群書類從に收む）以下『御室撰歌合』『仙洞十

人歌合」共に群書類従に收む などが催された。次いで翌年建仁元年には「老若五十首歌合」「新宮撰歌合」「影供歌合」何れも群書類従に收む などの催があつたが、殊に名高いのは、此の年六月に二條殿で行はれた「千五百番歌合」續國歌大觀に收む である。此の歌合の作者は、左方は後鳥羽院を始め奉り、良經・慈圓・有家・具親・顯昭・宮內卿・二條院讃岐・小侍從等の十五人、右方は、惟明親王・通親・釋阿(俊成)・定家・通具・家隆・雅經・寂蓮・家長・俊成女・宜秋門院丹後・越前等の十五人、合せて三十人であつて、各百首の歌を奉つて千五百番合せたのである。此の歌合の判者は後鳥羽院を始め奉り、良經・釋阿・定家・顯昭・慈圓等十人であつて、判者も歌人も共に一代の巨匠揃ひであるばかりでなく、完成するまでに一年半を要した空前絶後の大規模の歌合である。此の歌合の作歌は凡そ八十首許りが「新古今集」に採られて居り、且つ其の歌風は大體に於て、新古今風によつて統一せられて居るのであるから、「新古今集」に次いで見るべき、當代の代表的歌合と言ふべきである。

千五百番歌合

「新古今集」撰進の院宣が下る以前に催せられた、百首和歌及び歌合は右の通りであるが、「千五百番歌合」が行はれた前月卽ち七月二十七日には、後鳥羽院は二條殿に和歌所を再興せられて、源家長を開闔(かいかう)とし、良經・通親・通具・慈圓・釋阿・有家・定家・家隆・雅經・具親・寂蓮の十一人の寄人を定められた。和歌所は既に村上天皇の御代に梨壺に設置せられたのであるが、「拾遺集」以後の勅撰集は撰者一人によつて撰ばれたから、之を置く必要がなかつた。然るに後鳥羽院が之を再興せられたのは、主として「新古今集」を撰定せしめられる爲であつたのである。卽ち同年十一月三日には、通具・有家・定家・家

新古今集の撰定

隆・雅經・寂蓮の六人に、上古以來の勝れた歌を選んで奉るべき院宣が下つた。これが『新古今集』撰進の事業の初めである。然し寂蓮は翌建仁二年七月に示寂したから、主として撰集に與つたのは五人である。尤も其の他の寄人も撰集に干與した事は言ふまでもない。かくて五人がそれぞれ選歌を奉つたのは、建仁三年四月の頃であるが、後鳥羽院は其の選歌に御親ら合點し取捨を加へられた後、更に撰者等に命じて部類せしめられたのであつて、一先づ二十卷の成立を見たのは、元久二年三月二十六日である。名づけて『新古今和歌集』といふ。眞名序は藤原親經の作であり、假名序は良經の作である。撰集が成つて奏覽した二十六日の夜には竟宴が行はれた。現存する『新古今竟宴倭歌』（群書類從所收）は此の時の御製應製を集めたものである。此の竟宴は從來行はれた日本紀竟宴や史記竟宴の先蹤に倣つて、勅撰集の後に行はしめられた最初である。

切捨切繼

『新古今集』の成立は今述べたやうに、元久二年三月二十六日であるが、實際は其の後數年の間に亙つて頻りに切繼（取捨改訂）が行はれた事は、定家の日記の『明月記』の記事によつて察せられる。而して切繼が行はれた最後の年月として現在知られて居るのは、承元四年九月であるから、（圖書寮所藏烏丸本、佐々木信綱博士所藏甘露寺親長自筆本などの附記に見えて居る。）此の集が現在見るやうな形になつたのは、元久二年から更に四年の後である。從つて『新古今集』には種々の異本があつて、歌數にも出入があるのであるが、異本中で最も注意すべきものは、其の後後鳥羽院が隱岐島に遷幸せられて、更におよそ三百首を切捨てて千六百首許りを精撰し給うた『隱岐本新古今和歌集』である。現存す

る隱岐本は、『新古今集』に後鳥羽院が精撰し給うた歌を書き入れたものであつて、院の御合點があるばかりでなく、各歌の頭には撰出者の名が記入してあり、又流布本に除かれてゐる作歌をも存して居るのであるから、此の勅撰集の成立の經過を窺ふべき貴重な資料である。

新古今和謌集巻第一

春哥上

はるたつこゝろをよみ侍ける　七十九首　攝政太政大臣

二定　三隆　四雅

みよしのは山もかすみてしら雪のふりにしさとに春はきにけり

はるのはじめの哥　三十三首　太上天皇

ほのぼのと春こそそらにきにけらしあまのかく山かすみたなびく

隱岐本新古今集（圖書寮藏烏丸本）

隱岐本の寫本には宮内省圖書寮所藏の合點本・烏丸本・永祿本の三本を始め、柳瀬福市氏藏本などがある。圖版に示したのは、烏丸光廣六世の孫なる光榮が、其の家に傳來した古本を書寫した所謂烏丸本であつて、宮内省の許可を得て撮影掲載したのである。柳瀬本を底本とし、其の他の寫本によつて校訂した活字本には、三矢・折口・武田三氏の手によつて刊行せられた『隱岐本新古今和歌集』一卷がある。

撰定の方針

『新古今集』は所謂『八代集』の最後を飾る最大の勅撰集であつて、二十卷より成り、短歌凡そ千九百八十首を收めて居る。假名眞名兩樣の序を首尾に置き、部類も整然とした集である。『萬葉集』の中の歌は六七十首採つて居るが、『古今集』以後の勅撰集中のものは採らない方針であつた。從つて收められた歌は、古を輕くし現代を重んじてゐるのであつて、當代歌人の主なるものを流布本による歌數の順位で擧げて見れば、西行の九十四首を筆頭に、慈圓九十一首、良經七十九首、俊成七十三首、式子内親王四十九首、定家四十七首、家隆四十二首、寂蓮三十五首、後鳥羽院三十五首などである。而して古人の中で歌數の多いのは貫之の三十二首、和泉式部の二十五首、人麻呂の二十三首などである。かくて現代の歌を尊重したのは『古今集』と同樣であつて、撰者が大なる自信を以て事に當つた事を示して居る。

特質

『新古今集』の歌風は大體に於て平安時代末期の傾向、殊に『千載集』の跡を承けて、これを大成したものと言へるのである。卽ち思想に於ては、大體に於て『古今集』以來の範圍を出てゐないけれども、過去の和歌に歌はれたあらゆる趣味感情を綜合し統一すると共に、これを洗錬せられた言葉と、清新な技巧で表現した所に此の集の特色がある。試みに敍景を見ても、『後拾遺集』以來漸く多くなつた客觀的描寫は益巧妙になつて、一般に綜合的となり、繪畫的となつて居り、又屢萬葉を模範にして、雄大な景趣を新しい感情で歌つて居る。又平安末期の特徵であつた幽玄味や情景融合の境地も、之に哀愁感慨の情や欣求淨土の宗教思想などを混へて、深みを加へて居るのであつて、殆ど情趣の極限に達

した感がある。而して想念を複雜にし感情を深める手段としては、本歌取が流行したのである。元來本歌取は古人の作の語句又は意義を一部に取入れて、內容の擴充を圖る所に興味があるのであるが、此の時代には本歌の聯想を借りて、別箇の淸新な詩境を創造した作歌が極めて多い。次に注意すべき事は思想を複雜にし、情趣を豐富にする爲には、格調や技巧に多大の苦心を拂つて居る事である。卽ち格調の特徴としては、初句切・二句切・三句切・四句切などによつて、一首を二三に切斷して居る事、動詞やてにをはの如き說明語を出來る限り省いて、具象的若しくは感覺的な名詞を多く取入れて居る事、結句を體言止としたり、倒置法の如き勁拔な表現を用ひて居る事などを舉げ得るのであるが、此等はまた一首の聲調を或は雄健莊重にし、或は流麗明快にする上に與つて力があるのである。更に修辭を見ると、或は警拔な譬喩・擬人を用ひ、或は巧緻な序詞・緣語・懸詞などを用ひて、表現を助け含蓄を深めて居るのであつて、洗鍊せられた技巧は語句の彫琢と相俟つて、新古今調の重要な要素となつて居るのである。『新古今集』に於て發揮せられた特徴は、大體に於て右に述べたやうな點にあるのであるが、此等の半面には又種々の缺陷がある。例へば幽玄なる情趣を求めた結果、却つて實感實情に遠ざかつて空想に流れ虛僞となつた事、情念を複雜にし表現を簡潔にした弊として、感情の統一を失ひ、或は意義の晦澁な作となつた事、修辭の巧緻を求めたものは、往々にして纖巧の弊に陷つて居る事などであつて、此等は新古今風に伴なふ著しい缺點である。

新古今時代の代表的歌人は藤原定家である。定家は俊成の子で、二條天皇の應保二年に生れ、天福

元年に出家して明靜といひ、四條天皇の仁治二年に八十歲の高齡で卒した。其の日記の『明月記』は、治承四年（十九歲）に始まつて嘉禎元年（七十四歲）に及んで居る。定家の家庭生活及び社會萬般の事を細大洩らさず記して居るから、彼の生涯並に世相を研究するには最も便利な資料である。定家の一生は、大體和歌を以て終始して居るのであつて、幼年から六十歲頃までは、專ら作歌と歌論の方面に活躍し、晩年は主として古典研究に沒頭したのである。而して歌人としての生涯を更に詳しく見ると、定家は九條兼實及び其の子良經に仕へてゐた關係から、九條家の政治上の權力が振はなかつた頃は、其の社會的地位も自ら沈滯したのであつて、三十八歲の頃にはなほ從四位上安藝權介であつた。かくて四十歲以前は未だ歌人としての眞價も認められなかつたのであるが、良經が後鳥羽院の殊遇を蒙るやうになつてからは、定家も仙洞御所に出仕して、次々に昇進したのであつて、四十三歲の時父俊成が世を去つて以來は、いよいよ一代に重きをなすに至つた。卽ち定家が歌境に於て最も活躍したのは、比較的晩年の事であつて、四十歲から承久の亂に至るまでの、凡そ二十年間が其の全盛時代である。

定家は早熟の人であり、又父の俊成が苦吟で有名であつたのと異なつて、寧ろ達吟の人であつて、終生の詠歌は極めて多數に上つて居る。家集の『拾遺愚草』（三卷）續國歌大觀に收むは建保四年五十五歲の時に編んだもので、「拾遺」は定家が奉じた侍從の漢名である。家集にはなほ其の後の作歌を集めた『拾遺愚草員外』（一卷）續國歌大觀に收むがある。定家の歌論の著は多く傳はつて居るが、後人の假託も少くない。

中にも『近代秀歌』『詠歌大概』『毎月抄』各一巻の三部は彼の著書として信ずべきものである。而して歌論の中心とする所は、俊成の幽玄體を受けて更に一歩を進めた有心體であつて、『毎月抄』の和歌十體觀の條下などに最も詳述せられて居る。定家は從來行はれた個人的な批評を否認して、普遍的批評の態度を主張したのであつて、有心體は詩歌に對する理想的標準である。有心體の要旨は稍明瞭を缺くのであるけれども、要するに內容用語格調等の融合から成る、情趣が豐かで餘韻のある歌風を理想としたのである。最後に古典研究の方面では、晩年に三代集や伊勢・土佐・源氏・更級などを書寫勘校して定本を作り、また顯昭の『古今集註』を補正した『顯註密勘』(八卷)などを述作して居る。定家が古典校訂の上に遺した業績は素より多としなければならぬが、所依の證本の面目を保存する事に留意せずして、寧ろ私見を以て自由に語句を加除した痕があるのは惜しい事である。かくて定家は詠歌と歌學に特に卓絶してゐた爲に、後世紀貫之と並べて歌聖と仰がれ、其の子孫は長く歌道の門閥として尊重せられたのである。定家が『新勅撰集』を撰んだ事や、二條家の基礎を確立した事など

定家筆懷紙（古文書鑑に據る）

に就いては、更に後に述べるとして、左に代表的な作品を擧げて置く。

春の夜の夢のうき橋とだえして峰にわかるる横雲の空　（新古今）

霜まよふ空にしをれし雁がねの歸るつばさに春雨ぞ降る　（同）

夕立の雲間の日かげ晴れそめて山のこなたをわたる白鷺　（玉葉）

雲はみな拂ひはてたる秋風を松にのこして月を見るかな　（新古今）

旅人の袖吹きかへす秋風に夕日さびしき峯のかけはし　（同）

駒とめて袖うち拂ふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮　（同）

玉ゆらの露も涙もとどまらずなき人こふる宿の秋風　（同）

藤原家隆

定家と並んで當時歌壇に聲望が高く、且つ互に推重したのは藤原家隆（嘉禎三年歿八十歳）である。家隆は壬生中納言光隆の子で、初め寂蓮の婿となつたが、後に俊成の門に學んだ。壬生に住み、位が從二位であつたので、世に壬生二位と稱せられた。家集に『壬二集』（三卷）（續國歌大觀に收む）がある。一名を『玉吟集』といふ。其の歌風は定家に比して遙かに自由であつて、技巧を弄ばず思ふに任せてなだらかな歌を詠んだ。家隆は稀に見る多作家であつて、頓阿の著『井蛙抄』の傳ふる所によれば、生涯の詠歌は六萬首に及んだといふ。なほ『後鳥羽院御口傳』にも「秀歌ども詠み集めたる多さ誰にもまさりたり。」とある。左に揭げる例を見て、平淡な作を得意とした事が察せられる。

霞立つ末の松山ほのぼのと波にはなるる横雲の空　（新古今）

藤原良經

さくら花夢かうつつかしら雲のたえてつれなき峰の春風　（新古今）

風そよぐならの小川の夕暮はみそぎぞ夏のしるしなりける　（新勅撰）

眺めつつ思ふもさびしひさかたの月の都のあけがたの空　（新古今）

下紅葉かつ散る山の夕しぐれ濡れてやひとり鹿の鳴くらむ　（同）

志賀の浦やとほざかりゆく波間より凍りて出づる有明の月　（同）

明けばまた越ゆべき山の峯なれや空ゆく月の末の白雲　（同）

定家家隆以外で名望のあつた歌人は後京極良經である。攝政九條兼實（月輪關白）の子で、後鳥羽院に重用せられ、土御門天皇の御代に攝政太政大臣にまで陞つたが、建永元年三月に年僅かに三十八で突如として薨去した。其の死因に就いて後世種々の臆說を生じ、刺客の手に斃れたとも傳へられて居るが、恐らく急病で卒去したのであらう。名門の歌人で短生涯であつた點は源實朝に似て居る。父の兼實が日記『玉葉』を記したのに倣つてか、良經も亦日記の『殿記』（一名殿曆）を遺したが、後世散逸して今は抄本を存するのみである。良經は和歌詩文に長じ、其の他諸藝に達してゐた。書道に於ては後京極樣の祖と仰がれて居る。良經は歌を俊成に學んだのであるが其の歌風は平易で、しかも感情が流露し清新の氣に富んでゐる。敍景に長じてゐたが、殊に落莫たる情景を得意とした。家集の『月清集』（四卷）（續國歌大觀に收む）は、詳しくは『式部史生秋篠月清集』といふのであつて、式部史生はわざと卑官を名乘つたのであり、秋篠月清は作者の雅名である。

吉野山花のふるさとあと絶えて空しき枝に春風ぞ吹く

うちしめりあやめぞかをる時鳥なくや五月の雨の夕暮

時しもあれふるさと人は音もせでみ山の月に秋風ぞ吹く

たぐへ來る松の嵐やたゆむらむ尾の上に歸るさ牡鹿の聲

人すまぬ不破の關屋の板廂あれにしのちはただ秋の風　（以上新古今）

此等が有名な作歌である。

慈圓

攝政良經の叔父の慈圓（嘉祿元年寂七十一諡號慈鎭和尚）もまた達吟を以つて聞えた歌人である。關白忠通の子で、兼實の弟である。久壽二年に生れ、十三歲の年に出家し、建久四年以後前後四度天台座主となり、後に大僧正となつた。後鳥羽院の殊遇を蒙つて護持僧となつて以來、院の御爲に祈禱修法を一日も怠らなかつたといふ。西行と親しく交り、其の影響を受けたのであるが、佛教趣味に傾き、歌人としての名聲の高かつた割合に、勝れた才能を備へてゐなかつた。

春深き野邊のかすみの下風に吹かれてあがる夕雲雀かな　（風雅）

藻鹽やく煙もきりにうづもれぬ須磨の關屋の秋の夕ぐれ　（新勅撰）

有明の月のゆくへをながめてぞ野寺の鐘は聞くべかりける　（新古今）

思ふことなど問ふ人のなかるらむ仰げば空に月ぞさやけき　（同）

六家集

此等によつて其の歌風を窺ふ事が出來る。家集に「拾玉集」（七卷）（續國歌大觀に收む）がある。先に述べた俊成の

『長秋詠藻』と西行の『山家集』に、定家の『拾遺愚草』家隆の『壬二集』良經の『月清集』慈圓の『拾玉集』を合せて、後世『六家集』と呼んで居る。『六家集』には刊本二十四卷がある。

新古今時代の注意すべき歌人には、右に擧げた六人の外に、後鳥羽院を始めとして寂蓮法師・顯昭法橋・鴨長明・藤原秀能等があり、又閨秀歌人には式子內親王・宮內卿・俊成の女などがある。後鳥羽院の御事は下に別に記し奉る必要があるから、今は寂蓮以下の人々について簡單に記して置く。

寂蓮

寂蓮（建仁二年寂）は俊成の弟俊海阿闍梨の子で、俗名を藤原定長といつた。初め伯父俊成の養子となつたが、定家が生れたので出家して寂蓮といつた。歌論の上では六條家の家學を承けた顯昭と相爭ひ、其の歌才は定家にも推賞せられたといふ。『新古今集』の撰者の一人に加へられたが、間もなく示寂した。平安末期から新古今時代にかけての歌人であつて、其の作は『千載集』に七首『新古今集』に三十五首入れられて居る。家集に『寂蓮法師集』（一卷）（群書類從所收）がある外に『寂蓮法師百首』（一卷）（續群書類從に收む）が傳はつてゐる。

くれてゆく春のみなとは知らねども霞におつる宇治の柴舟

さびしさはその色としもなかりけりまき立つ山の秋の夕暮

むらさめの露もまだひぬ眞木の葉に霧たちのぼる秋の夕暮

和歌の浦を松の葉越しに眺むれば木末に寄するあまの釣舟　（以上新古今）

顯昭

此等が著名な作である。顯昭法橋（歿年未詳）は清輔の弟で、初め山門に居り、後に仁和寺に移つた。六條家

の流を汲んだ歌學者として重きをなし、歌論には前に述べた『六百番陳情』(一卷)がある。其の他著書には『日本紀歌註』(後世散逸した)『古今集註』(二十卷)『袖中抄』(二十卷)を初めとして、萬葉以下の歌集の註釋考證の類があつて、其の博學を示して居る。

萩が花まそでにかけて高圓の尾上の宮にひれふるや誰　(新古今)

秋風にたなびく雲の絶間よりもれ出づる月の影のさやけさ　(同)

鴨長明

此等が代表的な作である。鴨長明(建保四年寂六十四)は俊惠法師(俊頼の子)の門人であつて、歌人として又歌學者として知られてゐる。其の傳記は後に『方丈記』の條下に記すつもりである。家集に『鴨長明集』(一卷)(群書類從所收)がある。

藤原秀能

長明にも増して勝れた歌を詠んだのは藤原秀能(仁治元年歿五十七)である。河内守秀宗の子で、年十六の時後鳥羽院に召されて北面の武士となり、和歌に長じてゐたので和歌所の寄人に加へられた。其の後建保二年九月には、院の『清撰御歌合』に九首の和歌を召される光榮を得た事が、『增鏡』に見えて居る。承久の亂に出陣して戰つたが、亂後には熊野で出家して如願といつた。家集に『如願法師集』(三卷)がある。左に示すやうな敍景の歌に特にすぐれて居る。

夕月夜汐みち來らし難波江のあしの若葉を越ゆる白波　(新古今)

奥山の木の葉の落つる秋風にたえだえ峯の月ぞのこれる　(同)

月澄めば四方の浮雲空に消えてみ山がくれを行く嵐かな　(同)

式子内親王

千載・新古今の頃に於ける一流の女流歌人は、百人一首の『玉の緒よ』の歌で名高い式子内親王であ

る。後白河天皇の第三皇女で、平治元年から十一年間賀茂の齋院となり、後に薙髪せられ、『新古今集』の成る前後に薨じられた。御歌は『後鳥羽院御口傳』にも推賞せられてゐるのであつて、高雅な氣品が備はり、麗朗な響があると共に一面には熱情がある。家集には清水濱臣が刊行した『式子内親王御集』(一卷)がある。左に『新古今集』の中から代表的な歌を擧げて置く。

山ふかみ春とも知らぬ松の戸にたえだえかかる雪の玉水　(新古今)

花は散りその色となくながむればむなしき空に春雨ぞ降る　(同)

生きてよも明日まで人はつらからじこの夕暮をとはばとへかし　(同)

宮内卿

次に宮内卿は右京大夫源師光の女であつて、後鳥羽院の女房となり、年若くして世を去つた。「千五百番歌合」の時に院の特別な御思召によつて加入せしめられた事や、其の時の百首の中では

うすく濃き野邊の緑の若草に跡まで見ゆる雪のむら消え　(新古今)

の作が特に勝れてゐた事などは、『增鏡』に記されて人口に膾炙して居る。

俊成女

又俊成の女は『新古今集』の撰者の一人なる源通具の妻であつて、

橘のにほふあたりのうたた寝は夢もむかしの袖の香ぞする　(新古今)

のやうな、優艶な情緒を歌ふ事を得意とした。家集に『俊成卿女集』(一卷)(群書類従所收)がある。

建禮門院右京大夫

當時の女流歌人の中で注意すべき者に、なほ建禮門院右京大夫がある。世尊寺伊行(藤原氏)の女で、建禮門院の侍女となり、平家一門の榮華のさまを見盡したが、壽永の秋の騷ぎに愛人平資盛が西海の藻

屑となつて後は、悲歎にくれる身となり、門院が大原に閑居の後は御傍に侍してゐた。其の歌は『新古今集』には一首も見えてゐないが、次の『新勅撰集』には二首採られ、更に『玉葉集』には九首入れられて居る。其の乙女心にひめられた戀心と、平家の都落以後の可憐な惱みは、長い詞書を添へた三百七十餘首の和歌に盡されてゐる。『群書類從』所收の『建禮門院右京大夫集』二卷がそれである。此の集は一種の歌物語となつてゐるのであつて、『平家物語』と合せ見る時特に感興が深い。

源實朝

以上述べたのは何れも宮廷歌人であるが、當時鎌倉にあつて異彩を放つたのは源實朝である。實朝は賴朝の二男で、母は北條時政の女政子である。建久三年に生れ、建仁三年に十二歳で、兄賴家の後を嗣いで三代將軍となつた。『新古今集』が成つた元久二年は實朝十四歳の時であつて、此の年四月に始めて十二首の歌を詠んだ。北條時政が妻牧の方と共謀して實朝を殺し、女婿の朝雅を將軍に立てようとして失敗したのは此の年である。實朝は武家に生れたけれども、夙に公家の趣味に憧れて、詩歌・管絃・繪畫・蹴鞠などを嗜んだのであるが、殊に和歌は最も好んだやうである。而して和歌の指導者となつたのは定家である。卽ち承元三年（十八歳）には、初學以來の歌三十首を選んで京の定家の許に送つて點を乞うたが、定家は之を返す時『詠歌口傳』（近代秀歌と同じ）を獻じた。其の後定家は屢消息や和歌の書を送つたが、建保元年（建暦三年改元）（實朝二十二歳）には相傳祕藏の『萬葉集』一部を獻じた。其の時實朝が滿足した有樣は、『吾妻鏡』に「御賞翫無レ他、重寶何物過レ之乎由有レ仰」と記されて居るのを見て察する事が出來る。從來は是を以て、實朝が萬葉調の歌風に移つた動機と見做してゐたのであるが、近頃佐佐木

信綱博士が發見して世に紹介せられた定家自筆の『金槐和歌集』實朝家集の奥書に、「建暦三年十二月十八日」とあるのによれば、萬葉風の歌は既に二十二歳以前から詠んでゐたのである。（此の寫本は金澤の松岡氏藏本であつて、卷首及び諸所を定家自ら書寫し、他筆を以つて書き繼がせたもので、奥書の日附は定家の筆である。近頃佐佐木信綱博士が寫眞版に複製して刊行せられた。）さて實朝は其の後建保六年十二月二日に右大臣に任ぜられたが、翌承久元年正月二十七日に、拜賀の爲鶴岡八幡宮に詣でた時、別當公曉の爲に殺害せられた。時に年二十七であつた。

建暦三年十二月十八日

定家所傳本
自筆奥書

實朝の生涯は極めて短かつたばかりでなく、其の間常に外戚たる北條氏の壓迫に苦しみ、殊に兄賴家がはかない最期を遂げて以後は、絶えざる不安と苦悶があつた。かくて悲慘を極めた短生涯の記念として遺されたのは、卽ち『金槐和歌集』である。金は鎌倉の鎌の偏を取つたものであり、槐は三槐（大臣）の義によるのである。一名を『鎌倉右大臣家集』ともいつて居る。『金槐集』には群書類從本と、貞享年間の刊本と二つの系統の本があるが、原本に最も近いのは前記の松岡本であつて、類從本はこれと同一の系統の本であり、貞享本は類從本を基にして後に順序を改め、且つ追加したものである。『金槐集』は既に述べたやうに、二十二歳以前の作歌を收めたものであるから、（群書類從本の終にある一本及び印本所載の五十二首を除く。）其の後の歌を集めたものもあつたであらうと思はれるが、後世

に傳はつてゐない。其の歌風を見ると、定家の指導を受けた關係から、新古今風の歌も詠んだのであるが、大部分は萬葉風である。集中には時に佳作とは言ひ難いものもあるが、萬葉の語句を用ひ、高古の調によつて、自由に且つ大膽に獨自の境地を歌つたものには、將軍らしい氣品が備はつて居る。併し他の一面には無常厭世の作があり、又感傷的なものが少くないのは、主として境遇が然らしめたのであらう。なほ朝廷に對して誠忠の志の篤かつた事も、集中の作歌によつて窺はれる。

けさ見れば山も霞みてひさかたの天の原より春は來にけり

吹く風の涼しくもあるか自から山の蟬鳴きて秋は來にけり

もののふの矢なみつくろふこての上に霰たばしる那須の篠原

箱根路をわれ越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ　（續後撰）

大海の磯もとどろに寄する浪われて碎けてさけて散るかも

さりともと思ふ物から日をへてはしだいしだいによわる悲しさ

物いはぬよものけだ物すらだにも哀なるかなや親の子を思ふ

いとほしや見るに涙もとどまらず親もなき子の母を尋ぬる

時により過ぐれば民の歎なり八大龍王雨やめたまへ

山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心わがあらめやも　（新勅撰）（金槐和歌集）

後鳥羽院

新古今時代の著名な歌人は大體述べ終つたから、當時堂上歌人を庇護して、和歌の隆盛を誘導し給

うた後鳥羽院・土御門院及び順徳院の事を記し奉らう。後鳥羽院は高倉天皇の第四皇子であつて、安德天皇が西幸し給うた後、御年四歳で御卽位になつた。其の後建久九年に御讓位になつた後も、院中で政を聽かせられたが、北條氏討伐の御企が敗れて、承久三年には隱岐に遷幸せられ、十九年の後延應元年に其の地で御年六十で崩じ給うた。後鳥羽院は多藝に渉らせられ、史傳故實に通じ、詩文にも長じて居られたが、殊に和歌を嗜み給ひ、當時一流の歌人に伍して劣り給はぬ程であつた。御製は『新古今集』以下の勅撰集や當時の歌合に見えて居るが、纏つた御集には『後鳥羽院御集』(一卷)がある外に、『後鳥羽院御自歌合』『遠島御百首』(以上正續群書類從列聖全集所收)などがある。又歌學の御著書には『後鳥羽院御口傳』(一卷)(群書類從所收)がある。院の御製には北條氏追討を思ひ立ち給うた英邁な天資が現れてゐる。試みに『新古今集』中の名高い御製を掲げよう。

ほのぼのと春こそ空に來にけらし天の香具山霞たなびく

鶯の鳴けどもいまだ降る雪に杉の葉白き逢坂の山

見渡せば山もとかすむ水無瀨川ゆふべは秋となに思ひけむ

みよし野の高嶺の櫻散りにけり嵐も白き春のあけぼの

山里の峰の雨雲とだえしてゆふべ涼しき眞木の白露

奥山のおどろが下もふみわけて道ある世ぞと人に知らせむ

後鳥羽院が隱岐に遷幸し給うた前後の事は、『吾妻鏡』『增鏡』などに詳かであるが、其の地で詠ませら

れた『遠島御百首』の如きは、悉く涙をそそる響がある。

春雨に山田のくろを行く賤の蓑吹きみだす暮ぞ淋しき

遠山路いくへも霞めさらずともをち方人の問ふもなければ

思ひやれ眞柴のとぼそ押しあけてひとり眺むる秋の夕暮

いたづらに秋の日數はうつりきていとど都は遠ざかりつつ

潮風に心もいとど亂れ蘆の穗に出てなけどとふ人もなし

曉の夢をはかなみまどろめばいやはかななる松風ぞ吹く

われこそは新島守よ沖の海のあらき浪風こころして吹け　（以上遠島御百首）

後鳥羽院は隱岐に御遷幸の後十六年目の嘉禎二年四月には、十番の「御自歌合」を家隆に下し給うて判をせしめられ、更に同年七月には「遠島御歌合」を行はせられた。（『隱岐本新古今集』も此の頃撰定せられたのである。）「遠島御歌合」は、京都を始め其の他に居る歌人十六人の作歌を八十番鬪はせられ、院御親ら判詞を加へられたものである。此の御歌合に就いては『增鏡』藤衣の卷に次の如く記して居る。

都へもたよりにつけつつ題をつかはし歌を召せば、あはれに忘れ難く戀ひ聞ゆる昔の人々、我も我もと奉れるを、つれづれに思さるるあまりに、自ら判じて御覽ぜられにけり。家隆の二位も、今まで生ける思出にこれをだにと、哀にかたじけなくて、こと人々の歌をもここよりぞとり集めて參らせける。むかしの秀能はありし亂の後、頭おろして深く籠りゐたり。如願とぞいひける。それも此の度の御歌合に召せば、今更にその

かみの事さこそは思ひ出づらめ。

「遠島御百首」の御製を拜しても、又此の歌合の家隆・如願其の他の作歌を見ても、雅麗な新古今風に比して著しく枯淡になり、一種寂寥の氣を帶びて居るのは、世相の變化に伴なふ歌風の變遷を示すものである。

土御門院

後鳥羽院の皇子なる土御門・順徳兩院も亦和歌に秀でさせられた。土御門院は承久の亂には與り給はなかつたので、北條氏も都に留め奉らうとしたのであるが、院は父帝並に順徳院が遠島に遷幸し給ふ上は、獨り都に留まる事を欲し給はず、御自ら進んで土佐に遷幸せられた。其の後阿波にお遷りになり、前後十一年間を邊土に過ごされて、寛喜三年に三十七年の短い御生涯を終らせられた。御集には『土御門院御集』『土御門院御百首』(各一卷。正續群書類從・列聖全集に收む)がある。御集は主として御遷幸後の御歌を集めたものであるから、自ら沈痛悲哀の調に滿ちて居る。又御百首は定家並に家隆に遣はし給うたものである。

順徳院

順徳院も承久の亂に佐渡に遷幸せられて、二十二年の後仁治三年に其の地で崩じ給うた。御年四十六であつた。院は故實を究め又詩文に長じて居られたが、特に和歌に御熱心であつた。禁中の儀式制度故實等に就いて記し給うた『禁祕御抄』(三卷)(群書類從列聖全集所收)や、從來の歌學を集成し且つ院の御説を記し給うた『八雲御抄』(六卷)(列聖全集所收)は、共に斯學の貴重なる書である。御歌は勅撰集や百首に見えて居る外に、『順徳院御集』(二卷)(別名紫禁和歌草)『順徳院御百首』(一卷)(共に續群書類從・列聖全集に收む)がある。御百首は佐渡で詠ませられたものである。

源實朝が兇人の手に斃れた年は、歌道の宿老定家が五十八歳であつた。其の後承久の變が起り、三上皇が遠島に遷幸せられて、世は一變したのであるが、定家は齡七十を超えて、後堀河天皇の勅宣を蒙つて新古今に次ぐ『新勅撰和歌集』を撰んだ。勅を奉じたのは貞永元年六月であつて、同年十月に假名の序と目錄とを奏上し、天福二年六月に假に奏覽し、更に切棄切繼を施した後、嘉禎元年三月十二日に奏覽したのである。卽ち『新古今集』が成つた元久二年から三十年許り後に成つたのである。此の間に一般の歌風は、新古今風の華麗を去つて漸く平淡となつたのであつて、試みに此の集の定家・家隆等の作歌を見ても、著しく枯淡の趣がある。

明けばまた秋の半ばも過ぎぬべし傾ぶく月の惜しきのみかは　定家

老いぬれば今年ばかりと思ひこしまた秋の夜の月を見るかな　家隆

此の集に最も多くの作歌を入れられたのは、家隆・俊成・良經・公經等であつて、何れも三十首を超え、實朝のは十九首であつて、定家のは僅かに十五首である。而して後鳥羽・土御門・順德三上皇の御製は一首も入れずして、却つて東國武士の作を多く採り、また關東に志を寄せてゐた西園寺公經の歌を比較的多く入れたのは、定家が關東に媚びたものであるといふので、非難の聲が高かつた。『井蛙抄』に新勅撰の異名を「宇治川集」といつたのは、武士の歌を多く入れた爲である。蓋し「もののふの八十うぢ川」の古歌に因るのである。要するに此の集は、新古今に比して種々の點に於て遙かに劣るのであるが、定家の獨撰であるが爲に、二條家の人々には尊重せられた。

二　二條京極反目時代

定家が世を去つた仁治二年以後、鎌倉時代の終までの凡そ九十年間を假に一期とする。此の時代の初めに歌道の中心となつたのは、定家の子爲家であるが、其の子の爲氏・爲教・爲相は三家に分れて互に反目し、殊に爲氏の二條家と爲教の京極家とは、長く門閥の爭を續けた。從つて此の時代は二條京極反目時代と言ふ事が出來る。

二條家と六條家の對立

平安時代末期に俊成が歌道に覇を唱へた頃、二條家と六條家が對立してゐた事は、既に述べたのであるが、六條家の清輔が歿した後に、其の弟の重家・顯昭及び季經が二條家の定家と對峙してゐた。併し定家が從來の歌學を整頓して、組織立つた家學を立てて以後、二條家の勢力は益盛になつたのに反して、六條家にはよく之と對抗する者がなかつたので、次第に衰へて行つた。新古今時代に六條家には重家の子に經家・顯家・有家の三人があつた。有家（建保四年歿六十二）は新古今撰者の一人であつたが、顯家の子知家（暦仁元年出家法名蓮性）は父の歿後定家に師事した。併し定家の死後には、其の子の爲家に對して反對の態度を示した。寶治二年の「仙洞御歌合」に爲家が判者となつた時、其の判に對する不滿の餘り、顯昭の陳狀に倣つて『蓮性陳狀』（一卷）（群書類從所收）を後嵯峨院に奉つたのは著しい例である。其の後知家の子行家（文應元年歿五十三）は、龜山天皇の御代に『續古今集』の撰者の一人に加へられたが、彼を最後として六條家は全く二條家の爲に壓倒せられてしまつた。當時歌道の家には、なほ『新古今集』の撰に與つた雅經を祖と

する飛鳥井家があつたが、其の子孫に至つて二條家の傍系の觀を呈し、其の勢力は微々として振はなかつた。要するに鎌倉時代の歌道の中心となつたのは二條家である。

藤原爲家

鎌倉時代の文藝は多く世襲せられ、從つて諸藝にはそれぞれ門閥を生じたのであるが、歌道の門閥として最も重きをなしたのは、言ふまでもなく二條家である。而して二條家の家學を確立したのは爲家である。爲家（建治元年歿七十八）は父祖が築き上げた歌學を承けて二條家の基礎を確立し、又後嵯峨院の院宣を奉じて、第十代集の『續後撰集』を撰し、更に『續古今集』の撰集に與つて、いよいよ勢力を恣にするやうになつた。

續後撰集

『續後撰集』は、後深草天皇の寶治二年に後嵯峨院の命が下り、三年の後建長三年十月に奏覽したもので、『新勅撰集』から十九年を經てゐる。主として新古今時代の歌人の作を採つたのであつて、定家の作は最多數の四十三首入れられて居る。此の集は俊成が撰んだ『千載集』、定家が撰んだ『新勅撰集』と併せて、二條家の三代集と稱せられた。

續古今集

次の『續古今集』は、正元元年に爲家が再び後嵯峨院から撰進の院宣を蒙つたのであるが、弘長二年になつて更に基家・家良・行家・光俊の四人を撰者に加へられた。爲家が二度までも勅撰の院宣を奉じた事は、彼が最も名譽とする所であつたが、後に四人の撰者を追加せられたのに對しては、快からず思つたのである。集が成つたのは『續後撰集』から十四年を經た文永二年十二月である。集中に最も多くの歌を入れられたのは、後嵯峨院の皇子で鎌倉將軍となられた宗尊親王（文永十一年薨三十二）の六十七首である。宗尊親王の御歌を多く入れたのは、撰者の一人の光俊が、歌の師であつた關係からであつて、爲家は光俊と反目の間柄であつたから、之を不滿に

爲家の歌風

思つたのは當然である。

さて爲家は温厚な人で、父の如き覇氣がなく、學才も遙かに劣つてゐた。其の歌風は保守的であつて、專ら定家の晩年の平淡な風を理想としたのである。家集には『中院大納言集』（七卷）の外に、『爲家卿千首』『爲家卿藤川題百首』などがあり、又歌學の著書には『詠歌一體』一名『八雲口傳』がある。爲家以後の二條家の人々は、悉く爲家の平明穩健な風を祖述して、一歩も埒外に出なかつたから、其の歌風は時代を經るにつれて陳腐平弱となつた。

二條家の分立

建治元年に爲家が世を去つた後、二條家は三家に分れて、子孫に亙つて長い間歌道門閥の爭を續けた。爲家の子には爲氏（弘安九年歿六十五）爲教（弘安二年歿五十四）爲相（嘉暦三年歿六十六）爲守などがあつたが、爲守は夭折し、他の三人はそれぞれ二條（御子左家とも）京極（毘沙門堂とも）冷泉の三家に分立した。元來爲氏・爲教と爲相とは其の母を異にしてゐた。卽ち爲氏・爲教の母は宇都宮賴綱の女であり、爲相は爲家が晩年に娶つた安嘉門院四條（後に入道して阿佛尼といつた）の子である。かくて此の異母兄弟の間には、甚しい年齡の差があつたのであるが、爲家の歿後に爲氏は、父の遺言によつて、爲相の所領と定められた播磨の細川莊を橫領して與へなかつた爲に、訴訟沙汰を惹き起し、是より長く爭を續けた。（第七章十六夜日記の條參照）爲氏は又同母弟の爲教とも不和となり、激しい反目を續けたが、爲教は遂に

限りある命を人にいそがれて見ぬ世の後をかねて知りぬる

續拾遺集

の如き怨を遺して病歿した。爲氏は此の鬪爭の間に龜山院の院宣を蒙つて、弘安元年十二月に『續拾

遺集」を撰上した。此の集には父爲家の歌を最も多く入れて居る。其の後、爲氏の子爲世（延元三年歿八十九）と爲教の子爲兼（元弘二年歿七十九）の代になつて、二條京極兩家の軋轢は益甚しくなり、兩人は從兄弟の間柄でありながら、あさましい鬪爭の中に一生を送つた。

當時朝廷に於ては、後嵯峨院の皇子なる後深草龜山兩皇統の御爭があつて、所謂兩統迭立の端緒を開いたのであるが、爲世は大覺寺統の天皇に重く用ひられ、爲兼は持明院統の伏見天皇の御信任を得たので、二條京極兩家の確執はこれより益激烈になつた。爲世は二條家の嫡流を承けたけれども、和歌の道には極めて凡庸であつたが、之に反して京極爲兼は卓絕した歌人であつて、上下の尊信を受けた。偶正應六年（改元永仁元年）に伏見天皇は二條爲世・京極爲兼・飛鳥井雅有・（雅經の孫）六條隆博の四人を召して、撰集の事を諮り給うた時、爲兼の意見が採用せられたので、爲世は嫉妬の情に驅られて益仇敵の思をなすに至つた。かくする中に爲兼は反對派の讒奏に遭つて隱謀の嫌疑を受け、永仁六年三月に佐渡に流され、其の年天皇も御讓位遊ばされたので、撰集の事は沙汰止となつた。其の後爲世は大覺寺統の後宇多院の院宣によつて、後二條天皇の嘉元元年に「新後撰集」を撰進したが、

新後撰集

爲兼は此の年大赦によつて六年目に召し還された。次いで持明院統の花園天皇の御代の延慶年間に、又勅撰集の御企があつた時、爲世と爲兼の間に再び撰者の爭が起り、雙方から數回訴狀を奉つた。此

の訴狀は『延慶兩卿訴陳狀』一卷（群書類從所收）に收められて居る。）併し伏見上皇の院宣は遂に爲兼に下り、正和元年に『玉葉和歌集』を撰上した。是に於て爲世は不平に堪へずして、爲兼が刑餘の身を以て勅撰に携はつた事や、撰定上の不都合な點などを擧げて非難攻撃を加へたが、爲兼は更に讒誣に遭つて六波羅に召し捕へられるやうな恥辱を受けた。（爲兼の歿年を『尊卑分脈』には元弘二年として居るが、他に異說がある。）かくて爲兼の晩年は極めて不遇であつたのに反して、爲世は其の女爲子が後醍醐天皇の寵遇を蒙り、尊良宗良兩親王を生み奉つたので益勢力を得、元應二年には再び後宇多上皇の院宣を蒙つて『續千載集』を撰進した。其の後元亨三年に後醍醐天皇は、爲世の子爲藤に勅して勅撰の事に當らしめられたが、翌年爲藤は病歿したので、改めて爲世の孫爲定に勅宣が下つた。かくて正中二年十二月に奏覽したのが『續後拾遺集』であつて、是より後歌道の實權は全く二條家の掌中に落ちたのである。『續後拾遺集』は鎌倉時代の最後の勅撰集であつて、第十六代集に相當する。

要するに定家・爲家父子が樹てた歌道の門閥は、其の子孫に至つて骨肉相せめぐ基因となつたのであつて、此の間の和歌は中心を失つて、徒らに過去の糟粕を嘗めて益平弱になり、何等新しい發展を見なかつた。當時勅撰集は次々に撰進せられたのであつて、數に於ては極めて盛であるが、其の撰者は大體に於て二條家の人々であるから、定家・爲家等の歌風を標準として概ね平凡に陷り、殆ど變化がなかつた。此の間にあつて、最も特色を發揮したのは京極爲兼であつて、其の撰にかかる『玉葉集』は獨り異彩を放つて居る。今爲兼一派の歌人と『玉葉集』に就いて述べるに先立つて、二條・京極・冷泉三家

（欄外見出し：玉葉集／續千載集／續後拾遺集／當代の勅撰集）

の系圖と、是までに擧げた勅撰集を一括して表示しよう。（卷數は何れも二十卷である。）

- 俊成
  - 定家（新古今・新勅撰）
    - 中院 為家（續後撰・續古今）
      - 二條（御子左）為氏（母宇都宮頼綱女）（續拾遺）
        - 為世（大覺寺統に）（新後撰・續千載）
          - 為道（早世）
            - 為定（續後拾遺）
            - 為遠
          - 為藤（續後拾遺）
            - 為明
          - 為冬
            - 為重
          - 為子
      - 京極（毘沙門堂）為教（母同右）
        - 為兼（持明院統に）（玉葉）
          - 忠兼（養子）
        - 為子
      - 冷泉（藤谷）為相（母阿佛尼）
        - 為秀
          - 為尹
            - 為之（上冷泉祖）
            - 持為（下冷泉祖）
      - 為守（母同右、早世）

一〇 續後撰和歌集	後嵯峨上皇院宣 建長三年奏覽	撰者	藤原為家
一一 續古今和歌集	後嵯峨上皇院宣 文永二年奏覽	撰者	藤原為家・同基家・同家長・同行家・同光俊
一二 續拾遺和歌集	龜山上皇院宣 弘安元年奏覽	撰者	二條為氏
一三 新後撰和歌集	後宇多上皇院宣 嘉元元年奏覽	撰者	二條為世
一四 玉葉和歌集	伏見上皇院宣 正和元年奏覽	撰者	京極為兼

一五 續千載和歌集	後宇多上皇院宣 元應二年奏覽	撰者	二條爲世
一六 續後拾遺和歌集	後醍醐天皇勅宣 正中二年奏覽	撰者	二條爲藤 二條爲定

玉葉集の特質

右の表によつて明かであるやうに、此の時代の勅撰集は主として二條家が撰進したのであるから、其の家風の作歌が中心となつて居るのは言ふまでもない。此の中で唯一つ『玉葉集』だけは、京極爲兼の手で撰定せられたのであり、且つ當時は二條家との軋轢が最も甚しい時であつたから、此の集には京極一派の歌人の作が最も重きをなして居る。卽ち京極の流を汲み給うた伏見院の御歌は七十六首を收め、是に次いで比較的多いのは從三位爲子（爲教女、永福門院女房）五十九首、西園寺實兼五十七首、永福門院（伏見院后 實兼の女）四十三首などであつて、撰者自らのは三十三首である。併し爲兼は比較的に公平な態度を示して、二條派の人々の作をも相當入れて居るのであるが、其の數が前記の歌人に匹敵しないのは勿論である。爲兼は新古今時代の歌風を慕つて、定家六十八首、俊成五十六首、爲家五十三首、西行四十九首を採つて居るが、又『萬葉集』にも親しんだのであつて、人麻呂のを二十五首入れて居る。其の他承久の三上皇の御歌も比較的多く收め、實朝や建禮門院右京大夫などの作も入れて居る。かくて『玉葉集』は萬葉・古今・新古今に亙つて廣く古今の作歌を採り、而も京極派の特色を發揮した清新の調を多く入れたのであつて、二條家の人々からは非難を受けたけれども、『新古今集』以後の勅撰集中では、確かに異彩を放つて居るのである。撰者爲兼の歌風は下に述べるとして、先づ爲兼の歌風を承け給うた伏見院を始め奉り、京極派の女流歌人中で最も秀でた、永福門院と爲子の佳作を『玉葉集』から抄出し

て見よう。

伏見院御製

山の端も消えていくへの夕霞かすめるはては雨になりぬる
山風にもろき一葉はかつ落ちて梢秋なる日ぐらしのこゑ
宵のまの村雲づたひ影見えて山の端めぐる秋のいなづま
さ夜ふけて宿守る犬の聲高し村しづかなる月のをちかた
ふけぬるか過ぎ行く宿も靜もりて月の夜道にあふ人もなし

永福門院

山もとの鳥の聲より明けそめて花もむらむら色ぞ見え行く
入相の聲する山の陰暮れて花の木の間に月いでにけり
河千鳥月夜をさむみいねずあれや寢さむるごとに聲の聞ゆる
月影は森のこずゑにかたぶきてうす雪白しありあけの庭
里々の鳥の初音は聞ゆれどまだ月たかきあかつきの空

從三位爲子

葉がへせぬ色しもさびし冬深き霜のあさけの岡のへの松
雨のあしも横さまになる夕風に蓑ふかせ行く野べの旅人

浦遠くならべる松の木の間より夕日うつれる波のをちかた

降りしめる雨夜のねやの靜かにてほのほ短きともし火の末

右に掲げた歌を見ても明かであるやうに、『玉葉集』の歌風は大體に於て新古今風を標準として居るのであるが、殊に細かな忠實な寫實的傾向のある事と、情景融合のしめやかな境地を好んで詠んで居る事が目立つのである。

京極爲兼の歌風

さて撰者爲兼は當時最も傑出した歌人であつた。爲兼は新古今風を理想とした人であるが、一方では遠く人麻呂・赤人を崇め、又源實朝の歌風を慕つたのであつて、其の雄大な思想、淸新な表現、奇拔な著想などは、平凡で誦するに足る歌のなかつた鎌倉末期に於ては、燦然たる光輝を放つて居る。生涯に詠んだ歌は一萬首を超えたと言はれて居るが、後世に傳はつたものは『入道大納言爲兼卿集』(一卷)(續群書類從に收む)の一千百首許りと、外に『爲兼卿鹿百首』『爲兼卿家歌合』(共に群書類從所收)などである。爲兼は歌學上にも卓絕した識見を抱いてゐたのであつて、『爲兼卿和歌抄』(一卷)(宮內省圖書寮所藏寫本)の如き著がある。此の書は二條家の歌學が、とかく枝葉に拘泥してゐるのに對して、詞姿よりも其の思想を主とすべき事を論じ、又歌風の準據としては、定家の說を承けて寬平以往の風を貴び、更に溯つて『萬葉集』の眞價を稱揚してゐるのであつて、歌學上注意すべき卓見に富んで居る。左に家集及び勅撰集中の佳作を掲げて置く。

わかめ刈る春にしあれば鶯の木づたひわたる天の橋立　(家集)

春の夜のみじかくもゆる燈火の色さへ壁の草となり行く　（家集）
山かげや竹の林に鳴く鳩のこゑばかりするゆふぐれの雨　（同　）
沈みはつる入日のきはにあらはれぬ霞める山のなほ奥の峰　（風雅）
枝にもる朝日の影のすくなきに涼しさふかき竹の奥かな　（玉葉）
さゆる日の時雨の後の夕山にうす雪ふりて空ぞ晴れゆく　（同　）
閨のうへはつもれる雪に音もせで横ぎる霰窓たたくなり　（同　）
海原や沖つしほせもひとつにて雲井につづく八重の白浪　（家集）
浪の上にうつる夕日の影はあれど遠つ小島は色くれにけり　（玉葉）
高瀬山松の下みち分け行けば夕あらし吹きて逢ふ人もなし　（風雅）

要するに爲兼は、萬葉の影響を受けると共に、技巧的な新古今風の歌を作り、又平明率直な作も詠んだのであつて、其の歌風は極めて自由であり、且つ清新である。言葉よりも思想に重きを置いた彼の主義は、右に擧げた例歌にもよく表れて居る。

私撰歌集

二條京極反目時代にも、各種の歌合や百首七百首の類が盛に行はれたのであるが、特に記すほどのものは無いから省略して、此の時代に成つた私撰歌集を大體時代順に擧げて、簡短に解說して置く。

玄玉和歌集

『玄玉和歌集』（群書類従所收）は十二卷あつたが、後世終の五卷が散逸して七卷現存して居る。俊成・慈圓・定家・

萬代和歌集

家隆・俊恵・有家、其の他此の時代の歌人の作を集めて分類したものである。撰者は詳かでない。『萬代和歌集』（二十卷）丹鶴叢書所收 は奥書によれば、後深草天皇の寶治二年に成つたものであるが、撰者は未詳である。古くは人麻呂などの歌も收めて居るが、主として平安朝から新古今時代までの歌を、勅撰集家集歌合などから撰輯した類題和歌集である。

現存和歌六帖

『現存和歌六帖』（一卷）群書類從所收 は、鎌倉初期の歌人百九十七人の作八百五十首を草木花鳥蟲類の題で、それぞれ類聚したものである。撰者は詳かでない。奧書によれば、建長元年十二月十二日に類聚を終つて後嵯峨上皇に奉り、更に作者を註すべき仰を蒙つたものである。もと『古今和歌六帖』に續ぐものを編む計畫であつたのが、未完成の儘で傳はつたのであらう。

秋風抄

『秋風抄』群書類從所收 は建長二年四月十八日に、小野春雄が撰んだもので、三卷から成つて居る。新古今・新勅撰・萬代三集に入つてゐない當時の和歌三百餘首を集めて分類したもので、其の序には貫之が『古今集』の序に六歌仙を評したのに傚つて、爲家・知家・行能・俊成・隆祐・定家・家隆の歌風を批評して居る。（群書類從本は二卷であつて中間を闕いて居る。）

新和歌集

『新和歌集』（十卷）群書類從所收 は詳しくは『宇都宮打聞新集』といふ。藤原爲氏が宇都宮に下向の頃に撰んだもので、新古今以後の歌人百八十六人の作歌八百七十二首を、勅撰集の部立に傚つて集めて居る。

雲葉和歌集

『雲葉和歌集』（十卷）群書類從所收 は人麻呂・赤人の頃から後嵯峨院の御代までの和歌を、勅撰集の部立に傚つて撰集したもので、撰者は詳かでない。現存するものは戀雜の部を闕いて居る。もとは二十卷本であつたであらう。

拾遺風體和歌集

『拾遺風體和歌集』（十卷）續群書類從に收む は新古今時代以後の和歌を集めて、前書と同じやうに部類したものである。撰者も成立時代

續門葉和歌集

も詳かでない。『續門葉和歌集』（十巻）（群書類從所收）は文治から嘉元に至るまでの、桑門の作歌千首を集めて部類したもので、巻頭に掲げた漢文の序の終に、嘉元三年玄冬臘月の日附がある。なほ序によれば、文治年間に成つた『門葉和歌集』（後に散逸した）の續集として撰んだもので、清瀧の吠若麿・嘉寶麿等の共編である。

未木和歌抄

此の時代に成つた最も大部の私撰集は『未木和歌抄』（三十六巻）（刊本には國書刊行會本と校註國歌大系本とがある。）である。萬葉以來の歌人の家集・私撰集・歌合・百首などを廣く涉獵して、代々の勅撰集に漏れた歌凡そ一萬六千餘首を拾集して、細かに分類したものである。未木と名づけたのは、扶桑の字畫の一部を取つたのである。撰者は冷泉爲相に學んだ藤原長淸（法名蓮昭）である。成立年代は略ぼ延慶年間であらうと思はれるが、大部のものであるから、前後相當の年月に亙つて撰集されたであらう。此の集は和歌研究の上に種々の資料を提供するものである。

風葉和歌集

最後に『風葉和歌集』（二十巻）がある。後に終の二巻が散逸して十八巻となつて居る。撰集の體に倣つて、古今の物語中の和歌を集めて類別したもので、序の終に「ふみながしといふ年のやとせ、降りみ降らずみしぐるる頃、これを奉りぬるとなり。」と記して居るのに據れば、文永八年に成つたのである。此の集中に收められた和歌は、後世散逸した古い物語や、後世の僞作にかかる古物語の原本の面目を推考する時の參考となるのである。

『風葉和歌集』が古い物語の研究資料に富んで居る事は右に述べた通りであるが、之と併せ見るべきものは、鎌倉時代の初期に成つた『拾遺百番歌合』一巻（群書類從所收）と『和歌色葉集』三巻とである。『拾遺百番歌合』は『源氏物語』の歌と『狹

衣物語』の歌とを左右に合せた『百番歌合』一名『源氏狹衣歌合』(群書類從所收)に對する名稱であつて、左は『源氏物語』中の歌、右は夜半寢覺・御津濱松・參河仁佐介留・朝倉・袖努良須・心高幾・取替波也・露宿・末葉露・海人刈藻、以上十種の物語中の歌を拔き出して百番合せたものである。撰者は詳かでない。次の『和歌色葉集』は古くは顯昭の著と言はれてゐたが、實は上覺法師の撰で、建久年中に成つたものである。本書は物語體に記した歌學の書であるが、其の中に後世散逸した古い物語の名七八十種載せ、且つ解題を添へて居るのであるから、古代の物語の研究上貴重すべきものである。右二書の外になほ『無名草子』があるが、是は別に述べるつもりである。

第三章　宴曲と和讃

宴曲は鎌倉時代から室町時代にかけて、堂上や武家桑門などの宴會の席上で吟誦せられた歌曲である。『綾小路俊量卿記』(群書類從所收)に五節の郢曲の一として、「水猿曲(或號二白拍子一)」を擧げて居るのを見ると、(猿曲は卽ち宴曲である)宴曲の一名を白拍子ともいつたのであるが、是は拍子の名であらうと思はれる。又室町時代に早歌(さうか)と呼んだのは、拍子を早く謠ふ意によるのである。(早歌は神樂にもあり、又雜藝にもある。)室町時代に「早歌うたひ」といふ者があつた事は、『七十一番職人盡歌合』によつて知られる。而して早歌は室町時代の末に至つて、小歌の爲に壓倒せられて衰亡した。宴曲は平安朝の末期に流行した雜藝(郢曲)から發達したもので、もと扇拍子で謠つたのであるが、後には管絃に合せた事もある。宴曲の中には平安末期の作品であらうと思はれるものもあるが、多くは鎌倉時代の作である。現存する宴曲

宴曲の集　の集は、鎌倉時代末期の沙彌明空が主として編輯したもの十部十八帖(中一帖は目錄)であつて、其の書目は左の通りである。

早歌うたひ
七十一番職人盡歌合所載

『撰要目錄』一卷　『宴曲集』五卷　『宴曲抄』三卷
『眞曲抄』一卷　『究百集』一卷　『拾菓集』二卷
『拾菓抄』一卷　『別紙追加曲』一卷　『玉林苑』二卷　『外物』一卷

『宴曲集』以下に收めた詞章は、合計百七十二章であつて、是が現存する宴曲の總數である。右の書目中最後の『外物』を除いた十七帖は、『續群書類從』遊戲部に收められてゐるが誤が少くない。吉田東伍・野村八良兩氏が續群書類從本に校訂を施したものは、國書刊行會出版の『宴曲十七帖附謠曲末百番』に收められて居り、更に之に『外物』を加へたものには兩氏校訂の『宴曲全集』がある。現存する宴曲の集の成立年代は『撰要目錄』によつて明かである。卽ち『宴曲集』以下の四部十帖は、明空が正安三年八月上旬までに集成したものであり、『拾菓集』は同じく明空が嘉元四年三月下旬までに編んだのである。又『拾菓抄』は正和三年三月五日までに成り、『別紙追加曲』と『玉林苑』とは文保三年二月に成つた事が記されて居るのであるが、其の編者の名は見えてゐない。(但し詞章の作者は註してある。)

宴曲の作者に就いては『撰要目錄』の自序に、

夫當道の郢曲は、幼童の口にすさみ、萬人の耳にさへぎるたぐひ、さまざま多しといへども、愚老が撰び集むる曲すべて其軸十巻を定め、其歌百の數を極む。この中二十餘首は愚作の外なり。卽ち其作者の名字をたどるたどる記す。云々

安田家舊藏宴曲集

とあるのに據れば、『究百集』までの十帖に收められた詞章の大部分は、編者明空の作である。卽ち明空は宴曲の作者であり、又集成者であつたのであるが、舊作にして彼の手で修訂せられたものも少くなからうと思はれる。明空の傳は詳かでないが、天台宗の僧侶であつて、宴曲の名人であつたやうである。其の歿年は詳かでないが、嘉元四年に記した『拾菓集』の序（撰要目錄所收）に、「今はむそぢのあまりつれなき命の程云々」と見えて居るから、仁治寛元の頃に生れた人である。『拾菓抄』以下三部に月江作と註した詞章が多いのであるが、月江は明空の門人であると言ひ、又明空の二字を省畫したもので、彼の別號であるとも言はれて居る。明空以

後の作家の名も多少傳はつて居るが、今は省略して置く。

宴曲の構造は從來の歌曲よりも遙かに擴大せられて、一般に長篇となつて居り、中には「海道」のやうに三段から成るものや、「熊野參詣」のやうに五段から成る長篇もある。其の句格は七五調を主とし、七四調を副として、長短句を交錯して變化をはかつて居るが、概して同一の句形を反覆して單調である。題材は大體に於て勅撰集と同じであるが、更に「熊野參詣」「善光寺修行」「海道」の如き道行や、「伊勢物語」「源氏」「狹衣袖」の如き物語を取扱つたものや、「雙六」「蹴鞠」の如き遊戲に關するものなどがあつて、其の範圍は遙かに廣汎に亙つて居る。而して道行物に東國に關するものが多く、又一般に教訓的な色彩があり、神佛の靈驗に關する事を多く謠つて居るのは、此の時代の文學的傾向と一致するのである。かくて題材が大體和歌朗詠の範圍を出てゐないから、其の内容も亦自ら平安朝の文學趣味を中心とするのであつて、當時の實生活からは遠くかけ離れて居るのである。從つて詞章もまた和漢の故事成句を綴り合せたもので、首尾一貫した意義は殆どないのであつて、美辭麗句をつづれ錦の如く臚列して、實感の稀薄なものとなつて居る。要するに宴曲は形式詞章内容何れの方面から見ても、尙古趣味に立脚し衒學的臭味に充ちた作品であつて、創作的伎倆を缺いて居る。併し謠物の發達の上から見る時は、前代の雜藝から室町時代の謠曲や小歌への過渡期の產物として、注意すべきものである。

更闌夜閑にして　淸明たる月の夜　明月峽の曉　庾公が樓に登れば　千里に月明なり　殘月窓に傾て　宮漏正に長ければ　打や砧の萬聲　千度寢覺の床の上に　拂ひもあへぬ露霜を　片敷袖にや置副む　月冷く風秋なり　此和琴緩く調て　潭月に望むのみならじ　索々たる絃のひびき　松の嵐も通來て　深ては寒き霜夜の月を　候山に送なり　瀧水氷むせんで　ながるる事をやえざるらむ　月の出鹽や御津の濱松の　下枝をあらふ波間にかよふ白妙の　月や砂を照らむ　月は明石の浦の栖居　槇の戶口の月影　問ず語の夢もげに忘ぬ節とや成ぬらむ　いざ見に行む佐良科や　姨捨山淸見が關　廣澤住江難波方　蘆間にやどる夜半の月仰げば淸き久方の　月の都は九重の　雲の梯にすみわたる　露臺の月の在明　月花門の夕月夜　秋の宮人の袖のうへに　移ふ萩が花ずり　露もさながら色色の　玉かと見ゆる月影　いざよひに弓張　伏待の月　朧に霞む三日月　（宴曲集）

和讃も亦當時の歌謠の重要なものの一である。平安時代の和讃には、文學的價値のあるものが多かつたのであるが、末期になつて漸く衰退した。其の後鎌倉時代になると、新佛教が次々に起つて、民衆教化の一方便として盛に和讃を作つた爲に、再び興隆に向つたものである。殊に淨土眞宗・時宗に於ては、其の宗旨の性質上和讃に重きを置いたから、勝れたものが多い。淨土眞宗の和讃には宗祖親鸞上人の作と稱せられる、「淨土和讃」「高僧和讃」及び「正像末和讃」の所謂三帖和讃以下、多くのものがあるが、此等を悉く親鸞の作と信ずる事は出來ない。時宗を開いた一遍上人は殊に和讃を重ん

じ、また作歌に長じてゐたから、其の作は内容詞藻共に傑出したものが多い。『一遍上人語錄』に載せてある「別願和讚」と「百利口語」は、其の眞作と信ずべきものである。前者は七十句から成り、後者は百九十二句のものであつて、共にひたすら六字の名號を唱ふべき事を勸めたものである。左に掲げるのは「別願和讚」の一部である。

はやく萬事をなげすてて　一心に彌陀を賴みつつ
南無阿彌陀佛と息たゆる　これぞ思ひの限りなる
この時極樂世界より　彌陀觀音大勢至
無數の恒沙の大聖衆　行者のまへに顯現し
一時に御手を授けつつ　來迎引接たれ給ふ。

此の外になほ法然上人の作と傳へられる「阿彌陀和讚」、日蓮上人の作と稱せられる「法華和讚」、他阿上人の作といはれる「往生和讚」などがある。當時行はれた和讚は專ら敎化の具に供したものであるから、歌詞よりも寧ろ聲調を重んじたのであつて、優麗で一種の哀調を帶びた曲節が、一般民衆の心を引きつけたのである。從つて歌詞の文學的價値は平安時代のものに比して遙かに劣るのである。

其の他の歌曲

鎌倉時代に行はれた歌謠の主要なものは宴曲と和讚であるが、當時は邦樂並に劇の發生期であつて、語物としては平曲の發生があり、歌舞の方面には從來から行はれてゐた延年・田樂・猿樂・曲舞なども、此の時代に盛に行はれ、且つ何れも發達して劇的要素を取り入れたのである。此等の歌舞には歌謠や

科白があつたのであるが、後世に傳はつたものは極めて少く、且つ文學としては特に論ずる程のものはない。併し其の舞伎歌曲は後の能樂の源流となつて居るのであるから、劇發達の上からは注意すべきものである。

第四章　歷史物語と戰記物語

一　歷史物語

平安朝の末期に現れた『榮華物語』『大鏡』などの系統を承けて、平安末期若しくは鎌倉初期に著された歷史物語に『水鏡』がある。本書は『大鏡』の前を補ふ爲に、神武天皇から仁明天皇に至る五十四代の事蹟を編年體に略述したもので、三卷から成つて居る。其の冒頭に七十三になる老尼が、或年の秋葛城山で仙人に逢ひ、其の時聞き取つた古代の物語を、初瀨寺で通夜をしながら、一人の修業者に語るといふ趣向を立てて居るのは、明かに『大鏡』の構想を摸倣したのである。『水鏡』といふ名は跋文に、

大鏡の卷も凡夫のしわざなれば、佛の大圓智の鏡にはよも及び侍らじ。是も若し大鏡に思ひよそへ侍らば、其のかたち正しく見えずとも、などか水鏡の程は侍らざらんとてなん。

とあるので明かである。文章は女房の筆に擬してあるが、漢語佛語を多く用ひて居る所に時代の特徴が見える。其の記述は『扶桑略記』に據つた所が多いのであつて、文學としての價値は乏しい。佛教の

傳來、寺院の創立、高僧の逸話などのやうな佛教關係の記事が多く、また傳說奇談が多いのは、鎌倉時代の文學的傾向を示すものである。從來『大鏡』『今鏡』と合せて三鏡と稱し、また室町時代に成つた『增鏡』を加へて四鏡と呼んで居るが、文學的價値の最も劣るのは『水鏡』である。著者を『本朝書籍目錄』に「中山内府抄」と註記して居るが、眞僞は詳かでない。『水鏡』の外になほ『彌世繼（いやよつぎ）』と稱する歷史物語があつた事は『增鏡』にも見え、又『本朝書籍目錄』にも見えて居るが、後世散逸した。

愚管抄

平安末期以來の歷史物語の系統に屬し、而も鎌倉時代の新興文學の特徵を具へたものに、『愚管抄』『六代勝事記』などがある。『愚管抄』（史籍集覽國史大系所收）は『本朝書籍目錄』に「愚管抄三卷（慈鎭和尙抄）」とあるが、流布本は七卷から成つて居る。作者を慈鎭和尙とする說にはなほ研究の餘地がある。此の書は七卷本に就いて言へば、卷一・二は皇帝年代記であつて、神武天皇から順德天皇までの事蹟を略述し、（後に仲恭天皇及び後堀河天皇を共に今上として書き繼いで居る。）卷三から卷六までは年代記の別記であつて、太古から順德天皇の御代までの歷史を記し、卷七には主として治亂興亡に對する史論を記して居る。本書の作者は、王法佛法の衰へた末世を慷慨して執筆したのであつて、保元以後の戰亂に就いては特に詳密に記し、且つ時勢の變遷を論ずることに力を注いで居る。文章は漢語佛語を混用した和漢混淆文であるが、時に時代の通用語を交へて居るのは、通俗を旨としたのである。文學的價値は別として敍事立論に勝れて居り、文章も平易明快であつて、やがて起るべき戰記物語の前驅として注目すべきものである。

六代勝事記

『六代勝事記』一卷（群書類従所收）は著者を詳かにしない。卷頭に記した自傳によれば、著者は二條天皇の應保年間に生れ、高倉天皇の御代に宮廷に仕へ、六十餘年の間に七代の御卽位に逢ひ、晩年に遁世して貞應の今此の書を記したと云つて居る。此の書の內容は高倉・安德・後鳥羽・土御門・順德・後堀河の六朝に亙る治亂の跡を、自己の見聞を本として記述したもので、簡單ながら要を得て居る。冒頭に世の爲民の爲に此の書を記すといひ、又卷末に政道を論じた史論を添へて居るのを見ると、『愚管抄』の筆者と同じ目的の下に執筆したものと思はれる。文章は和漢の故事を引き、對句を列ね、漢語雅言を巧みに使驅して絢爛であつて、流布本『平家物語』に酷似して居る。

御舟よりおりて行路をかへりみさせ給へば、もしほのけぶりは東になびき、いさり火のほのほは胸よりもゆるかとおぼしめしあへぬまで、とりの聲もせぬふかき山の雪をしのぎてぞ、おちつかせ給ひける。おほよそ天子帝葉のとほき島にはなたれ、都のほとりにとぢられ給へる、いづれもいたはしく侍れど、北山の雪のそこ、南海の波のうへ、翠帳紅閨にことなるはにふのこやのあしすだれ、薫爐のけぶりにかはれる葦火たくやのあやしきにつけて、淸涼紫宸の金殿に花を見、月をながめし雲の上、そよや霓裳羽衣の曲をととのへ、龍笛鳳管を聞きしよなよな、三公九卿のただしかりし禮義、椒房羅綺のやさしかりしむつごと忘れ給はず。

五代帝王物語

『六代勝事記』と同類の書に『五代帝王物語』（一卷）（群書類従所收）がある。後堀河天皇から龜山天皇まで、五代の事を記して居るが、特に後嵯峨院の頃の花やかであつた有樣を追憶し讚美して居る。文章は勝事記よりも更に和文脈が勝つて居る。後宇多帝の御代の作であるが、作者は詳かでない。

二　戰記物語

一般に文學の沈衰した鎌倉時代に、獨り光彩を放つたのは、專ら戰亂の史實から素材を取つて、それに多少の脚色を加へた『保元物語』『平治物語』『平家物語』『源平盛衰記』等の戰記物語である。戰記物語は、『榮華物語』や『大鏡』などの和文で記された歷史物語と、『將門記』『純友追討記』、前九年の役の事を記した『陸奥話記』（一名陸奥物語）などの如き、和臭を帶びた漢文で記された合戰記とから、系統を引いて現れたものであるが、其の形式は『今昔物語集』などの說話文學の影響を受けて、局部的の事實を連續的に羅列し、且つ其の間に種々の挿話を織り込んで居るのである。而して『大鏡』や『榮華物語』などの作者が、過去の藤原氏極盛時代を追懷して執筆したと同じやうに、戰記物語もまた北條氏執權時代に、源平二氏の盛衰の有樣を回顧して書かれたのである。卽ち保元と平治とは源氏の殁落の有樣を主題とし、平家と盛衰記とは主として平氏の滅亡の狀態を寫して居るのであつて、孰れも其の隆盛よりも、寧ろ衰亡の悲哀を主題として取扱ひ、たとひ其の隆盛の樣を寫すにしても、なほ前代の英傑の末路と對比する事を忘れてゐない所に其の特徵がある。かくて戰記物語は、武人を主人公とし、其の敗慘滅亡の悲壯な事實を物語る事を主眼とするのではあるが、其の間に父子夫婦の間の別離の情や、主從間の壯烈な節義などを織り雜ぜて、感情と意志の衝突に苦悶する人情の美を描寫して居るのである。從つて文章は自ら其の內容に應ずる形式をとつて、雄麗簡勁にして一種の悲哀な調を帶びた、和

漢混淆の新文體を用ひて居るのである。而して此等の戰記物語は廣く國民に讀誦せられ、又は樂器に合せて語られて流布したものであるから、時代を經るに從つて改修補足せられ、文章も洗煉せられて、幾多の異本を派生したのである。『保元物語』『平治物語』の如きは、比較的異本の少いものであるけれども、猶二十餘種に上り、『平家物語』に至つては、更に數倍の多きに及んで居る。

九條公爵家舊藏平治物語
（學習院圖書館藏）

『保元物語』と『平治物語』は共に三卷より成り、文章も相似たものであつて、從來同じ作者の手に成つたものと考へられて居るから、今一括して取扱ふ事にする。此の二書には古くから多くの異本がある。水戸の『參考保元物語』（九卷）並に『參考平治物語』（六卷）（國書刊行會出

版の活版本があるには、異本五種を以つて流布本と對校してあるが、これに引かれてゐない異本で、しかも原本に最も近い系統に屬すると思はれるのは、九條公爵家舊藏の寫本、學習院所藏（圖版參照）及び琴平神社所藏の寫本である。此等は章段を分たず、順序の異同があり、又文章も著しく簡潔である。卽ち流布本は原作を增補し、潤色を加へ、また段を分ち、標題を附したものであつて、其の間に種々の異本を派生したのである。流布本には寛永元年出版の片假名本と、寛永三年及び貞享二年出版の繪入平假名本とがある。以下述べる所は流布本に就いてである。

作者

保元平治兩物語の作者に就いては、從來三說がある。第一は僧隆源の『醍醐雜抄』群書類從所收に見えて居る說であつて、平家・將門・保元・平治の四部共に中山中納言顯時の孫（左衞門佐盛隆の子）民部少輔時長葉室時長の作として居る。第二說は『參考保元物語』の凡例に見える中原師梁の著作とする說であつて、師梁は時長より凡そ百年後の人である。第三說は『安齋隨筆』に記してゐる多武峯僧正源喩の作とする說である。併し此等は何れも疑問とすべき點があるのであつて、容易に從ひ難いのである。姑く作者未詳とすべきであらう。次に此の二つの物語と『平家物語』との前後に就いても、從來說が二つに分れて居る。平家より先とする說は、最も廣く行はれて居るのであるが、藤岡作太郞博士は平家を先とし、鎌倉室町時代文學史野村八良氏も同樣の意見を有つて居られる。鎌倉時代文學新論

保元物語

さて『保元物語』は三十七段に分たれ、保元元年七月鳥羽院の崩御に始まり、元曆元年四月に、保元の亂の戰場であつた白河殿の址に崇德院を齋ひ祭るまで、前後二十八年に亙る事變を記して居るので

あるが、記事が特に詳密であるのは保元の亂後の事である。主要人物は崇德院を始め、左大臣賴長・源爲義・鎭西八郎爲朝等であるが、殊に中心人物として描かれたのは爲朝であつて、我が國無雙の英雄として寫し出されて居る。此の物語中で最も見るべき所は、新院軍評定の事、義朝白河殿夜討の事、新院御經沈附崩御の事などであるが、なほ乙若龜若等が誅せられる條と、爲義の北方入水の條とは、沈痛悲壯を極めて居る。保元の戰は上下名利に狂奔して、道義は地を掃つた時であるから、作者は單に事變の顚末を語るばかりでなく、至る所に德操の重んずべき事を論じて居る。

平治物語

次に『平治物語』は保元三年八月、後白河天皇の御讓位に始まり、正治元年正月に源賴朝が歿するまで、前後四十一年間の事を物語つて居るけれども、記述が詳密であるのは、平治元年十二月信賴義朝等が兵を擧げて以後、義朝が殺された後の遺子の處分に至るまでの、約一箇月許りの事である。『保元物語』に較べると年月も長く、事件も複雜であり、現れて來る人物も多數であるから、記事がともすれば散漫になり、又時として敍述が簡略に過ぎた所もあつて、一段と見劣りがする。敍事の勝れて居るのは、滑稽を盡した光賴參內の條と、戰場に於ける將士の扮裝活劇を紙上に活躍させた、待賢門の軍の條とであるが、なほ悲痛を極めた常盤の物語も出色の一段である。『保元物語』及び『平治物語』の文章は國文の中に漢語佛語を混へて遒勁簡潔であるから、戰場の爭奪修羅を記し、武勇節義を語るに適して居るが、又他の一面には、四六駢儷體に倣つた流麗な文體もあつて、戰爭場裏の人情を寫す事にも成功して居る。これを『平家物語』と比較する時は遙かに劣るけれども、戰記物語中の佳作たる

を失はない。要するに此の兩書は、歴史として見る時は史實の考證に粗漏があり、文學として見る時は假想的分子が乏しく、從つて興味が少い。其の價値は史上の著名な戰亂を、恰も繪卷物を見るやうに寫し出してゐる事と、內容にふさはしい新文章を創めた事とにあるのであつて、此の描寫と文章とは、後の戰記物語に多大の影響を與へて居る。なほ此の二つの物語が、後の小說戲曲などに幾多の題材を供給した事も注意すべき事である。

平治物語繪卷

保元平治の亂を描いた繪卷は幾らもあつたであらうが、現存するものは合戰繪卷中の逸品と稱せられる、傳住吉慶恩筆の『平治物語繪卷』三卷である。第一は三條殿燒討の卷であつて本多修理舊藏であるが、今は米國ボストン博物館の所藏となつて居る。第二は信西の卷であつて、岩崎男爵家に藏せられて居り、第三は六波羅行幸の卷であつて、伯爵松平直亮氏の所藏である。繪の筆者には異說があるが、鎌倉時代中期の名手の作であつて、盛壯豪快の氣象が滿ちて居り、人物の姿態表情も如實に寫されて居る。詞書は藤原家隆筆又は世尊寺行俊筆と稱せられて居るが、詳かでない。三條殿燒討の卷は凄慘壯絕を極めて居るのであつて、此の繪卷中で最も傑出して居るが、外國の有となつたのは惜しい事である。本書の卷頭に掲げたのは岩崎家所藏の信西の卷の一部であつて、『國華』に掲載されたものから轉載したのである。畫中に見える長刀に附けられた生首は、言ふまでもなく信西の首である。

平家物語

戰記物語の中で最も傑出した作品は『平家物語』である。『平家物語』は平曲によつて盛に語られた爲に、極めて多くの異本を生じた。流布本は十二卷本であるが、外に灌頂卷を別にした十三卷本も廣く行はれて居る。而して異本の中には、卷數・篇次・內容・文章等が流布本に比して大いに異なる所があつ

て、一見全く別種の作品であらうと思はれるものさへある。貞治二年に成つた『平家勘文錄』（續群書類従に收む）によれば、最初は三卷本であつたのが六卷本となり、次いで十二卷となり、更に三十六卷本もあつたと云ひ、また『醍醐雜抄』には資經作の平家は十二卷、時長作のは二十四卷であると云つて居るが、三卷本・六卷本は現存してゐない。山田孝雄博士の著『平家物語考』（文部省國語調査會刊行）には、異本七十種を擧げて十七類に分ち、更に三十種に別つてあるが、高木武博士は八十八種の異本を數へて居られる。現存する異本中で時代も古く且つ名高いのは、花園天皇の延慶二三年の頃、紀伊の根來寺で筆寫したものの轉寫なる延慶本（十二

平家卷第七
壽永二年二月廿二日　主上朝覲法住寺殿行幸
鳥羽院六歳ニテ朝覲行幸ノ有ケル其例トソ聞ヘシ
同廿三日宗盛從一位シ給フ同廿七日大臣ヲ辭申サル是ハ
兵亂ノ祈也南都北嶺ノ大衆熊野金峯山ノ僧徒
伊勢大神宮ノ神官ニ至ルマテ一向背平家源氏ニ心ヲ通シ
ケリ四方ニ成下　院宣諸國ヘ宣旨ヲ遣セトモ　院宣モ宣旨モ
皆平家ノ下知トノミ心得テ随付者ノ無リケリ

平家物語古寫本
（文學博士高野辰之氏藏）

卷）と、長門の赤間宮に傳來の長門本（二十卷）であるが、『源平盛衰記』（四十八卷）も亦平家の異本の一種と見做されて居る。延慶本はもと六卷本であつた形迹があり、其の書寫の時代は建禮門院の崩去

を去る八十餘年後であるから、異本中最も古いものであるが、最近發見せられた高野辰之博士所藏の古寫本(十二卷)は、なほそれよりも古いであらうと言はれて居る。(圖版參照)十二卷本は大體に於て古い姿を保存して居るのであつて、卷數の多いのは漸次之を增補したものであらうと思はれる。『平家物語』の作者に就いては、從來諸說が現れて未だ詳かでない。最もよく知られた說は次に揭げる『徒然草』の說である。

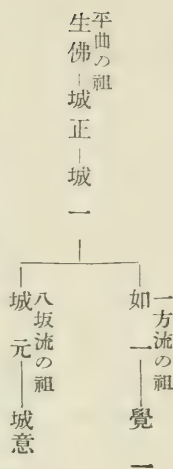
> 後鳥羽院の御時信濃前司行長稽古の譽ありけるが、樂府の御論義の番に召されて、七德の舞を二つ忘れたりければ、五德の冠者と異名をつきにけるを、心憂き事にして、學問をすてて遁世したりけるを、慈鎭和尚一藝あるものをば、下部までも召しおきて不便にせさせ給ひければ、此の信濃入道を扶持し給ひけり。此の行長入道平家物語を作りて、生佛といひける盲目に教へて語らせけり。さて山門の事を殊にゆゆしく書けり、九郎判官の事はくはしく知りて書き載せたり。蒲冠者の事はよく知らざりけるにや、多くの事どもを記しもらせり。武士の事弓馬のわざは、生佛東國の者にて武士に問ひ聞きて書かせけり。かの生佛が生れつきの聲を、今の琵琶法師は學びたるなり。

『平家物語』の基礎となつた原本が、後鳥羽院以後承久以前に成つたであらうといふ事は、近來の學者によつても唱へられてゐるのであるが、作者を行長とする說に對しては異說がある。卽ち『醍醐雜抄』には、二十四卷本は葉室大納言時長が、源光行の助力を得て書いたといふ說と、十二卷本は吉田資經が書いたとする說とを擧げて居る。時長は既に述べた通り、保元平治の作者にも擬せられて居るので

あるが、『尊卑分脈』にも時長に就いて「平家物語作者隨一也」と記して居る。其の他なほ異說があるのであるが、何れも根據が薄弱であるから、姑く比較的古い『徒然草』の說に從ふ外はないであらう。併し此の物語は一朝にして成つたものでないから、流布本が成立するまでには幾多の人の手を經て、漸次改刪せられた事は言ふまでもない。

琵琶法師
七十一番職人盡歌合所載

『平家物語』は琵琶に合せて語つたのであつて、これを平家琵琶又は平曲といつた。平曲を語る事を職業としたのは、主として盲目の琵琶法師である。琵琶法師は平安時代には天台宗に屬し、琵琶に合せて經文を誦唱したのであるが、後には俗耳を喜ばせる爲に、種々の歌曲を語るやうになつた。其の後鎌倉時代になつて、戰亂の物語を語つたのであるが、主とする所は『平家物語』であつたから、之を平曲と稱したのである。平曲の曲節は主として天台若しくは眞言の聲明から取つたのであるが、其の他從來の歌曲からも、それぞれの長所を取り入れて大成したのである。平曲の祖として知られて居るのは生佛であるが、其の後鎌倉時代の末に城一といふ名人が現れ、其の門弟の如一と城元に至つて二派に分れた。如一及び其の弟子の覺一（應安四年寂）の流派を一方流といひ、城元（文保二年寂）の流を汲むものを八坂流といつて、長く後世に傳承せられたが、後に更に分れて六流となつて江戶時

代に及んだ。平曲の詞章は、文才のある人によつて改修せられたのであるが、又琵琶法師の名人によつて改められた所も少くなからうと思はれる。

『平家物語』は中心人物たる平清盛の榮華を語る部分と、其の一族が源氏の爲に、はかなく滅亡して行く有樣を物語る部分とに大別して見る事が出來るのであるが、更に冒頭には平氏の先祖から忠盛に至るまでの事を簡短に記し、又末尾には平家滅亡後の有樣を語つて、六代御前の末路や建禮門院の薨御の事などを記して居る。之を年數の上からいへば、天承二年に行はれた得長壽院の供養に始まつて、建保元年に建禮門院が崩じ給ふまで、凡そ九十年許りの事變を記述して居るのである。併し其の間で記事が詳密であるのは、治承元年に西光成親等の陰謀が發覺した時から、平家一族が西海に沒落するまでの前後十年間である。而して此の物語の内容を貫く思想は、卷頭の「祇園精舍の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を現す。云々」の一節によつて最も明瞭に示されて居る。即ち無常觀と因果應報とは、此の物語を終始一貫して流れて居る中心思想である。主人公淸盛の絶大なる權勢と、强烈なる意氣とを以つてしても、なほ因果應報の理には敵し難く、無常の風に誘はれては、忽ち此の世を去らねばならぬ事を物語り、其の他の副主人公たる重盛を始めとして、平家の公達もまた悉く同一の運命を辿つて滅び去つた事を物語つて居る。而して西光・成親・俊寬・敦盛・義仲・義經・

妓王・妓女・葵前・小督・千手・横笛等に關する樣々な挿話もまた、平家の運命の縮圖として取扱はれて居るのも、全篇に漂ふ悲哀を更に深くして居る。次に作者は文事の爲に滅んだ平氏と、武力によつて榮えた源氏とを對比して、平家の一族が時勢の大なる潮流に押し流されて行く悲劇的運命に、滿腔の同情を寄せると共に、他の一面には平家の人々によつて維持せられた平安時代の貴族的文化が、其の滅亡と共に消滅した事に對して、絶大の愛惜を感じて居るのである。『平家物語』は右の如き思想によつて、史實を美化し、歷史を理想化して居るのであるが、其の文學的價値は更に文章の力によつて高められて居るのである。

『平家物語』の文章は其の記事に應じて變化の妙がある。大體から云へば、明快流麗な和漢混淆文であるが、部分的に見て行くと、情話や風流韻事を敍する時には優雅な擬古文を用ひ、合戰の修羅場を描く時には、漢語俗語を多く混へた簡勁な文體を用ひ、人物や事件を評論するに當つては、理智的な文を以つてし、悲哀な人生悲劇を寫し出す時には、佛語を多く加へて哀愁に滿ちた、しめやかな文を以つてして居る。又技巧の上から見ると、抒情的な記述には頻繁に對偶法を用ひ、又屢七五調を加へて、韻文の要素を多分に取り入れて居るが、悲壯な戰場の光景を寫す時には、遒勁簡潔な漢文調を加へると共に、音便・促音・撥音などを多く用ひて、聲調語感の助を借りて、壯烈な情景を如實に描き出して居る。要するに『平家物語』は原作から流布本に至るまでには、相當の歲月を經たのであつて、或は語られ或は讀まれて廣く流布する間に、國民的趣味に適合するやうに、漸次改删せられ補修せられ

て、遂に一大傑作となつたのである。かかる經路を經て成長を遂げた作品は、語物や謠物に其の例が少くないのであるが、中にも此の物語は、其の代表的な作品である。なほ『平家物語』は後の謠物・謠曲・幸若舞・淨瑠璃・歌舞伎などに、幾多の材料を供給したのであつて、國文學史上重要な位置を占めて居るのである。左に掲げるのは福原落の一節である。

文例

平家其夜は福原の舊里にて一夜をこそ明されけれ。折節秋のはじめの月は下の弓はりなり。深更空夜靜にして、旅寢の床の草枕、露も涙にあらそひて、只物のみぞ悲しき。いつ歸るべし共覺えねば、故入道相國の作りおき給ひし、春は花見の岡の御所、秋は月見の濱の御所、馬場殿・二階の棧敷殿、雪の御所・萱の御所、人々の家々、五條の大納言國綱卿の承つて造らせられし里内裏、いつしか三とせにあれはてて、秋の草門を閉ぢ、舊苔道をふさぐ。瓦に松生ひ垣に蔦しげり、臺かたぶいて苔むせり、松風のみや通ふらん。簾たえ閨あらはにて、月影のみぞさし入ける。明ければ主上を始奉つて、平家皆舟にとりのり、海にぞ浮び給ひける。都を出し程こそなけれ共、これも名殘は惜しかりけり。中にも但馬守經政は行幸に供奉すとて、

　御幸する末も都と思へども猶なぐさまぬ浪の上かな

昨日は東山の關の麓に衡をならべて十萬餘騎、けふは西海の浪の上にして纜をといて七千餘人、浦々島々過行ば、海士のたくもの夕けぶり、尾上の鹿の曉の聲、渚々によする波の音、袖にやどかる夜半の月、千草にすだく蟲の聲、すべて目に見耳にふるる事のひとつとして、哀を催し心をいたましめずといふ事なし。雲海沈々として青天既に暮なんとす。孤島に夕霧隔つつ、月海上にうかぶ。極浦の浪を分、鹽にひかれて行舟

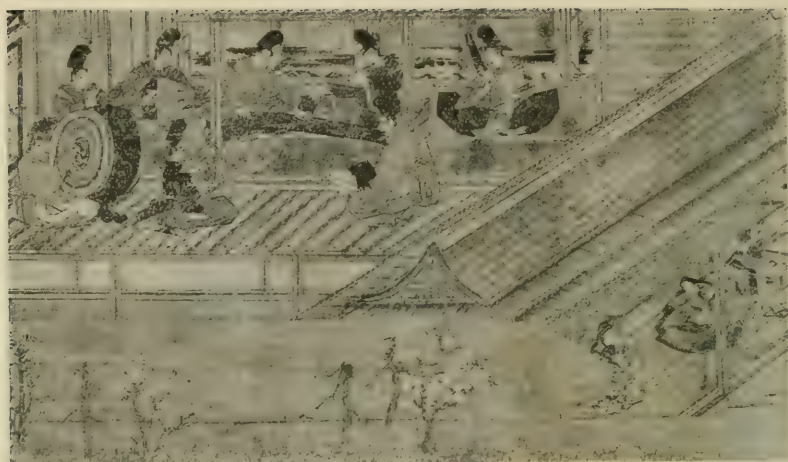
は、半天の雲にさかのぼる。日數ふれば都は山川程を隔てつゝ、遠國は又ちかくなる。はる〳〵きぬと思ふにも、つきせぬものは涙なり。浪の上にしろき鳥のむれゐるを見ては、彼ならんむかし在原の中將の、墨田河原にてこと問けん、名もむつまじき都鳥にやとあはれなり。壽永二年七月廿五日の卯の刻に、平家都を落はてぬ。（内閣文庫所藏八坂流古寫本より）

『源平盛衰記』（四十八卷）は『平家物語』と同一の題材を取扱つたものであるから、從來『平家物語』の異本の一種であると考へられて居る。例へば水戸の『參考源平盛衰記』には「盛衰記蓋平家物語別名也」と見えて居り、近くは山田孝雄博士の『平家物語考』にも『平家物語』の一種として擧げ、なほ藤岡作太郎博士・野村八良氏なども平家の異本と見做して居られる。併し一方には異說があつて、容易に決し難いのである。異本でないとする說の有力なものは、『湯土問答』湯淺常山の問に土肥經平の答へた物の說である。即ち經平は、信濃前司等が『平家物語』を書いた時より遙かに後に作られたもので、異本ではないと言つて居るのであるが、更に其の成立年代に就いては、（一）物語の中に巴女が元曆元年に二十八歲である事が見え、なほ寶治元年に九十一歲で歿した事が注してある事、（二）書中に順德天皇を佐渡院と記して居るのは順德なる御諡號がない頃に書かれたものである事、（三）賴經將軍を入道將軍と記して居る事などから推考して、寶治二年・三年・建長元年の三箇年の間に書かれたものであると言つて居る。これは一說として參考すべき說である。

假に『平家物語』の異本と見做す時は、流布本には極めて遠く、寧ろ延慶本・長門本などに近い。かく

て本書の內容は流布本平家よりも遙かに詳密であるが、記述に杜撰が多く、又往々記事の重複して居る所がある。其の他流布本平家に比して劣る點としては、物語を一貫する作者の思想が稍不鮮明である事、及び文章が概ね散文的であつて、聲調の美を缺いて居る事などを擧げ得るのである。但し此の物語には、流布本平家にない異說や、漏れた記事などを見る事が出來るのであるから、歷史の參考資料としては貴重すべきものである。要するに『源平盛衰記』は主として讀物として行はれた爲に、語物としての流布本平家のやうに、彫琢改刪を經る事なくして傳はつたのである。

第五章　擬古物語

前章に述べた戰記物語は、鎌倉時代に發生した新文學を代表するものであるが、一方にはまた尙古趣味の上に立つて、平安時代の文學形式を踏襲する擬古物語が作られて居る。これは主として貴族社會の、創作力を缺いた作家の筆に成つたものであるから、徒らに『源氏物語』其の他過去の文學を摸倣して單調冗漫に流れ、一讀して失望を感ぜしめるものが多いのである。なほ當時作られた作品も亦後世散逸したものが多いのであつて、現存するものは僅かに『住吉物語』『小夜衣』『石淸水物語』『松浦宮物語』『苔の衣』『風につれなき物語』『山路の露』の七篇である。此等は分量からいつても、內容から見ても、平安時代の物語に比して數等劣るのであるが、室町時代の小說に移る過渡期の作品であり、

住吉物語繪卷殘卷(福岡子爵所藏)國華に據る

又時代を反映してゐるものであるから、文學的價値は別として一應考察する必要がある。

右に擧げた作品の中で、最も廣く行はれたのは『住吉物語』(一卷)である。(二種の古活字本があり又『群書類從』にも收められて居る。)『住吉物語』の名は『枕草子』の「物語は」の段や、『源氏物語』の螢卷に見えて居るのであるが、現存のものは原本が散逸した後に、『落窪物語』を粉本として書いたものである。而して此の物語には流布本以外に、時代や系統を異にして發生した、多種多樣の異本がある。それ等の異本の中には、流布本を更に增補した複雜なものと、反對に極めて簡單な御伽草子風のものとがある。此等は何れも室町時代に成つたのである。流布本は內容文體などから見て鎌倉時代のものである事は明白であるが、これと並行して行はれた繪詞本は、『住吉物語繪卷』から系統を引いて、獨自の發展を遂げたらしいのであつて、文章に

かなりの相違がある。現存する『住吉物語』の成立年代に就いて、黒川春村の『古物語類字抄』に、文體や歌風などから考へて、承久の頃のものかと言つて居るのは、素より臆測に過ぎない。現在の所では『風葉和歌集』に此の物語の和歌の中四首が見えて居るから、此の集の成つた文永八年以前に作られたといふ事以上には、確かな事が言へないのである。但し白峯寺所藏の異本の如きを見ると、『風葉和歌集』所載の歌全部（『古物語類字抄』以來六首として居るが實は七首である。）を含んで居り、又『源氏物語』の螢卷に主計頭（流布本には主計助とある。）とあるのも、其の通りになつて居る。從つて今後古寫本が續々發見せられたならば、『源氏物語』以前の原作と流布本との關係も明瞭になり、又成立年代も自ら明かになるであらうと思はれる。

梗概

さて流布本『住吉物語』の梗概は次の通りである。中納言兼左衞門督なる人に、二人の北の方があつた。一人は宮腹の女で、一人の姫君を生んで他界し、今一人は諸大夫の女で、中の君と三の君の母となつてゐる。母宮に先立たれた姫君は卽ち此の物語の主人公であつて、乳母の女侍從が仕へて何くれとなく庇護してゐる。時に右大臣の子の四位の少將は、此の姫君の美貌を傳へ聞いて見ぬ戀に焦れ、或日意中を文に認めて屆けさせたが、返事はなかつた。繼母は此の事を洩れ聞いて妬心を起し、自分の腹の三の君を姫君の如く見せかけて、少將に近づかせたが、少將は後で人違ひと知つてやはりもとの姫君を慕つてゐた。其の後父の中納言は姫君を五節の舞姬に出さうとしてゐると、繼母はまた妬んで、無實の浮名を姫君に負はせて宮仕を斷念させ、更に中納言が姫君を左兵衞督と結婚させようとす

る時、再び奸計を弄して、姫君を年老いた主計助に盗み取らせようとした。かくと知つた姫君は大いに驚いて、故母宮の乳母で今は尼となつて住吉に住んで居るのをたよつて、姿を隠した。一方少將は姫君の行方を知りたさに長谷寺に參籠してゐると、一夜神の示現があつて姫君にめぐり逢ひ、やがて同棲した。其の後姫君との間に一男一女が生れたが、若君が七つ、姫君が五つになつて、袴著の儀式を擧げる時、其の席に招かれた中納言は、少將の北の方が實は行方を案じてゐた自分の女である事を知つて、嬉し涙で對面した。少將は其の後立身して關白にまで昇り、一家悉く榮えたのに反して、繼母は人々にも疎まれ、零落して世を終つた。

特質

『住吉物語』は右の梗概の通り、類型的な繼子いぢめの説話を取扱つたものであつて、『落窪物語』を摸倣した點が歴然としてゐるのであるが、鎌倉時代の作品としての特徴も亦極めて多い。主從の關係を重んじてゐる事、勸善懲惡の思想や念佛信仰などが見えて居る事、上流の姫君が自由に野遊をしてゐる事などは其の著しい點である。文章は中古の物語を摸倣してゐる所も多いが、佛語や時代語を取り入れて平易であり、殊に地の文に平安時代の物語に例のない「侍り」を用ひて居るのは、鎌倉時代に成立した證據となるのである。

小夜衣

『住吉物語』の系統に屬するもので、鎌倉時代の末若しくは室町時代に成つた物語に『小夜衣』一名『異本堤中納言物語』がある。三卷から成つて居る。按察使大納言の落胤である山里の姫君を中心として、帝と兵部卿宮との戀愛を寫したものであるが、其の間に姫君を虐待する大納言の北方と、姫君を

庇護する民部丞の妻とを出して、物語の結末には腹黒い北の方が零落したのに反して、兵部卿宮が東宮となり、やがて帝となるに及んで、姫君も皇后となつてめでたく榮え、民部丞の妻も命婦に召された事を語つて居る。卽ち此の物語は描寫の上には『源氏物語』を摸倣した所もあるが、構想は明かに『落窪物語』殊に『住吉物語』を學んだのである。なほ物語の末尾に、作者が教訓的な詞を添へて居るのは、御伽草子に極めて多い形式であつて、室町時代に成つたものであると見る說もある。題名は、兵部卿宮が心ならず關白の姫君と結婚した時、山里の姫君に「心にもあらずへだつる小夜衣重ねし袖のかわくまぞなき」以下三首の歌を贈つたのに對して、姫君からも小夜衣の語を含んだ返歌があつたといふのに基づくのである。一名を『異本堤中納言物語』といふのは、一本に按察使大納言を堤中納言として居るのに據るのであつて、平安時代末期の『堤中納言物語』と關係があるのではない。此の物語は寫本で傳はつてゐたが、近年龍谷大學國語國文學會から、『異本堤中納言物語』の名で活字本が刊行せられた。

石清水物語

次は『石清水物語』である。二卷であつて『續々群書類從』及び『日本文學大系』に收められて居る。奧書に「正三位物語」とも言つて居る本があるが、正三位は源氏繪合卷に「次に伊勢の物語に正三位を合せて」とあるものであつて、後世散逸したのであるから、石清水とは何等の關係もないのである。此の物語の和歌は『風葉和歌集』に載つて居るから、集の成つた文永八年以前のものである事は明かである。平出鏗二郎氏著『近古小說解題』に、物語の中に「三月づつ京にのぼりて大番と云事を勤むること、

昔より今に絶ぬ習なりければ」とあるのに據つて、大番の任期を三月に改めた寶治元年以後、文永八年以前の二十五年間に成つたものであると言つて居るのは、殆ど確定的な說である。此の物語の筋は極めて錯雜して居るのであるが、要するに主人公なる伊豫守の不倫な戀愛を中心として居るのであつて、題名は主人公が石淸水八幡宮に參籠して、靈夢を蒙つた記事に基づくのである。此の物語も過去の文學から多くの影響を受けて居るのであるが、時代の反映も亦極めて多いのである。主人公が關東武士であり、且つ遂げられぬ戀に煩悶して、遂に出家した事になつて居るのは、最も著しい點であるが、其の他に東國に於ける合戰の事を記して居り、又迷信に關する記事の多い事なども、時代の傾向を示して居る。文章は擬古的であつて概ね古雅であるが、佛語や時代語なども相當に交つて居り、なほ敍事は一體に冗漫であつて、中古の物語から餘程時代を下つた感じがするのである。

次の『松浦宮物語』一卷（寫本二卷）は『續群書類從』に收められて居る。此の物語は時代を藤原宮の御代とし、大納言兼中衞大將橘冬明の子、右少辨兼中衞少將を主人公として、異國に於ける夢幻的な事件を寫して居る。主人公は幼少の頃から才學に秀で、殊に管絃に長じてゐたが、失戀して遣唐副使となつて唐に渡つた。物語の名は船出をする時、其の母の飛鳥皇女が別を惜んで松浦まで見送り、そこに宮を作つて我が子の歸朝を待つた事から出て居る。辨の少將は其の後唐の帝や大后の寵を得たが、月明の夜高い山の樓に登つて、八十許りの老翁から琴を授けられ、又老翁の言葉に從つて、帝の妹華陽公主について祕曲を學んだが、帝の歿後には先帝の弟燕王の亂があつたので、大后の請によつて國難を

救つた。かくて歸朝の後初瀬に參籠すると、公主から授けられた水晶の玉の靈驗によつて、在唐の頃慕つてゐた公主に再會する事が出來、更に大后から授けられた鏡の箱を開くと、大后の姿が彷彿として現れたといふのである。

此の物語は右の梗概によつても明かであるやうに、中古の物語から種々の素材を得て居る。主人公が遣唐使となつて渡唐し其の后と契る筋は、『濱松中納言物語』から取つたのであり、仙人から琴を授かり、異國の人から祕曲を學んだといふのは、『宇津保物語』の俊蔭卷の摸倣である。其の他月明の夜を背景とする夢幻的な情景は、『竹取物語』を學んだのであらうと思はれる。此の物語の前半の文章は中古の物語を摸倣して古雅であり、挿入した歌も『古今集』以前の古歌に似てゐるのであるが、後半になると漢語を混へて、著しく新しみを見せて居る。かくて後半は別筆であるとも考へられるのであるが、藤岡博士は『鎌倉室町時代文學史』に於て、作者は初め古物語に擬するつもりであつたが、中途から其の煩ひに堪へられなくなつて、今めかしく記したのであらうと言つて居られる。此の物語にも亦鎌倉時代の特徴が散見する。其の著しい點を擧げれば、唐の反亂の事を記して居る事や、反軍の將宇文會を阿修羅の化身とし、これを征服する大后を第二天の天衆とし、辨の少將を天童としてゐるやうな、輪廻轉生說が見えて居る事などである。此の物語の奧書に「貞觀三年四月十八日染殿の院の西の對にて書きおはりぬ」とあるのは、素より信ずる事は出來ない。物語中の歌が『風葉和歌集』に採られて居る點から見て、文永八年以前の作である事は確かであるが、それ以上時代を精確に決める事は困

難である。

『苔の衣』以下の三篇はさまで勝れた作品でないから、簡單に解說して置かう。『苔の衣』は寫本五卷として傳はつて居る。未だ刊本はない。親子三代に亙る物語であつて、人物も筋も『源氏物語』を摸倣した痕が明白である。筋が冗長であり、文章も殊更に古語を用ひて而も拙劣であつて、勝れた作品とは言ひ難い。題號は、主人公の右大將が出家する時詠んだ歌に「色々にそめし袂を今

苔の衣（東京高等師範學校藏）

はとて苔の衣にたちぞかへつる」とある外、本文中にも所々に苔の衣の語があるのに基づいたのであ

る。此の作品にも石山の觀音に祈つて姬君をまうけた事などがあつて、鎌倉時代の宗教思想が現れて居り、なほ主として失意憂愁の樣を描寫して居る所にも時代の反映を見るのである。『古物語類字抄』には、此の作の詞づかひの上から見て、建長頃のものであらうと言つて居るが、直ちに信ずる事は出來ない。作中の歌百首ばかりある中で、『風葉和歌集』に載つてゐるのは僅かに二首である。

風につれなき物語

次に『風につれなき物語』は殘缺一卷が傳はつて居るのであつて、今『續々群書類從』に收められて居る。完本でないから詳細を知る事は出來ないが、宮廷を背景とする兄弟の兩大臣家の勢力爭を寫したもので、『源氏物語』を始め中古の物語を摸倣してゐる事は明かである。此の物語の歌は『風葉和歌集』に四十三首載つてゐるのであるが、現存する殘缺本には二十四首あつて、此の中で共通するのは僅かに五首である。黑川春村は此の點に著眼して、全部十卷ばかりあつたものかと言つて居る。此の物語の文章は素より擬古的であるが、情景の描寫に勝れた筆致を示して居るのであつて、作者は古文學に造詣の深い人であつたと思はれる。

山路の露

最後に『山路の露』は一卷であつて、『續群書類從』に收められて居る。『源氏物語』の終篇「夢の浮橋」の後を書き繼いだものである事は卷頭にも記されて居る。題號は薰大將と浮舟君との贈答歌に、「山路の露」の語があるのによつたのである。浮舟の後日物語として相當の成功を收めて居り、文章は源氏には到底及ばないけれども、當時の作としては捨て難い趣がある。作者を世尊寺伊行（近衞天皇朝から高倉天皇朝まで）の人とする說は假託であつて信じ難い。此の物語の名は『和歌色葉集』に載つてゐないし、又作中の歌は

『風葉和歌集』に見當らないから、文永八年以後に成つたものであらうと思はれる。尤も南北朝の花山院長親(耕雲)の『源氏小鏡』には、此の物語の事が見えて居るから、それ以前に成つた事は明かである。

短篇物語

以上述べた七篇は鎌倉時代に成つた物語の主なものであるが、此の外に實錄若しくは說話に近い短篇物語が幾らも現れたのである。現存するものでは、藤原信實の作と言はれる『繪師草紙』、(丹鶴叢書所收)繪卷で名高い『志貴山緣起繪詞』、(宇治拾遺物語の一節となつて居る。)新羅三郎義光が豐原時秋に祕曲を傳授した話を書いた『時秋物語』、(古今著聞集の一節にもある)『群書類從』所收の『鳴門中將物語』一名『なよ竹物語』(古今著聞集の一節にもある)の如きである。此等は繪卷や說話集に採錄せられて、後世に傳はつたのであるが、此の外に散逸したものは極めて多かつたであらう。かの『和歌色葉集』や『風葉和歌集』に物語の名ばかり殘つてゐるものの中にも、短篇であつた爲に散逸したものが少くなからうと思はれる。

無名草子

平安時代末期から鎌倉時代にかけての頃には、既に述べたやうに、過去の文藝に對する憧憬から擬古物語が作られたのであるが、それと共に一方では、中古文學に對する研究や評論の如きものも漸く起つたのである。『無名草子』一卷はかかる時代の產物として、最も注意すべきものである。これは物語の形式によつて中古文學を評論したものであつて、創作品ではないが、文學評論史上重要なものであるから、簡單に其の性質內容を說明して置かう。此の草子の成立年代に就いては、『古物語類字抄』の例言に、應永頃のものかと言つて居るが、藤岡博士は內容から見て、鎌倉時代初期のものとし、書

中に定家を定家の少將と記してゐる事、（定家は建仁二年に中將になつた）及び勅撰集を列擧して『新古今集』に及んでゐない事などから見て、『新古今集』以前に成立したものであると言つて居られる。（鎌倉室町時代文學史參看）又近來山岸徳平氏は藤岡博士の說を承けて更に詳細に考證した結果、建久の末年か、遲くも正治の初年に成つたものであるとし、更に作者に就いては、俊成の女京極局（後白河院女房）か、又は俊成が京極局の作に假託して記したのではなからうかと推測して居られる。（國語と國文學源氏物語號）此等の考證によつて、鎌倉時代初期の作である事は確定したのである。

組織及び內容

此の草子は『大鏡』の體裁に倣つたもので、八十三歲の老尼がある家に宿つて、隣の局に集まつてゐる女房の、過去の物語・勅撰集・家集・女流作者などの品定めをしてゐるのを聞くといふ仕組になつて居る。從つて文章や批評の態度なども女性的であつて、作者は恐らく女子であらうと思はれる。書中に批評せられた物語の中には、「淺茅が原の內侍」「浪路の姬君」「初雪」のやうに、『風葉和歌集』にも見えてゐないものもあるが、要するにすべて定家時代に存在した作品である。其の評論は各物語を部分的に（詞遣・結構・作意・描寫法など）批評すると共に、總括的にも評論を下して居るのであつて、其の批評は概ね正鵠を得て居り、態度も公平であつて、時に忌憚なき批評を加へて居る。かくて此の草子は、當時の文藝評論として貴重なものであるばかりでなく、散逸した中古の物語の梗概を知り、また其の文學としての價値を察する事が出來るのであつて、中古文學の研究上參考となる事が極めて多いのである。

第六章　說話文學

一　世俗說話

宇治拾遺物語

創作力が衰へて過去の物語の糟粕を嘗めてゐた時代に、說話集が續出したのは怪しむに足らぬ。鎌倉時代に成つた說話集は『今昔物語集』の系統を引いてゐるのであつて、其の中で最も優れてゐるのは『宇治拾遺物語』である。此の物語は十五卷から成り、百九十六の說話を收めてゐる。題名は『今昔物語集』の補遺の意味であるが、實は『今昔物語集』と重複してゐる說話が八十許りある。蓋し『今昔物語集』中の興味ある說話を基礎として、更に編者が見聞した話を加へて成つたものである。本書の編者は詳かでない。宇治大納言源隆國の作であるとするのは、根據のない說である。本書の成立年代に就いては、記事の考證によつて、後鳥羽院から順徳院の御代に至るまでの間に成り、其の後多少增補したものであらうと言はれてゐる。內容は『今昔物語集』と同じく、本朝の說話の外に漢土及び天竺の話をも含んで居るが、彼の如く說話を分類しないで、本朝のものを主として、諸所に異國のものを交へ記して居る。說話の種類は佛敎に關するものが多いのであるが、當時の巷談街說も多く取り入れて居るのであつて、此等によつて當時の庶民の生活を窺ふ事が出來る。傳說の中には「大童子鮭ぬすみたる事」の如き滑稽な話があり、「鼻長き僧の事」（今昔物語にもある）の如き奇談があり、「鬼に瘤取らるる事」「雀恩を

狩野守信筆　宇治拾遺物語繪巻（雀報恩事）
近衞公爵家藏（國華に據る）

報ゆる事」（後の舌切雀の童話の源）の如き童話めいたものがあり、又盜賊・狐怪などに關する話や、詩歌の德を讃歎する話などがあつて、種類は極めて多い。而して說話が一體に敎訓的傾向を帶びて居るのは、『十訓抄』の前驅と見るべきである。なほ此の書は『今昔物語集』のやうに、單に說話を說話として記すに止まらずして、發端から結末に至るまでの小說的な發展を記述して居るのは、注意すべき特色である。文章は漢語佛語を用ひ、又時代の通用語をも交へてゐるが、概して擬古的で流麗で、而も平易明快である。左に文體を示す爲に、短篇を一つ掲げて置く。

これも今は昔、田舍の兒の比叡の山へ登りたりけるが、櫻のめでたく咲きに咲きたりけるに、風の烈しく吹きけるを見て、この兒さめ

ざめと泣きけるを見て、僧のやはら寄りて「などかうは泣かせ給ふぞ。この花の散るを惜しう覺えさせ給ふか、櫻ははかなきものにて、かくほどなくうつろひ候ふなり。されどもさのみぞさぶらふ。」と慰めければ、「櫻の散らんはあながちにいかがせん、苦しからず。我てての作りたる麥の花散りて、實のいらざらんを思ふが佗しき。」といひて、さくりあげてよよと泣きけるはうたてしやな。

『十訓抄』は三卷十篇から成つて居る。其の序によれば、建長四年の冬に成つたのであるが、作者は詳かでない。作者に就いては、『古今著聞集』の著者橘成季とするもの、菅原爲長とするもの、（清巖茶話の說）及び妙覺寺本の奥書に「或人云六波羅二﨟左衞門入道作云々」とあるものの三說があるが、前二說の信ずべからざる事は既に定說であり、第三說は信ずべきもののやうであるが、其の姓名傳記を詳かにし難い。此の書の主意は書名にも示されて居るが、序文によつて一層明瞭である。卽ち著者が見聞した古今の物語を種として、「よき方をば是をすすめ、惡しきすぢをば是を誡めつつ、未だ此の道を學び知らざらん少年のたぐひをして、心をつくる便となさしめんため」に著したのであつて、教訓を目的とする說話集である。『十訓抄』の名は、十箇條の綱目によつて說話を分類してゐるのに基づくのであつて、其の十綱は佛書の『十善業道經』の十綱に倣つたものであると言はれて居る。（十訓抄詳解附錄藤岡繼平氏十訓抄考參照）本書所收の說話は、『今昔物語集』『宇治拾遺物語』を始めとして、中古の歌物語などから得て居るのであつて、我が國のものが最も多いのであるが、儒佛に關する外來の說話も少くない。文章は漢語佛語を交へた當時の普通文であるが、圓熟した筆とは言ひ難い。

古今著聞集

『古今著聞集』は二十卷あつて、神祇・釋教以下魚蟲禽獸に至るまでの三十篇に類別してある。當時現れた同類の說話文學中の最大のものである。其の序文によれば、『宇治大納言物語』『江談抄』などの後を繼いで、世に遺つてゐる說話を集めたのである。而して序の末に「于時建長六年應鐘中旬、散木士橘南袁愨、課小童猥敍大較而已」とあるによれば、後深草天皇の建長六年に成つたので、作者は橘成季（系圖傳記未詳）である。南袁は南里須袁の上下の二字を取つたのである。此の書も亦諸書から古今の說話を蒐集したものであるが、殊に『十訓抄』と密接な關係がある。卽ち本書も亦說話を細別し、各條の初に簡單に著者の意のある所を記し、なほ末尾にも敎訓的な一言を添へてゐる。此の集には古傳說もあるが、最も多いのは著者の見聞に入つた同時代の說話である。詩歌管絃や武技諸道に關する說話に富んで居るのは、他の說話集と同じであるが、此の書には博奕・偸盜・宿執・鬭爭・興言・利口・恠異・變化などの目を設けて、當時の社會の反面を直寫して居るのは、時代を知るべき好資料である。强盜の棟梁であつた大殿小殿の話の如きは、長篇であり敍事も巧みであつて、出色の一段である。文章は漢語を用ひる事は比較的に少く、屢俗語をも交へて、流暢であり且つ自在である。

古事談

以上述べた三部は、鎌倉時代の說話文學の主要なものであるが、此の外になほ『古事談』『續古事談』『今物語』『蒙求和歌』『唐鏡』などがある。『唐物語』も此の時代のものであるとする說もあるが、此は旣に平安時代末期に述べて置いた。『古事談』は六卷あつて、『丹鶴叢書』に收められて居る。長短樣々な古事傳說を、王道・后宮・臣節・僧行・勇士・神社・佛寺・亭宅・諸道の九つに類別して居るのであるが、最も

多いのは中古以來の文藝に關する逸話傳說である。なほ時代の反映として注意すべきは、佛教若しくは陰陽道の迷信に關する說話の多い事である。作者に就いては、『本朝書籍目錄』に源顯兼（建保三年歿五十六）の作として居る。顯兼は具平親王の御子源師房の裔である。此の書は『今昔物語集』『江談抄』『今鏡』『百練抄』其の他公卿の日記などから抄出したものに、なほ作者の見聞に入つたものを加へたのである。文章は素朴な漢文體であつて、雅趣に乏しい。

續古事談

『續古事談』（群書類從所收）も元は六卷あつたが、今は卷三が缺けて居る。說話の分類は大體『古事談』と同じであるが、卷六に漢朝の部を設けたのは異なる點である。卷末に「建保七年（此の年改元して承久といふ）卯月の下の三日これを記す」とあるが、作者の名は記されて居ない。源顯兼の作とする說があるけれども、顯兼は建保三年に歿したのであるから、勿論從ひ難い。此の書は『古事談』の續篇として作られたもののやうに考へられるけれども、『古事談』に收めてあるものが可なり多く見えて居る。文章は流麗な和文體であつて、『古事談』と同じ作者の手に成つたものでない事は、文體を見ても明瞭である。

今物語

『今物語』（一卷）（群書類從所收）は從來前右京權大夫信實朝臣の作と言はれて居るが、なほ疑問である。信實（文永二年歿す）は爲家の從兄弟で、辨内侍等の父である。定家の門に學んだ歌人であり、又父の隆信と共に畫名の高い人で、北野天神緣起や華嚴緣起の筆者として世に知られて居る。本書は主として歌人の逸話を集めたものであつて、賴政・忠度・實定・定家・家隆・西行等に關する、人口に膾炙する多くの佳話を載せて居る。從つて他の說話集と異なつて寧ろ實錄に近いものである。文章は『宇治拾遺物語』に似た流麗

な和文である。『仁和寺書籍目錄』に十七册と記してゐるのに據れば、現存するは其の零本である。

蒙求和歌

『蒙求和歌』と次の『唐鏡』とは、共に支那の古史傳説を集めたものである。『蒙求和歌』（十四卷）（續群書類從に收む）は其の序に「于時元久甲子之歳初秋壬申之日、朝議大夫源光行、閑居暇慨然記之云爾」とあるから

源光行

源光行が元久元年に書いた事は明かである。光行（仁治寛治の頃歿か）は漢學を大學頭文章博士藤原孝範（永範の子）に學び、また歌文の才があつた。『源氏物語』の註釋書『水原抄』は、光行の草案を其の子親行が完成したものである。『蒙求和歌』の跋文に「爲教幼稚之兒、抄出兩三之書帙、所謂撰蒙求之中敍十四卷、抽百詠之句、連十二卷、述樂府之章、分五箇卷、各々和其詞、軸々綴其詠是也。」とあるのに據れば、光行は『蒙求』の外に『李嶠百詠』や白樂天の樂府なども和譯したのである。『李嶠百詠』を和歌に詠んだのは現存する『百詠和歌』（十二卷）であつて『續群書類從』に收められて居るが、樂府の方は傳はつてゐるか否かを知らない。なほ野村八良氏の說によれば、朗詠の句を和歌に詠んだ『朗詠百首』（一卷）（群書類從所收）も光行の作である。（鎌倉時代文學新論）『百詠和歌』や『朗詠百首』は純然たる和歌であるが、『蒙求和歌』は寧ろ說話文學として見るべきものである。

『蒙求』は唐の李瀚の著である。經史の中から故事の類似したものを選んで兩々屬對せしめ、四字句の韻語で標題を記したもので、もと童幼の教科書とする目的で作られたのである。此の書が平安初期に既に行はれた事は、『三代實錄』元慶二年八月の條に、貞保親王（清和天皇皇子）が橘廣相に就いて、始めて之を學ばれた事が見えて居るので明かである。さて光行が『蒙求和歌』以下の作を試みたのは、野村八良

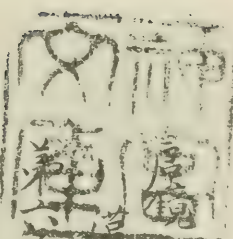
氏が言はれたやうに、大江千里の『句題和歌』（一五二頁参照）に倣つたのであらう。『蒙求和歌』は『蒙求』中の故事を春・夏・秋・冬・戀・祝・旅・閑居・懷舊・述懷・哀傷・管絃・酒・雜の十四部に分類して、其の詞を假名文に譯し、なほ各の末尾に其の故事を詠んだ和歌を添へて居る。其の和歌にも見るべきものがあるが、殊に文章は簡潔暢達の和漢折衷體であつて、よく原意を傳へて居る。左に其の一例を引いて見よう。

子猷尋戴

晉ノ王羲之ガ第四ノ子、王子猷ト戴安道トハ多年ノトモナリ。琴詩酒ノアソビニハ、ムシロヲヒトツニシ、雪月花ノナガメニハ、ソデヲツラネズト云コトナシ。子猷山陰ニコモリヰタルニ、ヨルオホキニ雪フレリケリ。子猷ネブリサメテ、酒ヲクミテ四望スルニ、景氣皎然タリ。ヒトリ心ヲスマシツツ、左思ガ招隱ノ詩ヲ詠ジテ、剡縣ノ戴安道ヲ思ヘリ。卽一小船ニサホサシテ剡縣ニオモムク。沙堤雪白クシテ水面ニ月浮、船ノウチノナガメ、浪ノ上ノアハレ、ヒトツトシテ心ヲクダカズト云事ナシ。アクガレユクホドニ、戴安道ガ家ノ門ノホトリニイタリヌ。五夜マサニアケムトシテ、萬感スデニツキニケレバ、ムナシクコギカヘリシヲ、アハデハイカニトキコユレドモ、雪月ノ興ニノリテキタリキ。興ツキテカヘリヌ、ナムゾカナラズシモ戴安道ニアハムトゾコタヘケル。

何カマタアハデカヘルト思フベキ月ト雪トハ友ナラヌカハ　（蒙求和歌第七）

最後の『唐鏡』は支那の古史傳說を平明な假名文で記したものであつて、『本朝書籍目錄』に據れば、もと十卷あつたのである。現存する寫本には、內閣文庫・神宮文庫・水戸彰考館などの藏本があるが、何

れも終の數卷が缺けて居る。即ち前の二本は卷五までであり、彰考館藏本は卷六までである。內閣文庫本及びこれを寫した神宮文庫本は、伏羲氏から夏殷周を經て、後漢の獻帝までの歷史傳說を記して居り、彰考館本も卷五まではこれと同じであつて、卷六には魏呉蜀から餘晉恭までの事蹟を記して居る。其の記事の特徴として注意すべき事は、支那の歷史傳說に日本の說話または俗說を結び付けて居る事であつて、殊に佛說に關するものが多い。例へば周の靈王の太子王子晉は、緱嶺で仙人になり、衆生教化の爲に日本に跡を垂れて熊野權現となつたといひ、また此の時代に生れた孔

唐鏡（神宮文庫所藏）

子は、儒童菩薩の權化であり、其の弟子の顏回は光淨菩薩であるといふが如きである。其の他周の惠王の十七年辛酉は、日本の神武天皇御卽位の年に當り、秦の始皇帝が卽位した乙卯の年は、我が孝靈天皇の四十四年に相當するといふやうな年代の對照があり、又後漢の孝靈帝の時、宮殿の背後にある槐の樹が自然に拔けて逆さまに立つたといひ、或は洛陽の女子が頭の二つある兒を産み、馬が人を産んだといふやうな奇談も可なり多い。稍長い話で文章も讀むに足るのは、漢高祖の條であつて、樊噲や項羽の話が巧みに物語つてある。『本朝書籍目錄』には藤原茂範の作として居る。茂範は大學頭文章博士孝範の孫で、經範の子であつて、伏見天皇の永仁二年に年五十九で出家した人である。此の書の卷頭に、諸寺諸山の淨場に百日參籠して、高僧の物語を聞き取つて記したと言つて居るのは、『大鏡』以下の歷史物語の形式に倣つたのであり、文章も三鏡に似せて居る。圖版に示したのは神宮文庫所藏の他の一本であつて、第四卷だけの零本である。此の本は爲氏の筆寫本を摸寫したもので、屋代弘賢の舊藏である。

二 佛教說話

以上述べた說話集とは別に、佛教說話集と稱すべき一群の作品がある。此等は平安時代の末期に續出した高僧傳・往生傳（多くは漢文で記されて居る。）などの系統を引いたもので、主として佛教の教理を說く方便としたものである。現存する主要なものは『寶物集』『撰集抄』『發心集』『閑居友』『私聚百

寶物集

因緣集』『沙石集』などである。此等の作者名はそれぞれ傳はつて居るけれども、疑問とすべきものが尠くない。

『寶物集』は平判官康賴入道の作と傳へられて居る。『平家物語』の少將都還の段に、「康賴入道は、東山雙林寺に我が山莊のありければ、それに落著いて、(中略)やがてそこに籠居して、憂かりし昔を思ひやり、寶物集と云ふ物語を書きけるとぞ聞えし。」と見え、又『本朝書籍目錄』にも康賴の作として居るから、康賴の筆に成つたのであらう。刊本には三卷本と、それを增補した七卷本とがあるが、原作の面目は宮內省圖書寮所藏の傳康賴自筆の卷子本(一軸)によつて窺ふ事が出來る。此の寫本は首尾を缺いて居り、且つ轉寫本であるらしい點があるけれども、書風字體などには鎌倉時代の古色があるのであつて、研究上貴重な資料である。此の本は古典保存會複製本の外に、續群書類從及び大日本佛教全書にも收められて居る。さて本書は、三卷本續群書類從に收むに就いて言へば、先づ卷頭には、康賴の山莊を訪れた舊友が、康賴が都を出た後、世の中がとかく騷がしく、嵯峨の釋迦が天竺へ歸られるとの風說があるので、都人はかの寺に雲集してゐると語り聞かせたので、康賴もやがて詣でた事を記して序として居る。次いで本文に入ると、其の釋迦堂に通夜をしてゐる人々が、人の寶とすべき物に就いて語り合ふ中に、畢竟佛法こそ無上の寶であるといふ結論に達し、居合はせた一人の聖が、三寶・六道・十二門などを說き聞かせる中に、夜も明けたので皆々歸らうとすると、かの僧も人に紛れて姿を消したといふ一篇の物語となつて居る。即ち此の書の仕組は、明かに『大鏡』に倣つて居るのであるが、內容は問答の形式によつて、專ら佛法の教理を說いて居るの

である。而して個々の話は日本及び支那の佛法に因緣のある說話であるから、佛教說話集の一種と見る事が出來る。かくて本書は文學としての價値は乏しいのであるが、文章は素朴な中に捨て難い所がある。

『撰集抄』は九卷あつて、西行法師の述作と云はれて居るが、信じ難い點が多い。卷末に「于時壽永二年む月の下の弓張に讚州善通寺の方丈の庵にして記し畢りぬ」とあるけれども、此の年は西行六十六歲（建久元年七十三歲寂とする說による）の時に當るのであつて、本書の序に「過ぎにし方四十餘年の霜を戴き云々」とあるのと一致しない。其の他內容に西行以後の事が見えて居り、又文體用語の上から見ても、西行の作とは思はれない點が多いのである。恐らく西行以後の人が、在來の高僧傳・往生傳及び西行の逸話などを資料として書いたものであらう。寫本の外に古刊本には嵯峨本・慶安三年版本などがあり、また『續群書類從』にも收められて居る。段の分け方は傳本によつて相違して居るが、序によればもと八十章であつたのである。（續群書類從本は九十九段）流布の版本に百段以上あるのは、章段の分け方の相違の外に、後人の加筆があると見られて居る。內容は主として古來の高僧に關する說話を借りて、無常迅速の穢土を解脫し、淨土を欣求すべき事を說いて居るのであるが、又詩歌管絃などの文藝に關する說話、特に歌物語も尠くない。此の書は元來西行に假託して作つたものであるから、西行遍歷中の逸話奇談などが少くないのであつて、此等は後世西行を取扱つた作品の材料に取られて、廣く世に流布したのである。白峯陵に參拜した話や、江口遊女の事などは其の著しい例である。文章は時流を汲んで、修飾の末に意

を用ひて生氣に乏しい。

發心集

『發心集』は古くから鴨長明の作とせられ、刊本にも『長明發心集』と題して居る。『本朝書籍目錄』に三卷とあるが、刊本は八卷である。三卷本は原作であつて、後世これを增補したのが八卷本であると見る說がある。刊本には慶安四年版本（片假名本）と、寬文十年刊本（平假名繪入本）とあつて、前者は『大日本佛敎全書』に收められ、後者は『史籍集覽』に採られて居る。本書の內容は、高僧の行狀や、遁世者の發心往生に關する事蹟、若しくは說話を廣く擧げて、欣求淨土を敎へて居るのであるが、中には文藝の諸道に關する話もある。『撰集抄』と同じく、主として過去の往生傳から資料を得たものであつて、作者を長明とする說にはなほ疑問がある。文章は擬古的であるが、平明で文飾も少く、『方丈記』と同じ作者の筆になつたものとは思はれない。

閑居友

『閑居友』（二卷）は刊本の外に『續群書類從』にも收められて居る。慈鎭和尙の作と稱せられて居るが、安藤爲章の『年山紀聞』に揭げてゐる契沖の說には、明慧上人と親交のあつた慶政上人の作として居る。姑く作者未詳とすべきであらう。書中に『發心集』の事が見えて居るから、それより後のものである事は明かである。內容は『發心集』と同じく、主として發心往生に關する話を集めたものであつて、文章は『撰集抄』に類似して居る。

私聚百因緣集

『私聚百因緣集』（九卷）は僧住信が正嘉元年（四十八歲）に常陸で撰したものである。（序文に據る）承應二年の版本があり、又『大日本佛敎全書』に收められて居る。組織は『今昔物語集』に倣つて、天竺・唐土・和

朝の三部に分ち、主として極樂往生に關する說話を收めて居る。說話には一々出典を記し、引用文の多くは原本の儘に記して居る。文章は『今昔物語集』に近いものであつて、文學的作品ではないが、室町時代の御伽草子の材料となつた說話も多いのであるから、佛教說話集としては注意すべきものである。

『沙石集』は十卷から成り、無住法師(大圓國師)の著といはれて居る。刊本には慶長十年の古活字本以下數種があるが、寫本で最も古いのは、京都帝國大學圖書館所藏の長享年間の寫本で、これに次ぐものは內閣文庫の天文年中の寫本である。無住法師は相州鎌倉に生れ、梶原景時の末孫であるといふ。十八歲の時剃髮して一圓といひ、南都北嶺を始め偏く各地に遊學して、顯密禪律等諸宗の敎義に通じ、尾張國木賀崎に靈鷲山長母寺を創建して、四十餘年をその寺に送り、正和元年に八十七歲で示寂した。『沙石集』は其の序文にも記してゐるやうに、佛敎の妙理を平易に傳へる方便として、卑近な物語を集めたもので、弘安二年の夏に成つたのである。題號の由來は序文中に、「彼の金を求むる者は沙をあつめてこれをとり、玉を翫ぶ類は石をひろひて是を瑩く、仍て沙石集と名づく。」とあるので明かである。所收の話は百二十五條であつて、類別的に集められて居る。『今昔物語集』『發心集』『私聚百因緣集』などから取つたものもあるが、作者の見聞に觸れた實話奇談も尠くない。佛敎關係の例話が主となつて居る事は勿論であるが、其の他に和歌連歌などに關する文學談も多く載つて居る。本書の特色として著しい事は、作者が諸宗に廣く通じた人である爲に、『寶物集』『發心集』などが專ら九品

往生を説いて居るのと異なつて、諸宗の教理を公平に說いて居る事であるが、更に文學としての價値の方面から見ると、作者が東國出身の人であつた關係から、東國に於ける多くの實話を收錄して居る事、及び經文や民間說話などから採つた滑稽談や童話などの多い事を擧げ得るのである。本書の例話の中には『徒然草』に取られてゐるものもあり、又滑稽談は狂言や笑話に材料を供給したのであつて、後の文學に及ぼした影響も少くないのである。文章は時代語俗語を交へ、眞率平明であつて、類書中では最も特色がある。要するに『沙石集』は當時の佛教文學中で最も見るべきものであつて、後世廣く讀まれたのも當然である。左に文例を示す爲に滑稽談の一を抄出して置く。

常州ノ東城寺ニ圓幸教王房ノ法橋トテ、寺法師ノ學匠有ケリ。他事ナク正教ニ眼ヲサラシ、顯密ノ行怠リナキ上人也。世間ノ事ハ無下ニ無沙汰也。田舍ノ習ナレバ、田ニ入レントテ小法師糞(コエ)ヲ馬ニ付テ行ヲ見テ、禁制シテイハク、「ナニシニ其糞ヲモツゾ。ヤレ、法師ガ祈リニ仁王經ヲ讀ゾ。馬ノ糞ニヲトル仁王經シモアランヤ」トゾ云ケル。又或時弟子共ニ語リテ云ク、「世間ノ人愚ニシテ物ノ計(ハカリゴト)不覺也。法師興アル事案ジ出シタリ。杵一ニテ臼二ツ搗ベキ樣アリ。一ノ臼ハ常ノゴトク置キ、一ノ臼ハ空ニシモニ向テツルベシ。サテ杵ヲアゲ下ダサンニ、二ノ臼ヲツクベシ」トイフ。弟子ノ云ク、「上ノ臼ニハ物ガタマリ候ベクバコソ、ナニヲツキ候ベキ」トイヘバ、「此難コソアリケレ」トテツマリニケリ。（卷五上）

無住法師の述作にはなほ『雜談集』十卷『聖財集』三卷『妻鏡』一卷等がある。此等の中で『沙石集』に次いで見るべきものは『雜談集』である。これは嘉元二年、作者七十九歲の著であつて、晚年の述懷と法

話を集めたものであるが、內容文章共に『沙石集』に類似して居る。

以上述べた佛教說話集は、何れも新興佛教の民衆教化の爲に作られたもので、此等に現れた佛教思想は、平安時代の貴族的佛教に比して、著しく平易化し實際化して居り、又例話に現れた國民生活には、當時の世相を窺ふべき資料を豐富に持つて居る。更に說話としては、後の文學に多くの材料を供給して居るのであつて、鎌倉時代の新興文學中の重要なものの一である。

鎌倉時代の佛教文學には說話集の外に、法然上人・親鸞上人・日蓮上人・一遍上人・他阿上人などの法語遺文の類があり、又繪詞には『法然上人行狀畫圖』や『一遍聖繪』の詞書などがある。概ね大部のものであつて、文章としても見るべきものがあるが、今は省略して、只日蓮の文章に就いて一言して置く。日蓮上人の文章は、和漢佛語を自由に使驅し、譬喩が巧妙であつて、高僧の述作中で最も傑出して居る。蓋し上人は意氣壯烈の人であつたから、一語一句の上にも其の人格が現れて居るのであるが、其の消息文を見ると、一面にまた情の人であつた事を知るのである。其の遺文集には日明の編んだ『類纂高祖遺文錄』三十卷がある。

第七章　隨筆日記紀行

鎌倉時代に現れた隨筆・日記・紀行が、何れも當時の文學に共通する特質を帶びて居る事は言ふまで

もないが、其の中にも自ら二種の別がある。一は平安文學の系統を引いた傳統的なもので、其の文章は擬古的であり、他の一は佛教思想の著しい作品で、其の文體は和漢混淆文である。『十六夜日記』『轉寢（うたたね）の記』『辨內侍日記』『中務內侍日記』などは、女子の書いたもので前者に屬し、『方丈記』『海道記』『東關紀行』等は、男子の作品であつて後者に屬して居る。以下此の順序を追つて解說しよう。

十六夜日記

『十六夜日記』は藤原爲家の後室阿佛尼（北林禪尼）の紀行である。阿佛尼は平維茂の後裔佐渡守平度繁の女で、順德院の皇后（後堀河院の准母）安嘉門院に仕へて四條又は右衞門佐と呼ばれ、後に爲家に嫁して爲相爲守等を生んだ。建治元年に爲家が世を去つた時、先妻（宇都宮賴綱女）の腹に生れた爲氏は既に五十四歲であつたが、爲相は僅かに十三歲であつた。爲氏は父の歿後に、其の遺言によつて爲相の所領と定められた播磨の細川莊（近江の小野莊と共に和歌所の領として俊成以來長子が相續してゐた。）を讓らなかつたので、阿佛尼は我が子の愛に引かれて、老の身をも顧みず鎌倉に下つて、幕府の裁決を仰いだ。『十六夜日記』は其の時の旅日記である。北條時鄰の考證（十六夜日記殘月抄總論所見）によれば、下向したのは建治三年十月であつて、此の日記を記したのは弘安三年である。作者が鎌倉に到著した時は、元寇の亂があつた爲に訴訟は捗らず、遂に裁決を見ずして弘安六年の頃かの地で客死し、次いで弘安九年には爲氏も歿したのである。併し訴訟は其の後も爲氏の子爲世と爲相との間に繼續せられ、正和二年に至つて漸く爲相の勝訴と決した。此の間に爲相は屢京鎌倉の間を往來したのであつて、彼が鎌倉で生活してゐた事は、其の家集を『藤谷和歌集』（藤谷は鎌倉の藤ケ谷に因る）といつて居るのを見ても察せられるが、なほ

『夫木和歌抄』に載せてゐる爲相の歌の詞書や左註に、「路次記」「海道宿次百首」「海道名所歌」の名があるのを見て明白である。さて日記を十六夜と名づけたのは、作者が京を出發したのが十月十六日の夜であつた爲である。

特徴

此の日記は二部に分つて見る事が出來る。第一部は冒頭に、父の遺言に違背する爲氏を恨み、細川荘の由來を述べた後、首途に當つての親子の哀別離苦の情を述べて道中記に入つて居る。道中記は粟田口から車を返した事から始まり、十三宿十四日で鎌倉に到着するまでの途上の風物を簡潔に敍する傍、屢感慨の情を洩らして居る。第二部は鎌倉の寓居の有樣を簡短に述べた後、都の舊知との消息や贈答の事などを記し、最後に述懐の長歌一首を添へて居る。文章は『土佐日記』や『更級日記』などに倣つて、優麗であり簡潔であつて、時に情景の躍如たる妙味があるが、槪して情趣に乏しいのは、作者の心が現實の苦悶に囚はれてゐた爲であらう。併し一體に張り切つた力と燃え立つやうな熱情があり、殊に愛兒の上を思ふ慈母の切情が一貫して流れてゐるのは、此の日記の特色である。作者は當時名高い歌人であつて、其の作歌は『續古今和歌集』以下の勅撰集に四十餘首入れられて居り、又『安嘉門院四條百首』(續群書類從に收む)などが傳はつて居る。而して此の日記中にも九十首に近い歌を挿入して居るのであるが、多くは歌枕を詠み込むことを主眼としたものであつて、歌としてはさまで勝れてはゐない。左に文例として一節を引いて置く。

文例

野路といふ所は來し方行く先人も見えず。日は暮れかかりて、いと物悲しと思ふに、時雨さへうちそそぐ。

うちしぐれふる里思ふ袖ぬれて行く先とほき野路の篠原

今宵は鏡といふ所に著くべしと定めつれど、暮れ果てて行きつかず。守山といふ所にとどまりぬ。ここにも時雨なほ慕ひ來にけり。

いとどなほ袖ぬらせとや宿りけむ間なく時雨のもる山にしも

今日は十六日の夜なりけり。いと苦しくて臥しぬ。いまだ月の光はかすかに殘りたる曙に、守山を出でて行く。野洲川渡るほど、先立ちて行く旅人の駒の足の音ばかりさやかにて、霧いと深し。

旅人は皆もろともに朝立ちて駒うちわたす野洲の川霧

十七日の夜は小野の宿といふ所にとどまる。月出でて、山の峯に立ち續きたる松の木の間、けぢめ見えていと面白し。ここは夜ぶかき霧の迷ひにたどり出でつ。

轉寢の記

阿佛尼の日記にはなほ若い頃に書いた『轉寢の記』一卷（群書類従所收）がある。前半は思ふ人の途絶に對する悶えを記した抒情的な日記であり、後半は後の親と賴む人に伴なはれて遠江に下つた時の紀行であつて、幼い頃からはぐくんでくれた人の重病を聞いて、歸洛した事を記して筆を擱いて居る。書名は文中の「はかなしな短き夜半の草枕結ぶともなきうたたねの夢」によるのである。文章は『十六夜日記』と同じく擬古文であるが、遙かに劣つてゐる。阿佛尼の作にはなほ其の女紀内侍に書き送つた『乳母のふみ』一名『庭の訓（をしへ）』（群書類従所收）があり、また歌學の書には爲家の說を祖述した『夜の鶴』（一卷）一名『阿佛口傳』（群書類従所收）がある。

辨内侍日記
中務内侍日記

當時女流の手に成つた擬古文の日記に『辨内侍日記』や『中務内侍日記』等がある。辨内侍は中務大輔藤原信實の女であつて、後深草天皇に奉仕し、其の後後宇多天皇の御代の頃まで生存して居た。『辨内侍日記』(二卷)群書類従所收は一名を『後深草院辨内侍集』又は『辨内侍寛元記』と呼ばれて居る。上卷には寛元四年正月二十九日に、富小路殿で後嵯峨院が御讓位になつた事から、後深草天皇の建長元年九月に至るまでの事を記し、下卷には建長元年十一月冷泉殿で行はれた五節に始まつて、建長四年十月十三日までの事を記して居る。此の日記は辨内侍の和歌と其の詞書を基にして、後の人が書き上げたらしいのであるが、現存のものには文章に錯簡脫落が多く、又年月や事實の誤も少くない。次に『中務内侍日記』(一卷)群書類従所收は、伏見天皇に奉仕した中務内侍が記したもので、後宇多天皇の弘安三年十二月十五日、東宮(伏見天皇)の御殿で雪見の御催のあつた事から書き起し、伏見天皇の正應五年の春までの、宮廷の御有樣や自己の事を記して居る。筆者は宮内卿藤原永經の女である。右に述べた二書は主として宮廷の公事節會の有樣を記したもので、文學としての價値は乏しい。此の外に同類の女流日記になほ建春門院中納言俊成の女の『たまきはる』圖書寮藏寫本一卷がある。主として宮廷奉仕の頃を追慕して記した敍事的な日記であつて、文學的價値は高くないが、先に述べた『建禮門院右京大夫集』と共に、『平家物語』と交涉のある記事を含んで居る。

鴨長明

鎌倉時代の隨筆には鴨長明の『方丈記』がある。長明は通稱を菊太夫といひ、其の父祖は代々鴨の社の禰宜であつて、父を長繼といつた。其の傳記は種々のものに記されて居り、又異說もあるのである

が、『源家長日記』及び『十訓抄』の傳ふる所によれば、幼少の頃孤兒となつたので、父方の祖母の家に養はれてゐたが、三十歳の頃其の家を去つて鴨河原の草庵に移り住んだ。和歌に長じてゐたので諸所の歌會に招かれたが、殊に後鳥羽院に認められて、建仁元年七月に和歌所を設けられた時、寄人に召される光榮を得た。其の後元久建永の頃出家して法名を蓮胤といひ、大原山に隱棲してゐたが、五年の後承元二三年の頃五十六七歳更に日野の外山に方丈の庵を結び、そこで五年の歳月を送つた。其の間建曆元年十月には鎌倉に下向して、實朝將軍に謁した事がある。かくて建保四年に年六十四で歿した。一說には建保元年に六十二歳で入寂したともいふ。長明の出家の動機に就いては、世の無常を觀じた爲であると言ひ、或は思ふ儘の立身が出來なかつた爲であるとも言つて居るが、是も『源家長日記』や『十訓抄』の傳ふる所によれば、鴨の河合社の禰宜とならうとした素志が破れたのを怨んだ爲である。恐らく最後の說が眞相に近いであらう。只の世捨人でなかつた事は、『方丈記』に現れた彼の思想を見ても察せられる。長明は琵琶の名人であつて、或時管絃の道の人々の前で啄木の祕曲を彈じて、其の不都合を責められた事が、僧隆圓の『文机談』に見えて居り、なほ琵琶を嗜んだ事は『方丈記』にも記されて居る。長明が和歌に秀でた事は旣に述べたが、其の作歌は『千載集』『新古今集』『續古今集』などに採られ、又家集には流布本『鴨長明集』一卷群書類從所收と、別本の寬文七年刊本二卷がある。彼は歌道を俊賴の子俊惠法師に學んだのであつて、歌學者としても知られてゐた。其の著『無名抄』(二卷)羣書類從所收は和歌に關する逸事を集めたものであるが、歌論の一端をも窺ふ事が出來る。其の他『本朝書籍目

錄』に『發心集』（三卷）『四季物語』（四卷）『蓮胤伊勢記』（一卷）を長明の作として居る。現存する『發心集』（八卷）は後人が增補したものであつて原作の儘でなく、『四季物語』は果して長明の作であるか否か明かでない。而して『蓮胤伊勢記』は長明が壯年の頃伊勢に旅した時の日記であるが、後世散逸したのであつて、其の逸文は『夫木和歌抄』に傳へられて居る。

方丈記

さて『方丈記』には流布本と異本との二つの系統がある。流布本で現存する最古の寫本は、長明自筆と傳へられる大福光寺（京都府船井郡高原村にある）の所藏本である。卷末に添付せられた別紙には、醍醐寺の僧親快が寬元二年に鴨長明の自筆本である事を證明した奧書があるが、これが果して親快の自署であるか否か疑問であるとしても、著者の時代を遠く距つてゐない鎌倉時代中期の寫本である事は、古體の假名を用ひて居るのによつて明かである。此の寫本は最近發見せられ、古典保存會の複製本によつて世に流布したものであつて、流布本の原形を知るに足るべき貴重な資料である。（圖版參照）次に異本には水戸彰考館藏本・東京帝國大學國語研究室藏本・故森洽藏氏舊藏本・吉澤義則博士藏本などがあるが、此等は流布本に比して記事が簡單であり、文章も漢字を主としたもので、流布本と趣を異にして居る。（圖版參照）

流布本の內容

流布本の『方丈記』は、卷頭に巧みな譬喩を借りて、人生の無常を說いた「行く川の流は絕えずしてしかももとの水にあらず云々」の名文に始まつて、安元の大火、治承の辻風並に福原遷都、養和の飢饉、壽永の疫病、元曆の大地震などの慘狀と人心の動搖とを述べた後に、此等の災厄を綜合して人生の無常に對する惱みを敍し、更に作者の身の上に轉じて、年六十に近づいて方丈の庵を構へ、悠々自

適の簡易生活に滿足するに至つた次第を語り、最後に述懷を記して筆を擱いて居る。かくて『方丈記』は人生の無常を敍した前半と、自己の境遇並に生活心情を記した後半との二部から成つて居るのであつて、一篇の內容は隨筆と自敍傳とを兼ねてゐる。思想の特色として著しいのは欣求淨土であるが、

大福光寺本方丈記
（古典保存會複製本に據る）

又一面には無爲を說く道教の感化もある。天變地災の記述中に恩愛の切情を述べて居り、方丈の庵の孤獨生活には現實世界に對する愛著の情が見えて居り、又寂寥に堪へかねて居るやうな點も見受けられるのであつて、作者は普通の世捨人と其の趣を異にしてゐたやうである。其の記述は組織が整然と

して居り、而も變化があり、感情が流露して居る。文章は漢語佛語を混用した流麗な和漢混淆文であつて、對句に富み譬喩も巧妙であつて、當時の新文體の特色を最もよく具へて居る。藤岡博士は『平家物語』『源平盛衰記』などに似て居る點を擧げて、後人が諸書を抄錄補綴して作り上げた僞書であると說かれ、（鎌倉室町時代文學史）又野村八良氏は『論語』『文選』『莊子』其の他佛典の影響を擧げた後に、全文にわたつて特に慶滋保胤の「池亭記」（本朝文粹卷十二所載）を摸倣した痕が著しく目立つ事に注意して、之を長明の作とする事に疑問を挿んで居られる。（鎌倉時代文學新論）『方丈記』が「池亭記」を摸倣してゐる事は、既に加藤盤齋の『方丈記泗說』にも說いて居るのであり、又流布本には後人の補綴がある事も從來廣く認められて居る所であるが、之を僞書とする說には從ひ難いのである。

方丈記　鴨長明作

行川之水不絶而然非本水澱浮沫且消且結久無留事世間住家又如此諸里々棟並甍争高賤人住居代々經不盡物共昔有今無或去年栄今年亡或昨日造今日焼住人又是同姿替振舞同共古見人者万人中一人二人殘或言葉雜結契人浅茅原露消或

異本方丈記（吉澤博士藏）

次に『異本方丈記』は安元の大火以下の五大災厄の記事を缺き、其の他にも流布本にある記事で本書に缺けてゐる所が多く、且つ記述は概ね簡略であり、文章も流布本と著しく相違してしかも拙劣であ

る。流布本と異本の成立の前後、並に其の何れが原本であるかといふ問題に就いても、從來說が分れて居るのであるが、前に述べた大福光寺本の發見によつて、流布本が古くから存在した事が明かになつたから、異本は寧ろ後世誰かが作つた略本であると見るのが正當である。

海道記と東關紀行

鎌倉時代には京都と鎌倉の間を往來する者が多かつたから、東海道の紀行が次々に現れた。『十六夜日記』も其の一であるが、此の外に男子の手に成つたものに『海道記』『東關紀行』などがある。海道は東海道の意であり、東關は關東の義である。『海道記』(一卷)は後堀河天皇の貞應二年の四月に都を出發し、東海道を經て鎌倉に下り、滯在すること僅かに十餘日の後、歸京の途に就くまでの事を記して居る。文章は漢語佛語を多く混へた駢儷體であつて華麗である。記述には懷古的情調が漂つて居ると共に、佛敎思想が滿ちて居る。作者を長明とする說もあるが、根據は薄弱であつて、一般には『源氏物語』の硏究家として聞えた源光行の作として居る。併し文中の下向の年代が光行の事蹟と合はないので、近來は作者未詳とせられて居る。次に『東關紀行』(一卷)は『海道記』より約二十年の後、仁治三年八月に京を出發して以來、鎌倉に下るまでの紀行と、鎌倉滯留中の見聞とを記し、最後に十月二十三日に歸京の途に上つた事を記して居る。作者を光行の子親行とするのは廣く行はれた說であるが、これも近來は疑問とせられて居る。其の文體は『海道記』と同じく、和漢の故事を引き頻りに對句を列べて流麗であるが、漢語佛語を用ひる事は『海道記』よりも少く、比較的に和文調が勝つて居る。槪して形式に囚はれて淸新の趣がなく、又實感が乏しい。『海道記』『東關紀行』共に至る所で和歌を詠

んでゐるが、其の歌風は時流の弊を受けて、平淡であり且つ生氣を缺いて居る。思ふに『十六夜日記』に並ぶべき紀行は『東關紀行』であつて、後の文學に及ぼした影響も少くない。

其の他の日記文學

鎌倉時代の隨筆日記紀行の主要なものは、以上で終つたのであるが、此の外になほ短篇の日記紀行が數篇ある。和歌所の開闔源家長が記した『源家長日記』（一卷續々群書類從所收）や、歌人飛鳥井雅有（雅經の孫）の紀行『春のみ山路』（一卷續群書類從に收む）などは、既に世に流布して居るが、佐々木信綱博士所藏の『飛鳥井雅有卿記』（寫本一卷）（短篇四章）や、『信生法師日記』（寫本一卷）などは、最近佐々木博士及び玉井幸助氏が紹介せられて、始めて廣く知られたものである。最初の『源家長日記』は新古今撰定前後の事や、當時の著名な歌人の事蹟逸事などを知るべき好資料ではあるが、文學的價値は乏しい。併し雅有の遺篇は何れも獨得の擬古文で記された出色の日記若しくは紀行であり、『信生法師日記』は下野國鹽谷城主鹽谷朝業が、出家した後の生活を記した旅日記であつて、流麗で哀調を帶びた文章は、内容と相俟つて讀者の心を動かすものがある。

第八章　漢文學の衰頽

平安後期に次第に凋落した漢文學は、鎌倉時代になつて益衰頽して殆ど冬枯の觀を呈した。鎌倉幕府創業の時、大江廣元（匡房の曾孫）・中原親能・三善康信等は朝廷を去つて幕府の樞機に參與したのであるが、其の子孫には大江維房を除く外には勝れた學者が現れなかつたから、鎌倉に於ける漢文學には特に記

す程のものはない。一方京都には、紀傳若しくは文章道の門閥として名高い菅原氏や藤原氏南家があつて、家學を傳へてゐたが、政權が幕府に移つて以來は、文章博士大學頭も空名となり、漢文學は只形骸を留めるに過ぎなかつた。

詩合

漢文學の名門が凋落して全く振はなかつた事は右に述べた通りであるが、初期に於てはさすがに前代の名殘を存して、宮廷及び公卿の詩作になほ記すべきものがあつた。尤も當時は和歌が盛に行はれた時代であるから、詩は歌人の餘技に過ぎなかつたのであつて、詩歌合が其の重要なものである。今詩歌合に就いて述べるに先立つて、當時催された詩合の例として、文章博士日野資實・平長兼兩人の「百番詩合」の事を述べて置く。此の詩合は春二十題・夏六題・秋二十二題・冬六題・雜四十六題に就いて詠じた二句一聯を、左を資實右を長兼として百番まで合せたもので、現存する『資實長兼兩卿百番詩合』（群書類從所收）がそれである。其の奧書によれば、藤原道家が判をしたのであるが、後見を憚つて削り去つたもので、現存するものは建長八年に菅原爲長が書寫した本である。其の冒頭の句に

春　春作四時始

左　漢十二皇高祖德　　唐三百載太宗功　　資　實
右　黃軒著德帝猷祖　　伯禹立功王者先　　長　兼

とあるのを見て一般を推す事が出來る。卽ち詩合といつても二句一聯の對句を合せたのであり、而も文學的價値の極めて乏しいものである。此の時代の詩合には二句一聯を作るのが普通であつた。

鎌倉時代の初期には、前代に引續いて歌合が流行した事は既に述べた通りであるが、歌合に刺戟せられて起つたのは詩歌合である。詩歌合の濫觴で後世其の典型とせられたのは『元久詩歌合』群書類従所收である。此の詩歌合は元久二年六月十五日に、後京極攝政良經が當時の詩歌の名流を集めて、其の邸で催したもので、「水郷春望」と「山路秋行」を題とし、詩の作者は太政大臣良經・大納言良輔・中納言資實・藏人頭左中辨長兼等十七人、歌の作者は、左馬頭藤原朝臣親定の假名で加はり給うた後鳥羽院を始めとして、藤原家隆・源通光・僧正慈圓・藤原有家・同定家等男女十九人である。此の詩歌合は各題三十八番を合せたのである。左に「水郷春望」の中から二三の例を掲げて置く。

左　　行長

楊柳一村江縣綠　烟霞萬里水郷春

右　　秀能

夕づくよ潮滿ちくらし難波江の蘆の若葉を越ゆる白浪

左　　親經

湖南湖北山千里　潮去潮來浪幾重

右　　御製

見渡せば山本かすむ水無瀨河ゆふべは秋となに思ひけむ

建保內裏詩歌合

『元久詩歌合』に次いで『建保內裏詩歌合』群書類従所收が行はれた。是は順德天皇の御代建保元年二月二十

六日に、內裏で行はれた二十六番の詩歌合である。題は「山中花夕」と「野外秋望」であつて、藤原範時・平經高・菅原爲長・藤原資實等十三人の詩と、藤原範基・平宗宣・藤原良平・同定家・女房(實は御製)等十三人の和歌を左右に分けて合せたのである。鎌倉時代の詩歌合で注意すべきものになほ『現存三十六人詩歌』(群書類從所收)がある。後宇多天皇の御代建治二年三月に、北條時宗が屛風の色紙に書かせたもので、詩歌各當時の名流三十六人の作一首づつを選んで、甲乙丙丁四帖に分ち、それぞれ九番合せたのである。詩は中納言藤原資宣の撰であり、和歌は右大辨入道眞觀の撰である。

聯句

鎌倉時代には詩歌の會の餘興として、又は單獨の會として、聯句を作る事が流行した。聯句は唐の詩人の間に餘技として盛に行はれたのであるが、是が我が國に流行したのは平安朝の中頃からであつて、連歌の流行から誘導せられたのである。平安朝の聯句は

尾拂樹間黃牛背　　手打門前白鴈聲
二藍經一夏　菅　　朽葉幾廻秋　紀
人曰山城介　孝言　　世稱水驛官　佐國
文武兩家姓　隆兼　　江平一士名
(江談抄所載)

の如き類のもので、全く遊戲文學である。而して當時の聯句は五韻(十句)から二十韻までのものであつたが、鎌倉時代には三十韻・五十韻・七十韻となり、時に百韻に及ぶものがあつたのは、恰も連歌の發達に似て居る。聯句には詩の句を連ねるものの外に、詩の句を和歌の上句又は下句に連ねるものが

ある。例へば

紫禁貴神靈　ふたたび世をたすけつるかな　後宇多院

の如きである。これを和漢聯句といふ。和漢聯句は詩歌合の流行するにつれて漸く行はれたのであつて、これも後には五十韻百韻と連ねるやうになつた。和漢聯句が盛に行はれたのは次の室町時代である。要するに鎌倉時代の詩は、前代の衰退の後を承けて益萎靡して振はなくなり、更に聯句の如き遊戯文學の流行を見るに至つたのである。斯かる時代の詩句に文學的價値のあるものが無いのは當然である。

公私の日記

鎌倉時代の漢文には和歌撰集の序や願文などに、常套的の美辭麗句を連ねたものがあるが、最も廣く用ひられたのは簡易を旨とした日本的漢文であつて、公私の日錄は悉くこれで綴られて居る。鎌倉時代の日記は二百數十種に達するのであるが、中にも浩瀚なのは月輪關白九條兼實（承元元年薨五十九）の『玉葉』（一名玉海二十八卷）藤原定家の『明月記』（現存六十餘卷）兼實の孫道家（建長四年薨六十）の『玉蘂』二十九卷等である。此等は和臭を帶びた準漢文體で記されたものであるが、『明月記』には定家の學才を見るべき文飾もある。私的の日記以外のものには、幕府の右筆の日錄『吾妻鏡』がある。目錄に五十二卷とあるが、後世第四十五卷を闕き、五十一卷現存して居る。治承四年から文永三年に至るまで八十七年間の、幕府の記錄風の日記であるが、其の前半は右筆の追記にかかる編纂物であると言はれて居る。文體は所謂往來體であつて、當時武家社會の通用文であるが、簡にして要を得て居り、時に美辭を連ねて戰記物語文に近い趣を備

へた部分がある。

鎌倉時代の漢詩漢文は以上述べた通り、時代を下るに從つて益崩れて、國民に親しみのあるものになり、國文學の發達に大なる影響を與へたのであるが、此の間に漢學は漸く貴紳の手を離れて僧侶に移つて行つた。當時は儒者の支那に留學する事は全く絶えたが、僧侶の往來は盛に行はれ、新佛教を傳へると共に宋學をも傳へて、我が國の文教に貢獻する所が多かつた。抑も宋は太祖以來學問を奬勵し、盛に書物を編纂印行せしめたから、儒學文學共に盛に起つた。宋代の儒學は、漢唐時代に訓詁を重んじ、字義の末に拘泥して、仁義道德の說に於て不徹底であつた弊に對して起つたのであつて、天命性理の微を窮め、省察修養の道を明かにする事を目的としたのである。此の學風は周敦頤・程顥（明道）・程頤（伊川）等に始まるのであるけれども、之を大成したのは朱熹である。宋學は程子と朱子を祖とする學であるから程朱學と呼ばれるのであるが、其の主とする所によつて性理學とも稱せられた。而して性理學はもと禪宗の教理の影響を受けて發達したもので、禪宗と相通ずる所があつたから、これを我が國に傳へたのも禪林の學僧である。程朱の學が我が國に傳來して以來、宋の百般の文化が續々傳來して、我が國の學問文藝は面目を改めたのであるが、是は次の室町時代の事であるから、今は禪宗並に宋學傳來の當初の事を簡單に記して置く。

宋學

宋學の傳來

我が國の商船が私に南宋と交通するやうになつたのは平安末期からである。殊に淸盛は日宋貿易の利益ある事を知つて之を奬勵した爲に、益盛に行はれるやうになり、從つて僧侶にして入宋する者も

俊芿

漸く多くなつたのであるが、彼等は禪宗を始め種々の新しい文化を移植した。支那に於ける禪宗は是より先既に唐代の頃から行はれてゐたのであるが、我が國に之を弘通した最初の人は榮西（建保三年寂七十五）である。榮西は宋から歸朝して鎌倉に壽福寺を創め、又京都に建仁寺を建てて、大いに禪宗を鼓吹したのであつて、是より宋の禪林を慕つて支那に渡る名僧が漸く多くなつた。榮西は我が國に於ける禪宗の始祖であるばかりでなく、茶を移植し、又宋の詩文筆蹟なども傳へたのであるから、恐らくは宋學にも接して之を傳へたであらうと言はれて居る。併し一般には宋學傳來の最初の恩人を僧俊芿として居る。俊芿（嘉祿三年（安貞元年）寂六十二）は不可棄と號し、肥後飽田郡の人である。十八歲の時剃髮し、後に笈を負うて京に上り、南北兩京の間を往來して高僧の敎を受け、建久十年（正治元年）には二人の弟子を伴なつて宋に渡り、律禪天台を修めて建曆元年に歸朝し、京都の泉涌寺の開山となつた。『泉涌寺不可棄法師傳』及び『元亨釋書』などに據れば、歸朝する時天台章疏七百十六卷、律宗經書三百二十七卷、華嚴章疏百七十五卷、儒書二百五十六卷、雜書四百六十三卷等を携へ歸つたのであるから、彼が宋の大儒に接して其の學說を聽き、又宋學の書を多く將來した事も想像せられるのである。俊芿以後宋學傳來に關係のあつたのは道元及び圓爾である。道元（建長五年寂五十四）は貞應二年二十四歲の時に宋に渡り、安貞元年に歸朝し、山城の興聖寺及び越前の永平寺を創立して、我が國曹洞宗の始祖と仰がれた。又圓爾（辨圓）（弘安三年寂七十九）は卽ち聖一國師であつて、嘉禎元年に年三十四で宋に渡り、仁治二年に歸朝した後、藤原道家の歸依を受け、京都東山に東福寺を建てた名僧である。圓爾は正嘉元年に北條時賴の請によつて、程子

の學說を引いた「大明錄」（宋僧圭堂の作）を講じたと言はれて居るから、程子の性理學は此の頃既に鎌倉に於て講究せられてゐたのである。

一山一寧

宋學の傳來に更に關係の深いのは歸化僧である。宋から渡來した高僧で、宋學の傳來に貢獻したのは、道隆を先驅として普寧・正念・祖元等がある。此等はやがて起るべき五山文學の緒端となつたのであるが、殊に鎌倉末期に於ける宋學の鼓吹者として注意すべきは一山一寧である。一山（文保元年寂七十一）（名を一寧といひ字を一山といふ。）は支那浙江省台州の人である。我が國の正安元年（元の成宗の大德三年）に元の密使となつて、我が商船に便乘して太宰府に渡來したのであるが、北條貞時は其の陰謀を探知して伊豆の修禪寺に流した。併し其の後學德の高い事が分つて建長寺に置かれ、遂に歸化して京都の南禪寺に住んだ。かくて一山は關東京都兩禪林に其の該博深遠な學問を植ゑつけたのである。後宇多法皇が屢彼に就いて法語を聞こしめされたといふ一事によつても、其の學德の程がしのばれる。一山は博覽强記で、佛典の外に儒道百家の說は固より、稗史小說の類にも通じてゐたといふ。五山文學は一山の門弟の虎關師錬・夢窗疎石・雪村友梅等によつて興隆したのであつて、後の文學の開發に極めて大なる功績を遺して居る。一山に始まつた五山文學の事は第五篇に於て述べるであらう。

北條氏の好學

鎌倉時代の漢文學を終るに當つて一言すべきは、北條氏の文敎に盡した功績である。鎌倉の學問はもと大江廣元・三好康信等を京都から迎へて以來、徐々に開けたのであつて、實朝は文藝を嗜み古書の蒐集にも熱心であつたが、殊に北條氏は代々武事の外に文事にも心掛け、禪と共に儒を尊信して文敎

の發達に貢獻する所が尠くなかつた。泰時の弟實泰の子なる越後守實時は殊に儒學を好み、清原教隆(當時將軍として迎へられた宗尊親王後嵯峨天皇の皇子に從つて鎌倉の地に下つた人)を師として儒學を修め、又古書の蒐集鈔寫に努め、宋本の購入にも熱心であつた。實時は初め鎌倉の自邸に文庫を設けて古書を收藏してゐたが、罹災を慮つて武藏國久良岐郡金澤の別業稱名寺內に文庫を移して、晩年をそこで送つた。これが有名な金澤文庫である。金澤文庫は實時が子弟の學問所として建てたものであつて、其の後顯時・貞顯父子もまた、父祖の志を繼いで盛に內外の典籍を集め、又稱名寺の僧侶の書寫蒐集し

金澤文庫印

たものも合併せられて、文庫は益盛になつたのである。北條氏は貞顯の子貞將の代になつて滅亡したけれども、文庫は稱名寺の僧侶によつて保管せられたのであつて、應安六年には禪僧親中中諦が、將軍義滿の古書蒐集の命を受けて金澤に下つた時、詩僧義堂周信五八九頁參照も共に藏書を閱覽したのである。其の時義堂が詠じた詩に、

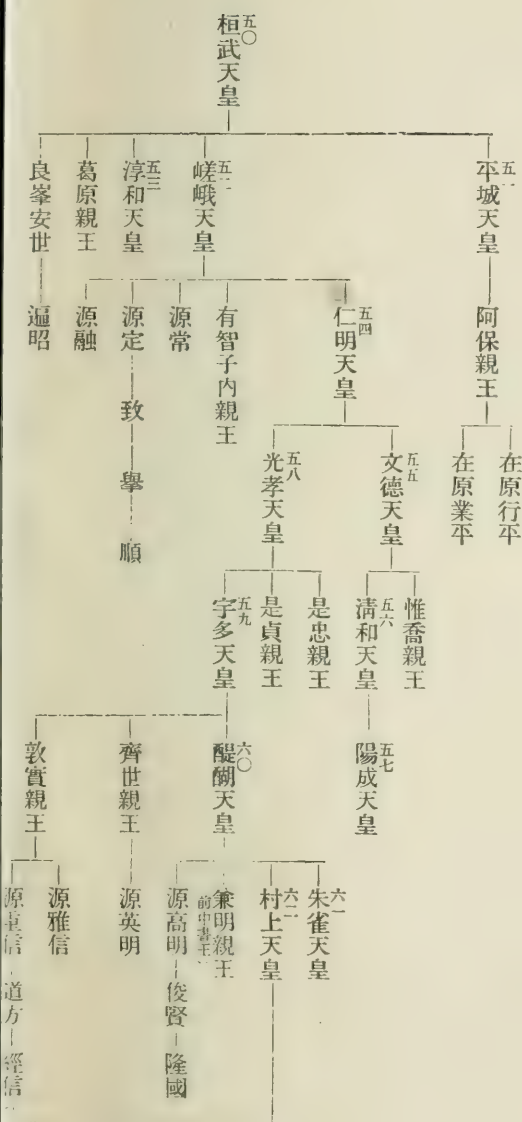
玉帳修文講武餘　遺人來覓舊藏書　牙籤映日窺蝌蚪
縹帙乘晴走蠹魚　圯上一篇看不足　鄴侯三萬欲何如
照心古教君家有　收在胸中壓五車　(空華集)

とあるのを見て、當時の文庫の狀態を知る事が出來る。文庫は其の後戰亂の世に殆ど廢絕に歸したのであるが、好學の僧侶が東國遍歷の途次に此の秘庫を窺つて、講學の便を得た者は極めて多い。此の

間に藏書の多くは散逸したのであるが、一部分は豐臣秀次が京都に持ち歸つて公卿に頒ち、又德川家康は大部分を江戶富士見亭の文庫に移し、其の殘りは德川光圀其の他諸侯の手に入つて、近世の學問の興隆に多大の貢獻をしたのである。金澤文庫の藏書は主として經史律令詩文佛典等であるが、國文學の古寫本も少くなかつたやうである。例へば實時は河內本を書寫せしめたのであり、（二八七頁參照）又『萬葉集』の古鈔本を藏してゐた事は、金澤文庫本の零本、若しくは金澤文庫本切の現存によつて察せられる。要するに實時以下三代が、文教の維持に盡した功績は偉大といはねばならぬ。

皇室御系圖

平安鎌倉時代

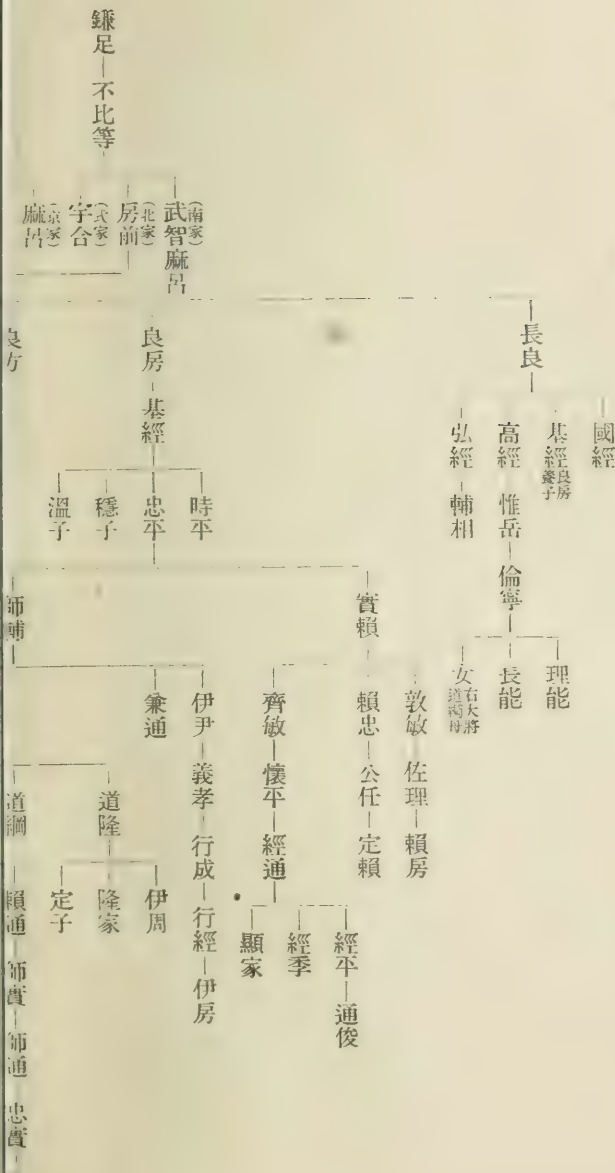
俊頼―俊慧

六三冷泉天皇―六五花山天皇
　　　　　　―六七三條天皇―敦明親王（小一條院）

爲平親王―源頼定

六四圓融天皇―六六一條天皇―六八後一條天皇
　　　　　　　　　　　　―六九後朱雀天皇―七〇後冷泉天皇
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　―七一後三條天皇―七二白河天皇―七三堀河天皇―七四鳥羽天皇

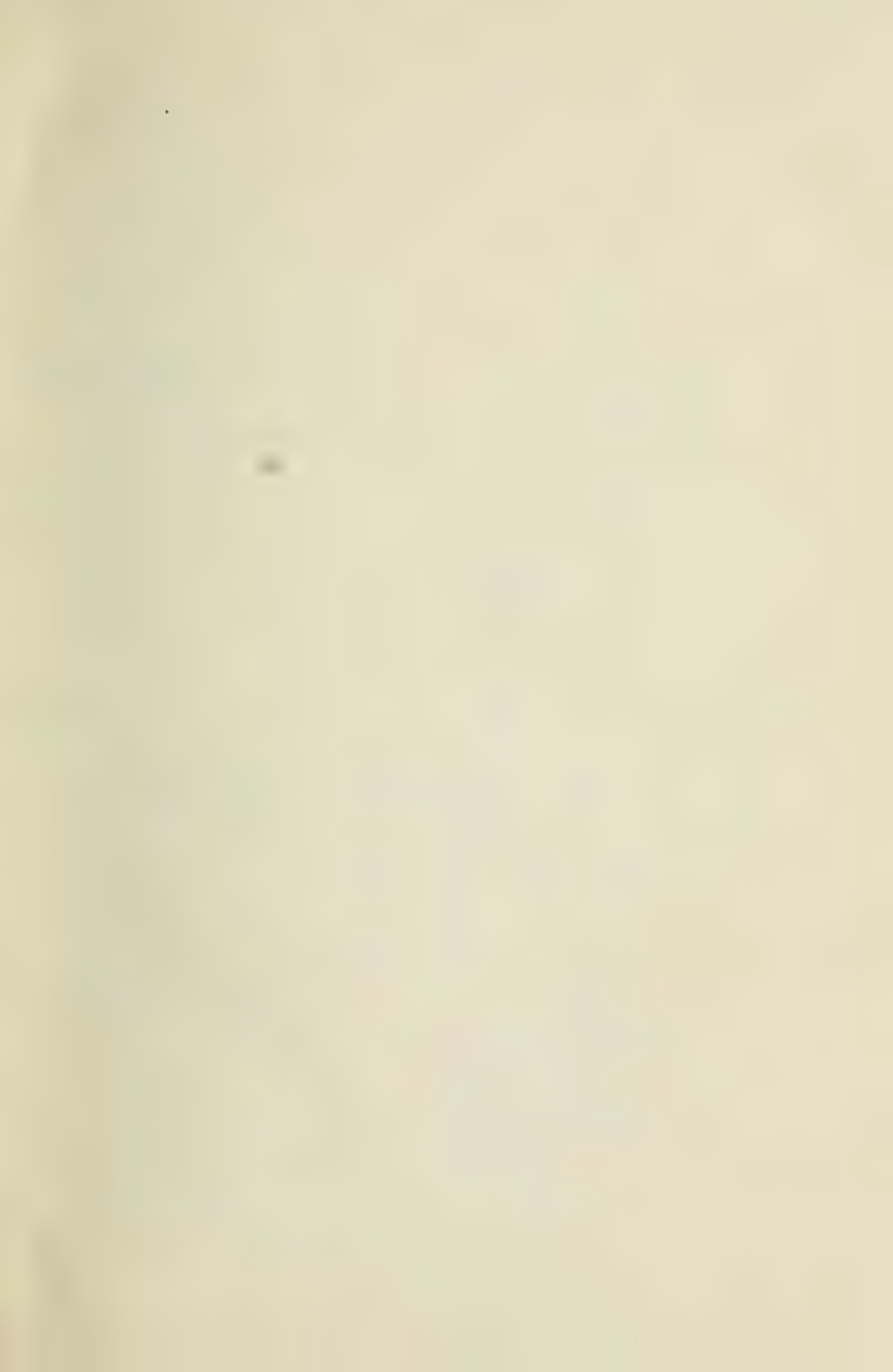
具平親王（後中書王）―源師房―俊房

七五崇德天皇

七七後白河天皇―七八二條天皇―七九六條天皇
　　　　　　　―八〇高倉天皇―八一安德天皇
　　　　　　　　　　　　　―守貞親王―八六後堀河天皇―八七四條天皇
　　　　　　　　　　　　　―八二後鳥羽天皇―八三土御門天皇―八八後嵯峨天皇（以下本文三八六頁參照）
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　―八四順德天皇―八五仲恭天皇
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　―道助法親王
　　　　　　　―守覺法親王
　　　　　　　―式子內親王

七六近衞天皇

藤原氏系圖

主として平安時代

眞楯
內麻呂
冬嗣
良輔
良相
良門
利基
兼輔
雅正
爲時
惟規
紫式部
高藤
定方
朝頼
爲輔
宣孝
大貳三位
定時
實方
濟時
師尹
兼家
高光
爲光
公季
道兼
道長
超子
詮子
齊信
能信
教通
長家
彰子
妍子
威子
嬉子
忠家
俊忠
俊成
以下本文三八八頁參照
忠通
基實
基通
基房
兼實
良經
慈圓
賴宗
俊家
基俊
不比等
房前
魚名
末茂
(六代略)
隆經
師隆
顯季
(六條)
顯輔
清輔
重家
顯昭
顯家
有家
麻呂
濱成
道成
興風

昭和七年九月二十日印刷
昭和七年九月二十五日發行
昭和七年十月二十日三版發行

國文學史新講上卷
定價金參圓五拾錢

著者 次田潤
東京市豐島區池袋三丁目一五三九番地

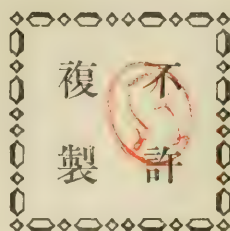
發行者 三樹退三
東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷者 守岡功
東京市本所區厩橋一丁目廿七番地

印刷所 凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區厩橋一丁目廿七番地

發行所 東京市神田區錦町一丁目
【振替貯金口座東京四九九一番】
株式會社 明治書院
電話神田(25) 二四一四番 二六九五番 二六九六番

不許複製

文學士 次田潤先生著

古事記新講

古事記は日本最古の古典で、苟も我が國體の淵源を窮めようとする人は何人も必讀すべき寶典である。本書は著者が多年の蘊蓄を傾注した苦心の大著で、言語、神話、歴史、宗教、土俗、考古等の史的科學の上に立つて、極めて詳密且つ獨創的な解釋を下したものである。殊に一段毎に添へた評論は古今の研究を悉く參酌するは勿論、更に朝鮮、滿洲、支那等に於ける國外的資料をも對照して、周密なる考證と犀利なる批判とを施したもので、一の興味豐なる上代文化史の體を成して居る。

菊判洋布裝全一冊
定價金五圓
送料拾八錢

祝詞新講

本書は「古事記新講」の姉妹篇である。卷頭には六章から成る祝詞概說を掲げ、祝詞各篇には其の祭祀の起原・意義・沿革等を詳述した解說を加へ、本文には古寫本古刊本を廣く參酌して、嚴密に校訂した原文と直譯文を掲げ、解釋は語釋・口語譯・評論の三段に分ち、あらゆる史的科學の新知識に基いて、古今の諸說に批判を下すと共に、詳密且つ獨創的な解釋・考證・評論等を施した。されば一般に我が國文學の源流を汲み、國體の淵源を知らうとする人々の書架に缺くべからざる參考書である。

菊判洋布裝全一冊
定價金四圓五拾錢
送料拾八錢